
明治三十九年六月五日發行
毎月一回五日發行
明治三十三年十二月廿五日
第三種郵便物認可
女學世界
第六巻第八號

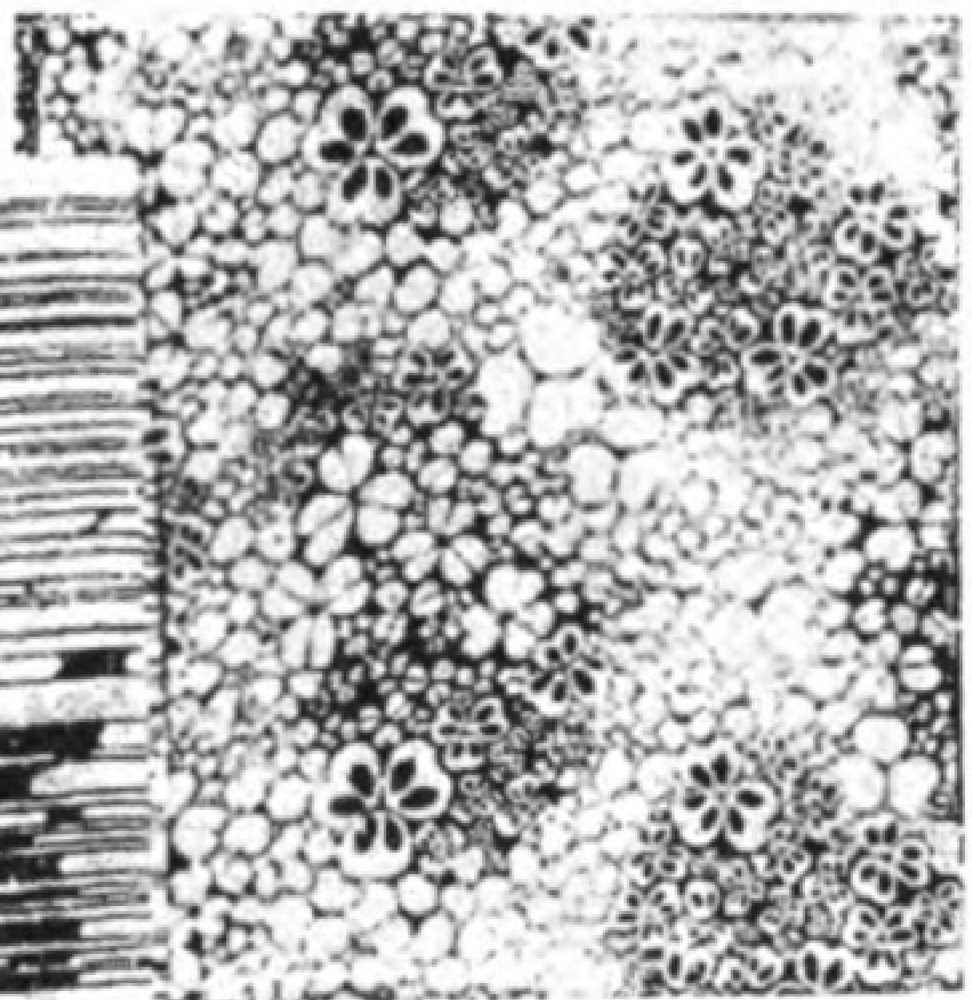
中形浴衣地新柄陳列會

來る六月一日より開會

豫て弊店に於て懸賞を以て募集致候中形浴衣地圖案により新に染め上げ申候中形類をも陳列仕候間御來観の程奉願上候

東京日本橋區駿河町

三越呉服店



（い）一反一圓六十五錢



（ろ）一反二圓五拾錢

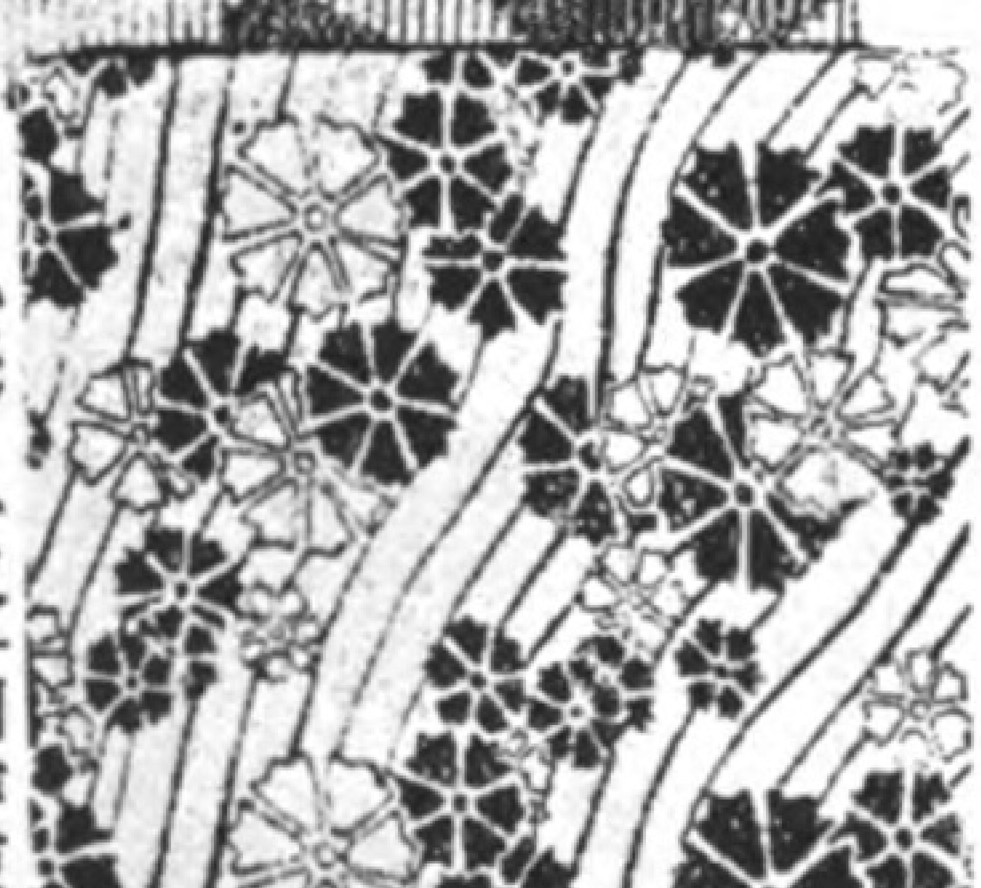
（新柄眞岡中形浴衣地の内）



（は）一反一圓四拾錢



（に）一反一圓八拾五錢



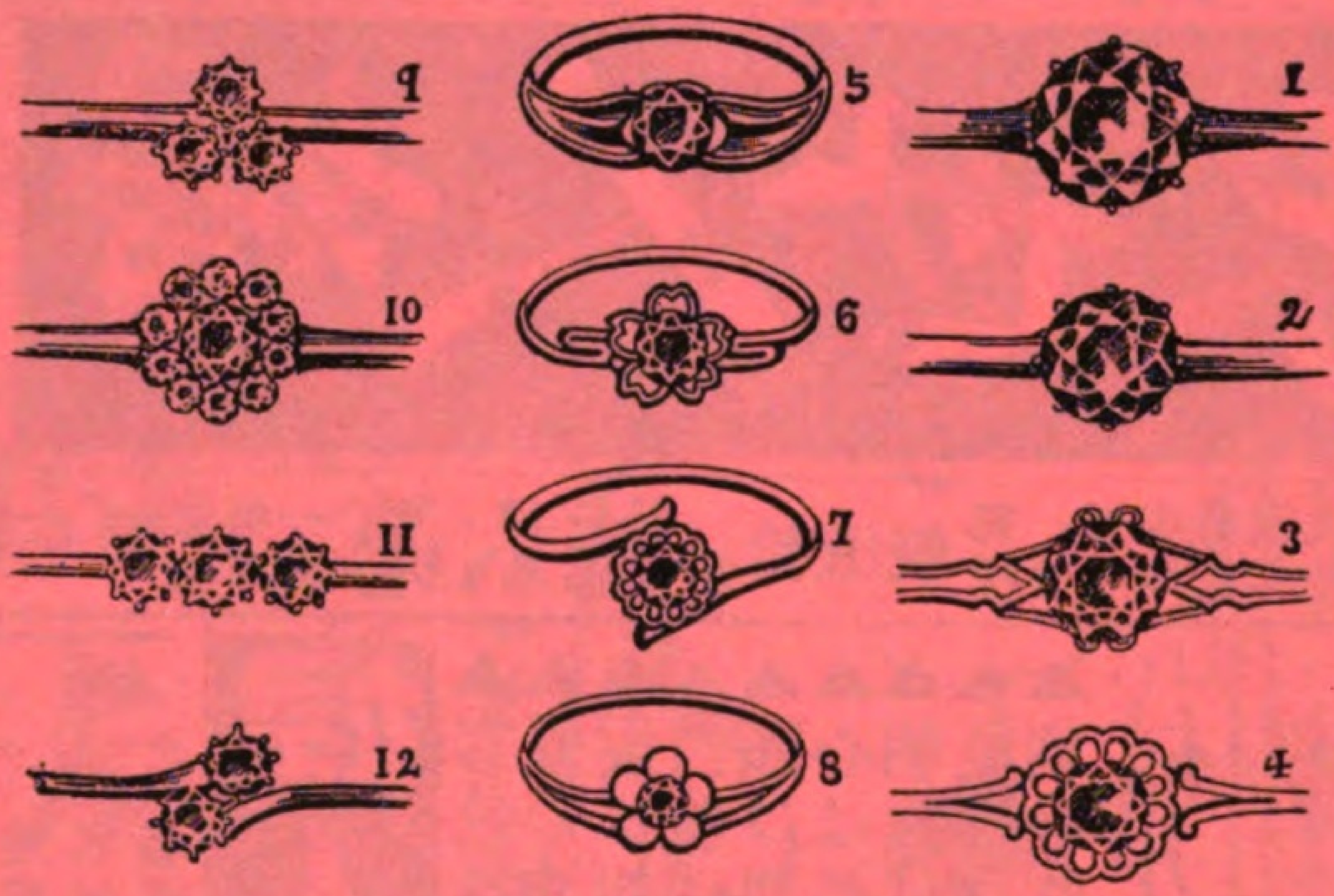
（ほ）一反一圓七拾五錢

（圖は何れも尺幅と御承知被下度候）

女學世界 第六巻第八號 目次

金剛石入金指環

（大四年ノ四）



（1）甲價二千圓　（2）甲價九百五十圓　乙價八百圓　（3）甲價七百五十圓
乙價六百圓　丙價五百圓　（4）甲價三百圓　乙價二百五十圓　丙價二百圓
（5）甲價二百圓　乙價百八十圓　丙價百六十圓　（6）甲價百五十圓
乙價百卅五圓　丙價百廿圓　（7）甲價一百圓　乙價八十五圓　丙價七十圓
（8）甲價六十圓　乙價五十五圓　丙價五十圓　（9）甲價二百二十圓
（10）甲價三百七十五圓　（11）甲價三百六十圓　（12）甲價三百圓　乙價百五十圓

永年の間實行致し居候へば一度弊店より御購求の御方は御承知の事に候へども弊店のダイヤモンド入製作品は何時にても原價にて他品と交換又は些少の割引にて買戻し候

貴金屬宝石
美術携帯品
婦人粧飾品

商

大西白牡丹

東京市京橋區南傳馬町一丁目

特 電話本局 三十番

（甲の一）

村井弦齋夫婦大に助力せらる

大好評

婦人世界

實用專一

六月三日發行　毎月一回　第六號　一冊 拾五錢　郵税一錢五厘　半年分郵税共九拾錢　一年分一圓七拾五錢

口繪

◎伏見若宮妃殿下并若宮姫宮◎ナポレオンの家庭（珍品）◎愛國婦人會第五回總會光景◎名流最近の新婚寫眞（三組）◎名媛の筆跡◎滿洲の美人◎

彩色石版

徒然（つれづれ）……中澤弘光

庭の若葉　川西義雄

繪手本

紫陽花……跡見花蹊

春日の神鹿　中澤弘光

婦人の日常生活法　村井弦齋

▲容色は如何に整ふべきか
▲髮の油は何を用ふべきか
▲髮は如何に洗ふべきか
▲白粉は如何に用ふべきか
▲顏は如何に剃るべきか
▲心は如何に洗ふべきか
▲朝飯は如何に支度すべきか
▲薬物は如何に用ふべきか
▲朝の飲料は何を用ふべきか
▲髮は如何に梳るべきか
▲櫛は如何に用ふべきか
▲フケは如何に取るべきか
▲白粉は何を用ふべきか
▲婦人の美は如何に保つべきか
▲朝飯前は如何に過すべきか
▲朝飯には何が宜きか
▲何の食物が皮膚の色を白くするか
▲牛乳は如何に飲むべきか

右は村井弦齋氏が全國婦人の爲に心血を濺いで起草されたる實用的大文字

◎娘の結婚に就き母親の心得
◎田尻博士の家庭◎嫁入道具
◎家庭用器具の新形　理學博士鶴田賢次
◎寡婦の鑑小川房子刀自……
◎小兒の病氣を知る法　ドクトル加藤照麿

◎弦齋夫人の苺料理談　天麩羅菓煮 ケーキ菓子
◎婦人と指輪◎蚊と衞生……
◎子宮内膜炎の話…伊庭醫學士
◎苺の話恩田農學士◎豆腐の話牧農學士◎女子と體育井口あぐり◎襁褓乾燥器◎小説の流行◎讀者文藝……

發兌元　東京京橋南紺屋町十二番地　實業之日本社　電話新橋八七四番　賣捌各地書店

女（甲の二）

◎新刊小說廣告!!!

田口掬汀著　小說



艶なる姿は咲誇る花に似て清き心は其の香氣の高きに勝れり、斯艶と美とを兼備へし佳人が義理人情の波に漂ふ半生の哀史は之れ。上下通巻八百頁みな機微を穿てる人情の反影なり。

上巻發行 初版盡きんとす

◎クロース製美本紙數三百九十頁定價七拾錢小包料拾錢　口繪　平福百穗畫

小說

伯爵夫人

前編五版
後編三版

クロース製美本
定價一圓八拾錢
小包料一冊拾錢
二冊拾五錢

（甲の三）

發賣元　東京神田表神保町　東京堂　同區裏神保町　上田屋

關西大賣捌　大阪東區備後町西　吉岡　同區南渡邊町　杉本

☚ カメリヤは時代の要求により

生れたる最新最良の洗粉なり ☚

カメリヤ洗粉

あらひ



カメリヤは一家傳來的なる陳腐の原料を用ひて製せるものと全然趣きを異にす

カメリヤは温和なる香氣を有するも一度之を用ゆれば花香芬々として爽快忘る能はず唯に色を白くしつやをよくするのみならず殊に肌を滑かならしむる點に於て全く他品に見る能はざる一大特長を有す社交を重んじ衛生に注意せらるゝ貴紳淑女の化粧料として日常缺くべからざる佳品なり

定價一個
瓶入十二錢袋入五錢

●本舖 東京 カメリヤ商會

●聯合發賣元 本舖 ライオン歯磨

東京神田柳原川岸 小林富次郎

（甲の四）

煩悶

北澤樂天筆



金製印面附指環



	十八金	廿金	純金
壹號（參匁附）	拾八圓參拾錢	拾九圓六拾錢	貳拾貳圓四十錢
貳號（參匁附）	拾七圓參拾錢	拾八圓六拾錢	貳拾壹圓四十錢
參號（參匁五分附）	貳拾貳圓	貳拾參圓五十錢	貳拾七圓
四號（貳匁五分附）	拾參圓七拾錢	拾四圓八拾錢	拾七圓拾錢
五號（貳匁五分附）	拾八圓貳拾錢	拾九圓參拾錢	貳拾壹圓六十錢

「注意」御注文の節は厚き紙にて指の太さを御送附被下度候

▲印面文字刻料壹字金壹圓以上
▲送料は内地拾錢臺灣清韓參拾錢申受候

貴金屬細工袋物商

東京市京橋區南傳馬町三丁目

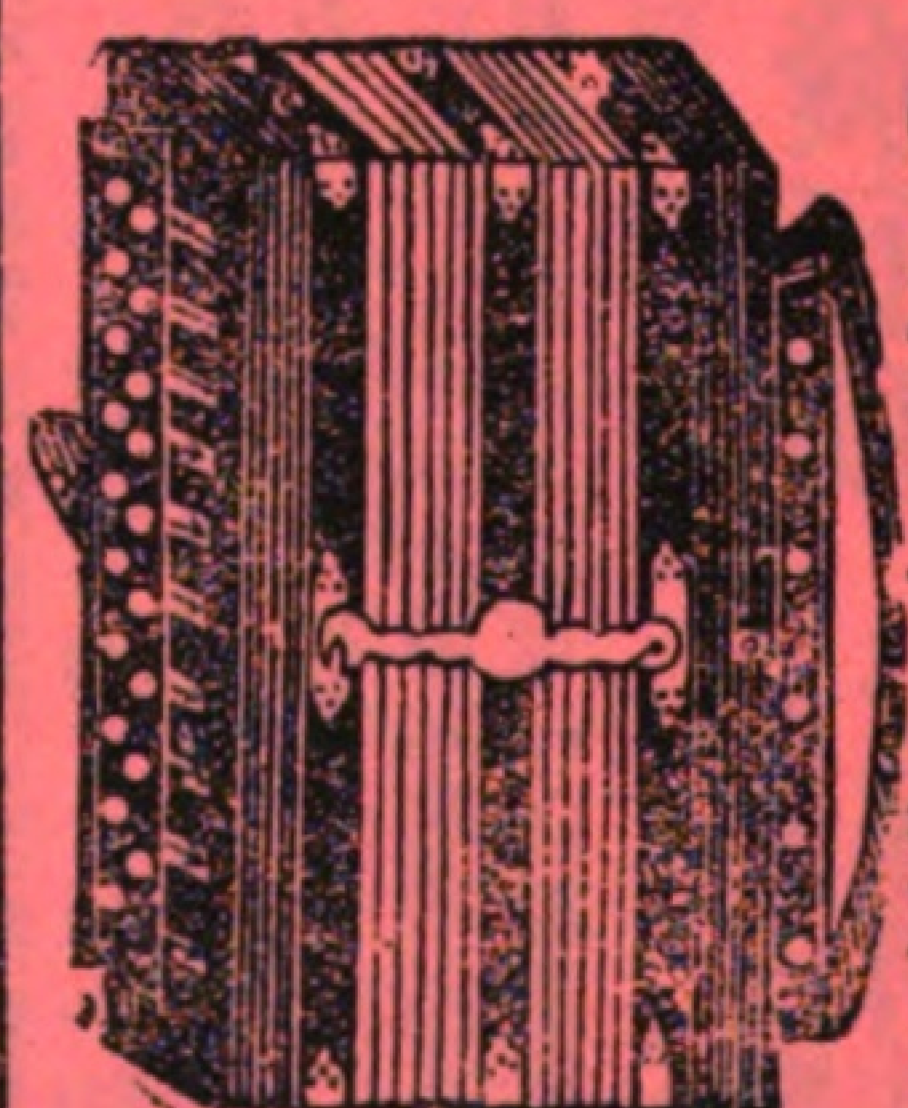
丸屋商店

（電話本局二十番）

圖書目錄進呈

▲三錢切手封入申込あれ

博文館小賣係



堅牢無比懷中

手風琴

本品は最も優美且高尚の小形なる手風琴にして音律の正確なる音聲の強大なる事普通手風琴に異なる事なし左れば旅行散歩等には至極輕便なり獨習書附屬す

正價 上製金壹圓八拾錢 並製金壹圓五拾錢

送料拾錢切手代用一割増

大阪市東區和泉町貳丁目

發賣元 **覗商店**

五大軍醫合議製劑

定價 五週分壹圓、三週分六十五錢、二週分四十五錢、一週分二十五錢、二日半分十錢

本舗

山口安民



全國各藥店ニて取次販賣す

女(乙の一)

登錄商標

佛國天然葡萄酒古「メドック」



此「古メドック」は佛國産純料の天然葡萄酒にて弊店に於て十有年來一手直輸入專賣するものに御座候此葡萄酒は藥用としても常用飲料としても慥に人體に有益あるものとして諸大醫及常用者諸彦の稱讃を辱ふし古「メドック」の名稱世に知らざるものなきに至りしは誠に仕合に奉存候然るに世間往々同一の名稱の葡萄酒を賣捌くもの有之候に付弊店の「古メドック」には印の商標を印し有之候間御注意御買求被下度候●御注文之品は直ちに御屆可致候●代價表は御申越次第進呈す

海外直輸出入洋酒食料品商
東京新橋竹川町
三組屋 大塚 大塚造
電話新橋七三六番

文學博士 村上專精 新著

自省錄

和裝 全一册
定價金四十錢
郵稅 四錢

吾人は毎朝必らず洗面する習慣が出來て居ます、されど毎朝洗心する習慣を持て居るものは甚だ少ない樣であります、顔に汚れたる垢がついて居ては如何に麗質の美人でも美人とはいはれませぬ、心に煩惱の垢が積つて居ては天性善良なる人でも精神上の美人とはなれませぬ、ところが心の垢は顔の垢に較ぶれば其落が強くて洗ひ落すことが困難であります、又顔が如何に奇麗でも心が奇麗でなくては人世の資格はありません、されば洗面上の規則的習慣も結構であるが洗心上の規則的習慣の方が一層必要であるといはればなりません。此書は村上博士が御自身の洗心用にとて定められたる五種の座右の銘を丁寧親切に説明せられたもので、附錄として雲谷禪師、蓮池大師フランクリン氏の洗心自省の方式を進べられてあります、文章は言文一致體で流暢平易何人にも解り易く書いてあります、男でも女でも老人でも青年でも是非一讀せればなりませぬ、殊に前途春秋に富める青年諸君の如きは速に本書を熟讀して心の垢を洗ひ落す工夫をせればなりませぬ。

發行所
東京京橋區銀座壹丁目
大坂東區北久太郎町四
大日本圖書株式會社

女(乙の三)

女(乙の四)

時世粧

島崎柳塢筆



○外部予防ゴム製

婦人の衛生器現れたり



子宮サック

一名さよごろも

定価 一個 甲種 金壹圓 乙種 金七十五錢

効能及使用方

子宮サックは「ゴム」製にて斬新の発明御婦人方の衛生上必ず備ふべき要用の良器なり子宮サックを用ゆるときはいかなる場合といへども黴毒痳病帯下病等の伝染することなく又子宮を毀傷する患なし子宮サックは懐妊を望む御婦人は用ゆべからずこれを用ふるときは懐妊せざればなり子宮サックは月経の際漏水の漏洩を防ぎ立居を便ならしむ子宮サックの使用方は本品を添て委細御説明すべし

○子宮サック入用の御人は御注文次第東京市内は無遅延送料にて御届申上候其他地方は郵送料一個に付金十銭にて全国何処を問はず御郵送申上候

東京両国米澤町二丁目一番地角

萬珠堂薬舗 電話浪花一一三八

月やくはらい 子宮サック 発売所 通経丸本舗

吉田安五郎

特約大販売所

東京々橋区銀座通、一 佐々木玄兵衛
東京日本橋区坂本町角 徳田多助
東京日本橋通四丁目 津村順天堂
東京日本橋通二丁目 北島[illegible]
大阪道修町二丁目 [illegible]合社
大阪高麗橋一丁目 稲尾商店
京都四条通新町 武田部[illegible]堂
京都三条小橋 [illegible]大[illegible]堂



美術 漆器 蒔絵

御婚礼道具 ぜんたん 家具 其他 おみやげ 御好 製造

ぬりもの陳列場設置有之候間御随意に御縦覧多少ニ不拘御用向被仰付被成下度偏ニ奉希上候敬白

東京市日本橋区室町弐丁目

木屋本店

林九兵衛

電話本局（九百九十番 千七百十番）
電信略名（キ九）

女(丙の二)

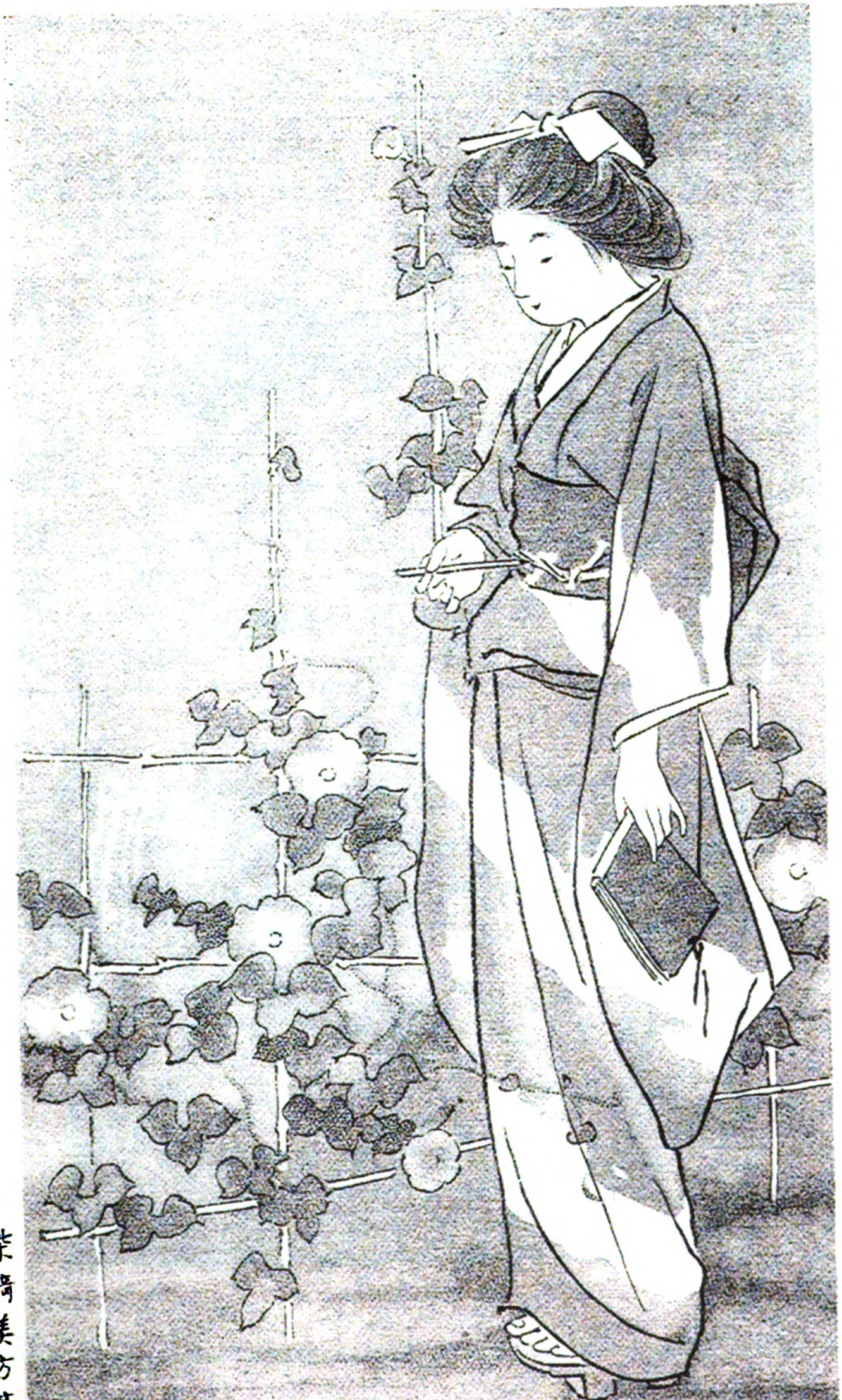
女(男の部)

あみ物



渡邉亮輔筆

朝顔



柴崎美方筆



美術造花材料
各女學校御用
附屬品並に造花器械類一式
嶄新夏期用材料
舶來薄絹シホン
ホワイトリーフス
兩品見本御入用ノ方ハ郵券四錢御送附ヲ乞
東京市日本橋區横山町一丁目十六番地
天野卯兵衛
電話(長)浪花一六四三番
(切取線)
營業目錄御入用ナレバ此切取ヲ添ヘ御申越被下度候
縣 郡 町村
女學世界 第六巻八號

女(丁の一)

女（丁の二）

五月廿日發賣

日本の家庭 臨時増刊

こども博覧會

全一冊定價金廿錢郵稅貳錢

材料豐富

●大村仁太郎先生著 家庭教師としての母 和裝全一冊 定價七十五錢 郵稅十錢

●専門家庭講話 十二大家選評並に執筆 母と子供 和裝全一冊 定價六十五錢 郵稅十錢

●福田琴月先生著半古先生畫 朝鮮と滿州 洋裝全一冊 定價十五錢 郵稅四錢

●福田琴月先生著竹坡先生畫 四百餘・洲 洋裝全一冊 定價十五錢 郵稅四錢

●西田常男先生著 室内のあそひ 洋裝全一冊 定價十錢 郵稅二錢

大村仁太郎先生閲
沼田笠峯先生編

家庭訓話

子供かたぎ

和裝全一冊定價六十錢郵稅十錢

子供のやさしい心、勇ましい氣象、あどけない思ひ、美しいなさけ、あはれな話。これ等は如何ばかり、人の心に感動を與へるものでせう。且つまたこれ等の子供かたぎを書いたものは如何ばかり子供が喜んで讀むことでしせう。笠峰君、流麗暢達の筆を揮つて子供のやさしい心から、おのづから出來たお話をつゞり、さまゞゝの子供かたぎを、目に見るやうに寫したのが、この書物です。家庭團欒の席に、或は學校講堂に於て、この書を讀んで聞かせましたならば、子供の喜びと奮勵とは著しからうと信じます。加ふるに書中の各所に、親切な教訓が挿んでありますから、父母と、教師と、少年少女とに、この面白くて有益な書物をお薦め申します。

發兌 東京市神田表神保町 同文館　大賣捌 大阪備後町 寶文館　東京早稻田 同文館支店　東京神田 東京堂

女(丁の三)

新柄 著荷

本店ハ明治元年ヨリ引續キ洋傘ヲ營業ス・仙女香鞭杖ハ文政年間ニ開業ス・本店ハ常ニ舶來精良品ヲ撰ビ安價ニ調進ス・

洋傘 鞭杖

流行新形各種

仙女香

坂本商店

東京市京橋區南傳馬町三丁目

電話本局 一四四六

天下一品
最上醬油

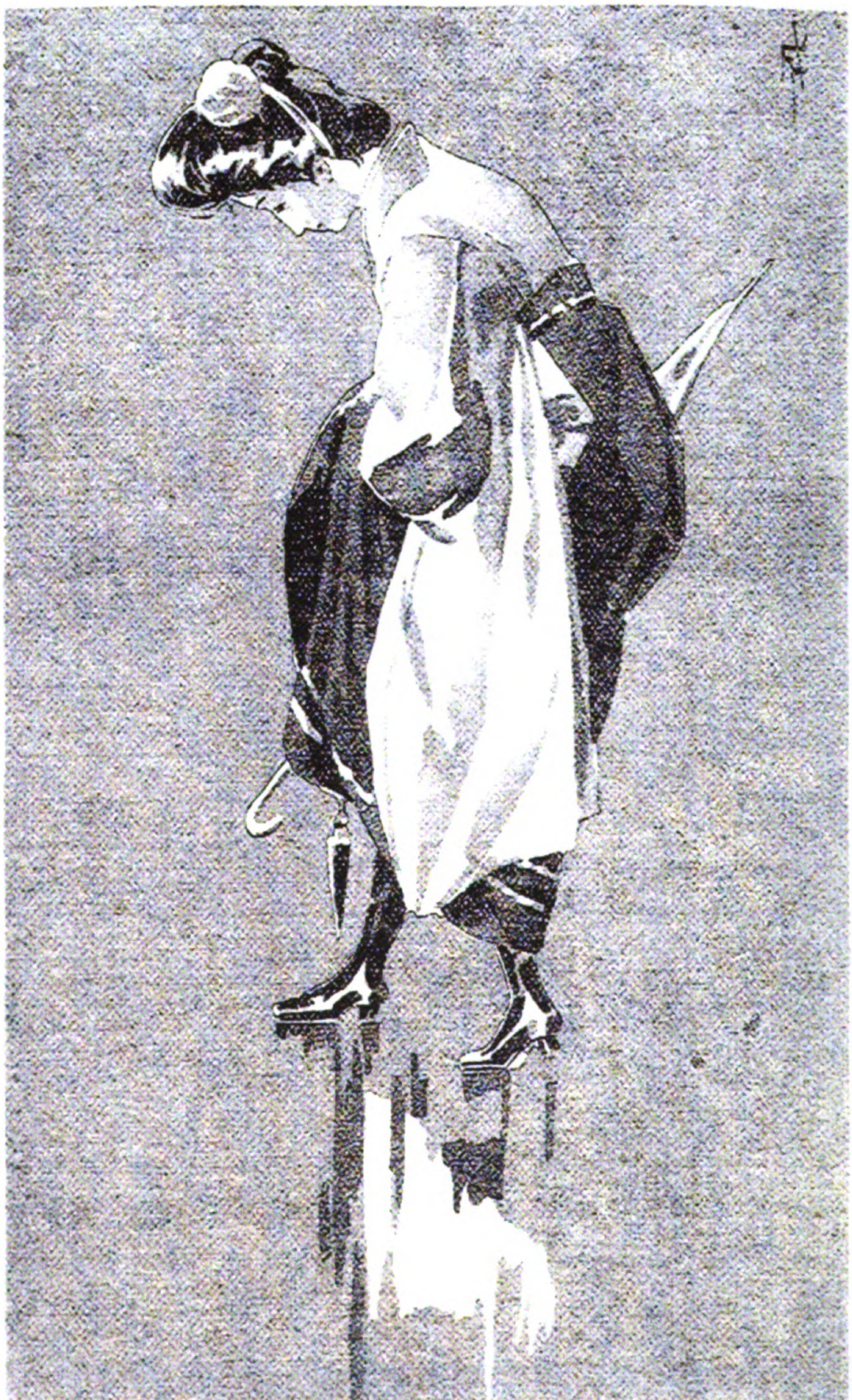
萬

醸造元 千葉縣野田町 茂木佐平治

賣捌所は各地とも有名なる酒醬油店に有之候

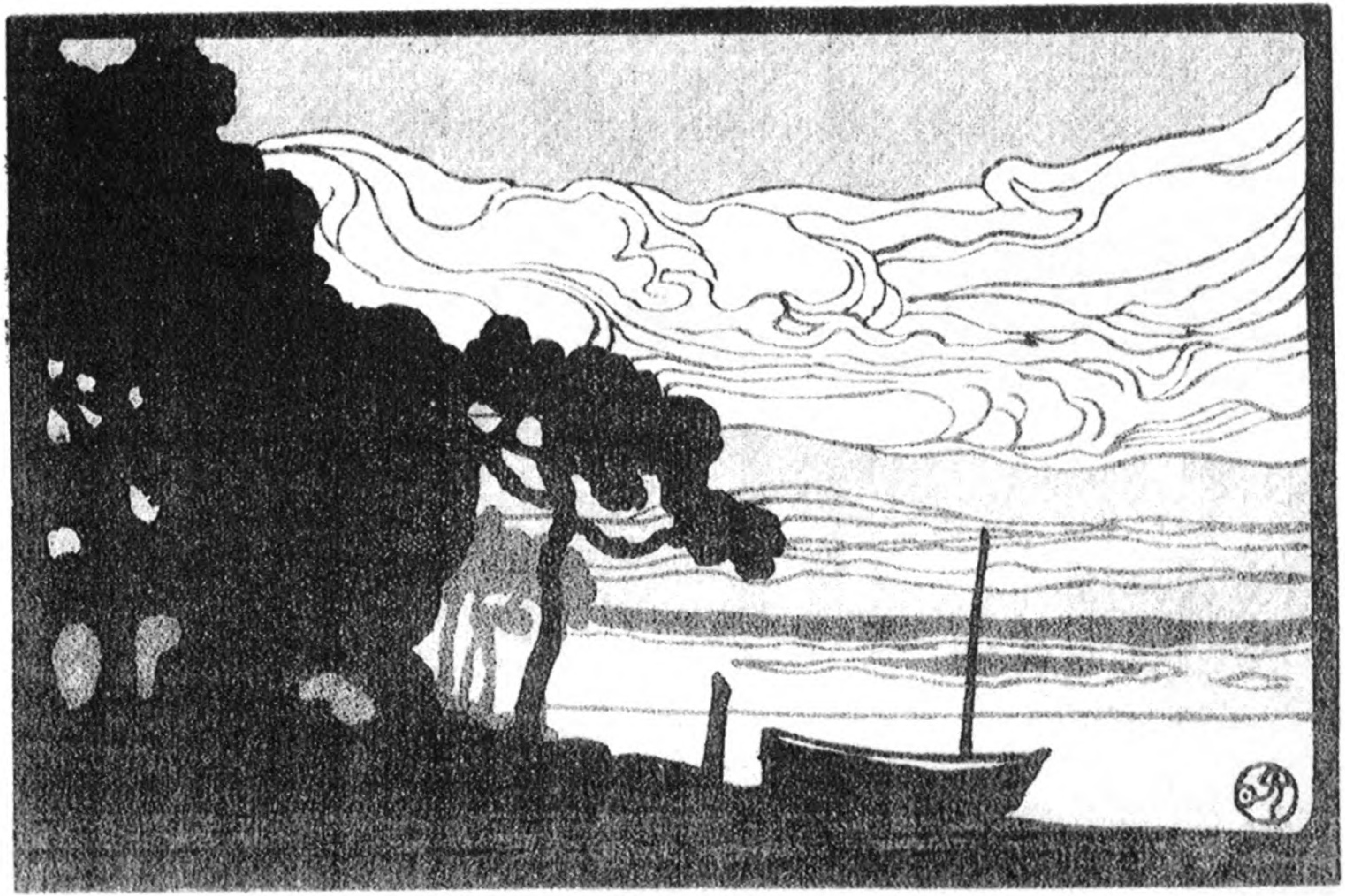
女(丁の四)

梅雨



一條成美筆

夕雲



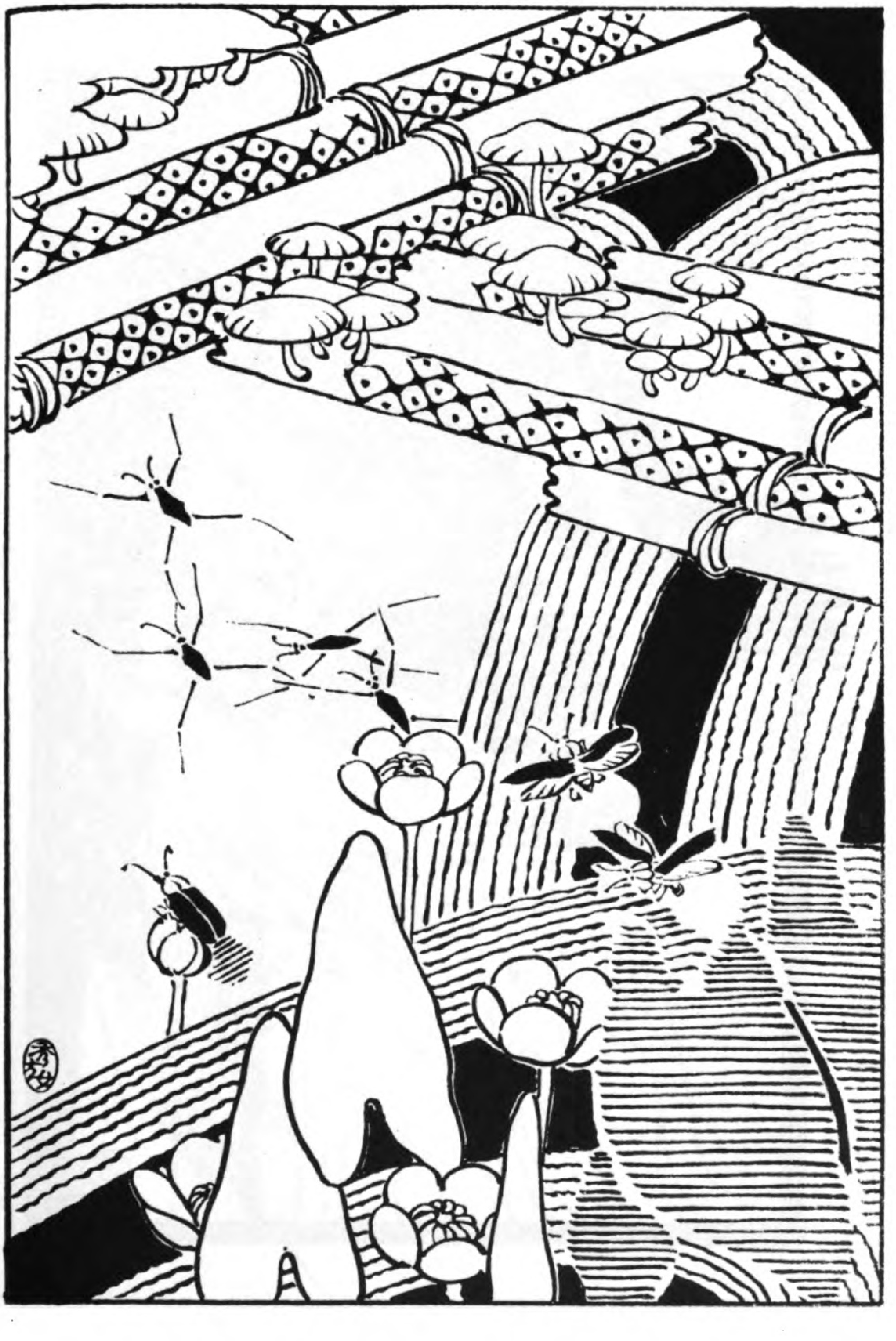
丸山晩霞筆

すゞめ

川崎蘭香筆



入梅



諸專門家講述◉全部約拾卷

早稻田通俗講話

此講話は趣味豐富にして平易通俗なる學術書を作り童蒙婦女をして樂んで之を讀過する間に其智德を養成せしめんことを希うて發行する者なり著者は皆當代屈指の大家にして材料の選擇講述の方法ともに其宜しきに適し極めて平易なる口語文を以て之を綴られたれば一般家庭の讀物として最も適切有益のものなるや疑を容れず

第壹編

理學博士 石川千代松講述

動物講話

（既成發賣）

總クロース製 頗美本全一冊
正價金六拾錢
郵稅金八錢

これ本邦動物學者の泰斗石川博士が最も趣味ある材料を選びて動物學の梗概を說き示されたるものにして其解說の懇篤なる其插畫の豐富緻密なる近年稀に見る所なり故に一たび本書を繙く者は復卷を蓋ふ能はざるの妙を感ずべき也

第貳編

理學博士 松村任三講述

植物講話

（既成發賣）

總クロース製 頗美本全一冊
正價金六拾錢
郵稅金八錢

著者は當代第一流の植物學者なり通俗平易にして童蒙婦女の讀み得べき植物書なきを憾み本部の請に應じて本書を著し植物研究の方法及び一般植物界の事項を最も懇篤に示されたり蓋し家庭の讀物初學の參考書として適切の者たり

（續刊）

池田晃淵 浮田和民 講述 **歷史講話**

農學士 志賀重昂 講述 **地理講話**

（其の一）

發行所 東京牛込 早稻田 早稻田大學出版部

（發賣所 東京日本橋區本町 博文館）

(戊の二)

東京帝國大學文科大學講師 佐々木信綱先生新著 新刊發賣

女子消息 文のしをり

●洋裝大判美本
●紙數三百餘頁
▲正價金五拾錢
▲郵便稅八錢

世に書翰文ばかり必要なるものはあらじ。世に書翰文ばかり趣味深きものはあらじ。而して又その一見易きに似てしかも難きこと書翰文にしくものはあらじ。佐々木先生爰にその典雅なる筆を以て、世の婦女諸君の爲にとて文の栞一巻を著さる。**實用雅事の文**併せて**百九十篇**殊に多くの趣味ある題目を選ばれたれば、以て日常作文の模範となしうべく、以て純雅なる趣味を養ひうべし。かつ又巻頭に添へられたる文話四十頁は、美しくこまやかなる筆を以て作文の注意を記されたるもの、必ずや少なからざる興味を以て讀み了ると共に大に益する處あるべく、世の婦女諸君が机上に缺くべからざる良書なり。

● 佐々木信綱先生 渥美雅子女史 共著 **新撰女子用文**（五版出來） 正價金參拾錢 郵便稅六錢 ●

發兌書肆 東京本町 **博文館** 東京神田 **東京堂**

數年難治の慢性胃病を根治し
消化機能を强壯健全になす靈藥

胃病根治劑

従來世に胃病藥頗る多しと雖ども皆一時の苦痛を凌ぐ制酸劑(即ち重曹、マグ子シヤ、苦味劑の如き一時おさゑムチスカシ的賣式賣藥のみにして未だ嘗て根治的に其病の基因を斷つ良藥あるを見ず、本劑は獨乙國高名大醫ノーデル氏處方に基き本邦胃病患者に適切なる嶄新有効藥を配合し百方實驗其奏効顯著なるを確認發賣せし最も進歩せる完全なる新藥にして數年難治の頑固なる**慢性胃病**にても根本より**誓つて根治**し胃腸を健全にし消化機能を强壯ならしめ食慾を催進し便通を快くし氣力を壯にし精神を爽快活潑にする空前の完全最新藥なれば從來種々雜多の胃病藥を用ひて効なく多年病苦に呻吟せる患者は一日も早く本劑を服し病根を斷絕し無病强健の大幸を得られよ輕症は壹劑重症は貳劑慢性症は參劑にて根治確證す

(藥價) 壹劑四拾貳錢　貳劑八拾錢　參劑壹圓拾錢　郵券代用貳割增し

新輸入 美容料 肉體

色白新劑

本劑は近時佛國パリス貴紳淑女間に最新流行の發明劑にして如何程色黒き男女にても特別製貳劑を用ゆれば忽ち肉體**純白色に變化**し艶美の容貌となるを確證す世上種々雜多の色白藥を用ひて奏効なき人は速に本劑を試み見よ眼前に峻烈なる特効を覺ゆ眞に奇効顯著の確證新劑價は並製金壹圓貳拾錢特別製金壹圓七拾錢

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房

月やくおろし

本劑は胃腸を痛めず子宮を害せず如何程長き月經閉止も必ず忽ち**快通流下**する特効あり本劑參劑分を用ゆれば二三ケ月間滯りたる月經にてもキレーに流下す又特別製分を用れば半年以上の月經閉止及び**血塊**にても必ず立處ろに流經す且つ月經不通月經不順より起る子宮病血の道を全治し多年滯りの古血及**惡血毒血**を一掃するとを確證す但し本劑は其奏効極めて**峻烈顯著**なるも毫も衛生無害なり婦人諸君安心して試藥あれ價は壹劑分七拾錢貳劑分壹圓廿錢參劑分壹圓七拾錢特別製分貳圓參拾錢

(注意)本劑の**大盛**を羨み近時續々怪しき無効なる**類似僞藥**顯はる用藥者は深く注意ありて「專賣元日新館藥房」の名義に注目し購求あらんとを乞ふ



わきが 腋臭

根治確證 新發見藥

醫療賣藥百方手を盡せし如何程頑固劇烈の慢性わきがにても**誓て根治**し決して再發或は他病に變ずる憂なき廿世紀的改良根治新藥なり速に試み苦惱を脫せよ價は輕症根治分六拾錢重症根治分壹圓廿錢頑固劇烈の慢性症根治分貳圓卅錢 着金即刻送藥す郵券代用必ず二割增の事

以上貳藥 專賣元 東京市神田五軒町拾九番地 日新館藥房(電話下谷五四六番)

(戊の三)



衛生家必携懷中良藥
ゼム
THE GEM
ゼム一粒の馥郁たる香氣と愛すべき美味とは一度用て終生忘るゝ能はざらしむ故にゼムは廣く萬人に愛用せらる
ゼム二粒は煙草の味を美にし心神を爽快にし疲勞を減じ息切れを防ぎ渴を醫す故にゼムは外遊學生に愛用せらる
ゼム三粒は音聲を美くす音聲は美の一要素也故にゼムは紳士佳人に愛用せらる
ゼム五粒を食前食後に用ふれば食慾を增進し消化を助く故にゼムは衛生を重んずる士の常用劑として愛用せらる
ゼム十粒は異境に於ける風土病疾癘食當り水傷りを治して神効あり舟車の醉を防ぐ故にゼムは進取的遠征家及び旅行家の必携劑として愛用せらる
ゼム定價
七十五粒入十錢
百六十粒入廿錢
四百卅粒入五十錢
九百粒入一圓
容器入ゼム 二十錢
日本一手發賣 東京馬喰町二丁目 愛國堂 山崎榮三郎
支舖 大阪高麗橋二丁目 山崎兄弟商會
其他賣捌は全國各地賣藥化粧品店にあり

女(戊の四)

岩佐侍醫の金婚式



第二列の中央は岩佐翁其の左は夫人德子、翁の後ろに立てるは長子新氏なり。

日韓の交際社會





(巴里社交界の一美人)



(獨逸の一佳嬪)

井上子爵の家庭



◉衛生無二殺菌防腐之三種石鹼

登録商標

ホルマリン石鹼

東京圓城

WHOLESALE DRUGGIST TOKYO

消毒 化粧 洗濯

●定價

消毒用 金二十錢

化粧用 金十五錢

洗濯用 金五錢

今般弊店創製發賣の**ホルマリン**石鹼は現今醫學藥學兩社界に於て無害にして卓絶なる防腐藥として賞用さるゝ（**ホルマリン**）を適量に含有せしめたるものなれば其効力の顯著なるは彼の諸病原菌中に於て最も頑強の脾脫疽菌も本品二萬倍の稀薄液に因て死滅すと日本藥局法註解に下山藥學博士の記述せられ有を以ても明かなり故にシラクモ田虫水虫シツ、ヒゼン、ニキビ、ソバカスの如きは勿論淋病、癩病、等の諸毒を消すに殊に本石鹼の特色は如斯効用に兼ぬるに優美高尚最も世人の嗜好に適する高貴の香料を配伍しあれは其佳香云はん方なく馥郁として使用後と雖ども長く衣体に薫るべし請ふ論より証據御試みありて必ず衛生保健の完全を期せられんことを

官許本舖

東京市日本橋區
本町三丁目七番地

登記商號 圓城商店

(巳の一)

東宮侍講本居豊穎先生題詠
學習院女子部長下田歌子先生題歌
文學博士小杉榲邨先生序文
國文學專攻 小森松風先生編著

女子文學全書

（女子文學改名）全部十二卷 每編讀切洋裝美本 每月一卷發行 壹ヶ年完成

全部總紙數二千五百頁以上 一册大判二百頁餘

根本を和漢洋の三文學に置き、體裁を最新式の編纂法に據り、女子の爲めに文藝獨習の心強き手引となるものは本書全部十二卷なり之を座右に具へ置けば文學上の智識は囊中に物を探るが如く、名作雄篇を成すに無比の重寶たらむ、敢て天下の諸孃に此良書を推薦す。

女子文學全書第壹編（六月十日出版）

美文作法

附錄 古今名家美文範

全一册 洋裝大判 二百廿頁 價三十錢 郵税四錢

本書は小森先生が現今の女子の文學趣味を鼓吹せんの考にて女子師範、高等女學校 其他各種の女學校に於て、最も困難を感ずる文章の作法を懇切に說明指導せられたるものなれば明治の女學生は、取りて實に坐右の寶典なり

女子文學全書 全部目次（自明治卅九年六月一ヶ年間）

▲第一編 美文作法
▲第二編 舊派新派和歌作法
▲第三編 新體詩作法
▲第四編 舊派新派俳句作法
▲第五編 女子消息文範
▲第六編 女子普通文範
▲第七編 言文一致文範
▲第八編 普通國文典
▲第九編 女子口語文典
▲第十編 女子修辭法
▲第十一編 女子文學者列傳
▲第十二編 女子國文學史

編輯の都合に依り相違することあり、發刊都度新聞紙に廣告す

正價 壹册金參拾錢●三册前金八拾五錢●六册前金壹圓六拾錢外郵税一册四錢 全部に限り特別 拾二册前金 金參圓 郵税不要（郵券代用壹割增）

發兌元 東京京橋大鋸町十二番 女子文壇社（電話本局六百七番）

賣捌所 東京堂。北隆館。東海堂。上田屋。良明堂。其他全國雜誌書店

（己の三）

五版既に盡く
六版近日出來

石橋思案君校　星野麥人君編

紅葉書翰抄

全一册横綴美本紙數三百餘頁
正價五拾錢　郵税六錢

發兌元　東京本町　博文館

本舗　三河國碧海郡刈谷町　益世館薬局主
醫科大學卒業薬劑士従七位勳六等　中島龜之丞鑑製

毛はへぐすり

送料共七拾五錢

以上二劑は拙者醫科大學奉職中歐米有名秘薬を薬化學上より研究し多年苦心の後發見したる最新奏効確著品なり醫薬學的智識なき山師製の濫製品と同視する事なく是非本劑を試よ詳細は四月發行の本誌廣告を見るか往復葉書にて照會あれ説明書を呈す

郵券代用二割増

ひ病必治薬

一ケ月分送料共參圓

各國帝室及王家御用

ネッスレス　ミルクフウド



歐洲諸國及び本邦名醫ノ讃辭ヲ辱フセル者ナリ小兒病者又タ平素不消化ニ苦ム者ニ適當ノ最良食物ナリ◉最モ盛カンニ薬舗洋酒食料品店ニ販賣ス

女(己の四)

日本女子大學英文科卒業生



前列は校長學監及諸教授、第二列右より吉田ふじ子、吉江とみえ子、青山ふさえ、田中みち子、近藤ふみ子、竹井たかの、仙波とも子、新井つる子、第三列右より大槻ひろせ、陶山あき、龍野ともえ、鹽野すてきく、田坂しゑ子、大橋ひろ子、太田和たけ子なり。

寫眞畫報臨時增刊

第一卷第十號　六月十五日發行

世界周遊寫眞帖

彩色石版二頁美麗寫眞版五拾頁○記事六拾四頁

定價貳拾錢　郵税貳錢

來る六月十五日は博文館創業十九週年に當る、雜誌「太陽」は例年同日を以て紀念號を發刊し來りしが、本年は寫眞畫報も亦た紀念號を出すの盛運に向へり。

「世界周遊寫眞帖」の一編は、本館が久しき以前より計畫せしものにて、世界各國より蒐集せし數千枚の寫眞より珍中の珍を撰んで編纂す、倫敦、巴里、伯林等華の都の壯觀、美觀、奇觀は云はずもがな、人跡殆ど絶へたる野蠻國の光景に至る迄で、苟も世人の知らんと欲するものは盡く網羅し、五大洲の風物を恰も眼前に見るが如く、歡ぶべきあり、怒るべきあり、笑ふべきあり、嘆ずべきあり、加ふるに極美麗の彩色石版畫、一見頤を解くポンチ畫を添へ、記事には米國周遊記（河上清）伯林物語（巖谷小波）萬國風俗奇譚。（押川春浪）歐洲の魔窟。文明國の暗面。世界膝栗毛　世界各國美人評等あり、實に一讀三嘆の珍書、何人も賣切れぬ内に御購讀あれ!!!

發兌元　東京日本橋本町　博文館

學生座右錄

附錄 夏と學生

洋裝大判美本●正價貳拾錢郵税貳錢

六月廿日發行

中學世界 第九卷第八號 臨時增刊

◎本書の特色と其價値

▲【學生座右錄】は從來世に行はれたる「必携」「節用」「便覽」等の如き、單調にして無趣味なる舊式の組織を踏襲せず、充分の新趣向を以て編輯す。

▲【學生座右錄】には一も死したる材料なし。即ち一卷の收むる所のものゝ悉く新時代の學生諸君が修學上、日常生活上、品性修養上、並に趣味性陶治の上に必要なる資料のみ撰擇して、頗る淸新に、而も多方面にその需要を滿したり。

▲【學生座右錄】また卷中の幾分を割きて『夏と學生』の一欄を附すべし、これには時節柄の凉しき面白き娛樂的の記事を滿載して綠蔭の下、ハンモックの上、或は海邊に、山間に幾多歸省遊子の旅中の好讀物たらしめん事を期す

所載主要目

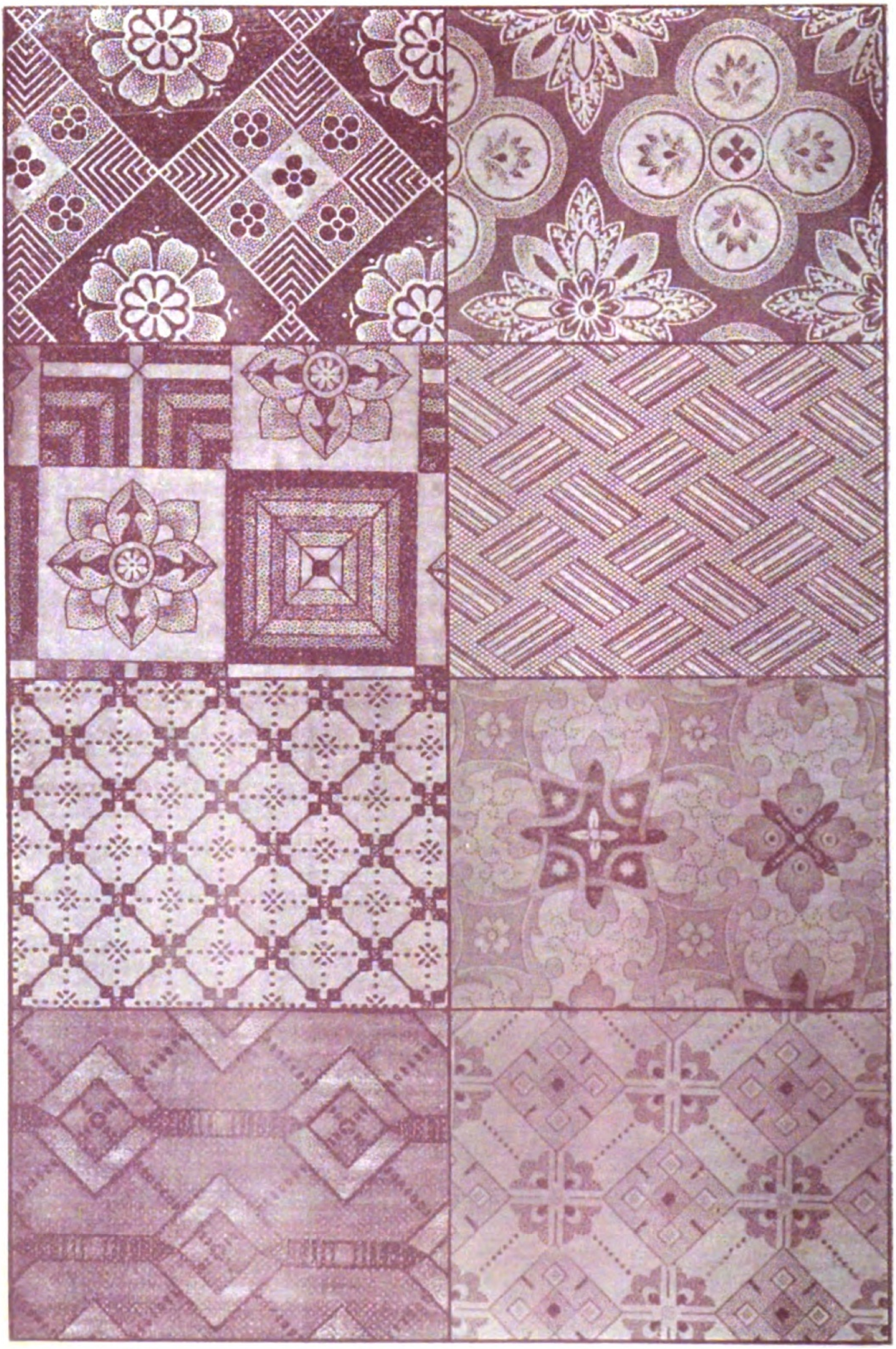
●精神修養法
●如何にして日曜日を暮すべき乎
●學生日常生活の模範
●學校時代と學校卒業後の活動準備
●諸大家立志傳
●當代諸名士の愛讀書
●歐米學生の美點
●勉學と娛樂
●『成功』の眞意義

●西洋男女學生の交際術
●各專門學科研究の順序
●各學校受驗參考書
●府下各中學の內容成蹟
●修學旅行の各方面
●學生日用衞生
●素人音樂
●水彩畫スケッチの栞
●書齋裝飾法
●學生間の會合と其趣向

東京本町 博文館

女(庚の三)

染形模樣



新刊

村雨莊司先生編
小野鵞堂先生書

實用女子書翰文

和裝横綴
裝釘優美
全壹冊
和紙刷定價金六十錢
郵税金六錢
洋紙刷定價金卅五錢
郵税金六錢

本書は村雨先生が實用を主旨とし編纂されたるものにして徒らに形客に流れず穩健優美なる女子の表情を認むべき文章流暢なる書翰文を流麗高雅なる筆蹟を以て知られたる小野鵞堂先生の揮毫せられたるものなり特に金屬版印刷に附したるものにて其筆蹟の鮮明なることゝ毫も肉筆に異ならずして從來の木版刷に比し一層の進歩をなしたるものなり然して本書は家庭と學校とを問はず書翰文範として又習字手本として婦人淑女に最も好向のものなり

小野鵞堂先生書

消息鳥丸帖

和裝美本全三冊定價各冊金十八錢
郵税各冊金貳錢

小野鵞堂先生書

眞書千字文

唐裝美本 全一冊定價金參拾五錢郵税金四錢

行書千字文

唐裝美本 全一冊定價金參拾五錢郵税金四錢

草書千字文

唐裝美本 全一冊定價金參拾五錢郵税金四錢

發行所 東京日本橋區數寄屋町九番地 六合館

女(辛の二)

月刊文學美術雜誌

文學美術 ハガキ文學

每月一回一日發行

第壹卷第七號 六月一日發行

（本誌の內容）

表紙（石版彩色） 橋本邦助

蓮若葉（同上） 齋藤五百枝

泰西名畫イ氏ジョー（コロタイプ）其他數葉

卷頭畫（木版彩色） 太田三郎 木版挿繪數葉

米國の畫伯（ジョーイ氏） 城南生▲柘榴の花渡邊江風▲初夏の雲阿部烏橋

畫道一斑 中村不折

鰹船 西村醉夢

舶來百色眼鏡 山本迷羊

僕の故鄉南山萩男 運命土屋香葉

五丁路 橋本春郊

漢詩久保天隨▲肺病妙藥鈴木秋風

大國 兒玉花外

神話と星宿 木暮理太郎

假面魔語 海若

其他編輯局より、雜錄。新刊紹介。普通文。新體詩。和歌。俳句。ハガキ小說。○ハガキお伽。川柳。讀者氣焰錄。支部たより等滿載。

女子文藝家庭雜誌

女子文藝

每月一回一日發行

大發展!! 今や到る處婦女子の歡迎盛也

第壹卷第六號 六月一日發行

白うさぎ 鹿目野徑

女子の品性修養に就いて 嚝井文學士▲女子敎育の理想 柴敎育家談▲何の爲めの學問 鈴木秋風▲夏の海×××

放任主 青山夢風▲子供の衣服 鹿目野徑▲滑稽談 山縣蠡湖▲流行△△△△▲流藻 碧海衣水▲胃病の話 村喜一郎▲浮巣 野口雨情▲うたゝれ 仙馬御風▲羅と情 阿部烏橋▲ワグチル 藥劇物語 森岡格雄▲

日本の女 野口米二郎

食物の改良 葉山新樹

家庭手輕醫者 秋山ちか子

牛肉と馬肉 麗子▲よい肉と惡い肉おなじ人▲希臘神話 底漏子桶

山本迷羊

青葉蔭 西村醉夢

女世捨人 土屋香葉

情の聲 堀內新泉▲すればする女夢の人

英詩文評釋 森岡格雄

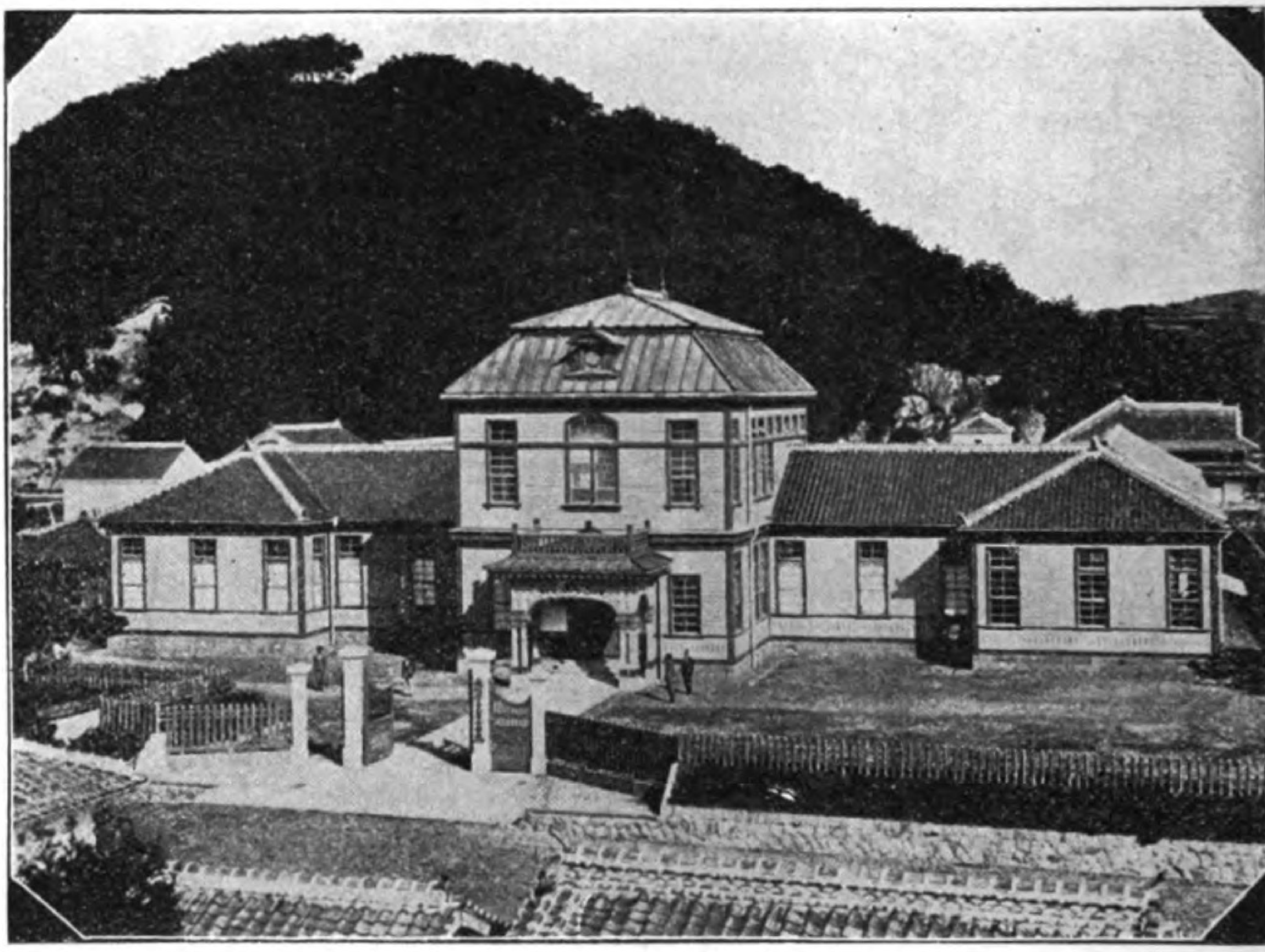
放課後の一時間 一の瀨初子

定價兩誌共 一册拾五錢 八册七拾錢 十六册一圓四十錢 郵稅一册一錢

（其の三）

發行所 東京小石川日本葉書會 賣捌 東京堂 東海堂 北隆館 良明堂 上田屋

濱田高等女學校



上海開道女學校內



茶の湯

☛ 御一覧の上御批評を乞ふ ☚

女子學術雜誌

各新聞の好評我國唯一の雜誌●見本券郵十三錢

五月一日 第一號要目

口繪 皇太子妃殿下（光澤紙二度刷）連翹（三色版）新式書簡箋（大判數度色刷）寫眞數葉

○讀書の選擇
○女子の體育
○現代の女流
○歐米の女子教育
○女學生と憂鬱症
○最近の結婚期
○女子教育
○四月の園藝
○女子の美貌術
其他○豚の料理法○海老茶袴の色揚法○女子の職業等數十件

本多男爵　山根醫學士　記者　麻生學監　後藤院長　棚田謙藏　菊池博士　前田技手　外國雜誌記者

○修身
○國語解釋
○文法
○日本歴史
○日本地理
○算術
○物理
○博物
其他和歌添削尾上文學士○作文添削秋廣未華（圖畫添削渡邊香涯

東女高師教授　大宮學習院教授　仝　馬上學習院教授　山川文學士　畑田教諭　近藤教諭　中井助教諭

毎號附錄日用女子和英辭典（八頁添附）

五月十五日 第二號要目

口繪 東伏見宮妃殿下（光澤紙色刷）綾瀨の景（三色刷）新式書簡箋（大判數度色刷）愛ちゃ其他寫眞

○良妻賢母
○兒守歌
○女子體育談
○小鳥飼養法
○女子に對する希望
○牡丹姫
○山の祠
○吉の山
○挿花と生花
其他女子と發明○女子の職業○ステール夫人傳○東西女學生等數十件

西女學校長　清子　山根醫學士　前田技師　中島德藏　秋郊　（小說）　西木武子　閑亭

○家政
○東洋史
○西洋史
○作歌法
○外國地理
○化學
○裁縫
○看護法
其他質疑は專門各家應答せらる新體詩添削渡邊光風
總て投書は添削

下田女學部長　高木文學士　馬上文學士　尾上教授　栗林文學士　渥美教諭　岡本講師　三好醫學士

毎號附錄日用女子和英辭典（八頁添附）

●高價なる講義錄を壓して興味ある名家の談叢と實益ある學科を網羅し非常の廉價を以て諸孃に見えんとす

●一冊十二錢郵税一錢●半年（十二冊）郵税共一圓五十三錢●一年（廿四冊）郵税共三圓

發行 東京府教育會附屬女子講學會　發賣 東京神田區千代田町二 博報堂

(女、壬の一)

女（壬の二）

毎月一回十日發行

農業世界

壹卷第參號（六月十日發行）

▲口繪
○家禽褐色レグホーン（三色版）○豌豆褐紋病の圖（石版刷）○堀田家と其農事試驗場○臺灣の果實○農科大學の温室○東京高等農學校實景○韓國農家の副業○滿洲の高粱と穀倉○米國の偉なる牛（以上寫眞版）

▲論說
天下の遺利に着目せよ（清浦男爵）●日露貿易上農工業者に告ぐ（佐藤博士）●對清國產業經營策（本田博士）●製糸と帝國改良（齋藤生糸檢查所長）●馬政私議（柳田法學士）農業道德の根本的觀念（横井博士）

▲農界の人物
●篤農家堀田正倫伯（鹿野化骨）●本那眞珠養殖業の御木本（二宮桑川）●農家副業蓮組工獎勵者（錦城生）

▲學藝
●米の腐白果して如何（稻垣博士）●作物醫談（堀博士）●害虫驅除勵行に就き所感（桑名學士）●石灰硫黄合劑（原農學士）●除虫菊（廣貞吉）●接木法一斑（下川義治）●熱帶の作物（吉川農學士）●果樹培養と綠枝剪定（高橋農學士）●實兒昔話中の保護（土屋技師）●日本蚕の價値（□□□次郎）●肥料及飼料としての大豆粕（山下農學士）外に四項

▲農政經濟
●種苗檢查と種苗商合同（白澤博士）●巡回農業圖書館の施設（石坂農學士）●參價變動の原因（伊藤好元）●共同乾繭場の設立（三谷徹）

▲家庭
●新農家の子女（石坂農學士）●農家の料理（横井禎子）●模範的農家の家庭（楚川）

▲海外農事
●清洲の農具（□□□雄）●滿洲の土質（酒井親輔）●韓國農家の衣食住（伊藤天涯）●北洋無盡の富源（□井啓吉）

▲雜錄
●北海の一大利源●府中附近の風習●和爾神社の御田植式●烟草の秦野

▲田園文學
●湯の里日記●懸賞俳句其他

一冊金廿錢郵稅二錢

毎號本文二百四十頁彩色石版畫二頁
光澤寫眞版四頁普通寫眞版四頁

數學世界

第二卷第二號

算術

三角法問題解義……白川太郎
記數法……出野淺治
算術講義　四則應用問題（上下）○同答ノ部○壹、貳、參、四諸問題解義
○自問自答○研究課題○質義應答○諸學校入學試驗問題○同解義○懸賞問題

代數學

三次方程式に就いて……松村定次郎
代數學の一問題解義……吉村三郎
代數學講義　方程式應用問題○同類項○寄セ算ト引キ算
○自問自答○研究課題○質義應答○諸學校入學試驗問題○同解義○懸賞問題

幾何學

截頭三角形作圖に就て……川越次郎
幾何學の一問題……米井秀雄
幾何學講義　平行四邊形○雜定理第壹貳、參問題解義
○自問自答○研究課題○質義應答○諸學校入學試驗問題○同解義○懸賞問題

算術之部
代數之部
幾何之部

三科共毎月一回一日發行
各一ヶ年卒業
洋裝菊判
毎號八十餘頁

正價

一冊金拾錢▲三冊前金貳拾八錢▲六冊金五拾七錢▲一ヶ年十二冊金壹圓拾錢▲外に郵稅一冊□錢宛▲三科全部一年冊六冊金三圓貳拾錢●外要郵稅

女（王の三）

東京本町 博文館

根治確証

わきが

新治療藥ラピヨシ

必ず全治して決して再發或は他病に變ぜず速に用て苦惱を脫せよ 丙價七拾錢乙價壹圓卅錢甲價特製貳圓五拾錢

本劑を塗擦すれば主成分は皮膚及び肉の組織に吸收せられ其組織にある毒素を深く浸潤驅逐し惡臭を根底より全滅せしむる作用を有する最近發見の特種の新劑にして如何程頑固劇烈の難重症も甲價特別製を用ひよ

毛のはへる

原名ベグネス

定價壹圓卅錢特別製貳圓送料拾四錢本品は原名をベグネスと稱する現今最賞用せらるゝ有力なる最新液にして毛をはやしたき人は早く試みられよ●ぬけ毛落毛を止め●はへぎわうすき人●まゆ毛●口ひげ●婦人こまあたりのはげ●あるべき所に毛なき人用ひよ毛髮增生す頭などにはげのあるのは見苦しき者也

化學製品

色の白くなる

効パントコロン溶液

價A印壹圓B印特製壹圓五拾錢送料十三錢本劑は貴紳淑女粹士間に大高評を博し殊に愛用せらるゝ最新流行の秘方奇劑にして本劑を塗擦すれば主性分の力に依り皮膚は次第に新陳代謝を盛にし皮膚を漂白するを以て全身次第に白色艶美となる男女交際上最も必用の品なり

身やくをとる

メソルビン此藥は子宮を痛ず如何ほど長き月經とまりも必ず下る二三月位のは壹劑も用ゆればすぐ下る二三ヶ月以上のとまり又は血塊には特製を用ひよ速に流經す本劑は効能極て烈強なるも毫も身體に害なくたやすく下る又月經不順より起る子宮血の道を全治し古血を一掃す價半劑六拾五錢壹劑壹圓貳拾錢特別製分貳圓參拾錢小包料拾錢

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

根治確証 新治療藥

梅毒

本劑は多年學理と實驗に依り最新發見の完全なる一種稀有の新劑にして忽ち全身の毒をとり●大小便如何なる劇烈のばい毒●そう毒●かさ●ふきでもの●よこれかんそ骨うつき其他如何なる惡性の梅毒も必根治す

輕症は半劑惡性重症も二劑用ひよ誓て奏効す世間種々雜多の無効なる驅黴藥の比に非ず藥價半劑八十五錢一劑一圓六十錢二劑參圓郵券代用一割增

らい病

新治療藥 ダービン

本劑は最近歐洲諸大家の最良藥と認めたる有力藥品の成劑にして何人にも容易に服藥し得る樣緊館幾多の調劑の實驗に鑑み丸劑となしたる者にて其有効確實なる本劑に優る者なし試に壹劑分丈けも用ひ見よ必ず大効あり壹劑廿日分三圓二劑四十日分五圓特別製九十日拾圓●郵券三錢送れ說明書進呈す

獨逸撰方 効驗一夜に顯る

りん病

新治療藥 キーロシン

本劑は最新の文明的有力藥にして如何程頑固劇烈なる淋病しよかちも一夜に輕快へ膿血を除き速に止り痛を止め輕きは一劑分重きは二劑分如何なる惡性の根治の目的を達す本劑は內服すれば一種の化學的變化を起し強度の殺菌防腐液となり小便と共に排泄せられ自然の洗滌法となり淋菌を根底より驅逐し病根を斷絕し苦惱を脫せよ人に知られず居ながら文明的新治療を受るを得速に用て

日本一手發賣本舖 藥價一劑輕症用六十五錢二劑重症用壹圓卅錢特製惡性頑固症用貳圓卅錢

●專賣 東京本郷湯島四丁目十四 オリエンタル藥舘

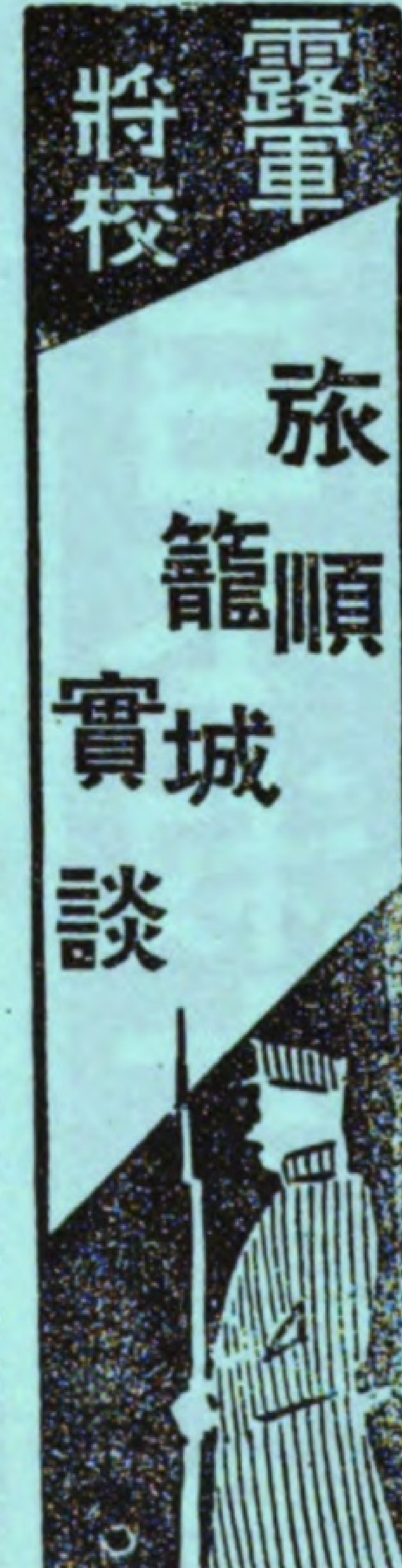
(壬の四)

悪夢



女（癸の一）

遲塚麗水君
內藤昌樹君
合著



全一册

洋裝菊判
紙數三百二十頁
（近刊）

目次

▲アーツル余を招く（テルベク中佐直話）
▲勇士の死は斯くの如し（エフスキー僧正直話）
▲軍樂隊の反響（スツウレンコウスキ軍樂長直話）
▲スラブを愛せし猶太人（リユビンスキイ大尉直話）

▲爾の敵を憫れめ（レオナルドフ檢査官直話）
▲二人前の戰死（ウエセロフ直話）
▲提督戰死の截夢（リユーミレ大尉直話）
▲良人の骨を蹴りし女騎士（ロプイレフ少尉直話）

抑も明治三十七八年戰後の中に就て、奉天の野戰日本海の海戰と共に永く史上に偉蹟を留むるは、旅順攻守の戰なるべし、上將の韜略戰士の勇武彼我互に讓らず以て彈丸黑子の地に鬪ひ日本男子の精神スラブ民族の氣魄相擊ち相激して、玆に絕代の鉅觀を現はし、スラブ魄は終に日本魂に屈服し城を開きて出で降るに至りたり、其流血の慘積屍の怛言ふに忍びざるも、而も兩國民人の發揚したる精神氣魄の壯烈なるは、應さに不滅の靈火となりて萬代を照すべきなり本著者內藤昌樹君は開戰當時長崎にあり旅順開城し露將來降ある每に、乃ち往いて之を訪ひ、其籠城談を聽く露の語る所悉く肺腑より出でゝ悲愴悽惋聽く者涙の滂沱たるを覺ゆ、其の人情の機微に入り身世の變化を極めたる一篇自然の脚本を作したるものにして、尋常一樣の小說を讀むの比にあらず、加ふるに方今の文界此種の著述に名ある遲塚麗水君の筆に成れる本書が如何に旅順戰史の好參考書なるかを知るべし。

概要

▲虛無黨員の殊功（ケノアトフ中佐直話）
▲旅順紀念の孤兒（ウエラーステツセル夫人直話）
▲エンセイ艦長の最後（パラノフ大尉直話）
▲心正しき卑怯者（シユラドヴイツチ判事直話）

▲手向の俚謠（オリシエフスキー中尉直話）
▲旅順悲劇の開卷（ウエルシニーシ大尉直話）
（以上）

東京 博文館 本町

（癸の三）



女學世界

第六巻第八號

六月五日發行

健康

人の世に處するや須らく元氣なかるべからず、元氣は品性を作るの原動力にして又學問、智識を作るの資源なり、人間一たびこの元氣を發揮するや其人の意志は一定の目的に向つて集注し、如何なる障碍物をも之を飛び越えて猛進し遂に凱歌を奏せざれば已まざるべし、即ち元氣は人生の目的を達するに最も必要のものにして其の之を得るは主として身體の健康に基く、故に人は人たるべきの義務として其の健康に注意せざるべからず。



新聞紙と家庭

夜來の雨、蕭々として降り灑ぎ、落花窓を撲ちて、春眠尚濃かなる時、早くも戸を叩きて、我家を訪ふものは新聞紙なり。風は雪を捲き、白絮飛々として中空に飄り、見渡す限り一面の銀世界、寒氣膚に迫りて、足一歩も戸外に出る能はざる冬の日にも、必ず來りて我家を見舞ふものは新聞紙なり。

小さき家庭と大なる世界

されば新聞紙は、小さき家庭をして、大なる世界と接近せしめ、狹き家庭をして、廣き世間と交通せしめ、單調なる家庭をして、複雜なる人事を觀察せしめ、靜寂なる家庭をして、活動せる社會を目撃せしむ。而も雨の朝雪の夕べ、曾て一日も怠ることなきは、最も尙ぶべき其の特性にあらずや。

古人は、智識と、信仰と、快樂と、便益とを以て、書籍の有すべき四個條の目的なりと曰ひき。今の新聞紙が政治、宗教より、文學、學術、經濟及び社會に涉り、東西南北、森羅萬象の實相を縮寫し、一目の下に、諸般の智識を供給して、一定の信仰を生ぜしめ、各種の娛樂を感ぜしめ、凡百の便宜を受けしむるによりて見れ

ば、此の四個條の目的は、粗々發揮し盡して、殆んど遺憾無きが如し。

若し世に新聞紙無からむか、家庭は何時迄も小さくして狹からざるを得ず。單調にして靜寂ならざる能はざるべし。爭んぞ又日々に世界の新らしき智識と信仰と、社會の興趣ある快樂と便益とに接するを得んや。大なるかな、新聞紙の家庭に及ぼす功績や。

多くの家庭が好んで歡迎する記事

新聞紙の家庭に於ける功績は、斯の如くそれ大なり。こゝを以て、其の家庭に與ふる影響の如何に大なるかも亦更に言を俟たざるべし、花にも月にも相親み、朝も夕べも身を離れず、昨日も今日も又明日も常に追隨して輟まざる新聞紙が、如何に鋭敏なる感化を與ふべきやは、相像するに難からじ。

野口事件と社會問題

されど一歩を進めて視來れば、多くの家庭が、好んで歡迎する新聞紙中の記事は、必ずしも政治宗教にあらず、必ずしも文學經濟にもあらずして、社會の出來事を報道する謂ゆる三面記事に在るは、注意すべき事實ならざるを得ず、蓋し社會的記事は、人心の好奇に乘じ、人情の弱點に投ずるものなるが故に、社會の事實を描寫して毫も隱さゞるは、恰も活動寫眞の如く、修飾して更に趣きを添ゆるに於ては、巧みなる戯曲にも似て、人をして、笑ひ、泣き、哀み、悦ぶ等、一種の感興を催ほさしむるものあればなり。この故に社會的記事愈々多ければ、讀者愈々之を喜び、其の記事尤も巧みなれば、讀者尤も之に親しむの狀ありて、其間恰も何等かの關連ありて、相默契するに似たり。かゝる狀勢なるをもつて、今の新聞紙が、爭ふて人の陰微を擿き、事の秘密を發き、舞文曲筆、潤澤し修飾して、偏へに讀者の所欲を充し、以て其の歡迎を受けむとするも亦怪むに足らざるなり、見よ、時人殺し、臀肉切り、藥種屋殺しの恐るべき罪惡が、一たび世評に上るや、之が張本人

新聞紙に取りて、九鼎大呂よりも重んせられ、其の一言一行は、千金の價値を生じ、小新聞は更にも言はず、平生大新聞を以て自任せる謹嚴なる新聞紙すら、貴重なる數段若くは一頁以上の紙面を、之が爲に塡塞して、尙且少きを患ひつゝあるにあらずや。

華嚴の瀧と大森の波打際

されば家庭が新聞紙により、受くるところの影響の尤も鋭敏なるは、重要なる諸般の記事よりも、却つて輕微なる社會的記事に在るは疑を容るべからず、而して社會の事實に善惡の兩面あるが如く、其の記事の與ふるところの影響にも、善感化と、惡感化とあるを免かれざるは、是れ將た自然の數ならんのみ。若し唯暗黑なる社會の裏面に伏在せる罪惡と醜行とのみを視て、之が是非を識別せずんば、淫猥陋劣なる文字に動かされ易きは、一般人情の弱點なれば、誰か又之が爲に誤まられざるを得むや。乃ち之が爲に醇良なる家庭も自ら濁り平穩なる家庭も自ら擾さるゝに至らんこと、淫猥陋劣なる稗史戯曲の類を見るに比して、一層甚しからむのみ。

華嚴の瀧に世を果敢なみ、人生の不可解を憾みて、遂に水底の藻屑と消亡せたる一少年の事實は、社會の出來事たるには相違なし、されど此の事實が、新聞紙上の問題となるに及びて、如何なる感化を天下の靑年に與へたる乎、幾多の靑年は華嚴の瀧を想へり。而して其跡を逐ゐたるものすらありしに非ずや。大森の波打際、松風稷々波浪穩かにして鏡面の如くなる處、一篇辭世の歌を殘して靑年學生と相抱いて、情死したる女學生の事實も亦、社會の出來事たるを失はじ、しかも悲哀艶麗の筆を以て、其の顚末を傳へしとき、さらでも菫よ皇よと、戀愛にあこがるゝ男女學生は、如何なる思想を起したりとするぞ。多くの女學生は、大森の海を望めり。之が爲に一掬の涙を濺ぎ、泣て吊ひしものも少なからざりしと言ふにあらずや。之を以て謂へば、事實を

事實以上に附會し牽强して、徒らに人心の好奇に乘じ、人情の弱點に投せんとする新聞紙は、人生の害惡なり。社會の蠹賊なり。家庭に惡感化を與ふるは、眞に是種の新聞紙ならざるを得ず。

如何なる趣味の新聞紙を讀むべきか

是に於てか、如何なる趣味の新聞紙を購讀すべきや、この問題は自から生せざるを得ず。而も之れ一概に解答し易からざる問題なり。人各々趣味を異にし、家庭各々其の興趣に同じからず、况んや職業により位置によりて、新聞紙に向ひ、望むところの區々たるに於てをや。されど凡ての家庭を通じて、普通に希望し得べきは淫猥なる事實を揭げざるもの、私行陰秘を摘發して揚々得たりとせざるもの、亂倫無道の出來事を修飾して、陋劣の文字を排列し風俗を紊るが如き嫌なきもの、則ち一言にして曰はゞ、事實を事實として、夫れ以上に誇張を加へざる、而かも品位ある新聞紙を選むにあるなり。かゝる新聞紙が、家庭に與ふる影響は、啻に世界萬般の智識と利益とを與ふるに止まらず、又清淨なる娛樂の種となり、趣味ある談話の問題ともなりて、家庭を平和にし、善良にし、健全ならしむるは勿論なり。

親子の間に朗讀する能はざる新聞紙

親子、兄弟、夫妻の間に於て、公然朗讀する能はざる記事多き新聞紙は、家庭に適せざる新聞紙なり。それ朗讀する能はざるは、心に耻かしきが爲ならずや。心に耻しきは、記事の醜猥なればなり。文字の淫靡なればなり。斯の如き新聞紙は、家庭に取りて無益にして、寧ろ有害なり、結局禁物たらざるべからず。故に新聞紙の、家庭に適するものと、然らざるものとを識別せんとせば、朗々高聲に讀み得べきと、否らざるとを以て標準とするも、亦簡易なる一方法とするに足るべし。

自助論の著者スマイルス氏は曰く、人の品格は、其讀むところの書籍に由りて、之を判するを得べきこと、猶其交るところの朋友に由りて、之を判するを得べきが如しと。蓋し品性の高尚なる人物が、方正謹嚴なる書籍を好讀するに反し、品格陋劣なる人にありては、野卑なる稗史小說の類を愛讀するは、自然の理ともいふべければ、机上に載するところの書籍は、以て其の人物の品性如何を識るに餘りあるなり。而して新聞紙亦書籍と同じく、依て以て家庭の品質如何を知るに足るといふも、強ち過許にはあらざるべし。若し高尚なる家庭が如何なる新聞紙を購讀せるかを見ると同時に、市井狹斜の家庭に於て、如何なる新聞紙が流行しつゝあるかを究め見ば、思ふに釋然として了會するところあらん。

新聞を讀む時期

若夫れ朝夕如何なる時間を以て、新聞紙を讀むべきかは、略々一定し置くべきことならざるを得ず。何處の家庭にても、其の家庭に相應したる用務あれば、此の用務をも差措きて新聞紙を讀めとの理由はあるべからず大概の家庭にては、朝飯前又は朝飯後に於て、必要なる事項丈を摘讀し置き、晩餐後又は夜間就眠前の餘暇に更に讀み洩らしたる個所を詳讀することゝせば、用を缺かずして樂しむに餘りあるべし。則ち午前には必要として讀み、午後には娛樂として之を讀み、斯くして朝夕怠らずは、日に新智識と新娛樂とを得て、家庭の幸福は益々增進するを見るに至らん歟。若又後日の心得となるべきもの、參考とすべきもの、記憶し置くべき重要のものなどは、切拔きて、抄錄冊子に貼附するは、尤も便利なる方法なるべし。斯の如きは、善く新聞紙を讀みて、之を利用するものといふべきなり。

要するに新聞紙の家庭に於ける勢力や偉大なり。而して之が爲に害用さるゝなく、善く之を善用する家庭こそ、新聞紙によりて幸福を受くものといふべけれ。

自由戀愛說

安部磯雄

どんな名論でも、聽手に釋解されゝば大弊害が出來る。自由戀愛と云ふ語は、近頃大分新聞雜誌に見える樣に成つたが、これにも少なからず誤解が伴つて居て、中には之を曲解して自分の非行を辯護しやうとするものもある。吾輩は其誤解を除去するため、こゝに一言しやうと思ふ。

元來戀愛は自由であるべきもの、他の抑壓を受くべからざるもので、露骨に言へば、結婚は當事者の意見を主とし、父母や親戚の意見は客にすべきものである。然し自由戀愛は決して野合でない。世に自由戀愛と云へば、たゞ當事者の意氣投合といふことばかりと解し、父母にも親戚にも相談する必要はなく、結婚式なども擧げるに及ばないと思ふものがある。が、此は曲解である。

今日自由戀愛說が起つたには、自づと深い理由があるらしい。現社會に行はれて居る多くの結婚は、重に門閥財產の釣合、家族の都合などが標準に成つて居て、戀愛其ものより外の分子が概して重要視されて居る。離婚の三分の一は、實に之が結果として生ずるのである。尤も此は我邦ばかりでなく、泰西諸國も、結婚の自由は漸く失はれつゝある有樣で、金錢の勢力が盛であるに從ひ、金錢と結婚し樣とする傾向が生じた。此の傾向に反抗するが爲め、自由戀愛の說は生じたもので、戀愛の前には、金錢も、門閥も、將た兩親も、親戚も、其權力を揮ふことは出來ないと云ふが、其主張である。

然しながら如何に自由戀愛者と雖、或程度までは社會の規則に從はなければ成らない。こゝに男女がよく意

氣の投合を見るに至つたならば、まづ長上の賛成を得、同時に公然の式を擧げるまで、お互に十分謹愼して、世の誤解を避けねば成らぬ。極端な自由戀愛論者は、双方の意氣さへ投合すれば、よいとして、直に同棲し、後父母の承諾を請求し、而して式を擧げると云ふ有樣であるが、斯う成ればむしろ野合である。米國の如き、自由戀愛の行はれる處でも、矢張り嚴然たる制裁はある。結婚を約束する青年男女は、則ち先づ兩親の承諾を得なければ成らない、承諾を得ない場合に、丁年以上ならば强て結婚することも出來るが、斯う云ふ場合は、資產の相續を拒絕する權が父母に在る。言換れば、戀愛問題は當事者の考が主であると同時に、自由戀愛をして野合に陷らしめないだけの制裁は、十分にあるのである。況して結婚式前の同棲などは、社會が嚴重に制裁する。

吾輩は元來生涯一度の外結婚すべからずと云ふ主義を採つて居るもので、自由と云ふことは、決して屢戀愛者を取替へると云ふ如き淺ましい意味には解しない。只青年男女に自己の自由意思で其配偶者を定めさせ、父母親戚の抑壓で定める樣な事をなからしめたく思ふばかりである。其れと同時に吾輩は、青年男女の關係を極めて潔白に嚴格にさせたいと思ふ。所謂父母の承諾を求めるにも、己が戀愛は決して一時の痴情に出たものでないことを證明する程の態度を取り、以て十分に父母を安心させ、或は父母が之を承諾しない場合は、其心の和ぐまで數年を待つ程の覺悟があらせたい。要するに結婚を斷行すると否とは自分の權内に在ると謂ふものゝ、尙あらゆる手段を盡し、以て父母の心を和げるは、青年男女の義務であると思ふ。取分け公然の結婚式を擧げない内に早く巳に夫妻の關係を結ぶなどは、一の大なる失態であると信する。

然し尙一方の自由戀愛に反對するものに對しては、同時に同意が出來ないのである。論者の中には、無經驗な青年男女が其配偶者を擇ぶより、經驗のある父母が擇でやる方が遙に安全で、戀愛は結婚後自然に湧て出る

ものだから左程心配するに及ばないと謂つて、自由戀愛說の尙早を唱えるものがある。が、我邦の家庭に幾多の悲慘な事があり、其が多く夫妻の不調和から來り、夫妻の不調和が全く結婚制度の不完全から來るとすれば、家庭改良の基礎は、實に結婚制度の改良に置かねば成らぬ。かの戀愛の發生を結婚後に求める如きは殆ど僥倖を希ふに等しく、決して贊同の出來兼ることである。自由結婚者の結果は、精細な調査後でなければ何とも斷言は出來ないが、吾輩の知る限りでは、先づ其多數が愉快な家庭を作つて居るらしい。尤も或人は情死を企で て幸に夫妻と成つた七八十組の夫妻の中、能く其愛情を全くしたものは三組しかないと謂つて、以て自由結婚の却て失敗に終ることを稱道するが、情死でも企てやうと云ふものは、槪して敎育のないものである上、多くは腕一本で此世を渡り兼ねる人々で、槪して生活難の爲めに情死を企てるのである。從てたとへ幸に家庭を作るに至つても、矢張り生活難の爲めに、何時しか其痴情を醒まして、遂に別離を見るに至るのである。此れで自由戀愛說を破らうとするのは、少しく無理と謂はざるを得ない。

然し自由戀愛說に幾多の弊害が伴ふことは、吾輩も之を信ずるのである。今日直に靑年男女に自由戀愛を許すとすれば、利益も多からうが、弊害も亦決して少なくあるまい。なぜなれば我邦では、未だ男女交際の道が十分に開けて居ぬため、未だ互に其性質を知り悉すと云ふ程の場合に達して居らない、從てたま／＼男女互に交際をすることに成れば、彼等は多く對手の人物が何うであるかを知悉する前、早くも忽ち淺薄な戀情を起すのである。此は畢竟男女交際の開けない結果で、靑年男女に自重心がないのも無理はない。だから、今日男女互に撰擇を誤るのは、むしろ男女交際の不完全から生ずるのぢやと斷定しても、あながち不可はないのである。

世には男女の交際を盛にするにさへ反對する人があるが、我が家庭を淸潔なものにし、愉快なものにするには、まづ夫妻の間を淸潔なるものにし、愉快なものにしなければ成らず、夫妻の間を淸潔なものにし、愉快なものにするには、つまり自由戀愛と男女交際との方法に據るより外はあるまいと思ふ。

嫁入仕度の教育

樋口勘次郎

△獨身主義を抛つべし

今日の女子教育で、謬見や缺點を數へ立てたら隨分澤山あらうが、就中最も遺憾に絶えぬのは女子に排婚思想を注ぎこむ事である。婚姻は厭だから女文學者にでも爲つて、自分で獨立爲やう、など云ふ思想を懷いて居るものは世の中に往々ある現に昨年私の家に置いた一女生（高等女學校卒業）なども矢張り是れであつた。恁ういふ間違つた思想を懷かせるのは詰り學校の教へ方が誤つて居るからである。自分獨りは獨身主義でも良からうが、其樣云ふ思想が汎く一般に行はれると其の結果は何うであらう。第一子供が出來ぬ、夫れでは社會が絶滅するではないか。

△女子本來の職分

元來女子の職分は子を生み子を育てると云ふ事である、此は甚だ明白なことで、身體の結構が既に其樣云ふ具合に出來て居るのみならず、自分の精力は殆んど全く之が爲に費さねばならぬやうに爲つて居る。先づ懷姙期の十ケ月は中々の勞苦である、次に分娩期は短かいけれど女子死亡率の大部分は之れで以て充されて居ると云ふ程に危險の多い時期である、其他哺乳期や養育期などもあつて、之にも亦非常な精力を注がなければならぬ。斯くの如く女子は生れ乍らにして重大な任務を負ふて居るので、男子とは全然別種の職分を執らねばならぬやうに爲つて居る。去れば女子教育の目的とする所も亦此所でなければならない。

△子を通して世に働らけ

女子は其の精力を子孫繼續と云ふ事に費さねばならぬが爲に、殘る所の精力は男子に比べると極めて分量が些ないのである、此の少ない精力を以て、世の中に立つて男子と角逐爲やうと云ふのは、大なる心得違である。歴史は正直である、昔から英雄豪傑と崇めらるゝ程の偉人は男子に多いが女子には寥々これが何よりの證據であらう。去れば社會に立ち働らくとか、社會の爲に文明を築き上げるとか云ふ表立つた仕事は男子が受持つて、女子は自分の生んで育てた其の子を通して世の中の爲に盡すと云ふとにするが天の命じた職業である。

△女子の高等教育は無益なり

女子には何れ程の學問をさせたら良いかと云ふに、右に述べた女子の職分と今日我國の教育程度とを參酌して考へて見るに、まづ高等女學校位で充分であらう。西洋諸國でも近頃女子の職分と云ふ事が段々判つて來た爲に、穩健な思想を有する人々の考は皆其樣云ふ風に爲つて居る。之より以上の學問を爲せるのは無益である、のみならず却つて害があらうと思ふ。女子は兎角敗け嫌いの氣象の強い所へ、男子のやうに横着しくは無いから、之に度々試驗などを遣らせては、其の爲に非常に精神を疲勞らせ、身體を害し、遂には其の本職の子を生むと云ふ事も出來ないやうに爲つて來る。年齡の方から考へて幾歳までは學問を爲せて置いても良いかといへば、判然幾歳までと云ふやうに、キッパリ限界を定めるとも出來ないが、凡そ高等女學校を卒業する位の年輩、即ち十七八歳迄は良からうと思ふ。其の上尚ほ高等教育として三四ヶ年も學問を爲せるのは有害である、たとへ有害でないまでも、無益である事は確である。

△どんな夫を擇ぶべきか

女子の職分と、それに必要な學問とを土臺として考へて見ると、今日の高等女學校は恰度嫁入仕度に該つて

居る。して見れば此處で婚姻の事を教へるのは最も至當な話である、少くとも何んな夫を擇ぶべきか、又子供を生んだら何うして育てるか、位の事は是非共教へて置かねばならぬ。所が今日の學校ではそれを全く教へないで、その代りあやし氣な三十一文字を並べたり、悲哀とか、理想とか言つて涙澤山の文字を並べる事位は知つて居やうが、結婚の事などに至つてはから駄目である、そこで今如何なる夫を擇ぶべきかといふ事に就て言つて見ると、先づ結婚には心理的(お互に氣の合ふ)結婚と生理的(お互に身體の釣合ふ)結婚との二つの區別がある、又他の方面から見て、結婚には個人的(兩人の望する)結婚と、家族的(家族の望する)結婚との二つの區別がある。で結婚は此の四つの種類の孰れにも適ふて居らねば到底幸福なる家庭を造ることは望まれない。去れば女子が結婚するに當つては、先づ氣が合つて、身體が釣り合つて、兩人共に希望して居て、それに我國では家族といふ事も大切な關係があるから其邊の希望するやうな男子を擇ばねばならぬ。此等は極めて明瞭な事だけれ共、學校では恁んなやさしい問題にすらも觸れることが出來ぬとは甚だ遺憾である。

△女子の活動舞臺

恁ういふと世間では反對があるかも知れぬ、女子は嫁入して子を生んで家に引込んで居る樣では甚だ困るぢやないかと言ふ人があるに相違ないけれど、私は女子に取つて最も大切な職分がこゝにあるといふので、此の大切な職分を盡し得た上で、更に女子に適當なる仕事、例へば圖畫、裁縫、音樂、慈善事業のやうなものを以て世の中に盡すと云ふことは、甚だ喜ばしい事であらう。但し夫れにしても其の働らく所の基礎は矢張り異がつて居らねばならぬ、男女の分業は天の命ずる所、即ち互に別々の職分を有つて居るのであるから、決して競爭の體度を取つてはならぬ。

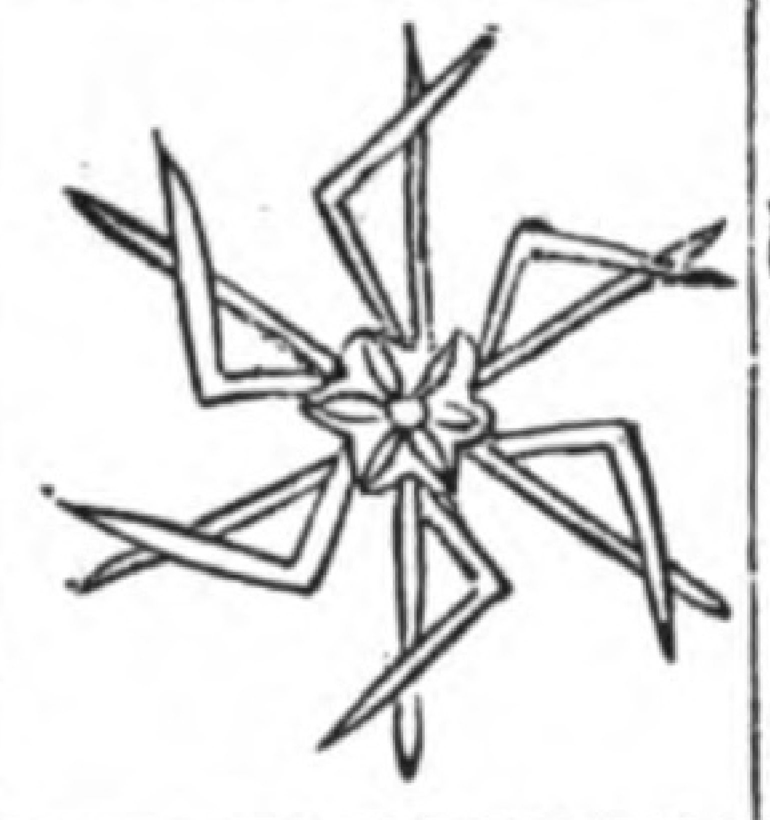
新意匠の紋



ひがたはまぐり



おもたか花ぎり



ま川むくるま



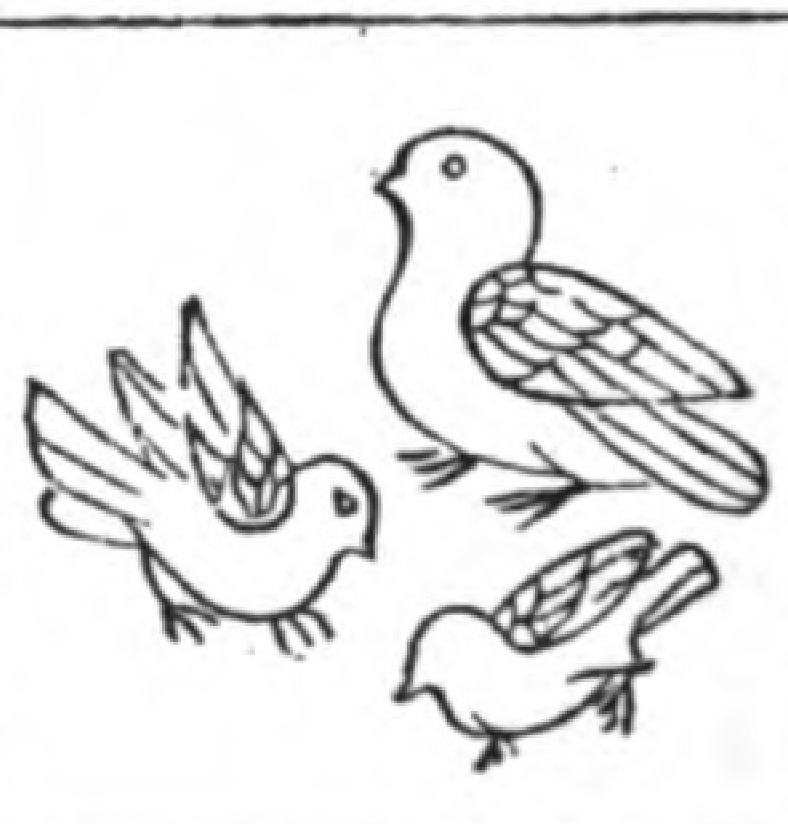
けん祢ち丁子



あこえ花びし



だきすみれ



子持三羽もと



かすみに帆



山ぶきの丸



三つとてことぢ



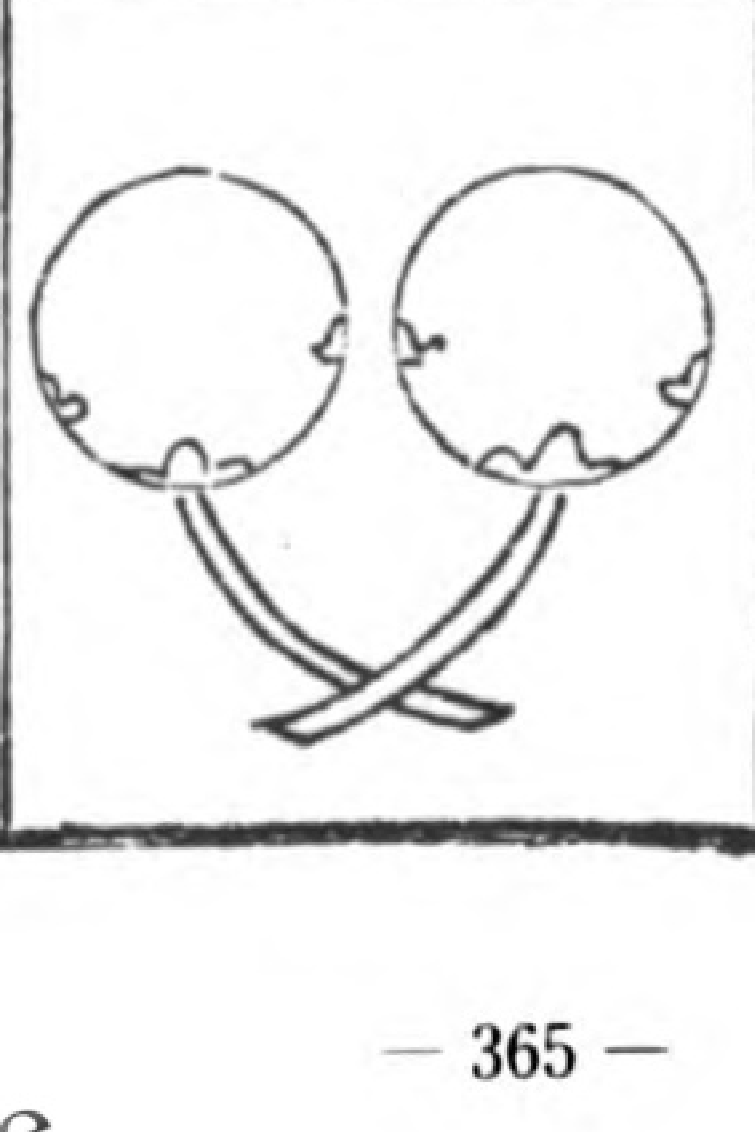
花鳩ぢ



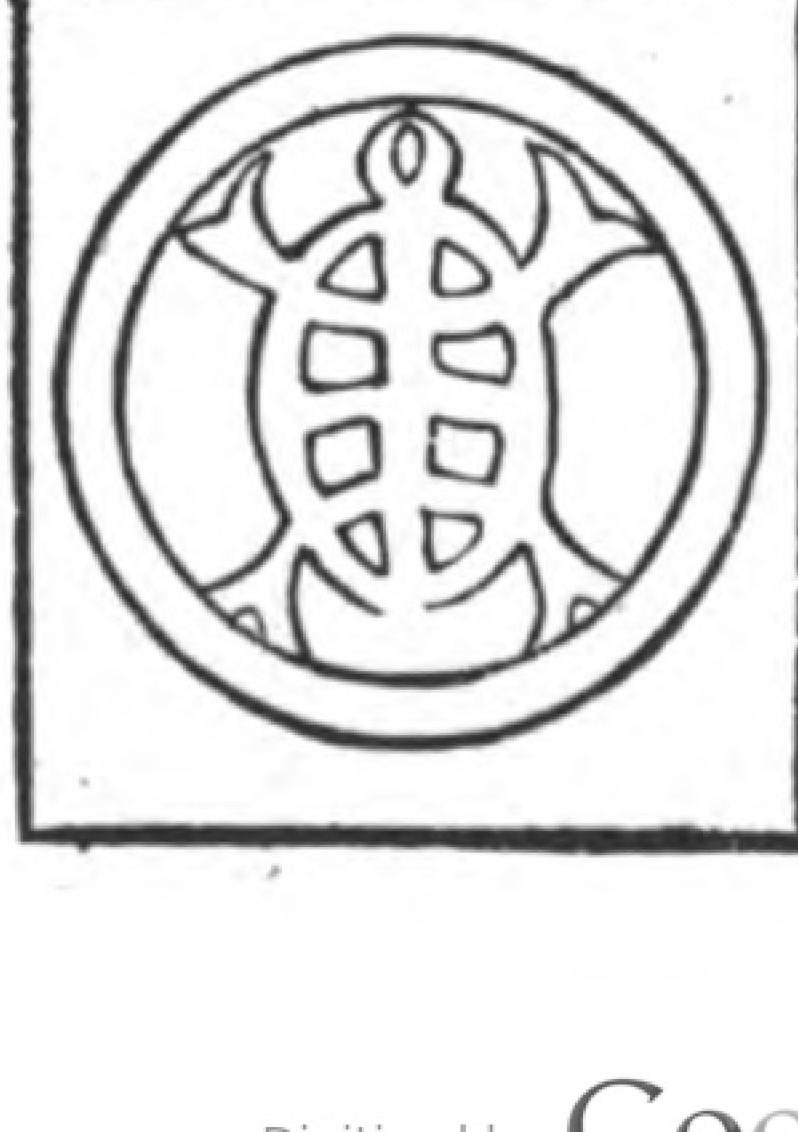
ちりまりはさみ



遊ぶしきぼたん



ちかひうちわ



古文字亀



美人の勢力範圍

泊子

△上下三千載の歴史を美しく飾りしものは何。
△淀君と、虞美人とクレオパトラの勢力。
△美人を高給にて雇ひ入るゝ學校の眞意。
△元祿振りを美人に着せし敏なる趣向。
△品性を陶冶し、人格を錬る第一の動機は何。
△美人も人なり欠伸もすれば團子も頬ばる。
△物質界の勢力は精神界の勢力に及ばず。
△優れたる彫刻をするには鈍い刄物を用ふ。

春色酣はにして櫻花の風に亂るゝ、白百合の露重う夕日に映えたる、美は美で艶は艶では御座いませうが到底人間の美しう麗はしいのには、及びますまいと存じます、美人は將に人世の花であつて、人類の寶で御座います、撫で肩の後姿すらりつと、髪は銀杏返しにもあれ、束髪にもあれ、扨ては丸髷の品能く、島田の粋がりたる、襟白粉の際立たぬ迄色白きに、態とならぬ口紅、遠山の眉清う、眼の輝く様に冴えたる、或るは夢見る様に曇りたる、細面の優しきも下脹れの可愛ゆきも、世に美人が無かつたならば、都會に美人が無かつたならば、交際社會に美人が無かつたならば、宴會に美人が無かつたならば、誠に淋しいつまらない物になつて仕舞ひませう、況しておほけ無き邊り、美人の側に侍らずば、物を食し召しても甘うない、國家の政を執る氣力も出ない等と、有り難い事を御言遊ばす、古稀に近い御前様も居らつしやる相で御座います、詩に歌に小説に雜誌に美人無くば、美人の口繪無かつたならば、本屋の店頭嘸かし淋しくなりませう、乙女の姿今暫し等と天津風に無理な註文を遊ばす厭ら

しい御坊樣でなくとも、女の白き脛を見て、通を失つたとやら云ふ久米の仙人でなくとも、況んや凡夫、繪葉書や、女の寫眞に、垂涎三尺、頻りと美人の餘香を拜するも無理のない話、美を好むは人の常であつて、美に憧がれるのは人の情で御座いますもの。

▲歷史と美人

成程、歷史の表面に現はれた事實は、殆ど男子の手に依つて、樣々な活動もし、種々な變遷も致して參りました樣で御座いますけれど、少しく其裏面を伺ひ、其眞相を探れば、野心の爲とか大義の爲とかにするのは別として、其外は大抵婦人、即ち美人の關係して居らない事件は御座いますまい、美人に依つて起ち、美人に依つて成功し、美人に依つて衰へ、美人に依つて亡ぶ――順序は其人〲の性行と經歷とに依つて、差がありませうけれど、大抵其軌を同じうして、光輝ある色彩ある、三千載の歷史を美しう飾つて居るのだと存じます。

豐公一世の偉業、空しく關ヶ原の一戰に敗れて、殘滓僅かに葦の葉に埋もるゝ大阪城の黃昏、細雨斜めに微の暗き處、誰れか淀君の傾國の美を想はざらむや、ナイルの河畔月影落ちて、秋荒寥の涼風、雨を呼ぶ邊り、永久に空を摩するピラミツトを仰ぎましたならば、誰か國色絕倫なりしクレオパトラの美を偲ばざらんや、項羽が哭ぎし虞氏の涙、勾當の內侍に離別を惜みし新田氏、一國の運命を累卵の危ふきより救つた健氣な少女もあれば、政變の犧牲となつて、自ら潔く斷頭臺上の露と消えて、時の志士を激ました美人も佛國にはあつた、男子は力量に、手腕に、學識に、野心に、智に意に依つて表はれ、女子は多く其の美に依つて現はれる、由來人間は感情の動物で御座いますから、理屈でも威力でも、怎うしても動かす事の出來ない意志の强い男子でも、美人の紅涙には敵し得ないで、激しては水の低きにつくが如く、發しては乾きたるに、火の燃える樣に、種々な活劇が表はれて參るので御座います。

▲美女の勢力

併し先も申した通り、美を好むで醜を嫌ふ、之れが動かす可からざる人間本來の情で御座いますから、浴後の微醉に美人の膝枕、心地快しとしない者がありませうか、海棠一枝雨に惱める美人の嬌態に、心、恍惚としない者がありませうか、だから男子でも女子でも、容色の美い者は七つの徳があるとか申す相です、況して女の醜いのは誠に可哀相な氣の毒な者で御座います宿瘤の賢が氏無うして、玉の輿に乘つたり、瀧鶴臺の妻の謹愼、能く良人の愛情を深うした等の例は、美人が美に依つて、成功したのに比較ると實に少ないのであります、近頃聞きますと、學校の敎員すらも、生徒の訓練上、敎授上、美婦の醜婦に比して、力を勞せずして効果の多きに、如きませんとか申しまして、爭つて美しい女を高給で雇ひ入れる相で御座ひます、して見れば、人の妻として良人を慰籍し、人の母として、子女を敎育する上に於て、美女の醜婦に勝る萬々なる事は、明白でありませう、だから着物や髮形等も、美しい方が御用ゐになると、餘程引き立ちます、醜婦が幾ら凝つた風を致しても、眼を附ける人がありませぬけれど、美人が少し變つた形を致しますと直に其れが人の注意を引いて、終には流行する樣になつて參ります、先年去る機敏の呉服店が元祿振りとか云ふ模樣を流行させる手段として、新柳二橋の美人に用ゐさせて以後、非常の速力を以て現今の流行を見るに至つたと申す位、實に美人の勢力は恐ろしいもので、流行界は美人――先づ只今の處藝者に依つて支配されてる樣な有樣で御座います。

▲美人と佳人

乃で、私は猶、美人の勢力の範圍を明かにする爲に、分り切つた事では御座いますけれど、美人と佳人との區別を致して置きたいと思ひます、唯一言を以て之を申し上ぐれば、美人必ずしも佳人とは云はれませんけれど、佳人必ず美人で無ければならないと云ふ差違が

御座います、ですから、古から美女は兎に角比較的多くありましたけれど、眞の佳人は、誠に稀なのであります、淀君やクレオパトラは美しう御座いました、楊貴妃や小野の小町も綺麗ではありましたけれど、佳人とは申されませんでしたが、紫式部の才筆、玉照君の高潔、袈裟の貞操、靜の端雅、僅しかに佳人たるの資格があらふかと存じます。

▲美女と醜婦

其麼具合で御座いますから、設令美女たりとも賢にして、德高く行ひの清い醜婦には、如きません、だから美しいからとて、誇るにも足ないけれど、醜いからとて、我から卑下するにも當りません、斯う申せば、自分の田へ水を引く樣で、美しい方々に對して、甚だ相濟まぬ譯で御座いますが、美女は、美しうて人目を引き易い丈其れ丈、危險の場合、墮落の動機が多う御座いますから、操行の修まらぬ美人は比較的多いと云ふ譯になつて參ります、況んや、美女は、自分の美を恃むと云ふ絶えず、誇りを持つて居る嫌ひがあります、けれど、婦人一世の大問題たる結婚に就いては、美女は、美と云ふ、花が、既に男子の希望に投じて居るのですから、滅多に婚期を取逃す樣な事はありません、醜婦は已に、容貌の醜いと云ふ、缺點が御座いますから、下手に狼狽くと一生獨身で立てねばならぬと云ふ悲しい運命を持つて居ります、だから醜婦は、他の方面に向つて必死と、修養を積まねばなりません、時には人の輕蔑にも堪へ、人の冷笑をも忍ばねばなりません、這麼事が、品性を淘冶し、人格を錬る上に、非常な効力を表はしまして、美人多くは薄命なる中に、醜婦の意外に成功する事が間々あるので御座います、之れをこそ、禍轉じて、却て福となると申すのでありませう。

▲男女の愛情と美醜

此處に可笑しい事には、親子の愛情や骨肉の愛情や、同性の愛情は、其人の美醜に依つて更に變りはないけ

れど、異性の愛は、大に美醜が關係するとか申します、併し、蓼食ふ虫も好き〴〵とか惚れて眺むりや、痘痕も笑凹とか申しまして、大なる戀、熱烈なる愛は矢張り、美醜には關はらないかと思ひます、隨分御粗末千萬な奥樣に鼻の下を延ばして、居らつしやる旦那樣もあれば、餘り風采の上がらぬ醜男が却て艶福に富むと云ふ例は世間には幾らも御座います、殊に、自體男の方は、誠に自惚の强い者でありますのに、美人の絶えず自分の容色を鼻に掛けると云ふ其の自惚とが衝突して、此處に、圓滿な愛情が成り立たないで、却て折角其の美に依つて萠しかけた戀も、破裂すると云ふ順序になり終るので御座います、况して美人だと云つても物も食べれば、眠りもする人間の皮一枚剝けば血も出樣、骨もあらふ、可愛い口で欠伸もすれば、團子も頬ばる、何をか美と云ひ何をか醜と云はむやで、眼元が可愛いの、眉が愛しいのと騷ぎ廻るは其れは若い中の眞の夢の樣な果敢ない戀、實際自分の妻として一生連れ添つて行かうと思へば、美醜問うて居る暇が無からふと思ふ、よしやあつたにした處其れは二の次の問題であつて、當節柄、第一に富とか位置——否、第一に氣心の合ふのをとお選びになる相で御座います。

▲美女醜婦の勢力範圍

斯う申しまするど、美人の勢力の範圍は誠に、狹うなつて參りました、更に私は、美なる多くの人は無能？であつて、醜なる多くの人は、敏腕？なりと云ふ筆法から、兩方突き合せた處で、即ち對等の勢力を持つて居ると申します、換言すれば、有形上の美人の勢力と、無形上の醜婦の勢力とは、殆んど等しくあつて、而も、物質界の勢力は到底精神界の勢力には及ばないと思ふのであります、良妻は必ずしも美人ではありません、賢母は必ずしも美人ではありません、文學に美術に成功した人は、皆、悉く美人ではありませんでした。優れたる彫刻をするには、少し鈍い刄物を用ゆるとか申す相で御座いますから、餘り美しく生れるのは、却て不幸かも知れません、否や、私共は眞實く負け惜しみでも何でもなく、美しく生れなかつたを、結局幸福であつたとして、喜むで之で筆を擱く事と致しませう。

歐米婦人の氣風と社交

日本女子大學校學監　麻生正藏

氏は歐米女子教育視察の爲め一昨年其途に上り彼地女學校の狀況を視察して此程歸朝されたり左は即ち其談片なり。

亞米利加の婦人は大のお轉婆であるとは豫々聞いて居ましたが、實際參つて見ると評判程でもなく、聊か意外に思ひました。閑雅で謙遜で內氣な日本婦人をのみ見慣れた私が、遽かに米國婦人の中へ飛び出したのであるから、其の緩みの無い顏付や、明快な語調や、快活な擧動を見て稍や强う過ぎると感じたが、段々と東の方へ行くに從つて、次第に此の感じも薄らぎました。東方は米國では最も古い歷史があつて、且つ最も英國に化せられて居る處だから、一般に雅な風がある。此方へ來ては全く違ふ之れは强ち、彼地の風に慣れたばかりとも言へない、米國とても相當の教育を受けた婦人ならば、實際丁寧親切であつて、些もお轉婆の風は見えない。英米兩國の婦人の間にはまづ大した差異はありませんが獨逸や佛蘭西の婦人となると少しく趣が異り、其の氣風は英米よりも却つて日本婦人に似て居て、概して閑雅で、いかにも婦人らしい所がある。で各國婦人の中で孰れが一番交際上手かといふと、矢張亞米利加婦人が第一である、彼等は天眞爛熳で愛嬌があり、丁寧親切で痒い所へ手の屆くやうな交際振は實に感心なもので迚ても他國婦人の及ぶ所ではない。

△奢侈の風潮

在米中或る家政科の教授の言に、米國では女に嫁入るものが少くなつて獨立する者が多くなり、家を構へる者の段々と少くなつて來るのは困つた事である、これには種々な原因があるけれ共、婦人社會の奢侈が其の重なる原因である、今婦人社會の有樣を見るに、ちよつと人中へ出るには、腕環も要る、首環も要る、耳環も要る、其他種々樣々の裝飾があつて、孰れも贅澤三昧を盡す、其の一例をいふと數百弗を抛つて新調した必要で高價の美服も、一度地摺をすれば再び之を顧

みぬやうな風であるから、其費用は實に莫大なものである、然るに男の身になつて見ると、自分の妻には成るべく世間並の身嗜を爲せたい、しかし其れは中々容易でない、と言つて不味い風を爲せて人中を連れて歩くのも、甚だ面白くないと云ふ所から、自然妻帯を見合はすやうになつて來る。いかにもあちらの婦人社會の奢侈は、日々に增長して止まる所を知らぬ。其流行の如きも非常に複雜に爲つて居るので、例へば二三十人或は百人位集つた婦人の中に就て見るも、其中に一人として同じ裝飾をして居る婦人を見ることが出來ないのである。で歐米諸國に於ては近來漸く其の弊害が現はれて來たので、特に聖彼得堡や維也納では、分に過ぎた華奢を眞似た爲に今日は甚しい窮境に在ると謂ふ事です。

△子供の躾け方

佛蘭西の子供の躾方は大分日本に似て居るが、子供を餘りに大切にするので稍柔弱に流れる氣味がある、親は子供の爲に財產を蓄へ、子も又自然親に頼る傾向のあるは、やゝ缺點です。英米の家庭は之と異り、子供の幼少の中は非常に注意を加へて養育する其の躾方は甚だ嚴格で、決して甘えさせないけれど。稍しく成長すると、全く子の爲る儘に一任して、極端と思はるゝ程自由放任主義を採つて居る。例へば妻を娶ると云ふやうな重大事件でも、親々は少しも干渉せずして子の一量見に任せて置く、我々から見ると餘りの事のやうに思ふが、これが英米家庭敎育の特色で、彼等は之に依つて子供の獨立心を養成するのである、で子供も又親讓りの財產を守るやうな事はしない、自分の運命は自分で開くものとの思想が少年の頭腦に充ちて居る又娘の子を育てるに就ても矢張り獨立心と大膽といふとに重きを置くので、子供が非常に危險な場所に遊んで居ても、無干涉で放任主義を守つて居る。日本人ならば樹に上るのは危ないと叫ぶが英米人は之を言はぬ、子供が船の欄干へ攀ち上るを見ては、我々ならば冷汗を流さうが彼等は一向に無頓着である此等は英米獨特の敎育法である。

夏のひかり



夏の美——六月の巻

▲早乙女——早乙女の汚れぬものは歌ばかり、苗代の苗をこゝに移して、子の泣く方へ植ゆるとや、畦よりは笠のみ見えて、男、女の差別もなく、涼しき風を身に受けて、田一枚の唄は清くも、柳の下の握り飯、そもや都には見られぬ風俗ならずや、かくてぞ秋は収穫の望みに老の若やぎもすなる。

▲團扇——天狗のもてる羽團扇は風を呼び雨を起すらん、法華の打つなる團扇太皷は、妙法蓮華の功徳ありとや、まことにこの團扇丸くして柔和なれば、岐阜團扇の名に呼ばれて、美くしき人に侍づき、女はふたぬ、男は裸百貫の腰にもさゝれて、茶代廢止の聲はあれども、宿屋に塗盆の上に景物、重寳なるものゝ一つに推されて、年中臺所に煤ぼる渋團扇も、時に塵取りの代りもなすべし、繪に描きし貧乏神のみの沙汰にはあらずかし。

▲日傘——今は絵日傘の見えずなりて、深張とやらん蝙蝠傘とはなれり、蝦茶袴に二枚草履の足も輕く、この傘に日ざしを避けて、行き過ぐる道や三尺、白薔薇の香りゆかしく鼻をうたば、誰かは恨む傘の深張、漢皇ならぬとも、魂や喪ひやせん、小褄片手に杵屋の門を、潜る日傘の美しとて、人は迷ひもするものを、心憎きものゝ一にこそ。

▲浴衣——中形は俗なりとて、鳴海絞の袖も輕う、浴後の髪を柳に梳かせて、夫待つなる門の石橋、豆腐賣る聲を秘めて、半挺がものは水にもなすべし、夕やけ空のあか〱と。

▲蚊柱——煩悩きものゝ一つならずや、文武と云ふて眠られぬは未だしも、夕暮を小簾の彼方に凱歌の聲喧しく、四面楚蚊の聲とは項羽も洒落じを、大手搦手の隙間〱、無遠慮に人を襲ふの罪、いつの世にか消え失せぬべき、孑孑のまゝで生きなば、人にも世にも疎まれで過ぎぬべきを、浮沈みして憎まるゝ、かくても汝は血に飽かんとや。

▲女夏帽——鳶色の夏服に女夏帽戴きたらんは、なん

ぼう尊くこそ見ゆれ、わけても七つ八つばかりなるが、白き色のそれに菫、薔薇などの花の挿みて、世の愛も知らず顔に、海のあたり逍遥きの、﨟たけて見ゆるものかな、昔しの人には似合はじとよ。

▲蟲賣＝＝情知らぬ業とも云はゞ云ふべし、縁日の小暗き陰に、荷を下して、松蟲鈴蟲の聲を合せ、篝火の闇に燃えよと、客を待つ男有繋に俗ならず、籠に舟、櫓のたくみを加へ蟲を慾に利かせたる細工、緋のくけ紐の長くもあらぬ商ひながら、夏を短き露の命にもあらず、かくてぞ戀も知る身なるべき。

▲夏羽織＝＝年老ひたる人は知らず、年若き女にはなくもあれかし、男は白扇とともにこれなくて公けの席へ出づべくもあらず、おぞや二次會の酒に醉ひしれて、袂よりあらぬ文どもの出でたらんには、これなきに勝りやすらん、着て涼しからねども、見て涼しき心地するはこれなり。

▲氷店＝＝昔兩國橋に冷水賣の影を絶ちてより、氷店なるもの出で來て、白玉か何ぞと問へば雪の花の、それさへ今はた衰へたり、奢れる世にはアイスクリーム、某の公達の召させ給ふ曹達水の、匙も黄金を用ひさせ給ふ世なりとや。

▲稗蒔賣＝＝眠たき晝を稗蒔賣の聲ぞ清けき菅の小笠に日を避けて、二鉢、三鉢稗蒔の、鶴に案山子の古風、橋も世を拗ね橋の、二十世紀にはなき景物なり、三日ならで雨滴落ちの受けとなるとも、夢恨みとな思ふなれ、泌むに早き土鉢の水の、いつかは涸るゝ世なればなり。

▲夏蜜柑＝＝卓に冷えたる麥酒を加へて、眞白き皿にうづ高く、夏蜜柑の盛られたる、鉢の覆盆子と色を競ふて、黄か、紅か、打水の庭もしとゝに―

▲瞿麥＝＝やさしき色に咲きたるよ、これが八重なるは常夏とぞ、淋びし河原に破蛇籠の、石に縋りて咲く花哀れ。

▲松魚＝＝鎌倉を生きて出でけん、其色の美くしさよ、刺身には山葵醤油に、夕べの膳や賑はうべし、價の高きを厭ふにこそ。（鶯塘）

社交に拙な日本人

▲談話術の拙劣なる日本人

文明國民で日本人ほど、談話の下手な人種は有りますまい、日本人は婦人のみが、談話が下手なので無い、男子も同じ事で、是は寡言沈默を以て品格の一と心得た支那の亞流で有るからの事で、餘計な事を話す必要無くとも、日本今日の儘では自分の思ふてる事さへ充分に表示する事が六ケ敷、家庭も何となく四角張ッて居る、之に反して、隔意なく談話をするといふ事であれば、自然に感情が融和して、友情も保たれ易く、其人に交りて愉快を感ずる、西洋の男女は談話術に巧みで、有合せの御馳走でも、友人には多くの愉快を與へる、日本人は御馳走を澤山出しても、談話の拙な爲に、割合に快味が少ない、その邊は西洋人の方が經濟向です。

しかし一利一害で、御饒舌りの西洋婦人が三人も話し掛けて來ると、頗る勞れます、人を賞めるのは仲々上手に遣りますが、人の惡口は決して云ひませぬ、是は我々の學ぶべき點で有りませう、日本人の交際に拙なのも、談話の下手なのも本來の性質も有りませうが、重な原因は四角張ッてるのを善いと思うてるからで有るらしい、西洋の性格圓滿に對して、日本では品行方正と稱して、兎角、四角が善いと成ッてるのであります。

▲ひねくれた男と素直な人

我々日本人は品行の方正なると共に、性格も自ら方正となりましたのか、兎角日本人には氣六ケしき人が多く、何となく、交り難き連中が澤山に有る、西洋人には六ケ敷屋が少く、先づ交り易き人が多い、品行の方正なのは宜しいけれども、性格が餘りに方正で、殊に六ケ敷屋と申すのは、其人の人格が小い事を證明してるので、喜ぶべき現象では有りません、又日本にはヒチくれた、曲ッた性情の人が澤山有れども、西洋人は割合に素直でコセ／＼した人から見れば、馬鹿正直に見える人が多い、日本が世界の大國たるには、コセツキのヒチクレた人よりも、素直な大度ある風の人民となることが望ましい。

（以上は海外より見たる故國の美風醜俗と題し堀鈍翁といへる人の觀察記の一節にして先月の新公論誌上より載せしもの）。



貧困に耐へたる良妻の一生

翠柳

△大飲暴酒の惡癖ある良人
△石の上にも三年の諺
△血涙を濺ぎし無心の稚兒
△一家獨特の待客法
△千辛萬苦も夕食の慰藉によつて償ひ得べし
△目前の外を見得ざりしの女の淺墓さ
△慰藉の言葉を得て一生の本望とす

唯今女學生の理想は獨身生活でなければ、月收二百圓以上の家へ嫁入する事でせう。併し獨身生活が多くの女學生を失望せしめると同じく、嫁入口も二百圓以上の月收もあり、舅、姑、小舅姑、別居して呉れると云ふ誂向の處は、勸業債劵五百圓の當り籤のやうに少いのです、それで貧に耐ゆる決心で結婚するのが、學校出の婦人を幸福ならしめる最捷徑と存じます。其實例を御目に懸けませう。記者の聞きました話は左の通り。

▲女學生時代

私の育ちます頃は零落した士族の家庭で、兄弟多ではあり、赤貧洗ふが如く江戸川端の詫住居に親や姉達

は凧を張つて漸く糊口を凌ぐ位でありました。私は一番の末女で、其頃はよく物も辨へぬ年でしたが、貧の中でも嚴正な父親と慈愛深き母は、女大學的の敎訓を私共に言ひ聞せた事は覺えて居ります。其内母も亡くなり姉達は緣付き、一人の姉は某女學校に救ひ養はれ、追々後進に敎鞭を取るやうになり、私も同校で敎育を受ける事となりました。此處の女學生は大抵裕ならぬ家の娘逹ばかりで、一般質素な校風ではありますが、特に私は幼少から頭腦に泌み込んで居たゝめか、清貧を貴ぶ觀念が他人より强いのでした。而して物心付く頃より自分は何一つ勝れた才藝はなし、交際は下手なり、普通の家庭に嫁する事は迚も出來ないから、牧師の妻となつて良人を助け神と學校の恩に報ひたいと云ふ決心で同窓の人にも折々は話したのです。質素な校風でも、學生時代はそれ相應に物質的高度の理想を有つて居るのは當然ですし、心に思はぬまでも一生結婚したくないなぞと言ひ合ふのは學生の習ひですから、私が年も行かぬのに早く人の妻、特に一生貧乏な生活するが定まつて居る牧師の妻となりたい望を話すのを不思議とし、又暗に輕蔑したのであります。

▲結　婚

卒業後は同校の助敎を勤めて幾分の俸給を貰ひ、敎員なる姉と相住居して日を暮す事一年半程でしたが、斯樣な境遇の同窓生が幾人もあつて、校のために別段必須の役でもないのに月給を貰ふのも心苦しい、娶ふて吳れる人あらば何れへでも嫁入したいと思つて居りました。私は容貌は惡るし、言語應對は武骨である處から、却々望み手がなく、偶々世話する人があつても何んの彼のといつて先方から斷ると云ふ風で、私も自分の性情が他に解らないのを歎じて居りました。唯今の良人は其頃 私 の身の上を聞いて同情を寄せ僕が娶つて見やうと言ひ出し、學校の姉及び私の尊敬する或る女敎師に申し込んで吳れたのです。良人は熱心な信者ですけれども、天性豪放で大酒を飮み、壯言放語人前を憚らぬと云ふ風で、學生中の亂暴者と評された位且卒業匆々未だ收入も僅少で甚だ不安心でしたが、姉

や女教師は良人の眞率を見込み、且私の婚期も逸す可からずと思ふて、私に承諾を勸めました。姉や女教師を固く信じて疑はぬ私はいかで命に背きませう。直ちに快く諾したのですが、同窓の人達は殆んど私の無謀に呆れ返り彼の亂暴者を生涯の良人と仰ぐのは自から死地に投ずる樣なものだなぞと中には諫めて呉れる友達もあつた程でした私は其頃二十歳、良人は



五つ上でありました。

▲新世帯

結婚匆々學校の近所に小さな家を借り、良人が音樂の助教として給せられる月俸拾二圓と私の收入三圓で生活を立てたのです、これは確か明治三十年だと存じます。夫婦氣を揃へて節儉すれば何樣か足りるでせうが、良人は前に申す通り飲酒家である上に友達を

連れ込むのが大好きで、家に在る時は晝夜の別なく客が入り、酒を汲み交はすと云ふ風で、私は歸校後も客膳の御菜拵へに忙しく未だ世帶なれぬ身の臺所でごたつく斗りでありました。忙しいのは厭ひませんが、膽を拔かれる程な月末の酒屋の拂に追々一戸も保ち兼ね友人の世話で或る酒店の二階へ轉居致したところ、酒店に知己を得た良人は愈々飲量も增し客の出入も繁く

私の心配は日增に加はるばかり、機を見て賴むやうに諫めれば、『僕の所へ來るのに此位の事は承知であらう、兎に角一家の主婦となれば、生計の繰り廻しは一切御前の責任であるし、且經驗のため宜しく自から工夫すべし。』なぞと一向平氣なものでした。當時酒屋の拂ひと客の費用で殆んど收入だけ使つて了ふ位でしたから、他は遣繰魂膽、少しは用意して來た衣類も追々融通に曲げると云ふ始末、併し兼て侮笑された同窓生に對し此窮狀を見せたくなし、且姉や女敎師にも成る可く心配させまじと思ふだけ、倘更心苦しく、偶々來訪する姉なぞには勉めて御馳走して餘裕ある如く見せかけ、一寸外出するにも一枚だけの晴羽織を引掛けて體裁を繕ひましたが、畢竟自分が汚い服裝をして出れば、倘更良人の締りなきを人に笑はれるが辛き故でありました。

▲空簞笥を姉に知らる

『簞笥の鍵を良人に渡すな』とは結婚前に姉や女敎師から注意された所でしたが、生計に窮しては如何して他人行儀に藏されませう。漸々と融通に遣つて簞笥は殆んど空となりました。勿論姉や女敎師には秘密でありました所、私が二年目に非常な難產を致し已に一命も危かつたのを親戚知己の厚き世話で良醫を招き不相應の看護を盡して貰つた爲め、母兒共生命を完くしたやうな騷ぎの際、家事は人任せで簞笥の秘密は全然露はれて了つたのです。夫れで私を氣の毒がつて心配して與れましたが、私は兼ての決心でどこまでも辛抱する積り、且此不締りな良人に一の希望を屬して居る事があつて、暗中幽かに光明を認むる心地して居つた、其希望は良人が音樂の練磨でありました。

▲音樂學校の通學

敎會の音樂は高尙なものではありますが、唯讃美歌だけに止まつて、音樂の一端に過ぎないので、其道に熱心な良人は進んで一般練習の志を起し、幸ひ敎會助敎の時間が土曜日となつたのを機として、上野の音樂學校へ通學し初めたのは私の初產前でありました苦しい中の月謝拂ひも此希望に依つて幾分か良人の粗放酒癖も直らんと私も大に勇氣が加はりました。併し難產後の養生費もかゝり、且子持となつて自分の學校勤めも出來かねると云ふ始末で、遣繰の術も盡き、遂に良人の長兄なる神田の某飲食店へ親子三人食客となり、良人は矢張通學して居りました。

▲食客の氣苦勞

長兄も義姉も至つて優しい人ではありますが、大勢の奉公人の手前もあり。何か相應の手助けと存じても乳呑を抱へては自由にならず、且客商賣の事ゆゑ、乳呑の泣聲を憚かつて、毎日背負ては近所の神社なぞで日を暮すこともあり、此商賣の常で店は濶くても家族の住居は唯一室、其處へ私共は家の人とごた／＼と膝を雜ゆる事ですから、氣の小さい私には却々氣兼でありました。而して夜をふかし朝寢坊する商賣ですから、私はそつと四時に起きて良人出校の支度なぞ致す位でしたが、良人は矢張毎日夕飯の膳に德利を缺されなかつたのです。私の苦心を知らぬ奉公人達は、食客の身として贅澤だなぞとの蔭口も屢々耳に入り、辛い光陰を五箇月ばかり過す內、學校なる姉は此苦境を憐んで靜岡の實兄に賴み私と子供を引取らせました。粗放な良人は單獨となつて忽ち家人と衝突を起し此家を去り、直近處に一戶を借りて又私を呼び寄せたのです。

▲下宿の內職

良夫の舊師（此人は獨身です）は私共の窮狀を察し自分が監督となつて四五人の學生を連れ來り、私に賄ひの內職を與へて呉れました。此舊師は珍らしい高德の人で、私共を子の如く愛しみ力を添へられたので、私も出來るだけの事を致さうと存じ、舊師及び寄宿

人の洗濯、身のまわりの世話など商賣氣離れて致しました。朝から晩まで重い男兒を脊負ふて勝手を働らき隨分骨も折れましたけれども、其内漸く良人の卒業も滯りなく濟んで、希望の端緒を開いた心地がしたのであります。

▲卒業當時

卒業して未だ收入もないのに、支出は忽ち增加致しました。良人はボロ洋服で通學して居たのが、方々の音樂會へ出るためにフロックも要る、車代も要ると云ふ風で當時は尙更困難を極めました。其内良夫の兄が創立した女子美術學校の音樂敎師に賴まれ、暫時無給で助ける事になりましたが、折々臨時に他所から會に聘せられて不時の收入なぞ少しはあつたのです。所が此學校も不幸にして倒れたのですが、此校の生徒を手始めとして私塾を開く事に運び、利の付く金を借りて敷金等もすまし、此家へ入る事に致しました。此家の持主は分つた人で私共が音樂を弘めたい目的で此家を望むけれども、無資力だから家賃敷金を減じて貰ひたしと云ひ込んだ所、快よく承知し引下げて貸與されたのです。

▲愛兒の死亡

是れから前途の方針も定まる端緒が開いたと、夫婦の心は少しく發揚され掛つた際、神は私共の油斷を戒められて一の打擊を與へられました。先づ良人が柱と賴める兄は戰死し、私の力と賴む兄は災厄に罹り、引續いて四歲の男兒を急病で失ひました。此男兒は難產で設け、其後方々流浪の際脊に負ひ膝に上せて窮苦を共にし、無心の稚兒に血の淚を灑いだ事も幾度、相互の愛情も一層深く、憂さも辛さも此愛兒の笑顏に依て慰められつゝあつたのですから、私は一時失神するまでは悲哀に沈みました。良人も非常の落膽で「吾が今日あるのは全く神の恩であるのに、世に乘り出さん野心の一時に燃え上つて幾分神あるを忘れかゝつた際神は鞭撻を加へられて、眞面目に前進の道を示されたのであらう」と私を慰め、爾來は飲酒も大に量を減じ粗豪の風も著しく改まりました。私も此愛兒に別れた

悲しみに依つて大に悟ることを得、暗に神意を肯れて勇氣も起つて參りました。是れは一昨年の夏で御座いました。

▲目今の生活情態

開業以來仕合に入門の御方も殖える方でありますが、生活は未だ樂どころか、寧ろ小さい生活の時より苦しい位であります。先づ拾六圓の家賃に樂器の月賦拾五圓程、其他一と頃より幾分か體裁費もかゝり、且例の客好の良人は交際の廣まると共に一層來客は増すと云



ふ工合ですから、自然收支は償へません、可笑しい事には良人の無慾が評判となつた爲めに、無報酬の音樂會へは何時も聘せられ、自分も喜んで應ずる所は全く御大名風です。併し此風を持續させるのも事業上必要だと存じ、私は出來るだけ自分の費用を節して良人の趣味に獻じたいと心掛けて居ります。

▲待客の工夫

結婚してから九年間の今日まで、來客の饗應は時に應じて種々の經驗を積みました。店屋から取

寄せなぞしては苦しい世帯で追付きませんから。出來ぬながら樣々工夫して如何に忙しくとも臺所で拵へました、平生雜誌を手に取れば、先づ一番に料理案内を披き、他家から貰つた料理や、偶に參る料理店の食品も決して迂濶とは食べません。或は經驗ある人に尋ね自からも度々試みなぞして、近頃は洋食の眞似事位致して客に供へます、尤もホンの一個の燒鍋丈けで何の器械もないので完全な事は出來ません。不意に大勢の來客があつても狼狽てゝ店屋へ賴む樣な事は御座いませんで、先づ客に暫時猶豫を乞ふて、一人の女兒を下婢に任せ、大急ぎで二三品の酒の肴を拵えるのを常として居ります。餘り平生豫備に澤山料理して置くのも不經濟だと存じますから……。御客の取持は何時も良人に任せて置きますが、時として女客なぞで、私の必要の場合には一枚羅を着て接待いたし、又上張を被ふつて臺所へ馳け込み、料理すると云ふ隨分早代りを演じて居るのです。

▲一日の慰藉

敎授や來客等のために、良人の晩食は大抵九時頃となりますが、書生方や下女は先へ濟しても、私は必ず待つて共に致します。是れは良人に對する務めばかりでなく、自分も一日の慰藉を此事に得るであります。世間の若い夫婦のやうに相携へて公園を散歩する事なぞは、時間も經濟も許しませんから、人並にならぬ間は決して爲ぬ事に定めて、此晩食を樂んで居ります。客多の爲めに一人の下女は雇ふてありますが、素直な田舍者で善く兒を愛する女を選んで置きました。而して此家に較べると私の身なりが酷いから買物等には夜ばかり出て、世間に不體裁を見せぬやうにして居ります。生徒方は皆私共の主義を御承知ですから、有りの儘で交際致して居ります。

▲淺墓な女心

正直に申せば、是れ迄は悲觀的に良人を觀察する事もありましたが、今から考へると淺墓な女心であつたのです。女は多く目前ばかりしか見えぬもの、如何に望みのないやうな男子でも、女が陰身に添ふて補佐す

れば、相應の活動は出來るもの、男より女が勝ると云ふことは滅多にない道理でせう。『貴女は學校で得た學藝を働かして自分だけの收入を計つたら宜いでせう』とよく朋友に勸められましたけれども、なまじな事を致して家を留守にするより、それ丈の精力を良人に注いで良人の成功を圖りたい決心であります。又『今から獨立の方法を考へて置かねば若し良人に別れた時如何なさる』なぞと注意する友達もありますが、今から離れ〴〵の働



をしたなら成功はむづかしく、良人さへ成功して世に信用を得れば、假令不幸に遇ふとも何とか方法も付きませうと考へて居ります。生計困難の餘り夫妻別居して働いて見る人もありますが、矢張不規律、不和合で生計も益〻困難となる樣です。

私は出來得る限り夫妻は別居すべからざるものと信じます。今良人が事業のため如何なる土地へ出掛るとも、私は何處までも附隨して廻る決心であります。

▲良人に望む一言の謝意

細事に拘泥しない良人は感情を私にも言ひ現はしません。私が如何に勞苦するとも、慰藉の言葉を發したことなく、俗に謂ふ張合のない風であります。併しこれが所謂男子らしい所と敬意を獻げて居るのです。私は瞑目する前に唯一言慰藉の言葉を良人から得れば本望であると思ふて居ります。

▲今日は勤勞の入門

知人は私共を目して半ば成功した如く申されますが、今は荒浪に漕ぎ出す舟が纜綱を解いたやうな處で航海の門途であります。是れまで聊かながら經驗した辛酸のために少からぬ利益を精神上に收得しましたから、以後益々艱難と戰つて、心身を練磨したいと存じて居る位ですから、唯つまらぬ身の上話しと御聞捨て下さいまし。

前號時論欄に掲載せし「拜金國の善感惡感」と題せる記事は石川中山氏の談話を筆記せしものにて文責は記者にあり。

令孃の御手料理

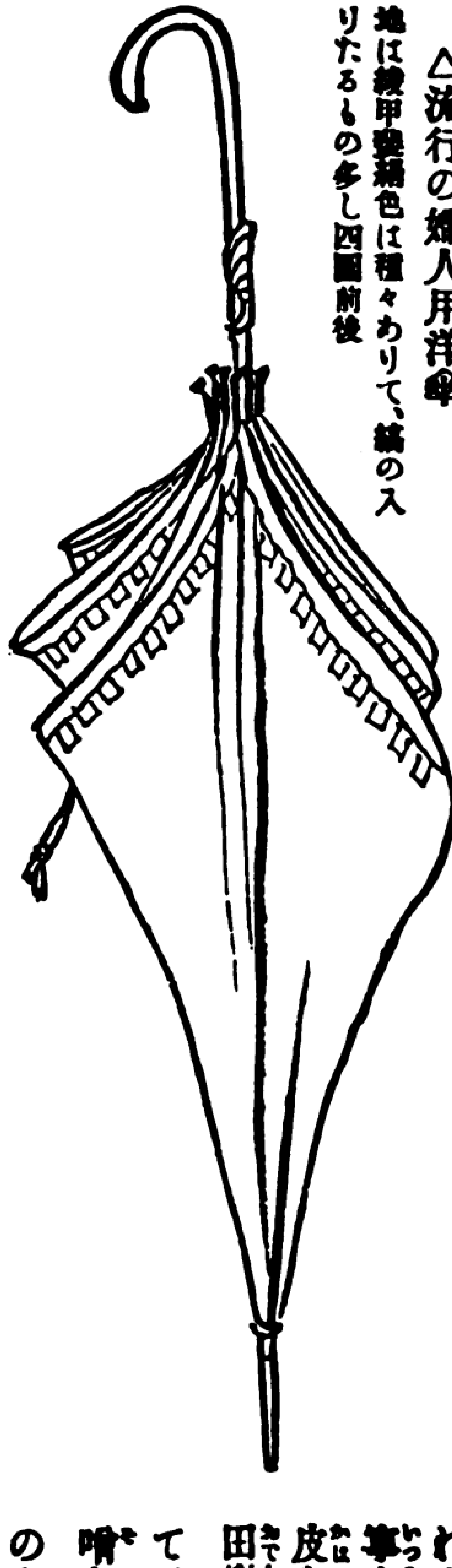
星のや

某紳士に姉妹の令孃があッて、それは平素茶席料理に熱心でした、ある日突然數人の珍客に襲はれてお手料理を供せねばならぬ事となッた、臺所は俄に賑はしくなり、下婢等はお指圖に隨つていづれも白金巾の庖厨衣を纏ひ、一切瓦斯應用の竈に準備するべく働くのでした。

さて姉と妹は今日の獻立の摸擇に就て會議を開きました。

姉「お前、お汁は何んな材料を遣ふ考へナノ」、妹「ハア、、白瓜をセンに打つて、岩茸を取合せやうと存じます」、姉「妾は冬瓜を圓形く切つて、紫蘇の葉を細に切つて散した方がよいと思ふわ」、妹「それも可でせうが白瓜は餘り感心致しません、なぜと申せば風味が少くなふございますからネ」、姉「さうおいひだけれど、

當季は何でも淡白な材料を遣ふのが可のですヨ、それだからこんなものが好いかと思ふわ、まだ他には寄せ豆腐に嫩菜を取合せるのもよいけれど、お豆腐が急に間に合はないからネ、さうでなければお豆腐の「ザク〳〵」と椎茸に菜を遣ふか、また里芋に菜も惡くはないけれど、少し重つくるしいわネ、仍り一番先の思ひ付にしませう」、妹「それぢやアさうしませう」、姉「甘酢物は何種にしやうね、胡蘿蔔をセンに打つて、白瓜と芋莖を短冊に切つて、さうして木茸を一寸取合せ、海苔をもんで撒けちやア、どうだらう」、妹「お精進料理見たやうネ」、姉「お吸物は何にしやう、鹹魚を結んで、蓮の嫩菜で一寸脊みを見せるのも可ぢやアありませんか」、妹「姉さん、小鯛に茗荷だ



△流行の婦人用洋傘

地は綾甲斐絹色は種々ありて、縞の入りたるもの多し四圓前後

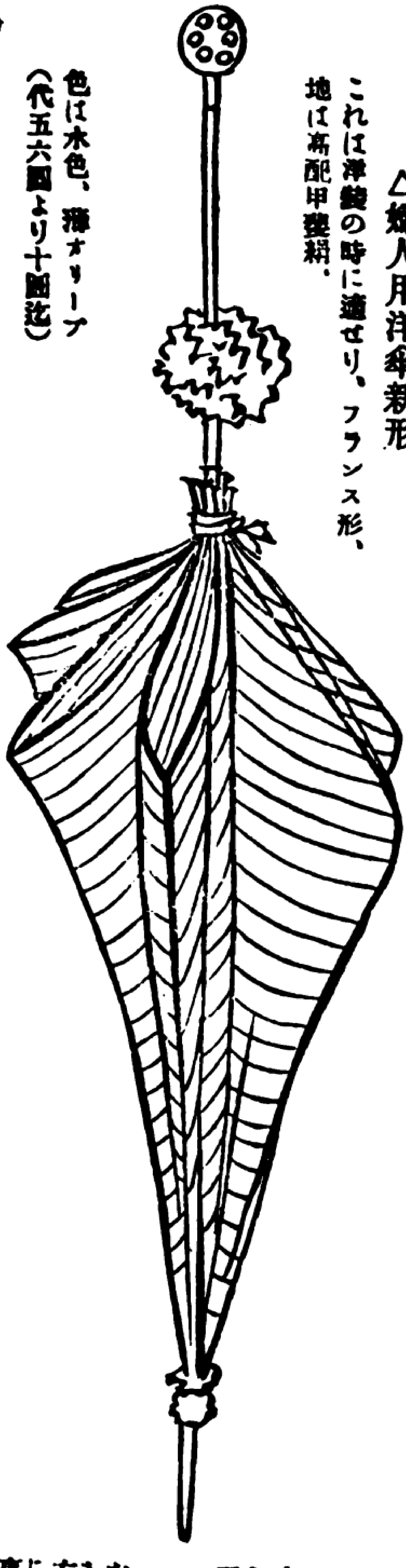
けを取合せぢやア、如何でせう」、姉「お前それぢやア普通の考へだわ、海老に白瓜をセンに打つて、青山椒を口に附けませう」、妹「小鳥か何かを材料にしてもよいのヨ」、姉「それぢやア面白くないわ、それより海老を遣ひませうヨ」、妹「お肴は海鼠に青豆をあしらつて、生姜酢で上げると可のネ」、姉「こりやア可い思附きですネ、それよりか、一寸小茄子の皮を剝て、田樂にして、玉子味噌をつけたのも替て居るけれども、少し重くるしからうネ、お前の考へが可ひわ」、妹「それぢやア、さう致しませう」、姉「鮎の子に木茸なんか可けれどネ」、妹「取肴はネエ、生り鰹魚を五分程に切つて、擦り山葵で上げて見ませう」、姉「お燒物は」、妹「さうですネ、仍り鮑を田樂にして上げま

せう」、姉「アノ粉山椒を入れて、醬油の附け燒がいゝのヨ、淡白りとして居て、却つて他のものと配味が適ふだらうと思ふわ」、妹「それもそうですネ」、これから兩女は庖丁に取掛りました。

珍客の好

客間には主人が今日は兩女の手料理を差上げますと半分は我娘の庖丁自慢を來客に吹聽して居る、客は別に茶味も何もない人達ではあるが、頗る料理には熱心であるので玆に難問題が起りました、これは何であるかといふに「鯉の生け作り」の話しが初まり、專門家でもなか／＼六ケ敷ものであるがといつたのが實はこんな庖丁は兩女には出來まいといふやうな客の口氣が見えたから、主人も躍起となつて（其實兩女の腕前にはどうであらふと思つたが）何、出來ぬことはありません、モシ生け作りがお嗜好ならば拙な庖丁で差上げませうか」、と無鐵砲にも請合つて、直ぐに兩女にその趣を傳へたので、姉妹はハッと胸に支へた、まだ「鯉の生け作り」は練習もない、經驗もないことであるから、暫時躊躇してゐましたがふと、以前に聞いて居た專門家の話が耳底に遺つて居るのを思出し、今更出來ぬといふは日頃敎育を受けながら、父母の耻辱となるのみならず、第一自分が愧し、そこでこの調理をやつてのける覺悟で、もし失敗したら百年目と早速一尾の鯉を取寄せて、庖丁に取掛ることゝなりました、これは實に專門家でも、調理に苦しむところで手早くしないと到底膳部に供するわけにはゆかぬ、生け作りは死作りになり、こゝで計らず割烹學校の大試驗を受けるので、及第か落第か分け目の實習となつたのである、之はまづ、鯉の頭より腹部へかけて肉をすき取り、皮を手早く剝し、肉を刺身の如く作り、冷水で能く洗ひ、肉のちゞれる程に冷却し、原形の通り肉を魚體に添え、皮を被つてから、皮共に目に立ぬやう白の絹糸で鱗の間を縫ひ、結び目を鱗の間へ出し置く、その手練を要することは勿論で、鯉は肉を切り取るも生きて居るから此間跳廻つて自由にならぬ、また生き

て居なければ生け作りではない、そこでこれを染附か何かの大鉢へ冷水を充分に湛へ、製氷を加へて活動してゐる一尾を放すとなか〳〵精力が强ひから何分か游泳ぐ氣色が現はれる、最も活動の庖丁が喝采される所である、さて之れを座敷へ出し、客の箸を取る間際に手際よく縫つて置た米を引抜き、各々へ取分けるので給仕も熟練して居らぬと出來ませぬ。



△婦人用洋傘新形

これは洋裝の時に適せり、フランス形、地は高配甲斐絹。色は水色、薄オリーブ（代五六圓より十圓迄）

調理の感服

首尾よく、調理が出來たから直ぐに來客の前に持出した、スルト客は其の手際にほと〳〵感服して、稱賛の聲は喧しかつた、で兩親は勿論兩女は天狗樣のやうに鼻高々となりました。

新渡戶博士夫人の　家庭改良談

英文武士道の著者として彼の有名なる新渡戶農學博士夫人は米國の產れにして今より十五年前博士が在米中に嫁せられ夫婦相携へて日本へ歸り爾來十數年間務めて我國の家庭の風に做ひ、淑德の譽れ高き才情双絕の一婦人なり、左の記事は夫人の家庭談として大阪每日新聞に見えし一節なり。

▲家庭科學

戰後の家庭に於て一番必要なとは其主婦が家庭科學の修養でせう槪して日本の婦人方には此修養が缺けて御出かと御見受け申します、つまり一家の主婦たる者

は一方に敎育者である、看護者であると共に、他方には事務家たるの資格を充分に備へて居らねばならぬので、此修養に缺けるところがあると健全圓滿な家庭をなすことは難いのです、米國では此家庭科學を敎える學校は澤山で有名なボストンのシニレス大學などはそれです、先づ大體を申上げると化學、醫術の大要、衞生學、家政、料理法等の科目で、理論よりも實際を旨とし、直樣家庭に應用し得らるゝやうな仕組になつて、既に嫁かれた方でも通學することが出來、其内の一科目を選擇して修める事も出來ます、東京では女子大學其他一二此家庭科學を敎うる學校があるやに承はつて居りますが、彼の基督敎徒の「母の會」などは其一部の仕事を敎える會合です。

▲臺所の改良

私が日本の家庭の人となりて十五年の久しき今に絕えず苦しめられつゝあるものは日本造りの家の臺所です、其設備が如何にも不完全であつて、無益に時間を浪費することの多いのには誠に驚きます、モウ少し臺所が煮焼料理を致すのに便利調法な構造にすると、下水其他衞生上の設備をモッと充分に備へると、そして秩序的に器物を排列整理する裝置とが欲しいのです、此秩序的に物を整理すると云ふ習慣は、日本の婦人が外國の家庭から學ぶべきことであらうと思ひます、最も今の中流以上の家庭の主婦たる方は、皆學校で充分に家政學や衞生學などを學ばれたことですから其家庭に於て既に習はれた處を實行して居られるでせうが書物で御學びになつたことと、實際に行ふことは或は家族の折合上、又は在來の慣習上、充分に御實行の出來ぬことがあらうと察せられます、米國でも此秩序的に家事を整理すると云ふ習慣は、決して學校で學ぶのではありません、寧ろ幼い時から母親の親しき薰陶に依つて自然とさう云ふ具合に躾けられて會得するのでありますから此秩序的家務整理と云ふことを、今日我國の家庭に於て望むのは或は無理かも知れません、まづ今から二三十年後の家庭に見ることが出來るでせう、つまり是れが我國が物質上に於て長足の進步をすることが出來ても精神

界に關する方面に於てはやはり漸次追うて進んで行かねばならぬと云ふことを示す善い證據だらうと思ひます。

△時間の節用

我國の御婦人方にとつて、今日位家政の取りにくい時はなからうと思ふのです、社會は日々に進歩をして行くのに伴れて服裝其他の設備も整へて行かねばなりません、例へば其夫たる人はフロックコートも有たねばならず、羽織袴の用意もなければならず、室内の飾り付も和洋二た通りを要し、料理も又同じと云ふやうな譯で、少額の俸給の方などの奧樣の御心配と手數は並大抵ではあるまいと始終御察し申して居ります、或外人は日本の家はまるでマッチ箱のやうだと評したさうですが、是れは頗る酷評で、此位美しい住み心のよ



婦人用
土耳古製
上靴
（六文より九文半迄）
皮製にて金モール絹糸等にて裝飾なしたるもの
色は紫、水色、白茶、オリーブ等なり。
（大一圓三十錢
中一圓二十錢）

い家屋はまづ世界になからうと思ふのです、併し此日本造りの家に洋風の家具を飾りつけるとしませう、テーブルの上で書き物をします節には障子では暗いと云ふとになります、之を悉皆玻璃戸にするか又紙を張る部分を少くして玻璃の方を多くせねばなりません、それから椅子などを並べると其上に溜る塵を掃つたり、其處等を拭き掃除致すのに殊に西洋家具の手入には仲々手間が掛かるので主婦たる者の手數は一通では御座いません、そこで私は時間の節約が肝腎と思ひ、外人の家庭の如く一週日を區分して何曜日は掃除日、何曜日は洗濯日、と云ふやうな具合に家事を治めて行くのが一番よろしいと考へます、併し外國の家庭の習慣を全然我家庭に應用すると云ふとは無理でせうが其組織を取つて之に準じた新しい習慣を作

る必要はあると思ひます、さうすると毎日單調で徒らに勞多き仕事を繰返して無駄に時間を費すこともなくなり、他の有益な仕事とか修養に餘暇を得ることが出來やうと思ひます、又夫人の方が面會日と其時間とを定めることゝ、先方の面會日を先づ尋ねてから訪問なさるやうにしたいのです、外國人の宅などでは其家の夫人が面會する時間は大概ティターム(茶を飲む時刻)で午後の四時から六時の間と云ふことにきまつてます、すべて婦人は皆其日々になすべき務をあらかじめ定めて居て朝などは殊に忙はしいのに長座をしたり、時を厭はず訪問を致すやうなことは習慣とは申せ先方へ迷惑を掛けることが多いです。

我家の教育

加納子爵夫人

加納子爵が昨年と今年と二回、四人の令孃に御供もつけずに修學旅行を御させになつた事は、世間で賞揚する所であります。記者は頃日夫人より其御話しを伺ひましたから一寸御紹介致しませう。

▲令孃第一回の旅行

昨年千葉縣まで第一回の旅行をさせました時、此地から本所停車場までは電車の乘換へなぞ御座いますから、せめて停車場まで誰ぞ附けて遣らうかと申しました所、久宜が『此旅行の企ては子供だけで試みさせる目的であるので、初めから其樣心配をするなら最早止めだ〳〵』と申したので、娘達は『母樣が餘計な事を仰るから折角の希望も水の泡になります』と大層不平を鳴らしました。夫れで一切構はぬ事に致して十五歳を頭に十四、十三、十二の四人を旅立たせました。併し千葉は舊領地の事ゆへ二三の知人もあり、自然頼りとなりましたので、久宜が是れでは矢張り依賴心を起して可かぬから、此次は何にも知らぬ土地へ遣つて見やうと申して、當年は日光の方へ遣はせました。

▲旅の用意

携帶品は久宜が銀座で求めて參つた小さい手提風の柳行李一個づゝ、是れへ寢衣一枚、手帳、櫛、石鹸、

楊子、歯磨等の類を入れました。尤も櫛とか石鹸とか共同で使へる品は成る可く一個で間に合せる事と致し此他に共同用として小さなバケツト、是れへ出立の朝拵へてつかはせた辨當の折なぞを入れたのです。最初荷物は共同の一包としたら如何かとも考へましたが、左様致すと自然姉にばかり依頼する様になり、姉も亦妹達をいたはつて、自分ばかり負擔すると云ふ傾きになりますから、各自携帯と定め、會計も各々持にして場合に依つて融通し合ふのは差支へなしと云ふ事に致しました、廿歳になります宅の長男は平生妹達に手早く身支度する事を慣らすため、學校から歸つて夕飯を濟すと、サア今度の汽車で日比谷公園まで運動に行かう、早く支度の出來た者は連れて往くし、間に合はぬ者は留守番だと申し渡す事が往々御座いますので、妹達は十分位の間に大急ぎで支度を致します。今晩あたりは亦兄様の命令が出やあしませんか子と始終用



米國漫遊中の小崎弘道氏と其夫人

意致して居るやうな風で、自然早支度には慣れて居ると見え、今回の旅行用意も案外世話を燒かせませんでした。

▲出立の前夜

華族女學校の變革で免狀授與式の日が一寸豫定と變りましたので、出立の時日が定まらずに居りました所四月一日に明日出立するが可いと父から申し渡されました。丁度私は東京に用事があつて留守に致し、歸宅しますと、久宜の方は來客でごた〳〵して居りましたが、四人の娘共はチヤンと行李を整へて直ぐにも出掛られるやうに支度が出來て居りますので、私は一應其行李の中を明けて見度いと存じましたが、又いらざる世話を燒て久宜の素志に戻つてはならぬと我慢して一切干渉致しませんでしたが、後で調べて見ますと御方便なもので何一つ取落した品もありませんでした夫れから來客の歸りも遲く、就寢前に父に呼ばれて、昨年第一回の際の注意書を復習させられ、二夜泊り往復の旅費七圓づゝを渡され、翌朝一番で出立しましたハイ當年の衣服は上着がカシミヤの袷で、フランネルの下着と木綿の肌着とで御座いまして、外套は各々用意させました。

▲令孃の健脚

汽車は素より三等ですのに、時候柄乘客が澤山でしたから非常の込合で、宇都宮まで立つゞけて參つた相です。彼地の旅店小西へ着きますと、直ぐに其足で霧降へ出掛け夕刻五時に宿へ歸り、翌日は東照宮の廟を始め方々名所を廻り、華嚴、裏見の瀧なぞへも參り、随分危い處までも下りて悉皆見物して參つたさうですが、案内者が娘共の足の達者なのに驚いて、平生餘程御慣しの事と見へ却つて私共が御供するのに骨が折れる位だと申したさうです。随分御轉婆には驚いたでせうと後で大笑ひ致しました。全體娘共は今回是非中禪寺の方までと云ふ希望でしたが、漸を追ふて試みた方が可いから是れは第三回と致し、それから松島の方まで遣はす事にすると父が申し渡して、今回は唯短い旅に止めました。

▲旅日記

歸宅後各自日記を父の前に持ち出で、會計から日々の出來事を委細報告致しました。長女だけは少し日記が長う御座いますが、末の娘なぞはホンの簡短な事

ばかりで、夏様の日記は汽車の發着ばかりのやうなものですと皆に笑はれました。下らぬ日記でも御目に懸ると宜しいのですが、或る御方が是非日記の儘で貸して呉れと仰つて下さいまして、其方へ差し上げ唯今宅に御座いません。

▲御主人の平民主義

女の旅は随分荷物のかさばるもので、私が以前鹿児島に居りました頃偶々出京致すのに、東京の御懇意先へ上る際、まさか紬の着物でもと存じて、紋付の一重位行李へ入れましたが、僅か斗りのものと思ひましても何んですか荷物が殖えますので、「御前と同伴の旅行は御免蒙むろ、荷物が多くて厄介で堪らぬから」と久宜によく叱られました。一度長女を連れて出京致し兄の許へ着いた時、遠方の處をよく獨りで來られたと慰められました處、久宜は之を聞いて『よく來られたも無いものだ、汽車に乗れば汽車が連れて來るし、船に乗れば船がつれて來て呉れる、少しも珍らしい事はない』と申して笑ひましたが、斯様風ですから、娘達にも充分身輕の旅行を修練させなければならぬと云ふ主義で御座ます。



▲令息の事務修練

娘四人の一箇月の學費は、一切長男に任せて置き、私は唯長男に金を渡して置けば月末に支拂を明細書にして持つて參り、一向世話は御座いません。長男は極亂暴者ではありますが、氣立は優しく妹達を公平に愛しますから、娘共は却つて父より兄に賴つて居る位で御座います。唯自分の會計ばかりでなく、共同的の經濟法も熟練させるが宜いと父も申しまして、此處の有志運動場の經濟を整理致させて置きますが、一體綿密な方で却々規帳面に取扱つて居ります。一昨年此運動場を設けますのに五百圓かゝり、半分は有志方の寄附が御座いまして殘りは村の信用組合から借用致したのですが、會費を以て漸々返財致す仕組に成つて居り、器械の修繕費なぞを引いてあとは殘らず返財に廻はすので此帳簿は長男が取扱つて居りますが、不時の寄附とか、運動場を借りた禮金とかゞ入ると私の處へ持つて參り、直ぐに是れだけ組合の方へ返財して下さいと申し、私が月末に一緒で宜からうと申しても聽きません位、隨分嚴重に行つて居ります。

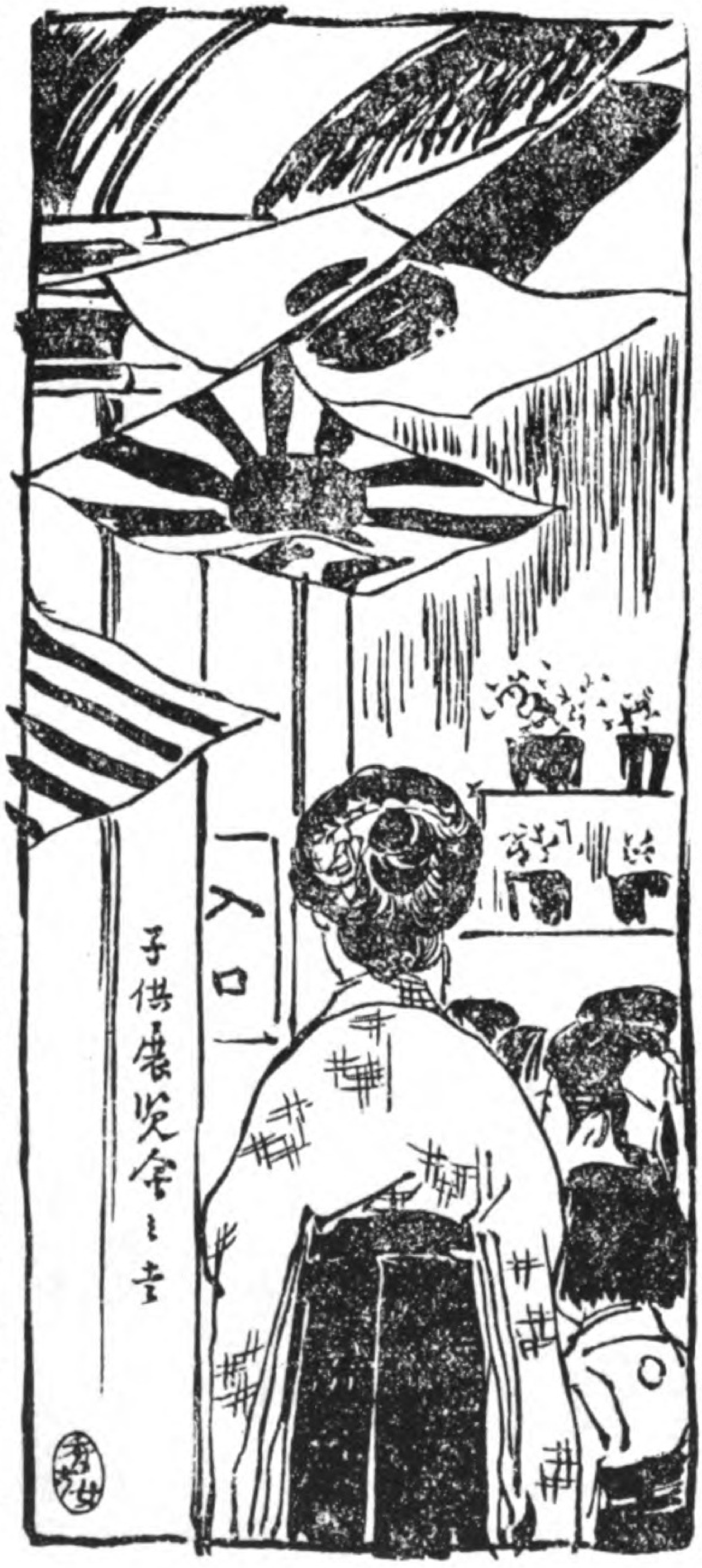
▲八景園の老媼

有志運動場は八景園の老婆が監督して居りますが、他から團體で借用を申し込まれる際、別段此方から定めませんでも、應分の寄附をされますが、其度に一割を老婆に世話賃として遣ります。老婆は是れを非常に喜び、別に勞力もせず頂くので勿體ないと申して紀念のため[illegible]曾孫の積金に致すさうです。此老婆は由緒ある者ださうですが、却々嚴格な人で、私方では大抵寛大に致して宜しいと思ふものでも、會員外の人は決して運動場へ入れず、貴所方が仰るのぢやなし、惡まれるのは此處ですから一向構ひませんと頑固に申して居ります。それで又却々寛かな所もありまして、此入新井の有志婦人會の集會に座敷を借りた際なぞ、貴女方が村民のため公益の御寄合をなさるのに、座敷料なぞ一文も入りませんと申して決して取りませんから、何分か禮として遣す位に致して居ります。總て平生の談話も確乎としたもので、每々感服する事が御座います。

▲夫人の公共的注意

私共の婦人會は月々の會費は御座いません。每月會費を定めますと、集金と出金とを差引して積み立てるとか何んとか煩しう御座いますから、唯臨時必要の場合を以て會員に御出金を願ふと云ふ規定に致してあります。一昨年開戰以來戰死者の葬儀に就いて度々集

金を要しましたが、私は思召だけと云ふのが極いけないと存じたのです、思召がどの位の程度やら何方も標準に御困りに違ひありません。それで私は御一人拾錢づゝと定め、若し餘分に御出しなさり度い方は御子さんか御家族の名前にする事と致し、私も其通り履行して居ります。葬儀に贈る造花は何時も三圓で出來る事に掛合つてありますから、三十八の會員方に拾錢づゝ出金を願ひ、次は又他の三十八の方と云ふ風に交替に致して居るのです。軍隊の送迎には私方から眞筆版の摺物を會員方に廻はしますので、先達中のやうに凱旋の頻繁な際は却々油斷が出來ませんでした。何日の何時には何々隊か通過されると云ふ事は始終前から調べて置き、摺物を下男達に持たせて方々樣へ御知せする事に致しましたので、何時も事ある時は此趣向にして一同會合するのであるますが、此入新井村婦人會は平常極御懇意の御方ばかりですから、會合も都合よく親密に御交際が結べて居ります。ツイ村の事ばかり致して東京の方の會には御無沙汰になつて濟みません。



▲小學生徒の繃帶巻

集會に衣服の心配を致さぬ事は堅く約束して御座いますが、昨年宅で繃帶卷を致す際なぞ、皆樣に繃帶卷は塵埃で着物が汚れますから御常衣の上へ上張を羽織つて來て頂きたいと申上げました。皆樣も誠に御熱心で却々捗取つたので御座いました。私は此村の二つの小學校から高等科の女生徒十名づゝを手傳ひに寄越して貰ふ事に話しました。生徒達が此家へ參ると私は金盥へ御湯を入れ石鹼で全然手を洗はせたのですが、中には餘り世話を燒過ぎて感情を惡くする子があるといけないと存じて、此繃帶は皆さんの御兄樣方が用ゐられるので嚴重に消毒をして上げればなりませんから、皆さんも手を淸潔にして御作りなさいと言ひ聞かせ、布裂と下卷を致させましたが、此布裂は實に子供に限ります。時間は四時までと致し、仕事を終へてから此庭で一ときり自由に遊ばせ、つまらぬ麵包なぞ上げますと、大層喜び樂しんで來るやうになりました。子供の手傳も馬鹿になりません平均一日に皆さんで百二十反位仕上げました。

▲夫人の反省

御交際申し上る御夫人方に御實驗談を伺ふて、自分に鑒みますのは、誠に利益ある事と存じます。矢張有志婦人會員で直御近所に御住ひの或奧樣は、地方へ御緣付きに成つた御一人娘の御孫娘を御世話なさるのですが、此御孫は八歲位で毎日紙風船をつくのを何よりの樂しみとせられるのは宜いが、毎日一個づゝ破ぶいて了ひ、毎日女中が買ひに參ると云ふ工合でしたので祖母君は一策を案じられ、御孫に向つて『御前が此家へ來たゝめに毎日下女に風船を買ひにやるのは心苦しいから、今度は一個の風船を一週間持つやうにして呉れまいか、若し保存が出來たら褒美として御前の巾着へ私が十錢銀貨一個づゝ入れて上げやう。而して一週間持つ事になつたなら、神樣がもつと大きい風船を御前に賜はるかも知れない、併し神樣の御旨だから判然とは言へない、大方御褒美があるだらうと斯う言ひ渡されたさうです。スルト御孫はちつと考へて『御祖母樣私は一週間持たして見ませう』と答へて、今度は大切についた爲めに一週間少しも損せずに了ひ、祖母君は約束通り巾着へ銀貨を入れました。夫れから一兩日經て打寄つて食事の際、祖母君は掛額の後を見上げて『オヤ／＼大きな風船が載つて居る事、是れは屹度神樣が御前に賜はつたに違ひない』と取つて御孫に與へられたので、御孫は大喜びで尚更大切に取扱ひ、夫れ

から風船買の請求は夢の如く忘れられたとの事です。御孫の親御もこれを聞いて褒美の御金を贈られたりして、暫くすると巾着に一圓參拾錢溜つたさうです。祖母君は又此貯金の遣ひ道を示して、此貯金を御前が玩弄品を大切にするために神様から賜はつたやうなものですから、其内幾分は人様のために費はなければなりませんよ』と云ひ聞かされて居りました所、此處の小學校の先生が恤兵の出金を生徒に勸められ、親御にねだらずに、自分の勢力、例へば海へ蜊取りに往くとか使ひ走りに行くとかして貰つた金を僅かなりとも獻じるやうにと言ひ渡されたので、祖母君が『サア是れです、斯う云ふ時こそ巾着の御金を幾何でも獻じなさい』と申されました。御孫は成程と感じて幾分かを學校に持ち行かれた相ですが、私は誠に宜い御教育法と感服いたしました。私なぞ薩張子供の教育が屆きませんで耻ち入る斗りですが、何卒皆様の御話を參考として一歩づゝ



こども博覧會

でも改善したい精神で御座います。

梅雨と衛生

(附育兒上の注意)

雨と云ふものは、世界一樣に何處でも降るものでない、暑い時と寒い時と、北極と南極と、寒帶と熱帶とで非常に雨量の差がある者です、世界で尤も雨量の多い國は、南亞米利加の一部と印度の邊である、我が日本も將に其の一つに加へられて居る、日本の一ヶ年の平均雨量は、實に三千ミリメートル(凡十尺)であつて其の尤も多雨の地方は、能登半島と、四國九州の南部である、北日本へかけては、金華山沖及び羽後の鳥海山あたりだといふ、そして我が國の雨期は大抵季節が定まつて居つて、二風交換の季節に降る、夏でいへば梅雨期、秋ならば秋霖の時である、此の梅雨期と申すは、歐洲諸國でも見ない事で、之れは我が國の特有である、而して此の梅雨に入ると、之れが爲めに氣候は自然と濕潤なり、空氣は腐敗して、人の健康に及ぼす害は甚だ少なからぬもので、就中小兒の健康上には、大なる影響を與へ、幾多の傳染的疾病を併發する恐れがあるから、充分の注意を拂はねばならぬ。

個人の衛生も、素より此の場合に肝要であるが、殊に多數の人の集合する場所には、衛生的の設備は尤も肝要であつて、多數の兒童を集むる小學校の如きは、尤も注意しなければならん、毎日學校に通ふ生徒は、梅雨期だと云つて、學校を休む譯にも行かない、男子なら外套、女子なら合羽などそれ〴〵雨具の準備をして學校へ遣る、所が日本の小學校は未だ完全した設備がないから、机や腰掛は濕氣を帶び、其處へ其儘濡れた着物で腰を掛け、稽古を受くると云ふ始末だから、何うして之れが兒童の衛生に適ひましやうか、して父兄も教師も平然として、此の不衛生を顧みないと云ふに至つては、實に慨かはしいではありませんか。

次は兒童の靴の事である、一寸見た所では靴は便利で、下駄の樣に鼻緒が切れたり、齒が缺けたりする心

配はない、雨天には靴が却つて便利だなどゝ、靴を穿かして登校さする父兄もあるが、小供が登校すると、濡靴のまゝ教場に這入る、そうすると濡れた靴で數時間を緊足され、其の爲めに足部を冷す様になる、足を冷す事は衛生上頗る有害です、昔から頭寒足熱と云ひ傳えられた程である、實に爭はれぬものだ、然るに梅雨期に毎日〳〵濡れ靴で居つたら、必ず其の兒童の身體に影響します、斯ふいふ事は教師と父兄が一所になつて、注意しないと少なからぬ害を兒供に與へます。



小供博覽會諸國の凧

獨り東京のみでない、都會の生徒は一般に健康上から體質不合格である、其の原因は不衛生と、運動の足りない結果だ、故に是非共衛生法を實行しなくてはならぬ、此の衛生法の御陰で活潑なる精神が、健康なる身體に宿り、始めて生存競爭に打勝つ事も出來、殊に中流以上の子弟には、虛弱なるものが多い様だから、尤も注意して欲しいと思ふ去らば小供を持てる親達及び小供を取扱ひつゝある御方は、此の梅雨期の衛生に處して、毫も忽にしてはなりません。

お辨當の詰め方

夏の衛生は食物を叮嚀にするのが第一です、諺にも病は口より入ると云ふてあります、取りわけ辨當などには深き注意を拂けねばなりません、世間には辨當持參の勤人は、非常に多く御座いませふ、學校の生徒抔も大部分は晝飯を辨當で濟ます事になつて居ます、然るに主婦たり世の母親たるものが、愛すべき子供や、良夫の爲めに、衛生上最も大切な、辨當の事に心付かずして、少しも顧みないのは、甚だ無責任と言はねばなりません。

少し注意して御覽なさい、夕食の忙はしさに打ち忘れて、今朝洗つた斗りの辨當箱へ、朝炊きたての飯を詰めるし、菜を其の温味のある上へ、遠慮もなく押し込むのだなら、今日此頃の暑さにて、晝頃には既に其の飯や菜が腐敗に傾いて、いやな臭いのする事は、往々ある事です、然るに頑是なき子供や、忙はしい勤人抔には、空腹な儘に、夫れ等の臭味あるにも頓着せず半分位は夢中で食べて仕舞ふ事があるのです、斯ふいふものを食したら、必ず消化を害し、疾病の媒介をなし、果ては十日も二十日も御役所を休まねばならぬ樣な、病氣となる實例も澤山御座いますから、大に注意しなければなりません、之れは皆妻君となり、母親となるものゝ責任です。

去らば食物の吟味をして辨當の注意を仔細に行屆かすべき事は、家政の要道で、妻君の名譽はこんな所より益々揚がるものです、夫れ故に辨當は成るべく腐敗に傾かない樣な者を詰めて、主人や子供をして、辨當のうまみを覺えさせしむる樣にしなくてはなりません、輕卒なる妻君は、晝飯位は何を食べさせても宜からふなどゝ、早合點をするものもあるが夫れは大なる心得違ひです。

いちごの食べ方

小兒は極く菓物を好むものであるのみならず、一體

菓物は衛生上効能のあるものですから、これを與へなければならぬ、併し食用の方法を誤ると兎角下痢を起したり、胃カタルの原因となツたりするものですから親達はよく其方法を辨へて頂きたい、此頃は丁度苺の出盛りですからまづ苺の食用法を述べませう苺はまづ莖を取て鹽水で清潔に洗ふか又は笊に入て熱湯を上より懸て冷まし西洋皿に盛てこれに砂糖と牛乳乃至はクリームを懸て出せば不潔物も去れて至極結構な味となります、食する時はホークなり、匙なりで潰して食べるですが其割合は苺一斤に糖砂二三十匁を度とするのが丁度よろしい様です、さてこれを食べるには午後二三時頃が適當で夕飯後などは斷じて食べさせぬ様にせねばならぬ、消化不良や下痢を起すのは多く夕食後の間食にあるものです。



濕氣と黴の注意

梅雨の季節となつて降るものは雨ばかり、空氣は濕り氣候は不順で綿入羽織の必要を感ずるかと思へば急に浴衣が欲しくなるといふ、黴はこの濕つぽいのと暖かいのとのお蔭で無暗に繁殖する一體乾くのと寒いのとは黴の繁殖を妨げるもので冬は割合に黴が生えないのは無論寒いからである又夏でも其の繁殖が著るしくないのは乾いて居るからである、故に黴を避けやうと思へばこれを冷たい乾いた處に置かねばならぬ、それ故飯のすゑ臭くなるのを防ぐには成べく蓋を風通りの善い様にする必要があるまた酸味ものを混せるとその中へは黴は生へないから長く保存が出來る、梅干などを數個飯の中へ入れて置くとこのすゑ臭くなるのが防がれるのである。

六月料理

△蓮飯

蓮の嫩芽を細かに刻みさつと湯を通し飯の炊き上りたる時交ぜるなり、又蓮の葉を如何様にも刻みて煮出して裏漉しにし其汁へ少し塩を加へて飯を炊くもよし蓮の香氣ありて風味頗るよし。

△鰹の餡かけ

かつをの切身を蒸し、或は湯出てもよし、餡を其の上にかけ、摺生姜をかけて食す、餡の製法は鰹の煮汁に葛を水にてとかし、汁の沸立たる中へそろ〳〵葛を入れ、攪きまわして煮るなり、此汁のあんかけは甘鹹にすべし。

△鯉こく

鯉を三枚におろし骨きりをして煮込むなり、塩なればつゝ切にして鍋に笊をしき、其中に味噌汁を入れ、鯉を入れて十五分間煮る、煮上りたらば笊共に引あげ鍋はそのまゝ火にかけ十分位煮つけおろしおき暖めて用ゆ。

△烏賊の黒煮

烏賊を常の如く洗ひ甲を去り、皮を剝き、腹に包める墨袋を破らぬやうにソット取り置き、さて烏賊の身と足とを細かに作り、湯にてざつと煮上げ、後取り置きたる墨袋を破り、酒醤油等を加へて塩梅し、右造りたる烏賊を入れて煮るなり。

△氷蒟蒻のいぶし煮

氷蒟蒻を一夜米の磨ぎ汁に浸し置き、拭巾に包みて能く水を去り、砂糖醤油に酢を少し加へて炭火に懸けて暫く煮るなり、又氷蒟蒻を細く刻み、黒豆と一緒にから〳〵煮にし置かば夏季にも長く保ちて御茶つけなどには好き菜なり。

△蓮根の酢煮

蓮根の薄皮を去り、細かく刻みて水に浸してアクを去り、酢、食塩、砂糖にて煮るなり此は煮過ぎぬ方よし、シヤキ〳〵と歯に當るを好むなり。

△蕨の煮〆

蕨は、桶又は、大きなる鉢に入れ、生灰をふりかけ、これに熱湯をそゝぎかけ、其上へ、板を置き、蕨の浮きあがらぬやうにして、一時間ばかり立ちたる時、蕨を出して、水にて、洗ふべし、さてこれを揃へて宜き程に切り、油揚とゝもに、煮出し汁と酒醤油とにて煮込むべし。

△鯛の南蠻煮

鯛、比目魚等を常の如く料理し、其の肉を宜き程に切り、焦げ付かぬやうに鐵網に載せて焼き、これを豚の脂にて揚るなり、ソースを用ゐれば最も好れど醤油酢等を懸けて食ふも可し、山椒、胡椒ぷうを香料に用ゆ。

△寄鍋

これはいろ〳〵取合せたるものなり、まづ鴫、鰕、蒲鉾、椎茸、糸蒟蒻、百合根、銀杏、三葉などを少しづゝ寄せ集め鍋に下汁を加減よくして入るなり。

十坪の菜園

桂陵

【櫻草】櫻草を栽培するのは世間で云ふ程六かしくはない。茎を揃へさへすれば善い。私は三本寄植にして三鉢仕立てました。仕入は駒込の美香園へ行つて取り交ぜ、一株五錢宛で買つたが、就中「大明錦」の如きは優等横綱の位でした。

【海芋】漏斗見たやうな花が咲いて、何だか人を馬鹿にして居るやうな花です。これは去年堀切へ行つての歸りがけ、一鉢買つて來ました代は十五錢。

【香菫】本郷の妙華園で仕入れました。同園では無暗な花銘などを附けずに、鉢の大さで値段を極めるから買ふのにも安心白の八重四寸鉢で四十錢、紫の一重三寸五分鉢で五錢。然かし此の香菫は光線が不足すると香いませぬ。棚の上で盛んに香つて居るから取り込んで机の上へ持つて來ると直ぐ香はなくなります。

【睡蓮】これは今まで度々手をかけて度々失敗した花です。花は善く咲きますが冬になつて何時でも腐らして仕舞ふ。圖書館へ行つてベイレーの園藝百科全書などを引くり返して見たが矢張りだめでした。處が今年妙華園へ冬を恐れぬ睡蓮が來たと云ふから、試に一つ買つて來ました。銘は「チユベロッサ、ロザヤ」と云ふので、大球一つ參圓五拾錢と云ふのだが、試植の爲め特に二圓にまけて貰ひました。鉢は例の如く醬油樽の古いもの。

【チユーリツプ】これは去年鈴木(充美)さんから貰つたのが一鉢ある。早咲の一重で色は朱紅。茎と云ひ、色と云ひ西洋草花の王は確に之であると思ひました。値段は日本で買うと一球二十錢から五十錢善いのは二圓などゝ云つて居ますが、倫敦へ注文すれば平均十錢端で買へます。

【アマリヽス】赤は鐵砲百合と思へば間違ひない。茎が太過ぎて風姿には申分ないですが、色は中々善い。澤山作つて置けば宴會の盛花用として一ツ五十錢位に賣れるそうです。從來ロカイと稱して直徑二寸位の花が開いたものですが、ヒメ、アリツド種が出來てからロカイは又顧るものがなくなりました。一球三十錢宛。

【シチラリア】此頃は緣日へも出て居ますサイ子リナと云ふのが是れです、花には紅もあり紫もあり、又蛇の目もある。普通は十分咲いて一寸か一寸五分です。紅の蛇の目が一鉢と、淡い紫紺が一鉢ある。何れも種子から仕立てたものです。種子の代は一袋二十錢。

【プリムラ】これは西洋櫻草又は寒櫻草と云つて緣日でも賣つて居ますが、中でサイ子ンシスといふのは花瓣が強く色が正しく、日本の櫻草よりも一段立勝つて居ます。十二月頃から咲いて未だ咲いて居る。

【ヒヤシント】是れも冬から春へかけての花です。一球一茎で一

莖に紫、桃色、白、淺黄等の花が簇生する。大きくなれば一寸面白いですが、素人がやると何樣も莖が小さくなつて困ります。値段は一球十錢。

アブチロン

之は草ではなくて木です。花は芙蓉に似て居るがモットやさしい。色は雪白、本紅、樺黄等である。一本廿五錢。

ア子モ子

三月から六月まで咲いて居る。花は美くしいが、葉が胡蘿蔔の恐縮したやうなもので氣に入りません。然かし栽培が造作もないから毎年作ります。八重咲の新種になると一圓以上ですが普通は十錢から廿錢で手に入ります。

カー子ーション

俗に麝香撫子と云ひます。花は撫子で香がある。莖の弱いのが玉に傷だが支柱を立てれば何でもない。目下歐米の大流行で新種の飛切は二百弗三百弗と云ふ値がして居るそうです。

グロキシニア

入谷あたりでは西洋朝顔と云つて居るか、朝顔とは丸で種屬が違ひます。春蒔いて夏花が咲き、一寸奇麗な花です。入谷では一球廿五錢、妙華園では五十錢、矢張り五十錢の方が善いです。

菜園

草花の方は多少經驗がありますが。野菜の方は全く素人で。第一肥料を何樣云ふ具合に施していゝのか分りませぬ。其れ故今年はホンの試驗の積りで、左記だけを播いて見ました。

菜豆

東側の板塀へからませるつもりで「紅花菜豆」を一合(八錢)買つた。處が紅花では實が面白くあるまゐと、更に「白八ツ房菜豆」を買つて播き足しをした。一合八錢。

玉蜀黍

南側の塀の根へ坪を切て洋種「ロングフエロー」と「ブラック、シュガー」とを播いた。後者は子粒が黑色だそふな。何でも世間に類の少いもので、兩方一合宛合せて十六錢。

南瓜

西側の塀へは南瓜の洋種「ハツバード」と云ふのを播いた。早稻田農園の目錄で見ると形が變つて居て面白いのみなら、す、皮は濃綠、肉は緻密、味栗の如しと書いてある。次手に佛國夕顔をも播いた。之は去年岡山縣長船の農事試驗場から送つて呉れたもので。

甘藍

是も曾てひどく手こずりました。勢よく生長したから今に球になる事だらうと樂みにして居ると、何時までたつても球にならぬ。色々にあせつて終には繩で縛つて見たが矢張りだめでした。然かし不結球の原因は移植をしないからだと敎つたので今年は試しに少し播いて見ました。種類も其の人の言に從つて「サクセツション」にした。一袋二錢。

花椰菜

菜や大根は八百屋から買う方が德です、一寸八百屋で買へないものをと云ふのが、抑も今年野菜へ手を出した趣意であり。其れで甘藍に次では花椰菜を撰んだ。甘藍と同じやうなものでよく西洋料理に出すもの。一袋十錢。

養鷄

菜園は寧ろ令夫人の發起であつたが、養鷄は私反對である。成程、私は日曜の外終日不在で、世話は一切家の者がせ

ればならぬ。厭だと云はれゝば其れまでゝあるが、友達に鶏の通が居て、之は銀色ハンバーグだの、是れは黒色ミノルカだのと、行くたんびに自慢をする。羨ましくて〳〵仕方がないから、終に奥方の御裁可を待たずして、雛ッ子を四羽買つて來ました。(白色プリモス、ロックと云ふのを)。是は日本に未だ澤山ない種類で、



親は岩崎家に居る三光園の定價表を見ると、成程黒色ミノルカと共に親鳥二羽番二十圓、雛百日以内二羽番十二圓としてある。幾らにまけると談判したら四羽四圓だとの事で而して不用になつたら何時でも二羽五圓で引取りますと保證狀まで添へて呉れたから、一番奮發して四羽買つて來ました處が内君は果して大不服である。鶏を飼うと云ふ事に對してすら同

意をしなかつた處へ、一羽一圓の雛ツ子を買つて來たのだから尙納らぬ。四圓あれば銘仙が買へますの、帶の片側が買へますのと云つて勢中々猛烈であつた。是には我輩一言なし。更に有利なる交換條件を提出し且つ三光園の目錄を示して、大きくなれば此の通り番で廿圓になると云つて聞かせたら漸くの事で納得した。女を說くには矢張り利を以てするに限る。其癖是が果してプリモス、ロックであるや否や別に確めもしない、以上は、私が今年越して來た十坪ほどの庭園内に起されたる園藝です。僅か十坪ばかりの空地、石燈籠の一つも置けば、其れまでゝあるが、そこを開拓して見ると春夏秋冬花不斷、玉蜀黍や苺が勝手に取れて、晩には蕃茄をサラダにして、明日は菜豆を胡麻よごしにしろなどゝ云ふ贅澤もする事が出來るのである。其れで費用はいくらかゝつて居るかと云ふと、只の卅二圓。此の内には四圓の鳥も含まれて居る。凡そ世に是れ程安い道樂はありませぬ。閣下一朝の亭を廢すれば、誰でも是れだけの樂をする事が出來ます。

さて右の草花や野菜を培養するには、方十坪ばかりの庭園を利用したのですが、その設計に植木の棚が三段で長さ凡そ三間に渡り、其の向ふに長さ二間半幅二尺の畝が十本、棚の左の塀の際には煉瓦で周圍を仕切つた一間に三尺の苗床が一つ、其れに隣して一間に二間の鷄舍が一つ、鷄舍の隣が塵芥捨場で、之は堆肥を造る仕組になつて居ます。

準備

設計が出來上つたから道具を揃るのです、今年は野菜畑をも作る事にしたから一通りのものを新調した。

鍬(大形のは重過ぎて困るから中形のもの)	四十五錢
ホーク(堆肥反轉の爲めに必要なり中形米國製)	一圓五十錢
ホーレーキ(除草と土壤破碎とに兼用するもの)	一圓
移植鏝(米國製のプリムローズ印)	四十錢
如露(細いのと太いのと楕圓形のと替口三個)	七十錢
金篩(三分位の目、土を篩ふに用ふ)	二十五錢
板(植木棚に用う、古物にて都合九枚)	一圓
杭(植木棚及鷄舍に用う、同じく古物)	三十錢
土鉢(五寸鉢四十個、六寸鉢二十、八寸鉢十)	二圓
密柑箱(二つに切りて苗床に用う、計十個)	三十錢
柄杓(肥柄杓なり、大小二個)	三十五錢
立札(苗床や鉢へ立てる木の札なり計百枚)	三十五錢
鋏(接木、枝切に用う大久保形一丁)	四十錢
鐵網(亞鉛引にて二寸四分目四尺幅三間)	一圓

右コテは妙華園、鐵網は白金の三光園、鍬やホークは新宿の耕牧園で買調へました。外に園藝肥料としては妙華園の培養土を取寄せた。是れは草花栽培には此上なしの土で施肥の煩ひなく、其上何處へでも屆けて吳れる。一斗の價が五十五錢。花ばかり作つて居た時には此の培養土と其れから通鹽町の鈴鹿商店で發賣する園藝肥料を用ゐて居ました。是れは一鑵郵稅共廿五錢で、至極重寶なものです。又野菜を作る爲めに過燐酸石灰と骨粉とを一貫目宛買ひ兩方で代價四十錢。

肥料に次では種物です、是れは去年から葉書を出して外國からも目錄を取寄せて置きました。葉書さへやれば直ぐ送つて吳れます。日本などでは一圓出しても賣つて吳れないやうな彩色石版入の立派な目錄をたゞで吳れます。

女代診（其三）

糸左近

▲不妊の原因及其救正法

御約束申したる通り、今回は不妊の原因及其救正法等に就いて滔々述べようと思ひますが、何分にも生殖器に關する事のみなれば、専門雜誌ならぬ本誌殊に「女學」の二字に對しては、男子に屬する部分は悉皆抜にせねばならぬし、其他も思ふ樣に書けぬが遺憾である、されど熱讀玩味なさるゝ中には成程と感せらるゝ節も多からうし、隨て衛生上の大利益も少く無いと自信してゐます、若夫れ兒無き爲に其不幸を嘆せらるゝ方が、本章の御蔭で、呱々の聲を聞かるゝに至ては、之を大袈裟に言へば余が國家に對する義務の一分を盡したるを喜ぶのである、先以て萬歲々々。

▲飲食――印度の古哲釋迦氏は我が門弟等の肉食を禁じたるは抑々何故なるぞ、これは動物を殺さぬための慈悲心に依るとは言ふものゝ、俗人即ち僧侶ならぬ者には禁せぬ所から考へて見ると、全く慈悲一天張でも無いらしい、余の僻目か知らねど、比丘及比丘尼をして妻帶或は有夫の念を斷たしむる一方便では有るまいか、果して然らば氏は仲々生理も心得て居らしたと謂はねばならぬ。嘗て余は本誌で紹介したる木食上人に、生殖慾の如何を尋問したれば、上人笑つて、自然生薯を食したる時などには聊か有つたけれど、道念を以て之を制したり云々。又動物學者曰く、滋養物を多く取る禽獸程兒も亦多し、雞の卵を澤山産ませんと思はゞ宜き餌を惜んではならぬと。今是等を總合して見るに人間も亦滋養物を多く取らねば兒を設け難いといふ事が斷定せらるゝのである。然らば如何なる滋養品が生殖力を強くするかといふに、鳥獸魚介の肉を始とし、雞卵澱粉即ち米・薯類・豆類等が有効なるもので、野菜類・嗜好食物等は大いなる効力無い

やうである、斯う申すと然らば野菜類嗜好食物は食はずもがなと反問せられんか、そは大なる誤りで、余が今茲に云ふ滋養品は生殖力を強くするだけの範圍なれば、さう心得られたいものである。古來支那では芣苢即ち「おほばこ」、我國では海老を珍重して、子無き人態々之を食するといふことなれど、是等は何かの因縁談で信ずるに足らぬ説であらう。酒は生殖慾を強くするけれども、之を大量に用ゐれば其力を減ずる事、言ふまでも無い、これに就いて倘論じたい事もあれどそは專門書に讓るとせん。

▲氣候——統計學者が出產届に依り、其妊娠したる月を調べて見て、妊娠は春秋に多く、夏冬に少なく殊に大寒は甚た稀であると證明して有るまた同じ動物例へば、犬、雞等に温かい生活法を取らしむると寒い暮方をなさしむるとは大なる差がある、寒卵產むなどは甚だ異數なる事を見ても丁る。又寒地に居て子無き人が、温暖なる地方に移り、始めて妊娠したる例も往々有る。また眼を宇内各國に注いで見ても寒帶熱帶は人口の繁殖少く、我國の如き温帶地方はドン／＼進んで、明治十年頃には三千萬に滿たぬ人口が今や五千萬に近づかんとするに非ずや、この鼠算を以て算せば將來百年間には果して何うなるであらうか嗚呼膨脹せざる可らず我が領土。

▲住居——吾人の目を慰めんために金魚を飼養し、之を繁殖せしめんとせんか、如何に善良の食餌を撰んでも、如何に清潔な水に注意しても、如何に温度を調へても、彼が住居にして不完全ならんか決して繁殖せぬものである。嘗て佛蘭西の動物學者は鷄を狹き籠の內に飼ひ、次に邸內なる或る所場を仕切て幾分の自由を與へ、其次に眞の自由を與へたれば其の產む所の卵は二、四、六の比例であつたとの事。人間も矢張其通で、空氣の流通惡しき日光の透徹充分ならぬ而も不潔な狹い家屋に計りゐる者は妊娠甚だ少いが、原野に出でゝ赫々たる太陽にも射られ、新鮮なる空氣をも吸ふ者に妊娠多きは人知るや知らずや。

▲運動——又々動物を以て試驗したる一例を擧げん

に、或人雌雄の二犬を飼ひ、鎖を以て多くの運動出來ぬやうにしておきたれば、Give me liberty or give me death. といふやうな風をして、生殖慾も無ければ勿論子を産む筈も無かつたが、之を解いて自由に一任したれば續々子孫を繁殖したといふ。人間でも夫婦を一つ牢屋に幽閉して更に運動の自由を與へざりし例は、歴史上無いでも無いが、兎に角妊娠はせぬ、これを以ても子孫の繁殖を計らうといふ人は運動を怠つてはなりませぬ、さりとて馬車馬の如くに朝から晩まで、間無しに働いてる者も「過たるは猶及ばざるが如し」とやらで、これ亦生殖力の弱くなるは言ふまでも無い。



▲夏ショール
シホン織にて、リボンにて結ぶなり
色は藤鼠、淡紅、白、オリーブ等あり
優美にして高尚なれば殊に洋服着用の時に用ふるに可ならん
和服にても十七八位の令孃に適す。

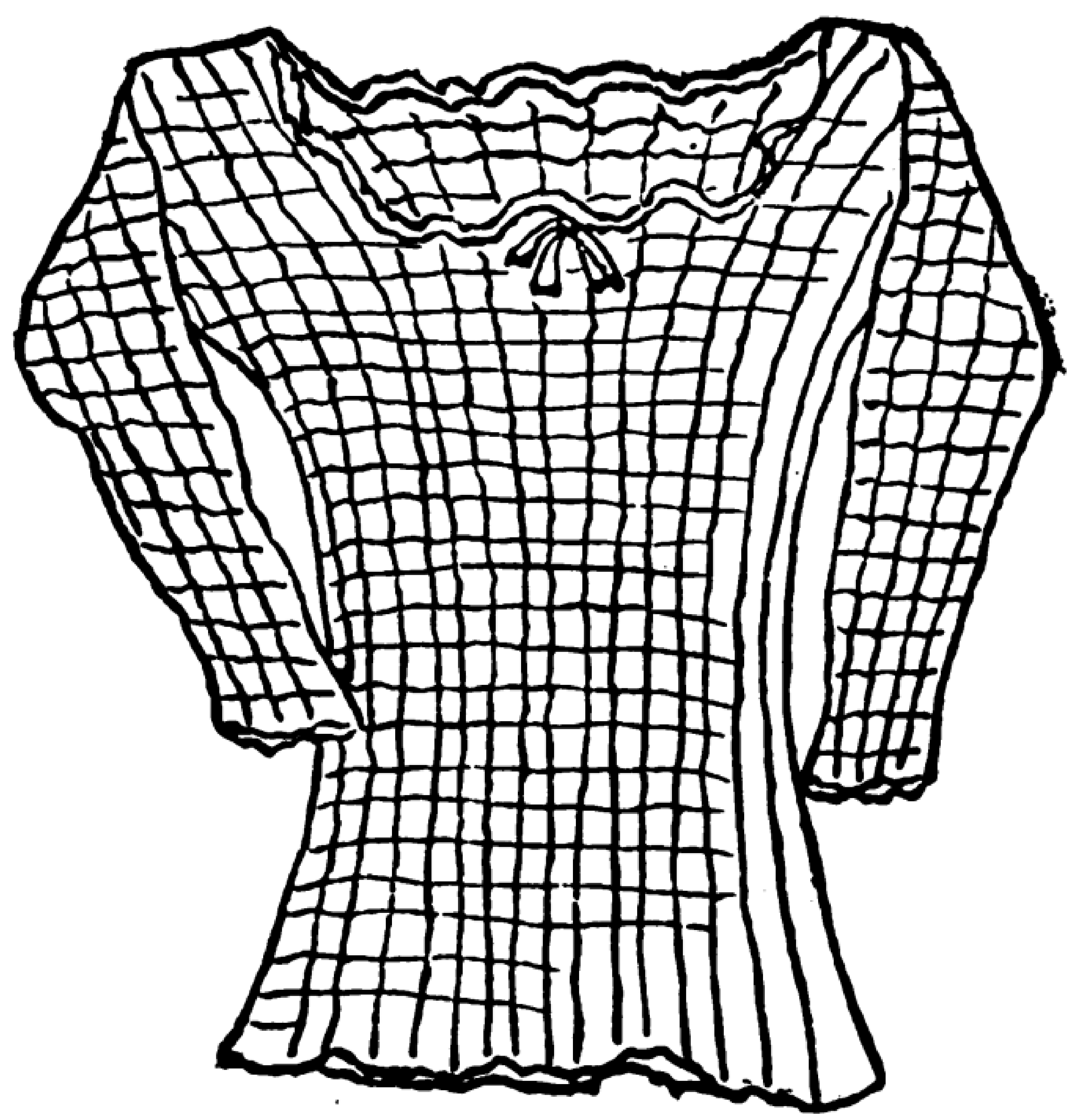
▲腦力――腦力を多く使用すると使用せざるとは妊娠上大なる關係あるもので、古今東西を問はず學者や發明家は餘り多く子を有たず、縦ひ有つても親の樣に賢ならぬが通例である、賴山陽翁の子に三樹三郎氏あるは實に異例であつて、これも或る人は山陽の氣質磊落にして物に頓着せず、勉强する中にも閑日月あつて、悠々自適する所があつたからで

あると、或はさうかも知れぬ。彼のニユートン氏に至つては、身體他人に勝れて强健で有つたけれど、一生の間勉學にのみ從事し、生殖慾の如きは更に起らざりしと云ふ、近くは故文學博士中村正直翁も其の生殖慾に淡白なること實に驚くに堪へたるもので有つて、斯く剛邁なる男子でさへも此の通りであるから、況んや心身の柔弱なる女子に於ては倘更である。歐米諸國に於ては夫も腦力を發して世に立てば、妻も亦精神を使つて敎授の任に當る者澤山有るけれど、夫等の人は何うしても子の少いは事實である、余は男女同權を非難する者では無いが、世の文明に進めば進む程妻は內政を掌つて、餘り頻繁なる事業に從はぬが宜いと思ふ、近來女子獨立論を稱ふる者續々出るけれど、生殖力は亦以て一國の消長にも關係することとなれば、これも程度問題である。

▲年齡――結婚年齡の早い遲いはこれ亦妊娠と大なる關係あるもので、早きも遲きも共に不娠の源をなすこと少く無い、されば如何なる時を以て結婚の好期となすかと云ふに、身體腦力の構造完備し即ち成長の極點に至りたる年齡を以て、三々九度の盃を擧ぐる方が眞に目出度のである、この年齡は種々なる統計に依て檢すると、我國ではおほよそ男子は二十五歲女子は二十歲を最良とするのである、これより早ければ生活力の供給を生殖力に分ち身體薄弱になるし、餘り遲ければ依卜昆垤爾歇私的里などの病を起すか、左無くも女子に在つては生殖器に炎症を發し、何れも間接直接に不妊の原因となること有れば、自由結婚を許さぬ我國の親たる者は好機逸す可らずである男女年齡の餘りに掛違有るもこれ亦宜しく無い、今余が住む近邊に夫は五十三四歲妻は二十七八歲のがあれば又夫は三十歲位妻は四十五歲程のもある、人は陰で取換たら嘸宜からうになど笑つてゐる、兎に角妻の若い方は伴れ添うてから七八年も經つさうだが僅かに一人の子、一方は數度の流産あるのみで更に子は無い、眞理は爭はれぬものである。

▲相性――余が今茲に述べんとする相性は土性に金

性などいふ如き古めかしい人相家の論では無くて、生理、心理上の相性を論せんとするのである、即ち心理上から云ふと意氣相投合し情愛濃かに所謂夫唱婦隨で無くてはならぬ、然らば如何なる夫婦がさうなるかと尋ぬるに氣質の相反對するが却つて投合するの源である、夫は意氣天をも衝かんずる豪邁ならば、妻は柔和に春風徐ろに吹くといふ有樣なるか然らずんば寧ろ妻は男勝の政岡で、夫は何うでも宜敷頼むぞやといふ如き詩人的が可い、然るに癇癪に癇癪、優柔に優柔、コラー、ナニーでも纏まらねばオヤくヽマアくヽも宜しく無い。次に生理上から云ふと、これも矢張反對が宜い、夫は色黒く筋骨逞ましく毛ムシヤくヽの増荒男ならば妻は色白く筋骨寧ろ痩形で如何にも、窈窕たる淑女が可い、又左無くば「蚤の夫婦」でも宜いこれに反して大的に大的、小式に小式は餘り宜しく無いものである。



▲クレープ地婦人用肌着

夏季婦人用肌着として着工合極めてよろし、汗を防ぎ肌ざわりよく涼しき上に體裁も優雅なれば實益と趣味を兼れたるものなり、形は概略此の二樣にて地は絹毛製瓦斯織などあり、色は薄藤、肉色、格子入等いろくヽ代價絹毛製にて三圓より三圓六十錢、瓦斯製一圓六十五錢より二圓まで又モス織一枚一圓八十錢

其能く似たる者は始め相合ふやうなれど後には不和合となり、其の異なる者は始め合はざる如くにして後には綢繆纏綿の情を増すは古來歷史上の證據立てる所である。斯く夫婦の意氣相投合すれば啻に一家の富貴繁榮を計らるゝのみならず、姙娠を全うし、子孫繁殖する上に於て、大なる源因をなすものである、

強姦せられて姙娠したる例も無いでは無いが、是等は異例の異例で、之を以て前論を駁してはならぬ、ダヴキン氏は仲善き雌雄の動物が多く兒を設けたるを取換へて新奇の雌雄交はらしめたれども兒を設けなかつた例を擧げてゐらるゝし、キツシユ氏は不貞の女子の受胎するは夫よりも姦夫に多きを探究してゐらる、又其他アリストートル、ハルレル氏等も愛情の一致せぬは不姙の主因なりと迄研究せられた、余が敬愛する所の讀者諸孃よ、返々も輕々しく夫を定てはなりませぬ。

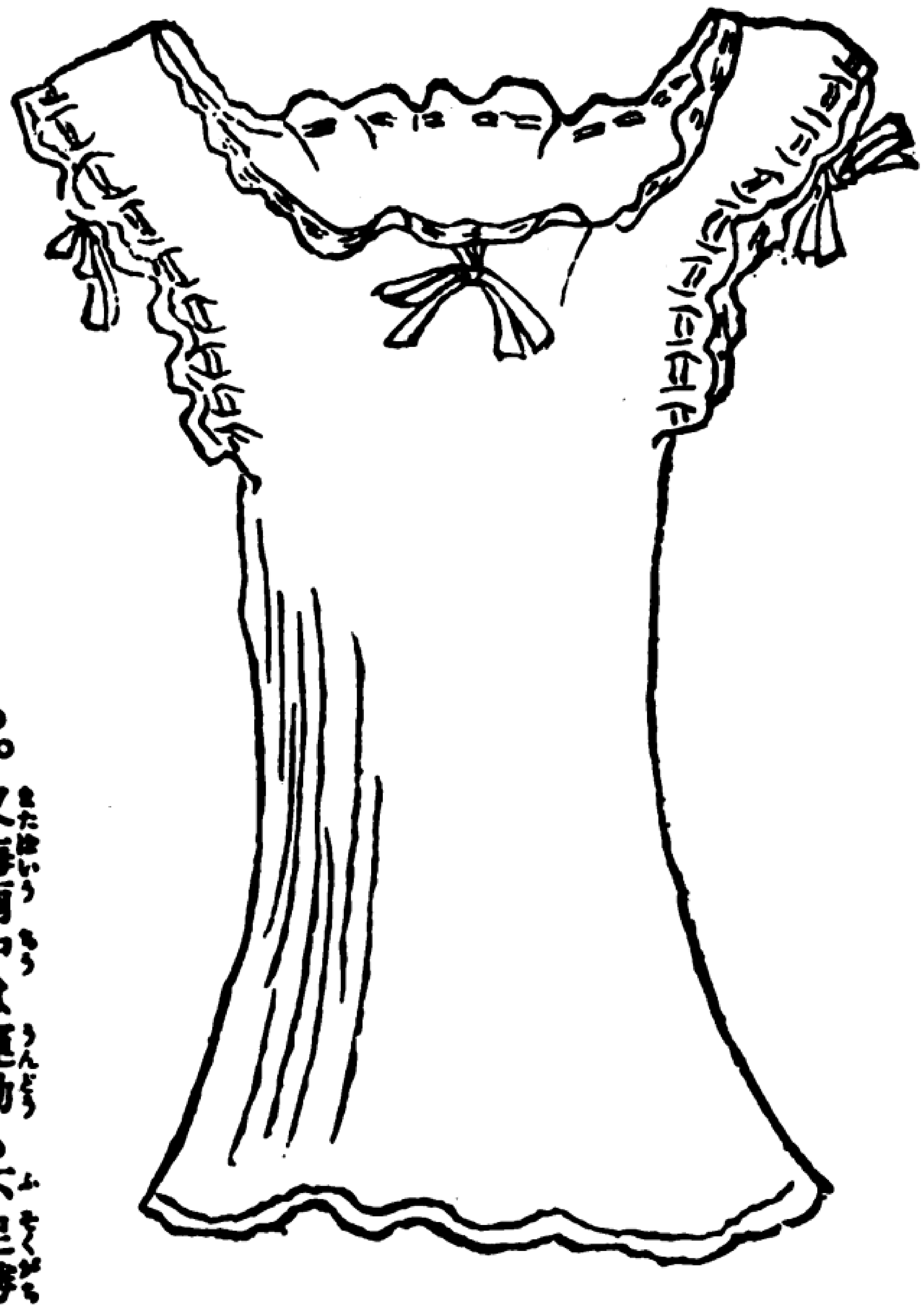
▲貧富　上來述べたる處に依て、輕々しく判斷すれば、兒は富者に多くて、貧者に甚だ少なくなる道理であるが、事實は之に反して「貧乏人の子澤山」「長者の子不持」といふ傾きがある、これは如何と怪まるゝ方もあらう、されば大に之を辯明しておかう、成程富者は滋養食品も多く取るやうだが、之を貧者に比すれば運動不足勝になつて、それが爲め其の食量少きのみならず、消化吸收の點に於ても貧者に比すれば固より少い。次に貧者の住居は狹くて不潔なれども、大抵外に出でゝ光線に觸れ大空を吸つてゐるが故に、却て富者が深窓の下に圍碁花牌を弄んでるよりも大いに勝つてゐる。次に腦力を費やす點に於ても今夜の飯を何うして求めようかと心配する程の極端で無い以上は、大抵單純なる思想を以て判斷し、左程の心配をせぬものなれば、富者の如く、種々複雜なる事柄に腦力を費すことの無いものである、然れども朝鮮人のやうに、赤貧洗ふが如く、食はず飮まずが幾日も續き、偶々金錢を得ても、懶惰不潔、蠢爾として豚同樣の生活をなすに至つては、生殖力漸次に弱り、人口次第に少くなるは、實に憐む可きものだ。次に我國富者の多數は淫慾に耽り、一夫多妻否多妾であるから夫婦の情愛濃かならず、爲に正妻に子なき者往々有るは何人も能く知つてゐる所で、其の妾腹の兒も果して富者其人の子で有るか疑はしく〳〵。

尙不姙の原因はこの他に二十幾つ有つて、次號に之を完結し、其療法等を述べませうから、本號を讀まるゝ方は是非次號をも見て頂きたい。

季節衛生

六月は所謂さみだれ時で、細雨濛々と降り續き、連日空濛、萬物凡て濕り勝になる時なれば、此際大いに衣食住の衛生法を知らぬと僂麻質斯・脚氣等の持病者は言ふに及ばず、健康者と雖も圖らざる病源を醸すものなれば七八月の盛夏よりも大いに注意をして頂きたいのである。

▲衣服——はフランネル紀洲ネルの如き、濕氣を吸收し難い物がよい、さうしてシャツ下着の類は殊に候補者を澤山用意しておき、幾日降り續くとも、乾きたるを着換るやうにし、若し晴天の日あらば何を忘れても、之を洗ひ、且つ乾かすことを怠つてはなりませぬ。



▲クレープ地婦人用肌着（其二）

▲食物——は一年中で、この氣節程黴が生え且つ腐敗し易い時は無い、されば新鮮なるを撰び、而も能く煮能く炙つて食はねばならぬ、常には滋養品の刺身・奴豆腐も梅雨中は用ゐぬを可とす、何となれば黴菌の恐れあるからである。又梅雨中は運動も不足勝になり、精神も亦鬱々として食慾進まず從つて消化も宜しからねば可成脂肪の少い淡白なる滋養品を撰び、餘り食らぬが肝要である。

▲住居――は何も清潔乾燥の二事を心懸けねばなりませぬ、濕氣は黴菌を生む母であるから戸棚押入・戸障子・壁に至るまで、屋茸といふ物が生えそれが衣服・飯食器に附着し、隨つて、我等の體內に入り、一方ならぬ病を惹起すものなれば、何處も乾きたる雜巾にて拭ひ取り、及ぶ可くは火鉢でも入れて乾かすが宜い、若し拭うて取れぬ黴などのある場合は熱湯を注いで洗ふが上分別である、便所には石灰アルボース石炭酸水の如き物を撒き消毒し玉へ、下水も能く疎通するやうに、水を流して汚物を去らねばならぬ、斯う注意しておけば梅雨の候去つて愈々炎々たる時來つても種々なる病魔に襲はれぬものである。

▲精神――は快活になるやう、唱歌・音樂・室內運動・入浴其他種々の遊戲をなして、鬱々たる精神にならぬやう、工夫せねばなりませぬ。悲觀的の詩歌小說はこの際殊に大禁物である。

脚氣持はこの月より麵包或は麥飯に改正するが可からう。

▲衞生顧問▼

(問)頭腦を明快にし記憶力を增す方法及び醫藥を問ふ。(京都廿歲の女學生)

(答)この種類の問に屢々接しますが、之を詳しく述べんには一大冊の書物となり、單簡に答へんとすれば一向要領を得ぬ、されども唯之を目錄的に申せば、早寢早起、適度の運動、滋養の食物、新鮮の空氣、明るき光線、身體中何れかに故障あらば先之を療治する事、心を高尙にする事、夜は閑靜なる處に臥し安眠を妨害されぬやう、能く熟睡する事、雜念を去る事、注意力を養成する事、清潔秩序を尙ぶ事、右の外連鎖記憶法、きつかけ記憶法などいふのがある、例へば天皇御歷代の御名を順次に記憶せんとせば、神武(深霧)、綏靖(水勢)といふやうに通はせ、深霧のあるは河の水勢が、甚しいからで、併し堤防破壞せずに(安寧)に有るはこれも天子の(懿德)であるといふやうに記憶するが

前者で、英語の石をStoneと投げ、烏の色はCrow、私は氷をIceといふやうに覺ゆるが後者である。

(問)私は四五年前より甚しき口中熱にて大いに困つてゐますが、何卒其の原因療法を敎へ下さい。(神戸の林貞子)

(答)口內炎、齒齦炎などの口中の病或は胃病、熱病等が原因となります、療法は原因に依て異なるけれど、兎に角、2%の鹽剝水、又は硼酸水にて含嗽し、薄荷の如き清涼劑を含むことも必要である。

(問)蝮の如き毒蟲に咬はれたる時は如何なる藥を用ゐて宜しく候や。(紀州の森キフイ女)



小供博覧會の瞥見

(答)格羅謨酸液を其部に注射すれば十五分時間內ならば必ず其の効を奏します、素人療治としては强發泡膏を塗ける位なものでせうが、これを以て滿足してはなりませぬ、一刻も早く醫療を受けるが大肝要である。

(問)新聞紙上に隆鼻器を廣告してありますが、實際に効力が有りませうか。(神田の谷間のさくら女)

(答)余は實驗せねど、又話に聞く所によれば、多少の効あるさうです。

(問)母五十一歳は右眼より涙しきりに出で、困難致しますが、何卒其の療法を六月の誌上にて御答を願ひます。(母思ひ女)

(答)涙嚢炎、涙腺炎、涙漏の三病 中何れかであらうが、何れにしても眼科醫の手術を受けねば根治しませぬ、姑息療法としては氷で御冷しなさい。

(問)廿二歳の女背や腹に「なまづ」出で、色々療治も致しますが効ありませぬ、何卒六月の誌上にて敎へ下され。(出雲の憂鬱女)

(答)果して「なまづ」ならば醫者の所謂癜風と申すもので毒藥なれども千倍の昇汞水を塗ければ大抵治らぬことはありませぬ御地の醫士と御相談あれ。

(問)兄廿二歳は本年三月の末、左眼の角膜實質炎に罹り失明して了ひましたが、何とか全快する工夫ありますまいか。([illegible]女)

(答)失明したるものならば迚も取返は就ますまいが、兎に角今一應専門名醫の診療を乞はれよ斯る重き病は通信教授出來ませぬ。

(問)朝夕清水をのみますが差支無いものでせうか。(大垣町の光子)

(答)何れとならば一旦沸したるを御飲みなさい。

(問)長男五歳は背中の骨が出て目下コルセットを嵌め、服藥してゐますが全治の見込ありませうか。(仁川病兒母)

(答)診察せぬことですから受合はれませぬけれど、適當なる滋養食品を與へ、療治を怠らねば必ず治りませう、藥のみに依頼して滋養品を疎かにしてはなりませぬ。

(問)卵巣嚢腫に罹り卵巣を切開したる婦女は姙娠の見込到底無きものに候や。(京都の其母)

(答)有りませぬ。

(問)三十五歳にして初めて男子を生み、夫と共に神の助けと打喜び蝶よ花よと育てしは夢か僅かに三ケ月にして急癇に罹り、あはれ果敢なくも萎みし其日より今に乳汁の分泌止まず、これに就けても涙の種、同情深き先生よ、何卒妾が心を御推察下されて乳汁の止る方法を敎へ玉はれかし。(茨城KH女)

身に換へて愛でし撫子ちりし後
出づる乳汁は何のためかは。

(答)一篇の小説を讀むが如く覺えず同情の涙を溢して十分に御推察申します、就いては淡白とした る食物を撰び、乳房を水又は氷にて冷し、御地の醫士と御相談の上、緩下劑を服まるゝが可いでせう。

一たびは散りし撫子生え出でゝ
二たび飲まんしるしなるかも。



こども博覽會の瞥見

(問)人工流產術とか申す法これ有り候や、有らば如何なる場合に用ゐますか、且つ其方法を何卒六月の誌上に御教示を乞ふ。（越後の三何女）

(答)醫者の母體の生命危篤に迫る時親夫等の許を得て之を行ふのであるが、專門書ならぬ家庭雜誌に幾度御尋ねになつた所で、これを答へられませうか、一體全體それを聞いて貴女は何になさります。

(問)舌癌に罹る者有之候が、切除より外に名法のな

きものに候や。(栃木の其親類女)

(答)然り。

(問)馬肉と牛肉との鑑別法を問ふ、或は衛生顧問の範圍外かも知りませぬが御教示下され候はゞ幸甚の至りに候。(北海道の男の女學愛讀生)

(答)左の如し。

馬肉の色は少し黒みを帶びたやうな赤さである、牛肉の色は鮮やかに紅である。馬肉に水を加へて煮れば、小便の煮ゆるやうな臭氣を放つ牛肉に水を加へて煮ても、牛肉の煮ゆる臭氣である。馬肉の肉を斬るに硬い、牛肉の肉を斬るに柔かである。馬肉の脂肪層は少い牛肉の脂肪層は多い。馬肉の脂肪の色は少し黄を帶びてゐる、牛肉の脂肪の色は眞白である。馬肉を碎いて稀硫酸を加へ少し温むれば矢張小便のやうな臭氣を放つ、牛肉を碎いて稀硫酸を加へ少し温むれば一種の臭氣を放つけれども、小便の臭ではない。

(問)蟋蟀の黒焼を服めば果して俗説の如く夫婦の情愛を温むるものに候や。(在韓國のNO女)

(答)決して斯る道理なし、且つすべて黒燒は炭なり、炭を服んで功あるものならば何ぞ蟋蟀を焼くの必要あらんや。

(問)鶯の糞をつけて顔を洗へば色白くなるとは、本當でありませうか、耻かしながら、御教示を乞ふ。(京橋區の湯屋女)

(答)然らず、衛生上有害なり。

▲質問心得

1. 質問は葉書に限ると心得られたし、印紙封入返事を乞はるゝも應ぜず候。
2. 宛名は東京本郷區森川町一番地表北裏八十一號糸左近に候。
3. 多くの中より可成異種の物を撰んで答へますから其餘の方は腹を立て下さるまじく候。
4. 質問の文體は何にても構はず候へども方言を交へぬやう、且楷書にて年齢月日、及び縣名を書かれたし。
5. 面白半分の問及び漠然たる問には答へず候、例へば「私は身體が苦しくて堪られず何病でせう」の如し。
6. 匿名は異様なるが宜し何となれば「女學世界愛讀者」などは餘り多くて紛れ易きが故に候、

四季適用 通俗治療法 （糸左近君著）

目次 （定價二十八錢）

鑑頭衛生問答 百六十種

患者に供する流動食物

本年は季候の不順にて大分病人が多いやうです、殊にこの頃では、エンフルヤチブスが流行して體質の弱き小兒や老人などの段々床に就く者が多い、さなきだに夏季は胃腸の病を起し易い季節ですから患者に對する食餌の注意は最も必要の事と考へます。

▲大麥のおもゆ

原料は大麥を大匙三杯、鹽少し冷水四合、レモンの汁大匙一杯、砂糖大匙一杯。

右大麥を暫時冷水に漬け置き、一時間半とろ火にて煮、濾して稀粥に鹽、砂糖、レモンの汁等(レモンは除きてもよし)を入れて味をつく可し、これは下痢病の折の飲料としてよく又は手輕き食物ともなり或は熱病の折の飲料にもよし、熱くしても冷ましてもよし。

▲米のおもゆ

原料は米大匙二杯、三勺の牛乳か又は一勺半のクリーム、冷水二合、小匙半分の鹽。

右米に水を入れて米がやはらかになるまで煮、濾して其稀粥に牛乳又はクリームを入れ鹽にて味をつけ再び火にかけ、熱き内に出す。

▲オートミールのおもゆ

原料は良きオートミール茶碗に一杯と、一度煮沸して冷ましたる湯を八合。

右オートミールを水に入れて温かき場所に一時間半置きて時々かきまはし、濾して冷ますべし、此は度々胃弱の折用ゐ又暑中勞働人等が氷水の代りに飲みてよし。

▲燒パンのおもゆ

原料は古くかたくなりたるパンと同料の熱湯、少量の鹽。

右の食パンを二分位の厚さに輪切にし、鍋又は餅網にのせ、縮みて狐色になるまでとろ火にかけ、細かに碎き熱湯をかけて一時間置き、布にて濾して鹽を以て味をつく可し、これは胃病の折又は吐瀉を止むるための飲料として用ふ、右熱ある病人などには氷に代へて冷めたき飲料となすべし。

▲レモン水

原料はレモンの汁大匙一杯、水、糖蜜大匙二杯一合の湯と五勺の砂糖とを八分間煮て糖蜜を拵らへ、大匙二杯の糖蜜にレモンの汁を大匙一杯と五勺の冷水とを入る可し、もし是よりも強きレモン水を拵らへんとならば更にレモンの汁又糖蜜を入るべし、之を前々より貯へおくには糖蜜を冷まして前の割合にてレモンの汁を入れ瓶に入れ隨時に出して用ゆ可し、又夏蜜柑はレモンの良き代用をなすものなり。

▲果實の汁

通例菓物を煮るよりも餘計に水を入れて何品果實にてもよし、よく煮て汁を取り、これに砂糖を好き加減に入れ煮たゝせ瓶に入れて冷たき所に貯へ入用の時出して用ふ、之を用ふる時はよき加減に冷水を注

ぎて稀薄くす可し。

▲鶏卵と果實の汁

前の果實の汁に鶏卵の白身一個をかきたてゝ其中に投ず可し、かくする時は更に滋養ある飲料となるなり。

▲牛乳の殺菌法

患者に與ふる牛乳は吟味の上にも吟味すべしまづ鍋に牛乳を入れてよく蓋をなし水の入れある他の鍋の中に入れ、其水が沸騰つまで火にかけ置き、火よりおろして十分間其まゝになし置き、清潔なる瓶に入れて冷まし、入用の時用ゆ可し、もし牛乳を一個の鍋にて直煮にする時は其成分を變じて便秘を起さしむる事あるものなり、されどこの如く湯煎煮にする時は斯る憂ひなし。

▲鶏卵を入れし牛乳

一合の殺菌したる牛乳と鶏卵の白身一個とを清潔なる瓶に入れて兩方ともよく混ざるまで瓶をふる可し、他の拵方にて病人が鶏卵を食べざる時は此の如くして與ふ可し。

▲又一法

鶏卵一個の黄身を滑らかになるまでよくかきたて、大匙一杯の砂糖を入れて混ぜ合はせ、これに一合の殺菌したる牛乳を入る可し、ワニラ、レモンなど香料を入れて用ゆる方よし、これは快癒期の患者が食事の間に欲する時用ゐて大によし。

▲クミス

原料は四合の牛乳、三勺のイースト液、大匙一杯半の砂糖、牛乳を殺菌して微温くなるまで冷まし、砂糖とイーストとを入れて、瓶の上を一寸五分位すかして牛乳を入れ栓を固くなし倒になす可し、栓は強き糸を通してよく結び置かざる可からず、斯くして六時間温かき所に置き後冷まして翌日用ゆ可し、是は牛乳を嫌ふ人もよく飲めるものなり。

▲ビーフチー

牛肉一斤を極く細かに刻みてガラスの徳利か又はよく蓋の出來る鍋に入れ、二合の冷水を牛肉にかけ又鹽を少量入れ、其鍋又は徳利を他の冷水の入れてある深鍋に入れ、火にかけて深鍋の水があまり沸騰せざる樣にそろ〳〵熱し、三時間温かき場所に置き、入用だけ牛肉より汁を漉し取り、再び熱くして供す可し、之を供するには赤きコップを用ゆ可しそは汁の色が明白に見えて病人の食欲を進ましむるためなり。

▲牛肉エスセンス

原料は牛肉半斤、牛肉を一寸位の厚さに切りこれを焜爐の上にて焼き汁の出ぬ樣に十秒毎にひつくり返して三分間焙り、細かく切りて汁を壓し出して茶碗に入れ其茶碗を熱湯の鍋の内に入れて内の汁を温め、汁の色が見えぬ樣に赤色のコップに移し入れ、鹽にて味をつくべし、此は食物を濃くして與ふるの必要ある時供すべし、即ちあまり水分の多き飲料を嫌ふ時に用ふ。

▲蛤の漉汁

原料は二十個の蛤を丁寧に洗ひ、よく蓋の出來る鍋に三勺の水と共に入れて貝の口が開くまで煮、蛤を取り上げて其汁を布にて漉し、鹽を入れて味をつけ、熱き内にても又冷めてからにても供すべし。

人情哲學

市の人

▲樂天家

子供「お父さん樂天家つて如何な人、
父「樂天家つて云ふのはな、奥樣を貰つて喜んで居る人の事だよ。

▲惡習慣

立場にて晝食を濟せ是から出立しようとしながら旅人が、代は如何かと尋れた、立場のお神さん「あの何で御座いますよ、七十五錢宛頂く習慣になつて居りますよ」と聞いて旅人「ウム、夫やあ惡い習慣だ、廢めた方が好いれ」と云ひながら五十錢銀貨を一ツ置いて行つた。

▲女の舌

醫者が婦人患者の舌を見ながら「もつとお出しなさい」と二三度云つた、處で其婦人が「先生女の舌でも長さは男と同じですよ」醫者「や左樣でしたかな」。

▲愛と結婚

愛は盲目である(Love is blind)、併し結婚してから誰しも少つと目が醒めるものだ。

▲持參金

A「夫では君の細君は持參金を當に貰つたンだれB「勿論さ、A「ウム、して如何位持つて來たれ、B「少つともA「おかしいぢやないか、如何云ふ譯でれ、B「君あつたら外へ往くつもりだつたそうだよ。

▲豫想外

金が拂へない時には此方から往つて言譯をするのが一番好いと聞いて私は出掛けましたよ、第一番に魚屋へ往つたが主人が不在でした、夫から米屋へ往つたに、是でも亭主が留守、家主、酒屋、薪屋と七八軒を廻はつたが皆留守、是から明日來ても昨日持つてつたに居なかつたからと言へると大安心をして家へ歸つて見ると、豫想外にも大勢の客、誰かと思つたら、今歩いた方々の主人達。

▲馴染

甲の妻「左樣ですよ、齋藤さんと妾とは約束が出來たのよ、貴樣妾どもの初めて逢つた時の事知つてゝ、小說的よ、雨の降つてる日に町で進行つたンでしよう、すると妾が傘なしなのを見て、自分のを貸して呉れたンですよ、乙の妻「おやまあ、齋藤さんは濡れちまつたンだよ。

▲獅子

肥つた紳士「入場券を下さい、動物館の番人「貴君は御斷りしますよ。

獅子が貴君の樣な方を見ると氣が暴くなつて危險ですから、

▲無　藝

「宅はもう眞實に愉快で御座いますよ、兄は蹴鞠の選手で御座いまして、弟は中々上手に繪を描きますし、姉娘は舞蹈、妹娘は歌が人樣の賞め物になつて居ります、『そして旦那樣は、『あれですか、あれは貴孃極無風流で何にも知りは致しません、唯皆を養つて居る丈で御座います。

▲富　籤

甲「如何して彼の令孃と近付きになつた、彼は財産家の娘だよ、乙「其樣だとも、僕は何時でも逢ふたんびに富籤だと思つて大切にしたからさ。

▲新　作

A「如何です、今度の脚本は甘く行きますか、B「ま、先づ〳〵上等です熱心な人があるもンです、初まりから仕舞まで一生懸命で見て居ます毎日、A「へい、まあ一體誰でしよう、B「音樂隊の人だとか云ひましたよ。

▲十五圓の月給

男「私は貴君の愛さへ傳られゝば世界を貴女に上げて仕舞つても好い

女「あら、好加減な事を云つて、十五圓の月給で世界が買へますか。

▲嚴　寒

酷い寒さで貴女のお口から出る詞が皆氷つて下へ落ちましたよ、私は今御別れして歸つても、此氷を拾つて早速鍋へ入れて火に掛ければ丁度最一度御話が出來ると云ふものです。

▲夫婦喧嘩

私は妻と結婚してから十年にもなりますが未だ嘗て家で喧嘩をした事はありません、する時には庭へ出ますから。

▲總理大臣

甲「僕は今日總理大臣と話をした、乙「ウム、何んだい、甲「彼處へ往けつて。

▲人間の價値

伜「人は誰でも直段が定まつて居るつてのは眞實ですか、父「其樣な事もあろまい、併しお前の價値が極つたんなら取引して仕舞ひなよ。

▲骨　折

「人は誰でも骨を折らなくつちや、何事も出來ませんね」と粕田夫人が夫に云つた、「左樣さ、私はお前を貰ふにさへ骨を折たんぢやないか。

寓書

黄金と結婚せる女の内心解剖

元祿姉さん

ホヽヽ御免遊ばせと華美な訪ひの聲、若竹の葉影露に濡れて、未だ臺處の用も濟み果てぬ、日曜日の朝で御座いました。

やあ之は〱御勿體ない、柴田夫人御歩行で恐れ入りますと、良人は例の戲謔交じり、あゝ慥か富貴子さんだなと思へば飛び立つ程嬉しく、片外しの襷其儘、濡れ手拭きつゝ異に、ねえ貴女、這麽がた〱した路次では、馬車の横附も出來ないじやありませんかと、障子細目に開けて、椽側の外、よい御天氣で御座いますと、客間とも書齋とも何ともかとも、兼帶の八疊の間に請じ入るれば、怎うもねえ、御暑ついこと、しゆつと、小氣味よき何やらむ羽織裏の衣摺れ、手早く袖疊みにして、小紋縮緬の二枚重ね、失禮ですけれどと友は微笑みながら口輕う云ひ出した。

飛むだもう、其後は御無沙汰ばかり致しまして、皆樣には御變りも御座いませぬか、お實家の阿兄樣脚氣とやらで居らつしやる相で御座いますが、此の夏氣に向つては如何かと御案じ申して居りますと、お茶の香淡う、差し出しながら、云へば、ハッ有り難うと友は沈むだ聲、御蔭樣で相變りませず……實兄は怎う致しましたか、其後皆無 私も實家へは參りませんのでね、嫁つた先は餘り實家と身分が掛け違つて居ります處から、病氣だと申したからつて、加減が惡いからつて、然う〱思ふ樣にも出向かれませんのよ、何、宜いの

さね、構ふものですか、夫れが却つて皆の本望なんだらふから、と投げ出した樣に浮かぬ口吻、上目使ひの誇らしげに吾れと吾れをば輕蔑む樣に、僕は餘つ程幸福者ですよ、彼樣處へ嫁きまして。

私は何とも得答へられませんでした。

富貴子樣に限つては、其麼、黃金と結婚遊ばす樣な方じやないと思ふけれど、人には色々云はれぬ餘儀ない事情のあるもの、死むだ氣で死むだ氣でとは、毎時の御口癖、萬一や切ない悲しい義理から心にも無い今の境遇を心に泣いて居らつしやるのではあるまいか、三年前の富貴子樣で居らしたら、必定然うある可き筈、

私は正直に有り樣を白狀すれば、一層其れならば嬉しいがと思つたので御座いました。

昨年ね、と友は徐ろに口を切つた。

學校を卒へましてから、父も母も御嫁きお嫁きつて頻りと申ますし、私迚も始めつから同窓の方々の思つてらつしやる程、御金持の實業家でなくつちや等と、其麼望みも無かつたもんですから、まあ、相當な處さへあればと申してた位でしたのよ。

△錦繡に對して如何ぞ青春の女が
血を燃さゞる

けれど、人間で御座いますもの、女で御座いますもの、人並な榮耀もして見たう御座いますわ、人並な榮華もして見たう御座いますわ、夫れや未だ其の問題の頭に降り懸からぬ中こそ、學士も惡くはない、高等官も宜いと思はぬではありませんでしたけれど、さあ、愈々嫁らねばならぬとなると、月給の二十や三十の處も否や、年俸の五百や六百じや、同級の方々の手前お恥しい樣に、然うかと云つて少しは樂に人の交際も出來樣かと思ふ處は、阿方、もう少禿の老爺さんで、小供の二人も三人もあらふと云ふ、後妻に相場が定まつてるから、可愛相じやありませんか、私が只今の處へ行きます時に、丁度外にも熱心に仰つしやつて下すつた方がありましたのよ、一人は、私立大學校出の可なり見込があらふと云ふ保險會社の會社員、一人は文學士でね、種々な文學雜誌や等に何か書いては出す、云

はゝ小說家なんで、後來有望の靑年文士と云ふ觸知込みでした。

見込がある無いと申した處で、高が會社員、文學士と云や、一寸乙にも聞こえませうけれど、借金をしない、貧乏をしない文士は無いと申す位ですから、何が何でもと父から始め、不承知を唱へますしね、處へ以て來て、私の學校は私立ですから、富豪の篤志家の寄附を仰いで居ると云ふ樣な具合なんでせう、ですから、時折其家族の方の御見えになる時の、先生方から始め、生徒の奔走つたら全く無いんですよ、丸で何の事はない、私共が、其の方々に學資でも戴いて勉强してる樣に、先生方も餘まりなと時には口惜しい思ひの致さぬでも御座いませぬけれど、其の定紋附きの車に肥馬の逞しき、洋裝の裾美しう燦として輝く指輪、而して日本一の女學校の校長樣ともあらふ方が、神樣の樣に其の方々を尊敬して居らつしやる、其れや此れや、目前に見たり聞いたりして、什麽して若い血潮の燃えずに居る事が出來ませう、誰だつて、あゝ、金は有り難い者だ、人の妻となる程なら、怎うせお嫁に參ります位ならば、一生は彼樣に過して見たい、多くの人に彼樣に敬はれて見たいと云ふ心は起き樣じやありませぬか。

△金と結婚するのが俺の理想

夫れから、家政の實地硏究とか申しまして、ちよい〲貴族や富豪の家庭を拜見に參る事がありますのよ、正直の處を申せば、各自の御自慢であらふけれど、何しろ金に飽かした仕事ですもの、專門の方から御覽になつたら、如何か存じませぬけれど、私等から申せばもう〲何とも云はれない程、綺麗づくめ、學校でお習ひした通り、遺憾なく完備してるとしか見えません、此れでこそ、三年間の勉强が樂に應用も出來やう、思ふ樣家政上の手腕も振へ樣、高が十圓や十五圓の借家じや、煮炊きの改良も、衞生的の料理もあつた者じやないと云つた樣な意氣込、其麽事やら何やらで、もう、學士も高等官も有り難くなくなつて、唯金を貯め樣、お金持になり度い!! 夫れが私の理想でもあり目的で

もあつたので御座いますだから、少し位の學識や人格等を問うて居る暇がないんです、私は世話なしにお金持になれると云ふ愉快さには替へられませんから、父母が勸めたと申すよりも、私が私で今の人を良人とするのが嬉しかつたのです、全くの處、お金と結婚するのが同窓の人等の手前、非常な成功の樣に思はれたので御座います。

△嫁してから一倍金の功德を悟る

良人は、金を貯めるより外何一つ能のない人間で御座いますから、彼麽人に金が無かつたらまあ、什麽でせう、其れこそ寄り向いても呉れ人がありませんわ、正直に私だつて、御嫁に等、参りは致しませんわ、けれどお黄金は何處まで有難い物なんでせうね、實際僕は嫁いてからは、餘計に金の功德を悟りましたよ、先日も何處やらの牧師が參りまして、寄附金をと申しましたからね、有る手前ですもの、若干か遣つたとお思ひ遊ばせな、而したら、可笑しいじやありませんか、夫人！貴女の信向は、貴女を助けます、神は必ず阿方を救ひますつて、ホヽヽ、神樣迄がお金が欲しいと見えますね、だからやれ、學者だ、美術家だ、教育者だ政事家だ、



▲金泥織丸帯

白と紫紺の大市松に、鳳凰と蝶とを赤と草色とにて織り出し、地合には金糸を以て緯地に織り込みたるもの故光線により金色美くしく光を放ち、夜會晩餐會などの際に尤も適當なるべし三越吳服店（代四十三圓）

等と大きな顔を致して居りましても、其れは良人の人等に向つてはペコ／＼者ですよ、全然御無理御尤もで通さして居るんですもの、來る人も訪ねて、行く先も夫人／＼つて敬ひます、夫れは私だつて、私を尊ぶのじやない、之は金に頭を下げるのだと知つては居りますけれど、銀座街頭懸聲勇ましう、馬車を驅る時の、愉快さつたら、眞實くありませんよ。

△人の位地と勢力を作る第一の物

けれど、設令ね、辻俥を走らしても、乘る事の出來ない、てく／＼歩行きの者からは、矢つ張りヘン、威張りやがつてと云はれるでせう、馬車に乘る人が。俥くて、俥に乘る人が、馬鹿だ俥を引く、人が賤しくて、引かせる人が貴いと、云ふ樣な、人間に少しも區別はないのですけれど、金が人の位置を造り勢力を作るから仕方がないじやありませんか。

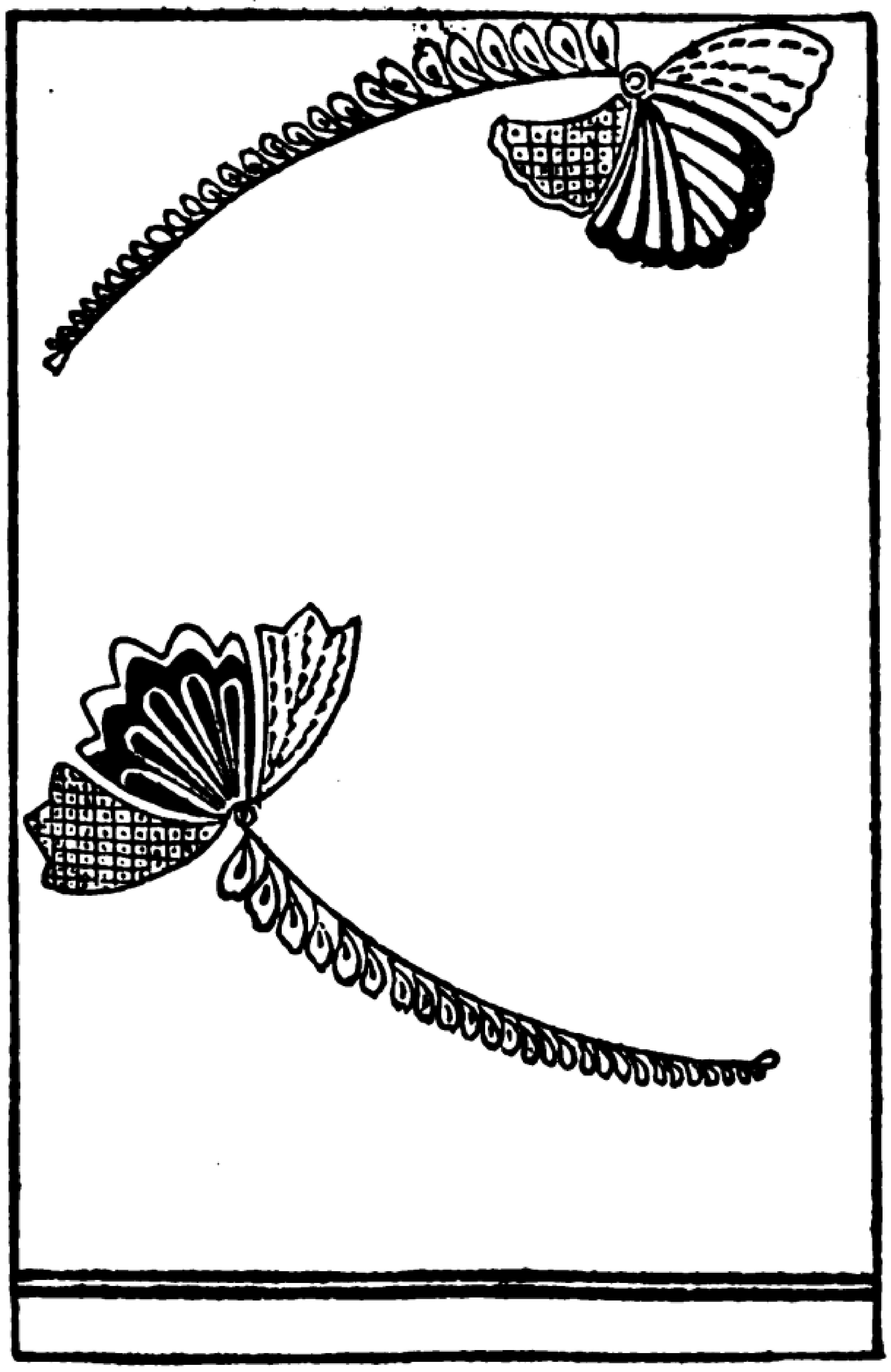
△富で買へる幸福が現世の最大幸福

成程良人は實業家とは云ひ條、商法の一枚も覗いた事の無い人ですから、阿方々の御目から御覽遊ばしたら、幾ら黃金が澤山にあつたからつて、能くも／＼彼樣者をと思召すで御座いませう、併し、考えて見れば、兒戯に等しい人世に、人格が高いからつて、低いからつて、智識があるとか無いとか申たからつて、どれ丈の差違がありませう、限りの無いスペースとタイムとの間に立つて、科學がどれ丈說明致しましたでせうか、哲學がどれ丈解釋致しましたでせうか、だから、宇宙の眞理を不可解等と、煩悶して、失望するのも、馬鹿らしいけれど、識らうとして、五十年、精々と勉强に身を急つて、苦しい思ひをして、加之に貧乏して、一人善がつて居た處が一向、始まらない話ではありませぬか、成程精神は無窮に死せぬ者だの、棺を掩うて、始めて人の眞價を知るだのつて、一應は道理の樣にも聞こえますが、人間の狡猾根性が這麼事を本氣で眞受にしてる者がありませうか、何ね、私に云はせれや、死むだ後の名譽等は、靑山邊りに宏壯な墓所を建つて貰ふより有難くはありませんよ眞實、夫れは私にした處、彼樣良人を夫として、事へなければならぬかと思

へば口惜しいには違ひ御座いませんけれど、所詮、富で買へる丈の幸福が最大の幸福と思ひ、その手段と思へば何でもない話。

△黄金と結婚するは學問、名譽、人物に結婚するのと五十歩百歩の相違のみ

生存競爭とやらの烈しさに、思ふ樣にお金が取れず、幾ら稼いでも貧乏神に追ひつかるゝ悔し紛れから、生強つか人に煽動られて、社會主義だ、平民主義だ等と唱道出して、自分で自分を持て扱ふ人等に比ぶれば、私の方が餘つ程宜いと思ふので御座います、成程 私は金の處へ參りました、黄金と結婚致しました、だから、皆樣は、私の事を幸福だ羨ましい〱いつて、云つて呉れますけれど、陰では甚麼事を仰つしやつて居らつしやるか能う存じて居ります、能う存じては居りますけれど、私がお金持の處へ嫁つて夫で、お金の處へ行つたと申すんならば、學者の處へ嫁けば、學問の處へ行つたのにはなるまいか、見込があるつて嫁くのは、矢つ張り其人其の者より、見込があると云ふ——所詮出世すると云ふ——畢竟後には樂が出來ると云ふ——其れが目的ではありますまいか、して見れば、名譽の處へ



▲博多片側帶

花衛砧地に桐蝶模樣、蝶に白臙脂、鴇、白茶、淺葱などにて、面白く色取りたり、十七八歳の令嬢向として上品なるもの。三越賣出（代九圓五十錢）

行く女もあれば、位置に惚れる人もありませう、容貌に打ち込む人もあれば、力量を喜ぶ人もあらふではありませぬか、何もお金持の處へ行くばかりが卑しくて、其外の處へ參るのが、善いと云ふ、其麼理屈は決して無い筈だと存じます、だから、人様が何と仰つしやつても、……やれ、金の爲に女の大切な情操を賣る、丸で、女郎だ、藝者だ、醜業婦だ、夫妻の神聖を無視してる、結婚の大儀を玩弄にしてる、等と、云ひました處が、果して、天下幾百の夫婦、眞正の愛情からなり立つて居るのが幾らありませうか、所謂五十歩を以て百歩を笑ふ類で、優る者羨ましさからの惡口だと存じて、私、自分ながら、不見識とも、恥辱とも何とも思つては居ないので御座います。

△千萬文明の利器も貧者には一の福音を與へず

御覽なさいまし、十九世紀から懸ての物質的文明！科學の發達、醫術の進歩、けれど、お金がなくて、其恩澤に浴する事は一つも出來ないぢやありませんか、學校も病院も、美術も音樂も、電話も電車も、衛生も健康も、貧者には何の福音も與へないじやありませんか、夫れは、美味に飽きて胃病に罹れ、炭火の害に腦を犯される富豪者も世には、無いでも御座いませぬが、月影の霜に冱ゆる大路小路、夕暮淋しう時雨降る時、饑ゑと凍えに泣いてる者は、如何程あると思召す、物が足つてこそ禮義も知れ、其麼人に、道德だの理義だのと說いた處で何になります、慈善家だの特志者だのつて世の中の美しい名譽は、云はゞ輕薄者が、金に負はせた、不公平な名に過ぎないんですからね、世の中に何が苦しいつて、死ぬ程辛い事は無い相ですのに、年々の自殺者の中に貧の爲にする人が最も多いと申す位でせう、だから只今の時世で、私は殆ど、金で買へぬ人間の滿足は人世には一つもあるまいと斯う考へるので御座います。

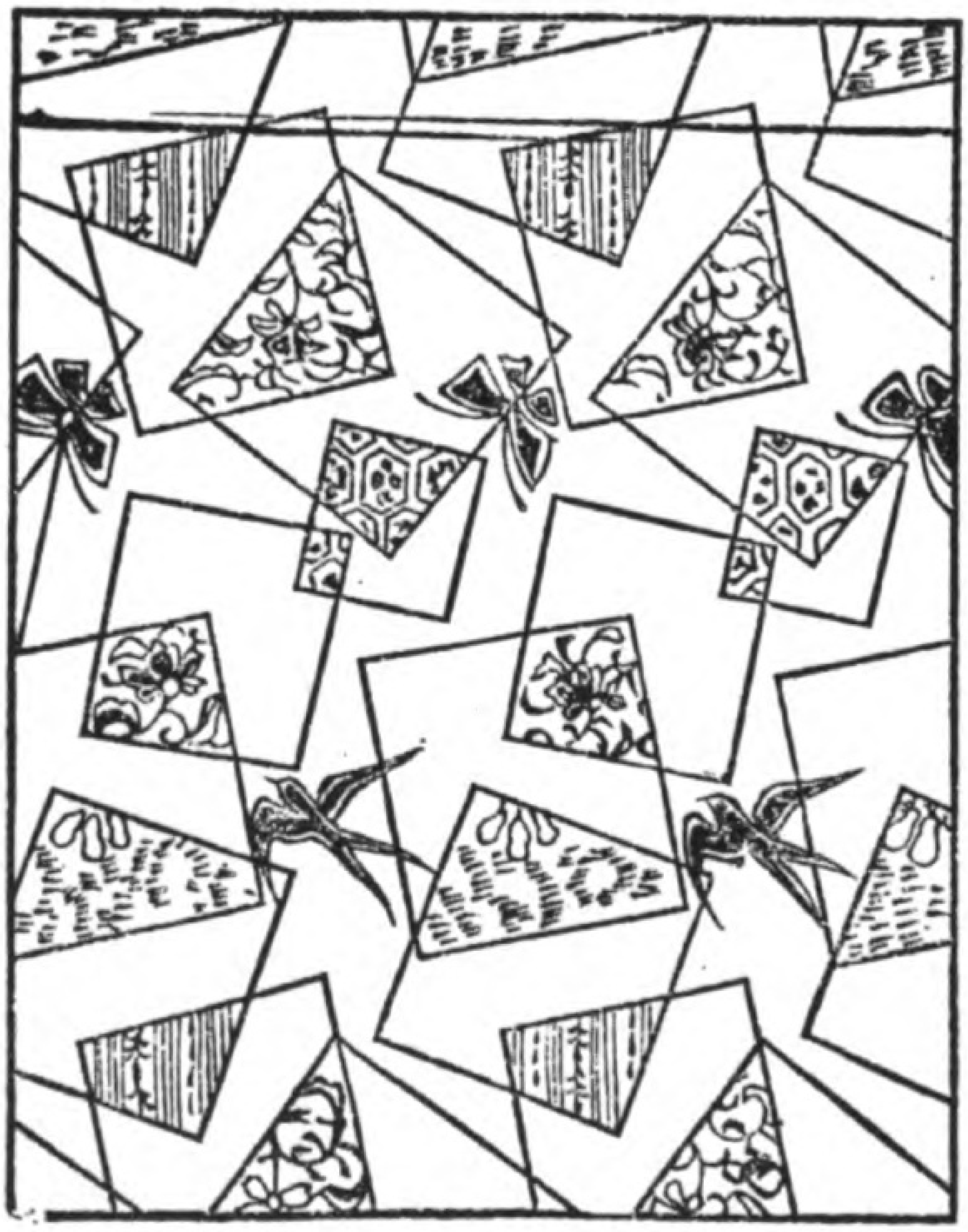
△富貴身を去れば元の裸になる分の事

併し、何と申した處、富等と云ふ者は、浮雲の樣な者で、何日、何時怎うなるか知れやしません、誠に果

敢ないくだらない、之を以て永久の安心を追求するなんて事は、到底出來ない者だとは存じて居ります、けれど、身に附屬いた自分の選なら、生涯樂に威張つて暮せると云ふ譯、罷り間違つて、失敗を取つた處が、怎うせ、裸で生れた身體ですもの、元の裸體になる分の事些つとも仔細ありませんわ、人間は、進化論者の一派の人の云ふ樣に、同類を繁殖すべき義務を果たせば、其れで善いと云ふ、簡單な意味の動物でありましたら、私位幸福な者は無いと思ひます、全く幸福者でせう儂はね、然うじやありませんか、ホヽ、隨分、饒舌り疲びれてよ、恐れ入りますが御茶をと、友は、無造作に晴れやかに、笑つて、委頓した樣に口を噤むで仕舞つた、

お一つ如何でと、柏餅の一つを取つて差し出せば、葉ながら手を添へて、一と口、眞箇にお甘しう御座いますよ。

怎うです、御大家のお柏と、私共のと、些つとは味が違つて居りますか、一錢買つた燒芋と十錢買つたのと、味は少しも變りはありませんよ、靴で歩行くより、草鞋の方が、歩行き心地が可いと申しますよ、と皮肉な一言、友はさすがに挨拶も出來兼ねて否や御幸福で居らつしやいます、改めて御喜び申し上げませう、と云へば、何をと得意の眉、夫れじや、何れと友は立ちかゝる。



▲厚板片側帯

柿色地に切箔模様、有職風の唐草を臙脂、鼠、薄オリーブ、平金などにて配合せしもの、燕に蝶を飛ばせたるも面白き趣向三越賣出にて二十歳前後の奥様向なり。(價十六圓五十錢)

新緑滴らんとして、眞紅の丹花一輪、結ひ渡たせし建仁寺垣の彼方、蝶や舞ふ花や飛ぶ、眞晝の空を、何やらむ鳥の一聲、淸う涼しう。

鳥も鳴いて居りますよ、牡丹も美しいじやありませむか……。

友の後姿見送つて、私は成程と感じたので御座います、

三年間學校教育の威大なる勢力に驚いたと同時に、彼れ程の不安と苦悶とを味はつて居りながら、猶且、富の虚榮を衒ふ程人間は僞はらねばならぬ者か、とつくぐ\私は感心致しました、悟つて仕舞へば、生も死もなけれど、覺らずとも五十年、富めりとて、貧しきとて、何かあらむやだ、智者にかゝる事が出來なくとも、貧者は富者に比して、壽命が、短じかいとも限りますまい、學校へ這入る事が出來なくとも、善良なる國民の一員としては、强ち、學者で無ければならぬと云ふ事もあるまいじや有りませんか、生死の境を超脱しない迄も、物質的の富の力を借らなくとも、慰安を求むる方法は他に幾らもある、暖に慣るれば暖を有り難いとも思はず、飽に慣るれば飽を嬉しいとも思はぬ、さればこそ、究竟は理即に近く大慾は無慾に似たりとやら申しまして、此處に至れば、富も貧も、畢竟するに、人間の慾から出た勝手な我儘の名に過ぎぬと私は考へるので御座います。

活断

人事活断　**運命占ひ所**

天啓堂

▲人事判斷は婦人に新福音を齎す
▲人事判斷は婦人に新生命を授く
▲人事判斷は婦人に新光明を與ふ

(問)　私は當年廿二歳です、二歳の時生母を亡ひ祖母の手一つで育てられ十六歳で父のそばへ歸り、教育を受けて今は家に居りますが、故あつて之までの緣談は皆斷つて居たのです處が今も二ヶ所から申込があります一方は中學教員人物に申分なけれど未だ下級とのこと、今一つは先妻の子一人ある財産家です、私の父は中學校長ですが性來金に縁が遠いのに祖母の二男が放蕩家で、之まで私の養育料じやと申して毎々父より捲り取つた高は已に數百圓、父も窮して居りますを思ふに付けて氣の毒でたまりません、私はどうか父を助けたいと思つて三度高師の試験を受けましたが失敗に終りましたから此上は小學教師か家庭教師をして今四五年單身生活を送らふかと思ひますが如何でせう、若しそれが惡ければ右の緣談の内何れへ嫁付てよろしいでせうか(秋野花子)

(答)　貴女の父思ひは親子の至情、併し教育家の清貧は寧ろ名譽です貴女も廿二歳と云へば最早や女盛り一生の大事なる婚期を犧牲としてまでも助力は如何あらん、父の身としてその志は嬉しいが容易に御同意なさるまい、此道は思ひ止まるゝを吉と判じます、次に財産家へ嫁したからとて金は自由になるでなし況して物持は持たないものよりも一層汚く、それもその蓄金ありてこそその地位を有ちて居るからです、中々貧乏人の想像出來ないまでに大切にいたすのです、殊に繼子まである處なれば有望でありますまい、中學教師と云へば如何に薄給でも我が現社會では中等の生活が出來、且つ將來見込のある人物なれば後日の樂みもあるとゆゑ、此方を吉と斷じます。

(問)　先達から初終お友達の女名前で手紙が參りますから、ツイ開封いたしますと皆男の方なのでその中二人は中學の五年で、其外は中學以上の立派な學生さんです、御返事をしないのは失禮と思ひますがそのまゝにして居ります、兩親は老て居ますし兄弟はありませんし、今年十六歳でやう／＼高等女學校の三年でして、世の中の事には通じません、男生に返事を上るのはどうしたらいゝかしらん、皆親切な御手紙ですがそれは實に愛して下さるのでせうか虛言でせうか(山出女學生)

(答)　左樣です惚れたの愛してるなど云ふは全く虛言です、みな公然と媒介を以て結婚を申込資格のない薄志弱行の寄生共が、貴女を初心な少女と見てあはよくば清き乙女の操を弄びその上幾分金でも捲上やうとかゝつてるので恐るべき惡漢です、勉强盛りの青年が女に憧れて付文するやうなものに碌な奴があつた例しはありません、貴女が乙女心に當惑されて居るは尤もですがそんな不潔な手紙は放棄して置いて宜しい、

見角女と云ふものは自惚れやすく又氣の弱いものですから、他人からあなたは美人だとか惚れ〳〵したとか戀しくて忘れられないとか云はれると欺すのだと思ひながらもツイそれが嬉しいやうな心がする、又從しく云ふて吳れると何だか頼母しい方の樣に慕はしくなりツイ力と頼むやうになるので、知らず〳〵何時となく深みへはまり身を誤るのです、貴女は大事の一人娘殊に親御は老年でもあり、一朝身を誤らば大の不孝ものとなりますから能く〳〵注意なされよ。

(問)　私は三年前に只今の處へ緣付きましたが良人は短氣もので何時も外から歸て來るときは私が留守にみだらなことをしはせぬかと打ちたゝきますので生疵の絕へた事はありません、そして良人は醫者くるひをして月の中ば外に泊るのでであります、姦より私にそんな覺えはありませんから後ではいたはりて吳れますが打たれる時はつらふあります、又私に子供が出來ないと罰つて大へん悔みます、私は嫁付かないうちは極々丈夫でありましたが昨年の春からぶら〳〵病に罹つて快復いたしません、私は此處が女のたしなみと思ひ何とも云はずにこらへて居りますが私さへ辛抱すれば永く此家に居られませうか、私には一生子がないのでせうか、又病氣は直らないものでせうか(香川縣一女)

(答)　貴女の境遇には誰が同情の涙を惜しむものがありませう、能く辛抱して居なさる、良人の毆打は己が不品行から起る猜疑心であるのです、貴女を憎みての折檻でなく可愛からのことです、故に良人の放蕩が止めば又やみます、短氣も年を取れば直りませう、貴女の病氣は心配から起つたのですから心配がなくなられば全快しません、又子供の出來ないのは心の結ぼれと體の健康でないところからです、何も運命とあきらめて一切心配しないやうに氣を遣はないやうになさるがよし、良人も貴女も六白金の生れですから合性は決して惡くないのですから緣は切れません、安心して辛抱なさい、で竝に一寸な訓へませう、懇意な出入醫者を頼み、子のないのはあまり心配させて體を惡うしてるからだ湯治させるやうにと醫者から良人へ勸めて貰ふのです、そこで道後の溫泉へでも(成るたけ遠方がよろしい)、良人に連れて貰つて一ヶ月許りも遊で來るのです、從て自然醫者買も遠のき貴女との中も溫たまるのです、よく熟考なされて折を見てお運びなさるがよし。

(問)　私事本年廿三歲以前從兄弟より緣談を申込まれ親も進まず私も氣に入らずで斷りましたが、他によき人なきか今だに申して來ます、それで親も此頃は義理に迫り行けと申しますが私は一生獨身で居るとも行きたくありません如何でせうか(梅子)

(答)　親が娘の將來を案じて進められる良緣ならば縱令厭心に氣が進まずとも親達の命に從ふが當前でありますが、金や義理の爲めに止むを得ず犧牲となる場合ならば破談されてよし、殊に從兄とは緣先なれば一旦結婚した上の不緣で中違ひになるより最初から不和となつた方が後ち〳〵の爲によし、斷然斷わつて差支へなし、又一時奉公する考も惡しくありませんが、もう其年でもないから相當の處へ緣付かれるが上策。

(問)　私は今年十八です一ッ上の男から文で結婚を申込まれました其男まだ一度も顏見た事はありません、どうでせう(無學女)

(答)　アナタは誠に女らしい優しい御心掛である斯る者へで婿撰なされたら屹度將來は幸福ですが、只その手段が違つて居るのが宜しくないのです、第一先方の身分を調べ惡しき遺傳病などのない純正な血統と云ふとも分つた上での文通や交際でなければ甚危險であるから呉れ〳〵

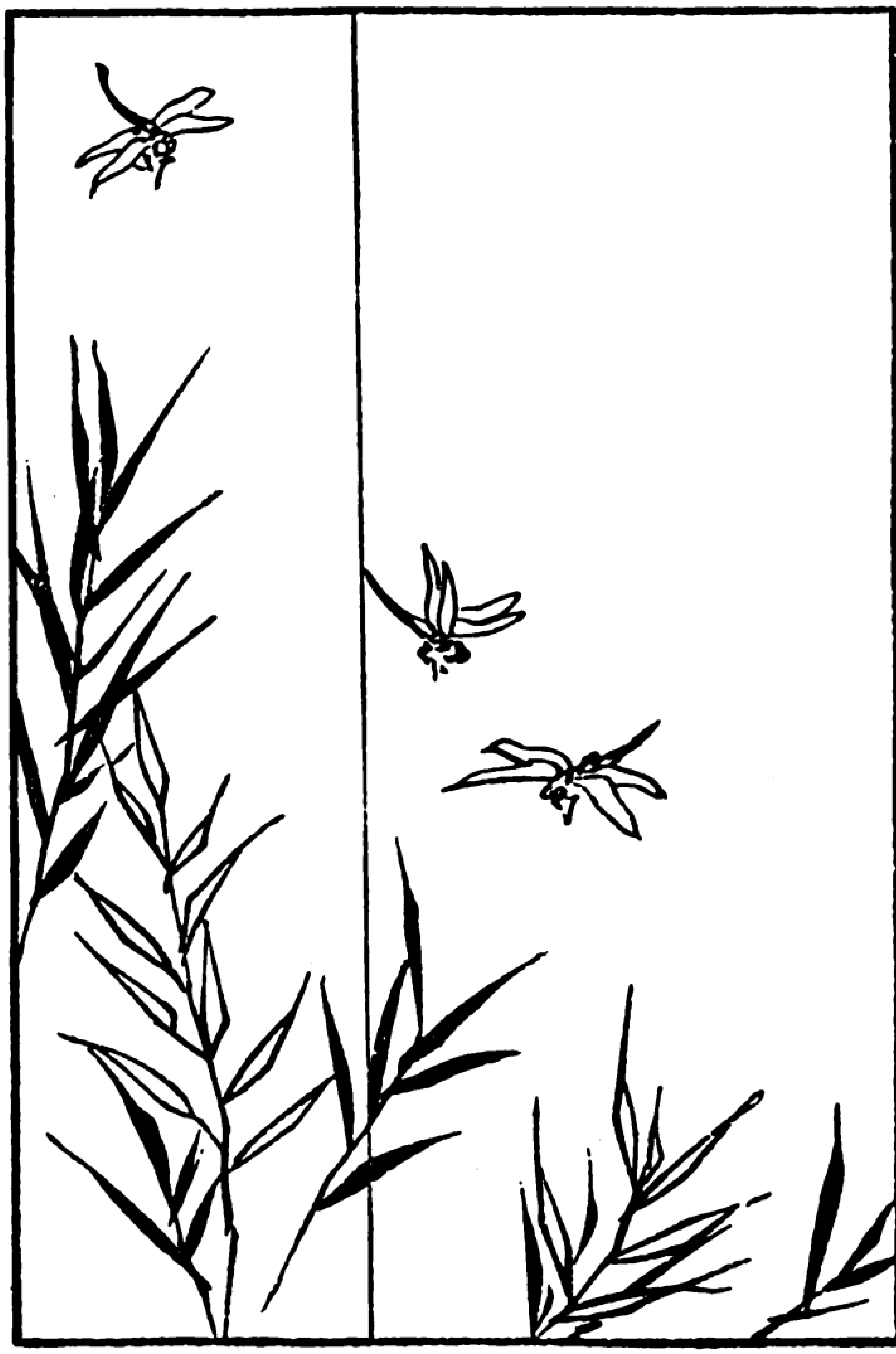
も御注意申して措きます。

（問）妾は廿一歳の時に縁付ましたが不幸にして縁を全ふせずして歸りました、もう嫁がずに何か致たさうと存じますがどういふ事を致しましたら宜しいでせう。（廿三歳女）

（答）女子が獨立しやつて行くには生半可の手の内では出來ません、先づ東京市本郷臺町坂上の倣利堂より出版した新撰女子就業案内でも見て貴女の性質に叶つた職業で修業なされた上のことになさい。

（問）私は本年二十三、二三年前一度嫁入した者ですが良人に末の見込がなくてやめました、之よりは一生良人を持たずに暮さうと思ひますが一人で暮せますか女の位な一と通りは出來ます昔は樂な家に生れた者です（不幸女）

（答）女じやとて獨立して往かれない筈はありません、現に成功して



（鼠地に若菫を紫鼠、白にて上げたるもの、蜻蛉を白上げになし、涼しげなる新模様なり）

名譽な惨されて居る女流もあるから決心次第です、良人に末の見込がないとてサッサと離婚されたと云ふやうな男勝りの貴女の事ですから此上は「妾が心は石にあらず轉ずべからず、席にあらず捲くべからず」てふ堅固であるならば獨接されても終を完ふせられませう、只一點の疑問は貴女が女の仕事は何でも出來る樂な家に生れたと云ふ處から餘りお安く社會を見くびつて居らしやりはせぬかと思ふのです此處よく〳〵思案を極めてなされたらよし。

（問）私は廿六歳女折々は縁談の申込もありますが未だ良縁が有ませんいつ頃縁付ませうか又どんな所が宜しいでせう。（本郷光子）

（答）廿六歳と云へば早婚ではありません、大抵の處ならば辛抱して結婚されてよし、さうなれば明日にも目出度い話が舞込で來りませう、貴女は美術家、文學者、銀行員等に嫁せられたら宜しい、商家ならば金物商、呉服店、糸屋などが將來の幸福です。

(問)　私は今年二十歳十七歳の時女學校を卒業し今は或る小學校に奉職して高等師範に入學の目的で勉強してゐますが何分職を執りながらのこと思ふ通りになりません今年一月の試驗に不合格の名譽を得まして毎日〳〵憤慨のみにて暮してゐます此際學校は止めて來年の準備を致したひと思ひますがどうでせう(憤慨女)

(答)　貴女の發憤には成功の前途もないではありませんが、何分競爭試驗であるから必ず貴女の頭に勝利の冠が戴けるとは今日の處確實と云ふわけに參りません、故に有體に申せば意氣は頗る壯とすべきでありますが先づ現職のまゝ徐に準備されるが萬全である。

(問)　私は當年廿二未だ何人からも結婚を申込まれた事が有ません最も家も貧しく顔容も不美人ですが不具では有ません今田舍の病院に產婆兼看護婦をして居りますがいつまで獨身で居られるものではありません(私の理想は身分の高下を問はず逸れな人物を夫として眞の日本魂を產んで立派に發育して見たいのです)と言ふて今の處自分で之ならと思ふ人も見付かりません、私の友人は皆嫁しましたのに私のみ一人のこされまして實に心細くなりました、其上近頃は時々種々な事をして愚な私の心を迷はそうとする人が出來て實に困つて居ります、若しこのまゝでいつまでも適當の夫を得られないものなれば斷然心を決して生涯淸き處女のまゝ獨身主義で世を送らうと思ひます學問をするなら今から始めないとおそくなりますので實に日々もだえに〳〵獨り苦しんで居ります、若し私の樣なものでももろうて下さる人が有るとすれば私は今から處世上の事を學んで置たいと思ひます私は如何なる方針を取れば宜しう御座いましょう又若し嫁ぐものとすれば如何なる人が適當でしよう(深山櫻)

(答)　結婚の申込の少ないは不美人にもあらず、看護婦と云ふ多少職業柄にもよるとだらふが第一は貴女の理想とやらが鼻先にぶら下つて居るからです「一拱へあれど柳は柳かな」で眞心から「私の樣なものでも貰つて下さる人が有らば」と優しい氣でおありなさるなら今日にも縁談の申込がありませう、又あなたが煩悶の御樣子では到底淸き獨立の最後は覺束ないから、世帶を持つ稽古をして結婚の準備をなさるが肝要であります、此の心掛けが無かつたのがつまり結びの神のお目に止まらなかつた一つの原因でしたら一で縁はありますが、どんな人といふ事はこゝに申上られません。

(問)　私は本年二十歳で都下の名ある學校に入つて居ります父は小さき時うせまして兄は實業家、家庭は武士風で至て嚴格です、家の知人で三十三歲で、貿易商で、品行方正な人物、收入等には申分のない方が私を望んでいられる樣子、然るにこゝに二十七歲の大學生で度々私に誠心こめた戀の手紙を下さいます、その爲め私はたへずこの事を家の者どもにうちあけて話す事も出來ず煩悶して居りますがどうしたものでせう。(東京やよい子)

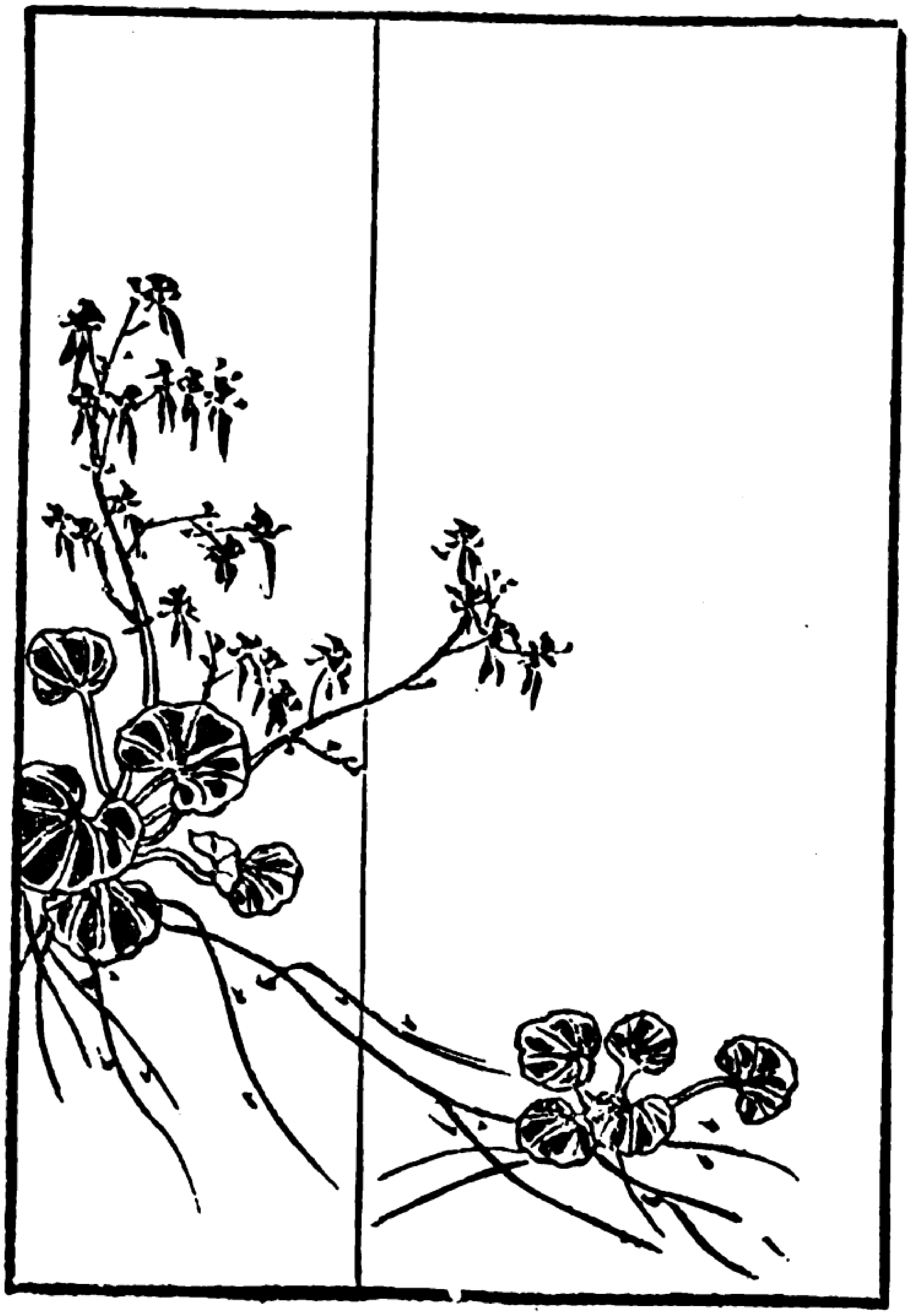
(答)　貴女の眞性は土性、二十七歲の大學生とは四綠木性であるから木剋土となるので合性は甚だよくない、論より證據で矢鱈に熱情などを送つて貴女の心を攪亂煩悶させて居る處を見ても爲にならない方だと云ふ事が解る、それに學生は未成品よし學士の免狀を握つた處で成功と云ふものでなく運命はそれからの働き如何にあるのです、然るに一方は合性から云つても先きは火性であるから火生土と來るので貴女の爲には此上ない良い保護者で其上家柄も同じ實業家で已に相當の基礎も出來て居る事だから重れ〳〵幸福なはなし熟案するまでもありますまい此處貴女が一生の幸か不幸かの岐路であるから躊躇へてはいけません

(問) 私は今年廿八歳夫は四十九歳継子四人實子二人姑は夫の爲めには継母にて私の心苦しさ日々に愈增し 筆紙にては申尽されませんが私の辛抱のたらぬのでしようかそれとも又居らぬがよいのでしようか思案にあまつて御判斷を。

（大阪心痛女房）

(答) 澤山の継子はある継母はある、其人は比較的老年と云ふ貴女のお心迷ひはお察し申すが、元この結婚は、天眞の合性から見ると貴女が進んで出來たのでなくある事情のもとに餘儀なく夫婦になられたのでありませう是れも初めより覺悟の上の成行きですから二人の愛兒まであるとゆゑ何事し運命とあきらめて御辛抱なさるがよし。

(問) 私は十四の時某華族の御家に小間使に上り今年で足かけ五年つとめて居ますが只今まで只夢中でつとめて居ましたが 近頃に成つて裁縫稽古に参りたくて仕方が御座いません 兩親に相談致しますけれども承知しません。（麹町の一小女）



（[illegible]鼠地にゆきの下を素鼠、白などにて淡白に染め上げたる、淺き江戸褄模様）

(答) 十四の時から永々の小間使奉公爲に女子のたしなみとしてなくて叶はぬお針の稽古が出來なかつたとはお氣の毒です、それで二三年裁縫修業をせうとの御志望は結婚の準備として最ものとですが、親御のそれさへ不承知で矢張奉公して居るやうとの命令は家庭の都合上よく／＼止むを得ない事情と察しますがそこを圓滑に相談されて希望を遂げられるがよし

(問) 妾は幼少より某家の養女と成りました然るに昨年一度縁付きましたが不幸にして破談と成り只今は家へ歸つて居り升、此頃又方々より縁談を申込まれますけれども 一向氣が進みませんで 裁縫學校へ入學したいのですが兩親は今縁付くのが當然と申ます、養父母の言葉に迷ふのも心苦しくさりとて何か手段でも有つたなら行末の安全と考へられますが どう

したら好いものでしよか（福岡十九歳女）

（答）　十九歳と云へは女子の盛りです、養父母の再嫁を進めなされるも最もですが、さて破鏡となつて日も淺い今日、此頃貴女が氣の進まないのも無理でありません、具に初婚で苦しき經驗されたとだから再嫁の手齒とゆゑ、あはてずとも緩る〳〵良緣を求められてよし、併し女子の手齒もあるに越したとはなけれどそれを力とする程までの條柴は並大抵の事ではないのですから矢張り女子は似合はしき男子に配するが安全の道です、貴女は幼少から生みの親に優るところの大恩ある養父母が更に行末を思はれての勸めであると見れば有難くお受けなされるが將來の幸福であります。

（問）　私は本年二十歳です、十一二の時より病を得、種々醫療も施したけれども一向に効なく、誠につまりません、近頃二三ヶ所より求婚申込がありますけれど病氣の爲皆斷つて居ります、然るにもし病氣はあつてもよいからとの申込があれば行ても宜いでしようか（福岡不幸女）

（答）　幼少から持病があるので結婚時期になつても遠慮して求婚を斷つて居られるとのを實にお氣の毒に存じます、貴女の天稟は五黄土であるから病氣は腰より以下に水氣を貯ふるが災を致すのであります、多くは氣節の變り目に發るので大抵一定の時期があるでせう故に合性の男子と結婚なされたら全快なされるに相違ありません、廿四歳及三十三歳の男子は火性であるから大吉、次は二十一、二十二、三十、三十一歳の男子ならば金性ですから是れ亦吉、胃病とか頭痛持とか寒胃に罹り易いとか多少とも病氣のないものはありませんから、遠慮に及ばず結婚して人生の幸福をお受けなさるべし。

（問）　妾は本年二十二歳で父母もそろつて居ます衣食に事かくこともありませんが不幸にして兄姉等に先だゝれ今はほんのひとりぼつち兩親や親戚等は入夫するか、嫁するか、いづれにもいろ〳〵心配して吳れますが、今に好き緣もありません、兄弟のない故か行末の事を考へると誠に心細うございます、いつになつたら樂しき家庭を組織する事が出來るでしようか妾の今の境遇では他家に嫁すのと我家を相續するのと何れが將來の爲めでしようか（大阪心配女）

（答）　貴女が將來の運命は家に在つて祖先の祀をせねばならぬ大役があります、决して他へ嫁入する身ではないのですから兄弟を失つて心細いからとて氣を迷ひ過して健康を害ふやうになつてはいけません、來る八月九月が良時期でありますから其節緣談あれば取極なされて良し結婚式は後で差支ないとして話をおきめ置かるべし、その以前はよろしからず

（問）　私は當年廿一歳一昨年女學校卒業今は宅にありて家政研究、祖母の實家に廿七歳になる從兄がありて色々世間話の末私に向ふて理想の夫を話せと申しもし自分が理想に叶ふ樣ならば終生あらん限りの愛情をさゝげるといはれましたどんなものでせう（大阪二三四女）

（答）　貴女の婚期は頗る熟して居りますから至極良緣と斷じました、如何にも良人として重みあり又婁として一臨の修養も出來てる方だから直に家庭を組織されて差支なし、暮はいそげです、貴女から理想の良人として將來幾久敷事へたいなら正式の結婚手続して下さいと御返答あつてよし。

(問) 廿歳の女家は商家です兄が御座いますが私に養子を取て別家させると親が申て居ます、私は他家へ嫁づくものとばかり思て居ましたのですがどちらが身のために幸福でせうか(埼玉願ひ女)

(判) 養子を迎へるは一倍の損あり、家には幸ひ歴とした兄上のあることだから嫁入らるゝがよし、さて養子は身分の卑き方よりするが習ひにてその爲め婦女は誇りやすく我儘となつて婦德を害ふが多し世に子女を抱きて捨てられし例し少なからず、一體嫁入は身分高き方へ往くが常として愼み深く辛抱するゆゑ婦德を全ふするが多し、故に心ある婦人ならば養子に對しての心配は大抵でなし此處よく〱御合點せられたら間違ひなし。

▲苦勞女に答ふ‖貴問は實價でよろしい成るだけその眞相をつくされんことを望む、誌上への記載は取捨するから御心配は無用、醫師が患者を診察するにも十年廿年前からの容體を尋ねる、卜者が筮しても本人の人相や血色や擧動を觀て判ずるのである、本番晝吉凶は明瞭でもその方途に至ては千樣萬態であるから其取る途の如何に依て吉も凶となり禍も福と變るものだから、貴問は重複は厭はない委しく述べられたし。

▲蓋女史に答ふ‖十五歳の初婚には殆んど自由結婚であつたがその結果目出度からで五年の後に破鏡となり、その廿五歳の再嫁には甚だしい壓制結婚であつた爲め爾來十年の間三人の子まで擧げたに拘らず冷な家庭に堪へずして獨棲生活と決心されしよし、よく〱の不幸の方と御氣の毒に存じます、無教育の爲に學問で獨立もならず身體頑丈でないから勞働は適せずとて、何か他に相當の職業を敎へよとのこと、且つ孤兒院は女を雇はないかとのお尋ねですが、生みの愛兒を捨てゝ仇し孤兒を育てられるは如何に決心とは云へ容易のことではない、相當の財產もあることなれば、そこは何とか圓滑に兒女を連れて別居されるやうな相談は出來そうなもの落着て居らつしやることをお勸め致したいが、三十過ぎた女が三年以前から熟考した上の決心だからと申されては是れも駄目、止むを得れば茲に一活路あり勇氣は如何でせう、到底並大抵なことで女一人の世渡りは覺束なければ、貴女が傾岡心を去り榮華の望を捨てたと云はれるを幸ひ、剃髮して佛門に歸せられては如何です、亡き母御の菩提を弔はれるもよし又閑時には御希望通り孤兒院の勸財に運動せらるゝも宜もよし、好でお勸めするではありませんが眞に決心が確であるなら俗界に離脫して苦を逃れらるゝより如何計り心安きか知れません。

▲小柳町の一女に答ふ‖一生獨立せんとのお考へで勉强中とのこと御奮發のほどまずは感心、來る明治四十二年に遠方へ旅行なさるよしにて吉凶が氣掛りとのことですが、それは渡米のことでもありませう學校卒業の上のことですから取越苦勞に及ばず、現在は一心不亂に御勉勵なされば未來は吉。

▲正直な僞者に答ふ‖貴女が永年の心遣ひには御同情を表しますが、男子の女道樂は一種の病氣で云はゞ本人は其罪惡と云ふことを知らないのみならず寧ろ誇りとして居るのです、大勳位某侯なども耳人と同列の患者です、此人にして此病あり、元來婦女の貞操を弄ぶと云ふことは羞耻的の行爲であるから常識あるものは隱密にするもので決して稠人廣座で話すやうなことはないはづです、仕方はないから傍から御注意なさる位でおかれるが宜しい如何に氣をもんでもその甲斐はありません、此病氣は自ら悔悛せねば駄目です。

▲日本橋の一女に答ふ＝某男子との交際を長くしてもよいかとのお尋ね、貴女も妙齢で結婚期にも達して居ることだから婿の候補としてならば格別、さなくば濫に交際を繼續しては成婚の妨げとなる恐れあり、若し婿としての交際ならば尚更ら違倒のこともあり第一家柄血統を確め置くの必要がある、順序を間違へてはいけません。

▲氷見サメ子女に答ふ＝「おないどし夫婦は貧乏する」などゝは荒唐無稽の言葉であるから懸念なく結婚せられて吉。

▲堺市の心配女に答ふ＝青春の血もゆるにまかせ道ならぬことをなして行末見込なき悪縁に煩悶して居るとは、教育ある處女の行爲にあらず、併し遠く相離れたるこそ幸ひ此際未練なく絶交さるべし、他日純正無垢をよそほひて眞正の夫を欺くとは實に罪深き所業なり、早く悔悛の氣の付たが何よりの仕合せ、過つて改むるに憚るなかれとは此處のことです。

▲堀河きみ子女に答ふ＝貴女の熱心は固き叔父の心を動かして遊學の目的を達せられたではありませんか、第二の目的も貴女の決意一つで屆きます勉強して成績をお示しなさい、退校して獨習せんとは全く不可「文とやら云ふものが來るのですが私は斯樣のものを披見る必要はありませんから封のまゝ皆もどしてやりました」とこの見識がなければ東京などで女獨りで學問はできない、然るに矛盾なとは「併し末の夫とも兄とも頼まれる男ならば一人欲しいと思つて居ります」とて自分の身にそなはつて居るか否か是非聞きたいとのお尋ねです、何たる氣の弱いことでせう其心が悪癖です。さては貴女も健氣に見えても危險の地に臨んでゐるから十分に注意せなければなりません、今日貴女の保護者は唯一人叔父あるのみで他に將來の夫たるものも極て居ないのだから斷じて男子に關係しては不吉。

▲親父思ひの少女に答ふ＝貴女はまだ年も若いから急がずともよし、兄上の除隊まで家に居て親父上の世話なされよ、之は貴女の運命です、自宅で裁縫の自修されて居るは善き心掛けです、頼少い老父を措いて裁縫學校へ入學したとて何程のこともありません。

▲哀れなる廿歳の女に答ふ＝「雲にかけはし霞に千鳥及ばないとて儘れないものよ賤が伏屋の月見やれ」と謡ふ如く氏なくして玉の輿に乗るが女子の譽である以上はよし身分に高下があらうが家柄の釣合ない位で戀の成就せない限りはありませんが、お氣の毒ですが貴女が失戀に泣いて居らしても先方の坊様は無頓着、都に上りてから二十世紀のハイカラ式や戰勝國の元祿振を見てはじみな地方風は疾くに忘れ果てゝしまつてるのです如何にアコがれてもトテモ同樣することは出來ません、そこで貴女の氣性は如何であるかと云ふに水山蹇の離に當つて居るから進めば川、退けば山と云ふやうな境遇ですから動かれません、今年中は徐にオチツイて居て運命のサレツに任せなさるより外はありません、明年立春後に於てそろ〳〵開運に向ひますから其時再びお尋ねなさるべし、尚念の爲め云つておきますが、京に田舍あり田舍に京ありて山里には又都會に得られない趣味がありますから、人一倍戀を感ぜられた鋭き貴女のことですから只くよ〳〵物案じ塞ぎ込んで居るより田舍の趣味をあまりて身の保養をなさるが肝要でせう。

▲發問者へ注意
今後人事活斷御問合せの方は本人の生年月日を明記して御送ありたし

●愛國婦人噂の聞書

蝶夢

▲貴婦人の服裝

日露戰役以來、公共團體に出入せらるゝ貴婦人方の服裝は、著しく質素と爲つたやうに思はれる。

戰爭起ると同時に、皇太子妃殿下の姉君に當らるゝ本願寺裏方は綿服を纏ふて、地方を遊說せられたことは、一般の知る處ろであろが之は本願寺裏方ばかりでなく、愛國婦人會に出入せらるゝ貴婦人方を見ると、いづれも戰役前に比べて著しく相違した。岩倉公爵夫人を初め、何れも服裝が質素に爲つたやうに、見受けられる。近衞前公爵夫人の如きは、最も適例で、愛國婦人會等へ出席される都度に落合村の邸宅から、いつも侍女一人を伴ふて、汽車に乘つて、飯田町まで出られる。そして、侍女を伴ふて、とぼ〳〵歩かれゆく後姿を見ると、何方が、御本人であるか分らぬ位であります。

▲貴婦人の辨當

貴婦人の服裝はなべて質素に爲りましたが、食物の如きも、また極めてお粗末である。彼の大勅祭の場合などは、近衞前公爵夫人を初め、各貴婦人の用ゐられた辨當は大抵十錢斗りの安辨當で、芋の煮ころがしに、鳥の肉二タ切、それに煮豆といふ粗食でした。辨當を使つて居らるゝ樣樣を見ると、些もやんごとなき令夫人とは思へません。序ながら近年、貴婦人社會に料理法が流行する所爲でもあらうか、各貴婦人は、以前の如く料理人などを置かず、孰れも進んで庖廚に出て庖丁を手にせらるゝのは、喜ばしい現象。岩倉公爵夫人の如きは、令息の具張氏を法學士に、令姬を東伏見宮樣へ、次を四鄕侯爵家へそれ〴〵立派に仕立てられたのは言ふ迄もなく、具張氏の子息まで世話せられて、子女の着物は申す迄もなく、小間使の着物まで意を用ゐらるゝ上に、その多忙の身を以て臺所に出て、庖丁を採られるそうである。

之は一例ですが、その他貴族社會全體に、此の風潮が行き渡つてゐるやうに見受けられます。之は華族の家庭ではありませぬが、日本銀行の有島夫人の如きは、朝は下女より先に起き、令孃を相手に雜巾掛して、臺所は大抵自分の手で始末して居られる。そして野菜物は、商賣人の手より買ふのは不經濟だとて、新宿の先方に田地を求め、一週一二回見廻はりて、自ら野菜物を作つて居らるゝそうです。

▲引ッ込思案の少くなりし事

西洋の婦人に比べると、日本の婦人は引ッ込思案の、陰辨慶であるとは、常に聞く所でありましたが、戰役以來は、此の引ッ込思案が、著しくぶち壞されたやうに思はれます。

つい一二ヶ月前、記者の知れる某地方の婦人が、愛國婦人會支部の用務を帶びて、上京しました、その婦人は、曾て私共が其の地方に居た時は、家柄が舊家である所爲か、寔に舊弊な人物で、多人數集まる席へは、決して顏を出さず、引ッ込み勝の、極めて內氣な人でした。然るに僅に三四年を過ぎると、がらり人柄が變つて、二里と遠方へは出なかつた此の婦人が、僅に一人の從者を伴れて、生き馬の眼を拔く東京へ出て來ました。それと聞いた私は、實に意外に打たれたのであります。近狀を聞くと、此の婦人が、斯く當世向に爲つたのも無理でない。それは戰役の起ると、總裁宮殿下の來遊あり、支部の歡迎會等ありて、此の婦人も、郡長などから勸誘されて、愛國婦人會支部の理事に推されたのであります。支部の理事に推されて見ると、我儘も言へず、郡長の夫人等に伴はれて、遺族の訪問や、戰死者の葬祭に弔文を讀み、何時の間にか引ッ込思案が矯正つたのだと聞きました。

又貴夫人社會で、大山夫人などは令名の高い割合にこれまであまり公共事業に關係されず、毛利母堂や、鍋島夫人に比ぶれば、殆ど交際社會外の人でありましたが、戰役後、ローズベルト孃の歡迎を初め、各種の公共事務に關係せられ、特に牛ケ淵公園の、遺族接待の時の如きは、風雨にお召物をビッショリ爲せて、米國艦への手腕を見せられましたのは好適例です。特に內氣を以て名ある東郷夫人の如きも、岩倉夫人に伴はれて、東北地方を巡廻せられたなどは、非常な御奮發でした。

▲貴族と平民の接近

殊に私共の喜ばしく思ふのは、此の戰役以來、我貴婦人社會が、平民的に爲つたことであります。

衣服、食物の質素は、その事實を證據立てゝ居りますが、大名華族の奧方で氣の輕い姉樣に爲られたのは、今日まで殆んど見ると

の出來ぬ現象。酒井伯夫人の如きは、その適例ですが、牛ケ淵の遺族接待の時なぞ、遺族は、德川四天王の隨一人なる酒井殿の令夫人と知らず、休み臺に腰掛けて言葉も粗末に、姉樣茶を一杯呉れッしやらぬか、と言へば、まだ二十一二歳のうら若き身なるにも拘らず、はい〱と言葉も輕く、氣も輕く、島津公爵夫人や、細川侯爵夫人等と共に、盆に茶を上せて遺族に茶を奬めて居られる。茶を受けた遺族の一人は、ぢろ〱と酒井夫人を眺め、綺麗な姉樣だと、大聲で同伴者に語つてゐたのも滑稽でした。

此の酒井伯爵夫人は、本願寺より酒井家に嫁がれた若夫人ですが、大名華族の令閨としては態度の謙遜的なるに、何人も感服してゐる。そして竹柏會に通ふて、歌の道に心を注がるゝ女秀才だそうです。

▲貴婦人社會の時世粧

右の如く、我が貴婦人社會は、戰後幾多の新現象を現はして來たが、啻に衣服飲食等の上のみならず、愛國婦人會の如き會員組織の會合で、時折開かるゝ評議員會などを見ると、流石に世界一等國の班に入りし日本婦人なりけるよと打ち驚かるゝのであります。

づらりと椅子を駢べて、會議を開かれてある模樣を見ると、先帝國議會を縮小した位の小議會です、岩倉公爵夫人は議長席に就れ、九條公爵夫人が、監事として、會計の任務を執れる大藏大臣です。そこで井伊伯爵夫人、酒井伯爵夫人、德川伯爵夫人、黒木大將夫人、東郷大將夫人、寺内夫人、長岡夫人、福島夫人、鳩山夫人、有島夫人、山脇夫人、島田夫人、仁杉夫人等は、威儀を正して、席に駢んで居らるゝ。……會議が初ると、一號案、二號案として、原案が出るのであるが、日比谷原頭のそれとは違ふて、黄白に依つて意見を曲げる者もなく、各議員何れも所思を有りの儘に述べて、その議案を議せられるのは、寔に心地好い次第です。

殊に鳩山夫人、山脇夫人、有島夫人などは、辯舌家の雄を以て目指されてゐる。島田夫人は、良人が雄辯家であるにも拘らず、東郷夫人等と同じく、沈默議員なるも可笑しく、そこへ行くと奥村百子女史である、まづ田中正造といふ格で時に大聲を出されるは頗る愛嬌である。會計に就て質問が起れば、九條公爵夫人は番外席に出で、流暢に答辯していさゝかの、淀みなく、

遉がに才辯の方です、さて議論が紛出して、止め度なく見へた時などには岩倉會長が素知らぬ顔にて、サッサと議事を進行せらるゝ手腕は實に見上げた技倆で彼の杉田議長等の中々及ぶ所ではない、と私共は常に感服して居ます。

就中、何時も男性的の行動を以て、奇拔な意見を出さるゝのは、濱尾總長夫人である、同夫人は、大日本婦人衛生會の副會長でもあり、會議に熟れて居らるゝ所爲か、なか／＼卓拔な意見を出さるゝ。柳谷夫人も、交際家の名ある丈け、何時も確然した意見を出さるゝやうに思はれます。大阪の廣岡夫人も、時に顔を出さるゝとあり、女豪傑の名ある同夫人の事とて、椅子に就いて居らるゝ樣子が、如何にも貫目がある。淺草左衛門町に、澤山の土地を持つて居らるゝ中山幸子老女史も、てきぱきとして居らるゝ。廣岡、奥村の老夫人は世界中何處へ持出しても矢張り女豪傑として一世に卓拔した人物でせう。又岩倉夫人は中々の交際家で隨分人の依賴にも應じて御世話をなさる方であるが併し唯交際家、唯世話好一遍の婦人ではない、其の中に凜とした處があつて額に一本筋金の這入つた利かぬ氣の御方である。それならばこそ全國五十萬の會員を有する婦人會の會長として容易ならぬ所を務められて居るのである。

新宿御苑の大會

天に微風あり、地に新緑ある五月廿日は我が社交團體の白眉たる愛國婦人會の大會が新宿御苑に開かれたる日なり。此日朝來曇天なりしも、晝頃より日光雲間を洩れ、聊かの微風は紅塵を上ぐるに至らず、斯る大會には絶好の日和なりき。

午前十時の開門を待ち兼れて諸方より來り集るもの宛から春の潮の打ち寄するにも似たり。まづ正門を入れば左右の花壇には、菫、紫子いろ／＼の草花咲き亂れたるは錦の褥とも見へつべし、さて式場は池の彼方に幅三十餘間、長さ六十間の假屋をしつらへ之れに檜葉殘る限なく打覆ひて紅白の幔幕、大小の國旗立て列れたる其の規模の大なるは遉がに日本一の婦人の大會なりと徐ろに感じ入りぬ。

池を隔てゝ彼方には遺族廢兵の休憩所あり、紀念品の渡し所あり、來賓の接待所あり、設備殘る處なく整ひて無慮二萬餘人の參會者をして大なる混雜もなく、不足もなくいと滿足を覺へしめたるは委員諸君の勞多しといふべしされば廣き式場も立錐の餘地なく或は白襟黒紋付の令夫人、裾模樣振袖姿の令孃、紫袴、庇髮の學生風、文金高髷、銀杏返し丸髷、など社會の各階級を代表せる良家の婦人を以て充されたり。

式場は正面を玉座に充て左右に來賓席及び各府縣會員席の設あり午後一時頃ともなれば瀏喨たる君が代の奏樂遠きより傳はり來る間もなく警蹕の聲勇ましく皇后陛下の御輦緩やかに式場前に到着あらせらる、斯くて陛下は閑院宮妃殿下の御先導にて有栖川、東伏見、梨本の各妃殿下を從へさせられ徐かに蓮歩を玉座に運ばせ玉ふ、流石に肅然たる群集も陛下の玉姿を拜し奉らんとて、式場は宛から鼎の沸くがごとく動搖暫時止まざりける、やがて會長岩倉公爵夫人は階段の下に立ち依りて開會の旨を奏せしかば、陛下は一同肅然として敬意を表せる中に玉音朗らかに令旨を御朗讀あらせらる。

本日愛國婦人會の總會に臨み會員を見るを喜ぶ將來益々本會の盛大ならんことを望む

陛下の御左には白色の御衣を召されたる有栖川、東伏見、久邇其他の妃殿下立たせ玉ひ其少し前に本會の總裁閑院宮妃殿下薄桃色の薔薇を彩りたるボンネツトに同じく所々薄桃に飾らせ給ひし白服を召し伏目がちに立ち給ふ、陛下の御左側には香川大夫が恭々しく控へたる少し前に閑院宮殿下黒の軍服を召させ金色燦然たる軍帽片手に屹然と直立し玉ひたる樣は實に我が皇室の威嚴兩つながら備はらせて、四民に臨ませ給ふの一端を恐察し奉るに餘りありき。

總裁宮殿下の奉答文左の如し。

本日愛國婦人會第五回總會を開くに方り
畏くも
陛下の親臨を辱ふし優渥なる令旨を賜ひ爲には明治三十七八年の時局本會の事業に對し特に懇篤なる恩旨を拜戴す本會の光榮何ものか之に加へん比年會運隆盛に趣き將に微功を奏せんとするは至仁至慈なる
陛下が深く廢兵遺族救護の事に
軫念あらせらるゝ所にして感激の至りに堪へざるなり智恵子等
鞠躬盡瘁以て
陛下の聖旨に副ひ奉らんことを期す謹で奉答す

斯くて總裁殿下より有功章の御親授あり岩倉公夫人總代として御受をなし受領者一同最敬禮を行ふ、式全く終りて陛下は

玉座を下らせ給ひて還御の御途に就かせ給ふ陛下御奉送の後各宮妃殿下は一まづ休憩所に入らせられ更に引續いて東京支部總會を開き、千家男爵夫人の御先導にて再び式場に着かせられ總裁殿下より御諭旨を朗讀遊ばされ、千家夫人の奉答あり引續いて遺族廢兵總代に恩賜金の下賜あり、右終つて來賓一同は式場脇なる立食席に入りて總裁殿下の賜宴に參列し奉りたり。

▲特別徽章受領者

（功績）會長公爵夫人岩倉久子、評議員男爵夫人千家俊子、仁杉歌子、奥村五百子外二十一名

▲一等有功章受領者

（功績）理事前公爵夫人近衛貞子、侯爵夫人大山捨松、子爵夫人谷玖満子外二十七名

▲二等有功章受領者

（功績）公爵夫人九條惠子、評議員伯爵夫人板垣絹子、同佐々木貞子、子爵夫人戸田時子、前子爵夫人山地謙子、男爵夫人堤常子、同高木富子、同黒木百子、同神山萬佐子外四十二名

▲三等有功章受領者

伊澤千代子外三十八名

▲弦齋居士食道樂續篇

古き例令なれども一篇出づる毎に洛陽の紙價を高からしむるものは弦齋居士の著作也。抑も居士がこの食道樂に筆をつくるやまづ大枚の月給を拂ふて日本有數の料理人を抱へそれを顧問として六十餘州の津々浦々より名物といへる名物を小包にて取り寄せ料理の實地を試驗した上にて仕組を立てたるものなりといへばそれ丈にても現にこの書の尋常一樣のものならざるを知るに足る況んや弦齋氏一流の妙筆を以てこれを美飾するに於てをや其の趣向の奇なるに至つては眞に天馬空行の慨ありといふべし、細評は後日に讓る。新橋堂發行定價八十錢。

▲家庭女學講義

多年家庭の友にて尤も實用的尤も平民的に家庭改良の意見を唱へ來られし羽仁もと子女史が今度又この女學講義を編輯せらるゝに至りしは吾人の喜ぶ處なり家政、育兒、衛生、臺所、手藝其他新家庭に必要なる家事一般の事柄を平易に面白く集めたるもの紙數の少き割合に實用上に裨益の多き會員組織の雜誌なり。毎月一回發行二ヶ年にて完結するもの會費僅かに十錢又同女史の四月號の家庭の友は令孃涼子の死を吊ひし紀念號にて記事悉く眞情肺肝、世間愛兒を喪ひし親心一讀して涙の滂沱たるを覺ゆ。三番町十二同會

觀察

西洋人の觀たる日本の結婚と離婚

ベーコン女史

日本の娘さんは、齢が僅かに十六七位になり、花の蕾が、漸やく開けかゝると見るや、忽ち結婚といふ問題が、其の身に持上つて來るのであります。で、通例其の配偶者となるべき男子が選擇される、それに就て、此人ならば宜いとか、嫌だとか言ふ位のことは、娘さんの自由に任せられてないでもないが、左りとて何方着かずに、何時までもグズ〳〵と引ばつて結婚を延引するといふ樣な事は其の兩親たる人々の許す限りではない、娘さんは斯なに婚姻を急がれるのであるから、中々女子の獨身生活などは思ひも寄らぬことです。日本に於ける婚姻は恰かも生きるか死ぬるかと同樣で、女子の身に一度は避くべからざることゝ爲てある、ですから男子の申込に對して、公然嫌だと拒んだ場合には、強て結婚せしむることは、先づ稀であるが、大概ならば辛抱して嫁入らせるのがまづ穩かな所置、當然な方法としてあるのです。扨て

△結婚しやうとする男子は、親戚や友人中の既婚者に依頼して、才貌兩ながら優れた女子を捜して貰うのが始りで、譬へばお花さんが好からうとの見込が附くと、其の友人は媒介者として、お花さんの兩親に申込むのである。そこで兩親に異存が無ければ、玆に見合といふことをして、若い一對の男女は神社佛閣の參詣又は或る一定の茶店、又觀劇場などに相會して、互に顔を見合せ言葉を交すのである。此の見合に於て、双方共意氣投合すれば、早速結納の取換をして、直に結婚の準備をする、さうして黄道吉日を擇んで、愈々結婚の式は執行される、結婚後三日目には、花婿花嫁は、相携えて、花嫁の親里に

行く、それから二三ヶ月經つて、結婚披露の大宴會は開かれて、廣く知巳友人を招待する、此の大宴會は午餐會にするともあれば、園遊會もあるが、近來は外國流の舞踏會が次第に流行するらしい。

　結婚後日本の若夫婦は必ずしも、家政の任に當り、又た、

△新家庭

を作るものとは定つて居ない、日本の結婚は、多くは新夫が、まだ其の家族の生活を支ゆるだけの技能を持たない程年少の時に起るのであるから、新婦を始め、生れた子供も、みな夫の兩親と一處に住居して、單に家族の一支系を形づくるに過ぎないのである。

　ソコで結婚を正當にしたといふ唯一の證據は、新婦の名前を、其の親里の戸籍から脫いて、夫の家族の戸籍に入れるのである。此の手續が了んだ後は、新婦は其の親里との凡ての關係を斷つて、法律上からも、習慣上からも、自分の身に屬する者よりは、良人の父母、兄弟、親類を重んせねばならぬことになるのである。この法律の認定は、近來離婚に關する夫の權利の制限、妻の權利の擴張と共に、日本結婚上の一進步と見るべきであらう。

　現今に於ける日本の結婚は、決して永久的のものではない、蓋し夫の方からでも、妻の方からでも、隨意に別れることが能るので、下等社會の人達の中には、女房を取換へ引換へして、五人六人にも及ぶことは、餘り稀らしく無い、又女の方でも、一度や二度離婚されても、平氣に幾度も新らしく結婚するのが常である、併し流石に上等社會になると、世上の譏や評判が恐ろしいので、さう滅多に

△離婚

するといふことは無いが、尙それにしても、現に尊敬すべき位置に居る人の中で、數回離婚の經驗を有つた人が、幾らもある。

　既に母となつた婦人は、縱ひ辛い苦しい境遇に逢ふても、離婚を求めずに、ジッと辛抱する者が多い、夫れは法律上子供は悉な父親の方に屬することになつて

居るので、如何に子供を養育するに不適當な父でも、離婚の場合には、子供に關する一切の責務を負ひ、離婚された婦人は可笑い子供を捨て、親里に返らねばならぬのであるから、良人が亂暴な無理な事をして、自分を逆待しても、出來得る限り堪へ忍ばざるを得ない譯になるのだ。全體日本に於ける、

△先祖を禮拜

するといふとは、唯男子側の系統に就てのみのことで、一般に子供は父の性質を承繼ぐものとしてあるから、子供は父の子で、母の子では無いと信ぜられて居る、ソコで父は上等社會の人ではあるが、母は下賤な下等の女子である場合が少なく無い併し其子は上等な父の跡を取るのであるから、下等な母に對しては、母として認むることを許されない。(譯者曰く之れは妾腹の場合をいひたるもの歟)

縦へ法律には離婚の場合に、子供は悉皆母親の方に屬するものと爲て居るとしても、事實に於て斯の如く決して行はるべきで無い、一體日本に於ては、婦人の職業が極て稀で



閨秀書家　松浦けい子

あるから、子供の世話どころか、其身一つを過し難ぬるので、離婚された婦人は、餘儀なく、其父又は兄弟に縋つて、厄介者たらざるを得ない、併し其婦人が可愛い獨娘でゝもあると、父は女の可愛い餘りに、女と共に其の子供を、引取る例の無いではないが、此の場合に在ても、夫が子供に對する權利を捨てゝ了つて、子供を妻に與ゆるを承諾しなければ、勝手に子供を引取るとは能ぬのである。

實例を揭て、以上の記事を證據立て見やう、予の識て居る婦人の中に、

△年若の美婦人

があつたが、不幸にして誠に愚鈍なる男子に嫁いで、其妻となつた、併し能く忠實に良人の爲に盡して、三人の子供まで設けたが、良人は年を逐うて、愈々放縱無賴となつて、もと勢力のある親族の世話で、やうやく得た位置をも遂に失つて、唯酒にのみ耽つて、妻を打擲……これは驚ろくべき習慣ゝしかし日本の夫たり父たる人には餘り稀らしくもない惡習慣ゝ其妻を打擲したり、又子供を叱り附けるなどの亂暴をするに至つた、妻は堪へられなくなつて、遂に子供を伴れて母の家に逃げて還りました、其後愈々離婚の運びが着いて、彼女は再び第二の結婚をして、今では幸福な生活をして居ますが、三人の子供は、皆飲駄暮の父の許に取戻されて、哀れや彼女は一人の子供をすら、我身の邊に置くを得ぬのである。

下層の社會に於て、結婚は永續すべきで無いことは前にも記したが、夫に就いて予の實見した面白い話がある、私が東京に住ふて居た時、車曳兼馬丁として、彌作と云ふ一人の壯丁を傭ふた、此男は近頃ろ田舍から出て來た、壯健で、忠實で、見るから愉快の顏をした男であつた、私は彼に向つて、女房がある乎と問ふた、それは予が彼に車を曳かせて外に出て居る間に、留守をして、厩の掃除やら、馬の世話やらさせる爲に、別に一人の雇人を要するから、もし彼に妻があれば、丁度都合が好いからである。然るに彼は私の問に答へて、妻は有りますが、今では故鄕の宇都宮に殘してあ

りますから、直に喚寄せませう、一二週間の内には、必然東京に參りますと云つた、然るに其後二週間經つても、三週間過ぎても、女房の來る模樣もないので、予は怪しく思つて、

△彌作の女房

は、何うしたかと、召使の者に尋ぬると、宇都宮に仕事があるから、東京に來るのを望まないさうです、とのことであつた、それから又一週間經つても、矢張り

十劍神大流女式武道



英國大使館にてコンノート殿下の御前にて試合の節

來ないから、庖丁に聞いて見ると、彌作は妻が自分の命令を聽かぬから、離別をして、他に役に立つ柔順な女房を搜して居るところです、と云つた、其後容子如何を探つて見ると、彌作は私と同居してゐる或る日本人の家族の內に使はれて居る田舍娘、……顏の面積の廣い、頰の赤い、さうして至つて痴鈍な田舍娘に、目を着けて居たらしいが、併し此女を女房に爲て自分の傍に引付ては、差向き其

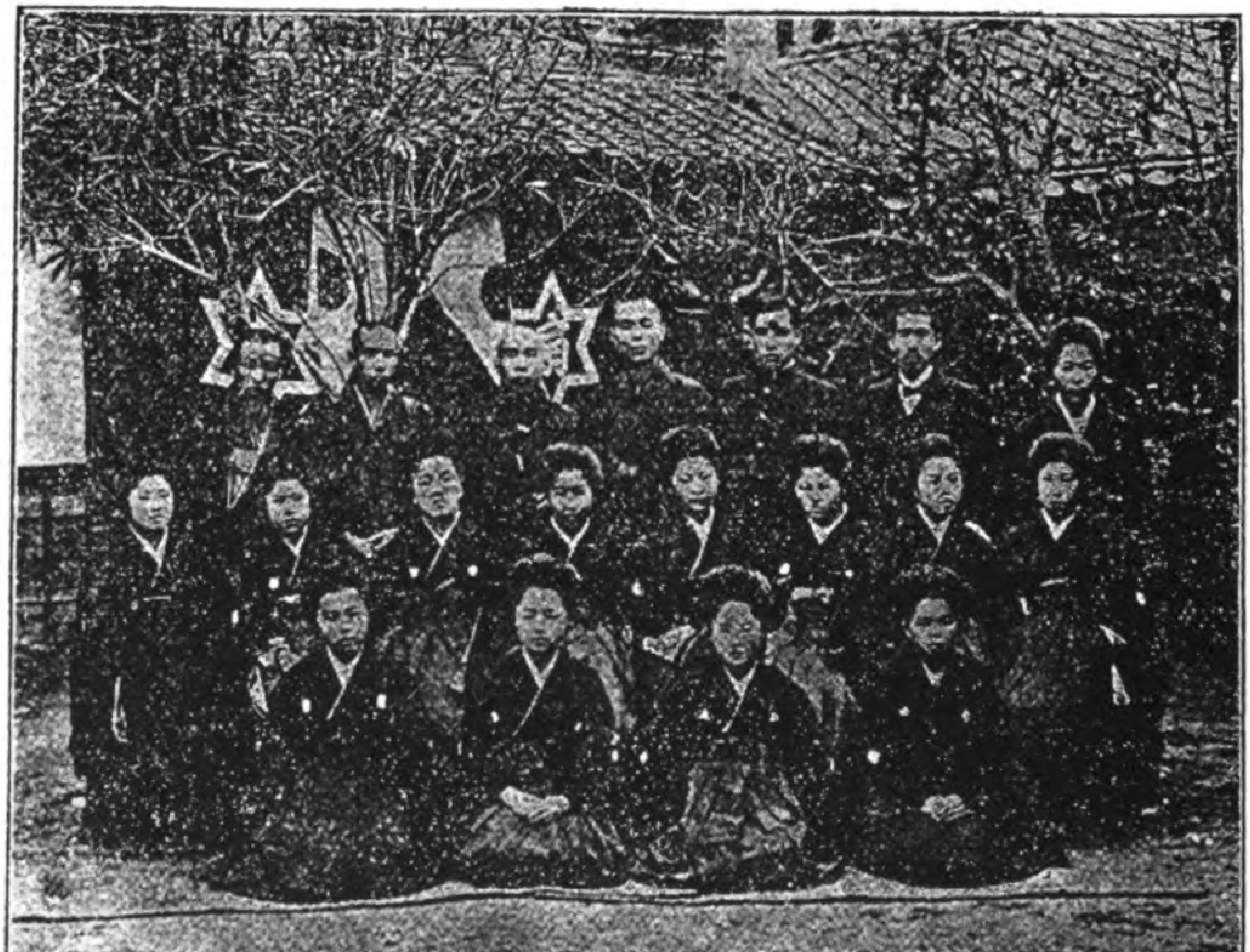
の家族の人達が、不便を感ずるであらうと思つて、遂にそれは廢にして、今度は東京に居る友達に賴んで、種々相談をして見たが、結局東京産の女は、彌作の故鄕と風俗習慣を異にしてゐるから、女房にした處が、永續はしまい、と言ふことになつたので、彌作は宇都宮の親爺に手紙を贈り、早く女房を貰つて、東京に送つて呉れるやうにと、賴んで遣つた。

其後一二週間經つてから、下婢の話を聞くと、彌作の花嫁が、明朝の汽車で、乘込で來るとのことで、馬丁室は、花嫁待設けの準備の爲に、大方ならず忙がしいのであつた、疊は新床を以て取換えられ、障子は新らしい紙で張られ、壁は彩色繪を以て貼詰られた、其れや是れやで、大枚十弗の月給取の彌作は、殆んど破産しやうとした、さうして彼れは、近邊の茶所に、御馳走の注文をして、英字と日本文字とで、我名を印刷した招待狀までも製らへたので、遂に冬着の衣裳を質に入れて、必要の費用を支辨したのであつた。

結婚の日と定められた吉日は、生憎雨天であつた、彌作は花嫁の汽車を待つべく、終日停車塲に立つて居たが、如何なる譯か、花嫁は影も形も見せない、其夜彌作は怏々として歸つて來た、獨り悄然と火鉢の邊に坐つて、烟草を吹して居たが、其の心中は、大に懊惱して又怒つて居たのである、彼れは嚴重な手紙を認めて、若し花嫁が、此次の吉日（日本では吉日で無ければ、決して結婚をしない）に來なかつたら、直に親里に送り歸して、此の結婚は止めにして貰ひたい、と言ふて遣つた、此の手紙は其功を奏して、十日餘後の吉日に花嫁は遣つて來た、ソコで彌作は、予に傭れて居る間は、此後決して再び妻を娶らぬとの約束の下に、二日間の休息をすることになつた、斯して結婚の翌晩に、花嫁は予に初對面の挨拶をする爲に、手を採みながら、予の前に跪づいた、蓋し彼女は始て外國人を見たのであらう、痛く震へて居たらしかつた、そうして彼女は肥滿して豚のごとき體格の、容貌頗る引立たざる娘であつた、その年も彌作よりは一二年上であらうかとも思はれた、彌作も今は自分が「見ず貰」をし

たのを痛く後悔して、心中甚だ不滿に堪へなかつたらしかつたが、二月許り過つと、遂に其花嫁を親里に送り返して了つて、彌作は再び新らしい妻を迎ふべく、用意したらしい。

今一つの例を申しませう、一日私は豫て知合の或る奥様を訪問した時、その家の女中は恭々しく腰を屈めながら怪しく微笑みつゝ、お茶を予に運んで呉れたが、其の女中の容子が何となく平生とは變つて居るやうに見えたから、予は殆んど毎月



大分縣扇城女學校卒業生

のやうに此家に出入して居るのに、今日に限つて平日と違つた風がこの女中に見えるのは、何うした譯か、と、少々怪しく思つて居ると、案の定、女中が立去つた後で、その奥様は私に向つて、

△おキクさん

はとう／＼返つて參りましたよ、と言つた、（女中の名はおキクである）そこで予は彼の女中が何處ぞへ往て居たのか、薩張り知らぬのであるから、今突如に返つて來たと聞かされては、何だか一寸合點が行かぬのである、

段々と理由を聞いて見ると、この女は一月許前に主人から暇を貰つて、嫁に行つたのであるが、昨日コッソリ返つて來て、復び此家に使つて下さるやうにと願つたのである、そこで何ういふ譯で返ッて來たのかと問糺すと、先方の良人は極親切な且つ善良な人物で、良人として決して不足はないが、只姑が如何にも酷いので堪へ切れなく、朝から晩までコキ使はれて、少時の間も休息する事が出來無いので、迚も辛抱する譯に行かないといふ事であッた、尤も結婚當初の約束では、姑は良人の兄が當然引受ける筈で、夫婦差向ひの氣樂な生活をするといふ條件であつたが、實際行つて見ると良人の兄の妻なる人は大の懶怠者で、性質は良くない、それに引換へて、弟の方の妻となッた人、即ちこのおキクさんは人一倍に精も出すし、又心も優しいからといふので、利口な姑は、それぢや弟の家の世話にならうといふ氣に爲て、遂におキクさんの處に同居したは大變な有難迷惑、ソコでおキクさんは迚も斯な八釜しい姑と一處に居る譯に行かぬと決心して、直に夫に離縁を申込で、結婚の日から、丁度一ヶ月目に、復び舊主人の家に逃て來たのであつた、といふお話である前に掲げた二三の例で、想像して見ると、日本では

△幸福な結婚

は殆んど絶無のやうに思はるゝが、併し決してさうでは無い、離婚は日々の出來事ではなくて、矢張り夫妻相調和して、幸福な結婚を樂む者の方が多いのである、昔時の貴族は、其妻を離別することは滅多に無かつた、其れは離別に對する世の批評をも憚かるばかりでなく、又一つには妻の里方との間に、面倒が起るからでもあるので、さういふ場合には、室を別にし、又食事をも一緒にしないのであるが、そして尚妻といふ名義丈は存して置くのである、武士も亦其の主君に忠實を表はすが如く、妻にも甚だ忠實であつた、要するに日本に於ける夫妻親愛の例は、多くの小說や演劇を見ても明白で、二十世紀式の戀愛とは、固より違つてゐるが、表面に見れざる誠實が籠つて、床しい處は我々西洋人の一寸想像に及ばぬところである。

明治維新の後數年の間の狀態は、昔時の習慣や德義や制裁は一時廢れて了つて、之に代るべきところの道德がまだ起らない、謂ゆる大變動の過渡期であつたから、其時の男子の行爲といふものは凡て亂暴過激、又放縱淫逸を極めたもので、舊妻を離別する抔は、一種の流行であつたから單に此時の狀況を以て、日本の今日を評するのは、決して公平な觀察で無い。

元來日本の少女は、其父の家から去つて、良人の家に輿入をする時には、將來の幸と不幸とは、全く自分の行爲の善不善に依るものと覺悟して、氣心も識らぬ良人に嫁ゐで、其の所有物となるのであるから、離緣さるゝのは、自分の恥辱である、不面目であると心得て居る、一體日本の舊思想として、女子の德は專ら柔順にありとして、絕對の服從を要求するのである、これに反して現今外國的の敎育を受けたる少年男子は、修養あり、識見ある女子を得て、家庭を幸福にし、且その生める子女の敎育をも任せやうと期望して居るのである、斯の如く新舊思想の衝突は激しいけれども、要するに男女間に關する法律の改正に先だちて、强固なる一般輿論を喚起するが必要である、法律は正當に使用し能ふ時期の來るまでは、此儘にして恐らく差支はあるまいと思ふ。

扨現狀を改良するの方法として、私の考、第一に

△敎　育

である、抑も女子をして舊日本に於ける地位よりも猶一層高等の位置に昻むるべく、敎育を施こしたならば、その結果は如何である乎、今日は日本でも有福な家庭に於ては夫は外國に遊學して、歐米の家庭生活の狀態を十分に解釋してゐる妻も亦夫の友人として、又信賴すべき生涯の伴侶として、知識や學問の修養を積で居る、斯の如き家庭の妻は、自由を有することも歐羅巴婦人と同じく、その愛情と妻の權利とはよく一家内を支配して、昔し八釜しかつたところの姑は、決して壓制を擅まゝにすることは能ぬのである、而して、其の健全なる家庭の影響は、日本一般の社會に及ぼして、日本女子の位置を次第に高めつゝあるのである。

然るに歐米の新敎育に依て養成せられたる娘でありながらも、猶兩親の意に從つて心ならずも結婚する少女の境遇は眞に憫れむべきものである、一體思想の高いのは、却つて失敗を招くの源となるもので、一家族を擧ツて皆舊思想で支配された家庭の中に、獨り新思想に充てる品格の優れた我身を投ずるのであるから、如何な高尙な希望も、舊習を脫せざる長上者の爲に壓せられて、我が意思を通すことが能ない、のみならず、其の生活は例の日本流で一家の内に限られて、世間と交通する事の能ない境遇に居るから、これを彼の舊時代の娘……只服從を以て最上の美德と心得てゐる舊時代の娘に比べると、幾層倍の苦痛を感ずるは當然である、されば妻又は母としての女子の境遇に、一大改良を施さなければ、徒らに敎育ばかりしたところで其の敎育は却つて女子を苦しめ、女子を惱まして、不幸ならしめ、不滿ならしめ、失望せしめた餘、遂にはその健康をも害するに至るの惡結果を呈するは必然の勢であらう、此の勢は現今ちらほらと實際に顯れて來てゐる。

されば皮相の觀察をすれば、現代日本女子の狀態は進歩ではなくて、寧ろ退歩と思はれる節がある、女子敎育に對する反動の原因も全くは此に在るので、到底妻として母としての女子の位置に一變動を生じなければ、西洋風の女子敎育は、永く失敗を見るを免かれまいと私は思ひます。第二の改良は、

△耶蘇敎主義

です、耶蘇敎では、夫妻が一たび結合した以上は、一生離る可らざるもので、双方の意思ばかりで別れるべきものでないとの考で以て、妻を選擇するから、結婚後の生活は眞に平和で、其の家庭は極て幸福である、今や斯の如き耶蘇敎主義の家庭は、日本全國到る處に散在して、勢力の中心點となつて居る、耶蘇敎主義は、將來日本家庭改良上尠からぬ功績を奏するであらうと思はれます。

猶一つ改良したい必要は、

△女子の職業

の區域を廣くするのである、殊に學問の修養ある女子の爲に、新職業を開くとである、日本の女子は自ら生活する能力を持たぬ故に、齡が婚姻の時期に達すると、長くは父母の厄介になる譯に行かぬから、如何に無趣味の結婚でも、兎も角女子として生活上の一新路を開くものであるから、單に生活上の關係からして無趣味の緣組が行なはれる、故に自活の道を得、自分の力によりて獨立生活が出來るに至らば、結婚は必ずしも女子の生活



印度少女の風俗

上の壓制とはならない。

されば結婚によつて親切と愛情と安全とを得べき見込ある場合の外は、隨意に拒絕すべきが故に、結婚より生ずる多くの不幸は自然免かるゝ事の出來得る筈である、尤も今日の日本女子の職業は、唯女敎師となる位なもので、其他には殆んど無いのであるが、此の唯一の職業も女子獨立の方法となツて、之に依り獨立生活を營む者の年々其數を增す傾向のあるのは、悅ぶべき現象であつて、結婚及離婚に關する現今の法律習慣が將來改正を要すべき確な

證據であると私は信ずるのであります。

世界に名高きサムライ女

鈴木青眼

▲復讐

古昔士氣が盛んで、而も法律の制裁が殆んど無かつた時代には、君父の爲に、仇を報することは稀らしく無かつた、繊弱な女子が、前途に横はる幾多の艱難を凌ぎ、辛苦を嘗めて、一身を復讐の事に委ね、男子同様な勇氣を以て、遂に仇敵の首を取て、目的を達した例は幾らもある。

大名の奥御殿で、復讐をした名高い話は、芝居の舞臺にも上せられて、人口に膾炙して居る、夫は尾上と岩藤といふ両人の奥女中の間に起つた事柄で、素尾上は卑しい平民の女であつたが、運が好くて局となつたので、多くの奥女中から嫉妬を受けた、其中でも岩藤といふ位置の高い高慢な女中が取分け嚴しく尾上を惡んで、種々の無禮を加へて苦しめた末に、尾上に向つて劍術の仕合を挑んだところが、尾上は諸藝に達した婦人であるけれど、劍術の技だけは修めて居ないので、此挑みに應ずることが能なかつた、岩藤の忿怒は極度に達して、亂暴にも、己が草履を掴んで、尾上を打擲した、草履で人を打つ抔は最も無禮の行いである。

尾上は公衆の面前に、斯る恥辱を受けたので、匆々御殿を退いて、自分の室に歸つたが、何うしたら此の恥辱が雪げやうかと、心を苦めて、兎や角と思に沈んだのである。

お春といつて尾上の爲めには忠實な侍女がある。彼れ侍女は今しも髮は亂れ色は靑褪めて只事ならぬ主人の有様を見て、何事か知らぬ容易ならぬ心配の有ることを悟つたので、様々と勞はり乍ら其日の出來事を聞かうとしたが、尾上は胸の秘密を包んで一切語らなかつた、お春は元來武士の家に生れた女、故あつて御殿奉公はして居るもの丶、素性をいへば尾上よりは見

分の優れたものであつた、そこで尾上は、この恥辱を拭はんが爲に、潔く自殺して死するの外に途は無いと決心したので、急いで家族への書置を認め、縅に懐中して居た岩藤の草履を、其の手紙と一所にして、お春に持たせて親里に送つたのである、お春は斯くとも知らずに、立出でたが、烏啼きが甚だ凶いので、何となく胸騒ぎがする、暫くすると下駄の鼻緒がプツ、リ切れて仕舞つた、是は一層凶い徴があるから、お春は今來た路を取て返して、主人の室に入て見ると這は如何に、尾上は紅の血潮に染みて其處に横はつて居る、餘りの慘状にお春は驚き斷腸の思であつたが、旋て其の原因が知れたので、主人の爲に必ず仇讐を打うと心の中に誓を立てたのである。

お春は尾上と違つて、劍術をも修業して居るから、今は唯その機會の來るのを待て居るのみであるが、程なく好機會があつて、岩藤に向つて仕合を挑んだ、高慢な岩藤は餘儀なく之に應じて太刀合たが、散々打負けて、多くの見物人の前で、恥辱をかゝされたのである、此事遂に大名の耳に入つて、お春は大に賞詞にあづかつてやがて、死んだ主人の跡役を繼ぐことになつて、非常に面目を施したのである。

▲夫の爲に身を賣る

侍の子女は、恥辱を受けた時には、自分で自分を殺すか、又は夫や父の手にかゝつて、悦んで死するのが、其の本望であるか、又夫や父の爲とならば、死に勝る程の恥辱に逢ふても、辛抱して我慢せねばならぬのである、歴史的戯曲の中に、理想的日本婦人の面影を寫した名高いものがある、それ夫は彼の「四十七士の話」を基礎として作つた戯曲で、浪人が復讐を企てたときに、同じ侍の中でも、忠義心の無い者があつては、目的の妨げとなるから、首領たる大石は、一味徒黨の選擇に就て、大方ならず苦心をした時に、或一青年が徒黨の仲間に加はらむことを願出たけれども、大石は容易に許可を與へなくて、結局何百圓の保證金を出せと命じた、保證金さへ納むれば、名譽ある仇打の仲間に入ることが能るのであるが、此の青年は貧乏者であるに加へて近頃ろ妻を取つた、さうして妻の兩親をも養ふ約束であつたから、却々保證金どころの事ではない。然るに其妻は忠義の心を知る兩親に勸められて、夫の名譽を保たしむる爲め唯一の方法として、二年間の約束で、身を遊廓に沈め、所謂傾城の勤をすると決心したのである、斯て其の身代金を以て、保證金に充

てたのであるが、若し夫に知れるときは、戀愛の情に溺されて、一未練の心を起しもやせんと思つて、夫が山獵に出て居る間を好機會として家を去つたのである。夫は狩猟から返つて、始て其の事情を知つたのであるが、之が爲めに一族の蒙むるべき不名譽は免れ得たけれども、可愛い妻や其兩親が、我身の名譽の爲に、斯る大なる犠牲を獻げたのを痛く悲しんだ。さうして妻は又遊廓の使に拉れられて家を出る時、昔日本武尊の妃が、海神の怒を鎭めん爲め、身を躍らして海中に飛込んだ話を心中に思ひ出しつゝ、別れのつらきを忍んだのである。

日本に於ては、少年も婦人も、熟く此等の話を知つて居て、身體は穢れても、心は汚れぬとのことを言ふてある。夫は夫の爲に女子の尤も貴重すべきものすら犠牲にして、最高の義務を果したからである。元より今日の日本では、斯る出來事は決して無いけれども、若し有つた時には、日本の人には、其の身を賣て夫を救ふた女に對して、其行を卑しまぬのみならず、却つて賞賛するであらう。日本に遊んだ外國人が、日本婦人には貞操と純潔といふものが無いと思ふのは此故である。

▲日本女子と西洋婦人

西洋婦人は、年頃になると、何は扨置き、身體の名譽を維持するといふことを敎えられるのであるから、婦人の德とは、男優りの勇氣や、獻身的の行をいふに非ずして、女子の大切な身體に汚損を付けぬとをいふのである、故に貞節は婦人最上の德として尤も尊重されるのであるが、今暫く此考を棄てゝ、日本女子の道德修業に就て熟考して見ると、日本の女子は幼い時から年頃になるまで常に服從と忠義を以て、最上の德として、之が爲には他の諸の德を棄てゝ犠牲とせねばならぬことを敎へらるゝのであるから、夫の爲め、親の爲めには、悦び進んで危難を冒し、財寶を捨て、不名譽を忍び、罪を犯すも當然のことゝして居るのは尤もである蓋し君父國家の重きに比べては、我身の輕きこと、物の數にも足らぬとは、彼等の理想であるから、父夫の爲に、場合に依りては、身體を汚すこともあるも、之を以て日本女子は不貞操、不純潔と云ふべきであるまい、其の最も愛する者の爲に身を棄て命を棄てゝ服從の義務を全うするは、高尙なる行といふべきではあるまい乎、若し公平なる裁判を下さんとせば、日本女子其人の行に就て直に判決を下すよりも、先づ其行の下に横はれる原因を探らねばならぬのである、思ふに詳かに日本女子の性格を研究して見ると、日本の女子程高尙で單純で完全な婦人は、他國の婦人社會に决して見出すことの能ないことが十分に證據立らるゝであらう。觀察者は明治初年に日本に來遊したる人にて當時の思想と現今とは大なる變遷あるを知らるゝ樣であつた。

多くの外國人の中には、日本女子の純潔に就て疑ひ、母として又妻として、其の美なる性質と、私慾なき愛情とは唯其生活狀態に於ける制限の結果であつて、彼等は思想行爲の自由を受け

んには餘りに軟弱であると謂ふものがあるが、此問題は時が進んで婦人の爲に一新紀元を開くべき日に於て始て決せらるべきもので、今日は之に就て兎角の批評を下すべきで無い。

▲女子の義務

予の見る處にては、義務といふ觀念は、一般日本女子、殊に「サムライ」の女子に强く發達したもので、義務を果さんが爲めには恐れず、悲まず、又他人の嘲笑を事ともせずして決行するのである、之に就て、予の端なく記臆を喚起するのは十六歳の一少女が、自から其の過失を、學友の前に公然白狀した話がある、此の少女は其頃ろ母同樣に己を愛して與れた親愛なる老祖母を失うたが、可憐なる少女は、今祖母の死に逢て、平生祖母に對して行つた自分の過失を思出して堪得ぬので、遂に其の學校友達の前で、公然と己が過失を陳述して、一つは自分の心を慰め、又一つには友達の戒めともしやうと決心して、斯て少女は詩的趣味を帶びた長篇の白狀文を作つて、敎師と生徒との前に讀上げたのである。是時少女の顏は紅くなり、聲は震へ、幾回か嗚咽して文を讀む能はざるに至つたが、終りに臨みて、祖母の死後、己の受けた苦痛の如何に嚴しきかを陳べて、吾が愛する生徒諸孃が、平生注意して、己と同じ過失を犯さゞらむことを望むとの旨趣を讀上げたときには、滿場の女子皆泣かぬものはなく、中には聲を揚て、啜り泣をした者もあつた、少々變つた贖罪の仕方ではあるが、又實に感心なものである「サムライ」階級の女子が、義務を盡さんとするときには、皆此の主義を決行して少しも憚からぬのである。

今一つの例は、維新の際、封建政治の倒れた時の事で、各藩の侍等は、藩主の、方針に隨つて、或は勤王黨となり、或は佐幕派となつたが、將軍の味方となつて、戰場に出で、官軍と刄を交へた侍等は、萬世一系の天子たる皇帝に向つて戰爭をするのであるから、則ち國家の反賊たる位置に居るのであつた、其時連戰連勝の官軍に抗して、若松の孤城を支へ、力を盡して防禦した二人の侍の女があつた、亂平ぎて後、二人は數年の間其家族と共に遠島を申付けられたが、暫くする

と千八百七十七年の西南の亂が起つて、人命を損すること莫大なものであつたが、此戰の始まつた時、二人の女は、政府に請願書を差出して、病院の看護婦となり、戰場に行つて、以前王師に反抗した罪を贖はんことを乞ふた、日本では此時まで未だ負傷兵を看護する爲め戰地に赴いた女子が無かつたのであるが、二人の切なる願意は納れられて、望みの如く過去の不忠を償ひ得たのである。

▲今日の「サムライ」

新日本の今日に於ては、「サムライ」は一定の俸祿が無いから、全國各處に散在して、農工商各種の業に從事して、武士性質を其の新職業の中に注入しつゝあるが、「サムライ」の婦人は、今や何を爲しつゝある乎、今日の政治が、皇帝の下に於ける「サムライ」の手中に歸せるが如くに、婦人の進歩、婦人各種事業の新思想は、皇后陛下の指導によりて、「サムライ」女子の掌握の下に在るのである、病院を設け、職業學校を建て、養育院を置くなどの慈善事業、又は新職業に入り、家庭を高尙ならしむる等婦人界の進歩は、「サムライ」女子の主唱に成るものが多い。

時勢の變革に依つて、「サムライ」階級の中の者で、新に華族に列せられたものもあるが、彼等は武士の性格を、其の新生活なる貴族主義の中に顯はして居る、一方には又昔輕蔑した商人、農夫、漁夫、大工又は家僕とまで成下つた侍もあるが、倘昔時の修養の跡は殘つて居て、如何なる職業に從事するとも、名譽と知識の模範を止めて、僅に一頭地を拔て居る。

王政復古の後、數年間は、衣食に窮して、或は演說、或は文章に依り、極端過激の議論を唱へて、反亂を煽動した侍もあつたが、多くは官吏となり、軍人となり、警察官となり、農桑の業に就き、商賈の職を營み、甚だしきは人力車引とまでなつたのである、婦人も亦其の變る運命に安んじて、男子と同じく新職業を求めたが、概ね教師、通譯、看護婦など、婦人に適當せる名譽ある職務に就いて居る、官私の女學校に於て、生徒の多くは「サムライ」の女子で、其の敎師長上を尊敬して、之に服從すること、竝に競うて名譽ある位置を占めんとすることは、新日本に於ける「サムライ」女子の特性を發輝して居る、思ふに日本女子の地位を廣く且確かなる地盤の上に建設するは、「サムライ」女子の事業で、彼等は業に既に之に着手して居る、予の見る處が誤らなくば、近き將來に於て、彼等は現今に於ける婦人界諸の惡弊を矯正して、天地を動かす程の功業を收むるであらふ。

「サムライ」女子の多くは、今日の文學を解釋し、又外國語に通ずる者も尠くない、又外國に遊んで、基督敎國の家庭及び家族の狀態を目擊したものもある、要するに百折不撓の武士的精神は、女子の血胤の中に通ふて居るから、旋ては夫又は父の命令よりは、一層强固なる基礎の上に、家庭と家族を置かん爲に、其の精神を發輝するに至るであらうと信ずる。(をはり)



歴史と人間生活

文學士　物集高量

△吾等は何の爲めに歴史を學ぶ乎

歴史を讀むのに、恰然演劇でも看る氣になつて唯だ愉快を求むる爲めの人もあらうし、時代小説を作る爲めの人もあらうし、又は、唯だ博識に成るための人もあらうし、其れは人々に依つて種々異る所があるのであらうが、其等の人々の爲めに一々其れに應じた歴史の讀み方を述べるのは、餘りに煩雜に流るゝ故、茲には普通學として歴史を學ばねばならぬ所以、及び專門家として歴史を攻究するの理由及び方法だけ、大略ながら左に陳べて見やう。

△普通學としての歴史の研究

自分の家に在て自分の家の風習や、祖先の爲した事は知らねばならぬ如く、國に在つても同じやうな理由で、自分は抑も奈何云ふ經歴を經て今日に至つた乎を知らぬのは甚だ以て不都合極まる次第である、とは普通一般の説であるが、唯だ其れだけでは甚だ理由が淺薄である。即ち自分の國に在りながら、神武天皇の御事蹟も知らず、後醍醐天皇の御事蹟も知らずに居ては甚だ相濟まぬ次第である、と云ふばかりで、更に其れ

以上、餘儀なく知らなければならぬ事情は無いのである、が此の普通一般の説以外に、奈何しても歴史を學ばねばならぬ最も有力な理由があるのを忘れてはならぬ。即ち『過去に於ける人間の動作は、將來に於ける吾等の行爲の參考となるべき者である』と云ふ事である。此の意味に於て歴史は、一と一と加へて二となる數學上の思想が日常吾等の生活の上に缺ぐ可らざる如く、未來の方針に就いて唯一の注告者たるを忘れてはならぬ。が唯だ斯ふ云ふばかりでは至つて解り難くあるから、二三の例を示して説明して見やう。往古西洋の羅馬と云ふ國が未だ强大にならぬ以前に、屢次北方の野蠻人に攻められて奈何しても勝つ事が出來なかつた。乃で償金を出して和睦と決したのであるが、愈々償金を渡すと云ふ時になると、野蠻人は秤を胡魔化して約束の償金よりも澤山取らうとした。羅馬人は直ぐに其れを見附けて、其れでは約束の償金よりは多くなると口を出すと、野蠻人は腰に佩していた劍を拔いて秤の分銅の方に載せて、其れでは是れだけよこせ、戰爭に負けた者は兎や角云ふ權利を有たぬ。と云つたさうだ。全く其の通りで、若し世界に唯た二個しか國が無かつたならば、弱國は强國の云ひなり次第にならねばならぬのである。今一つ同じやうな例であるが、彼の有名な成吉汗が歐羅巴征伐の時に、諸所の城を攻める前、先づ使者を遣して、降參すれば赦して遣ると云ひ送つた。其れで中には能くも考へずに阿容々々と降參に出て、而も一所に纏めて皆な殺されて了つた者が非常に多かつたさうである。是れは元來成吉汗を食言をつかぬ道德的の帝王と豫想つてゐたのが大なる誤りであつたのである。約束を守る。こは道德上から見たら大層立派な事であるのであるが。道德を無視した者の目から見たら一文の役にも立たぬのである。而も道德を無視した者が世の中に決して少くは無いことを注意するのが肝要である。尙ほ一つ例を取つて見るならば彼の大不忠臣と云はれてゐた足利尊氏であるが、一度京都を乘取つた後、新田義貞 楠 正成の爲めに散々に敗られて、既に腹搔切つて死なうとしたのを、高師

直に諫められて、漸く辛うじて九州に逃げ下つて、既う再度勢を恢復しさうにも見えなかつたのを、僅か半年經たぬ中に忽ち盛返して數十萬の大軍を率ゐて攻め上り、湊川に正成を討死せしめ、義貞を追うて京都を占領し、覇業の基を開いたのである。現時から當時を顧みれば、天皇に刄向ふ大不忠の尊氏が、奈何して半年經たぬ中に恁麼事が出來たのであらうかと、頗る疑問を抱くのも道理であるが、熟々考へて見るのに、忠とか、不忠とか云ふ事よりも、尙と〱ずつと深い所に、眞に人間の固有の性質が活動してゐるからである。即ち、人間は各自自由を欲し、出來得るだけ自分の我儘氣儘を徹さうとするものである。であるから當時の武士共が、後醍醐天皇に忠義を盡して後宮の婦人達に抑へられてゐるよりは、足利尊氏に從つて封土を貰つたり祿を戴いたりする方が、餘程利益にもなるし又自分の我儘氣儘を自由に伸ばす事が出來るから後醍醐天皇を見捨てゝ足利尊氏に附いたのである。足利尊氏は此の人間根本の心情、殊に當時に於ける武士共が充分に此の心情に充滿ちてゐたのを見て取つて、容易に覇業を爲したのであるが、己れを扶ける者は亦た己れを斃すので、足利氏の亡びたのも、思ふ存分武士の我儘を通させて遣つた結果である。斯くの如く人間根本の性情は、人間と云ふ者の生存してゐる限り、何處如何なる時でも血液の管のやうになつて皮膜の底に漲つてゐるのであるから、若しも此の性質に逆ふ事があると、遠慮なしに何時でも道徳だとか法律だとか云ふ皮膜を破つて、本性を露はすのである。歷史を讀む者は能く人間の根本性情を考へて讀まなければ、何故南朝が衰へて北朝が勝利を得たのであらうかなどゝ分りきつた事も分らなくなる者である。

以上述べた事を約めて云へば、普通學として歷史を學ぶのは、神功皇后の朝鮮征伐、源平の盛衰、南北朝の爭ひなど、歷史の事實其れ自身を覺えるのみでなく、更に其れ以上に亘つて大切な事柄は、抑も人間と云ふ者は如何なる事に出遇へば如何なる有樣になる者であると云ふことの、原因結果を深く明めて、其れを日常

の吾々の仕事に最も能く應用して行くやうに心掛けねばならぬのである。

扨て次には所謂る歴史專門家の歴史研究法を極めて簡單に述べて見やう。

△歴史の起る所以

古來、此世に人間として生まれて來た者で、一人として死なぬ者は無く、長壽をした者さへ至つて少く、八百歳の年齢を保つた彭祖、三百歳の壽を得た武内宿禰は別として、如何に長壽の者と云つても百歳を出づる者は至つて稀である。人生五十年と云つて居るのであるが、假に是れを六十年として、生れてから三十歳までを修養の時代、三十一歳から六十歳までを社會的事業を爲すの時代として見れば、僅々三十年の歳月、限りなき星霜に比較ぶれば、實にや一炊の夢、蜉蝣の生涯にも等しいのであるが、翻つて考へて見れば此の僅かな三十年間を如何して送つたら可からう乎、是れは實に大問題である。唯だ動かずに靜として居れば、三十年は愚か三日の中に餓死にして了ふ。其れでは大變と云ふので食物を求める爲めに齷齪する。自分が齷齪すれば他も齷齪する。食物が一個で人間が一人の時には至極都合が宜いのであるが、人間が二人で食物が一個となると、勢ひ自己の生存上一個の食物を爭はねばならぬ。此に於てか爭鬪が始まつて一方が斃れるか或ひは和睦して更に自然力から自己の食物を得る方法の見出されるまで繼續されるのである、併し實際、双方相爭ふは双方の爲めに損でもあり、其の相爭ふ精力を、自然力に對して用ふれば、却つて多くの食物を得られるが故に、大抵の場合に於ては、何時迄も相爭ふことをせずして、相合致し、共に業を分つて、共に働いて食物を得るやうにと努める。此に於てか社會を生じ、分業を生ずるやうになるのであるが、抑も社會を形成つてゐる人間の働く壽命は僅かに三十年である。此の三十年の壽命を以て記錄も覺帳も何にも無しに死んで了つたら、何時まで經つても事が新しくて、到底其の社會を擴張し進歩して行く譯には行かぬのであ

る、であるから何處の社會でも將た國家でも、自己を擴張進歩させる爲めの必要に迫まられて、記録なり覺帳なりを子孫に遺して呉れる、子孫も亦た祖先の業を承繼ぐ爲めの必要から其れを讀んで、嗚呼斯う云ふ事をしたから自己の祖先は失敗したのであるとか、斯う云ふ事をしたから成功をしたのであるとか、其れで以て大いに得る所があるのである。



斯くの如くして歴史は起るのであるが、記録とか覺帳とか文字に寫した物のみでなく、日本などでは往昔は語部と云ふ一つの職があつて、耳から耳へ文言を傳へて暗誦して居つたのが、支那から文字が渡來して後、古事記に成つたのである。斯う云ふ風に吾等の祖先は子孫の爲めに自分のした事業や其他種々の事柄を語部や記録に遺して子孫に示して呉れ

るのは、大變に有難いのであるが、此に一つ困つた事がある。其れは誰れしも自分の失策つた事は他に知らせるのが可厭であるから、失策の物語は大概削つて了つて、手柄話ばかりが仰々しく述べられてある事である、失策九分の成功一分の世の中を、僻つて歴史に徴して是れを見るのに、却々其れとは反對に、失策一分の成功九分になつてゐる、若しも其れを正直に受取つて、其の通りを眞似て見やうなどゝ思つたら、其れこそ大變、間違つたお手本の爲めに却つて飛んだ失策をする事が屢次ある。要するに歴史と云ふ者は成るべく正直に書いて置いて遺して呉れなければ、大いに後世を誤る者だと云ふので、先年或る博士が演說した中に諸君は成るべく正直に日記を記して下さい、と云つたのであつたが、恐く失策を恥辱と思ふ現今の社會では一人として其の恥しい事を正直に日記に記して置く者は無いであらう。

歴史の起る所以は右に述べた如く至極簡單な者であるが、扨て歴史家が愈々本式になつて、此の記錄は斯う書いてあるが、此の部分は法螺である、此の覺帳は斯う記してあるが皆な出鱈目でなければならぬと、一々證據を擧げて識別するのは、精密なる用意と、卓越なる眼識を要するのである、以下順を追うて一般の規則を述べて見やう。

△歴史の材料と豫備の智識

支那一流の歴史の編み方は、證據物件即ち歴史の材料が極めて少いにも拘らず、又其れを深くも吟味せずして、好い加減に筆を舞はし、滔々數萬言の議論を吹き立てるので日本の以前の歴史も皆な此の系統に屬してゐたのであるが、是れは決して眞正の歴史とは云ひ兼ぬるのである。然らば眞正の歴史は如何して編まるゝのであるかと云ふに、先づ出來るだけ其の歴史に必要な材料を蒐集してやらなければならぬ、例へば地理でも、古い建築物でも、其他言語、制度、風俗、物產古文書の類から、歴史畫、歴史像、神話、古傳說、逸話、諺、系譜類、記錄類、覺書類、何でも構はず證據

物件即ち歴史の材料となるべき物は盡く寄せ集めて置いて、扨て是等の證據物件が果して歴史の材料となるであらうか、奈何であらうと考へて見る前に、是等の歴史の材料に關して特殊の智識が必要なのである。例へば年代學の智識が無ければ年月日を精確に定める事が出來ぬし、地理學の智識が無ければ歴史即ち人間の活動の舞臺が能く分らぬし、古文書學の智識が無ければ、折角發見された古い文書の眞贋さへ分らず、從つて有力な材料を無にせなければならぬやうになるし、系譜學の智識が無ければ豪族家門の起伏してゆく理が判然と分らぬのである。是等の諸學科に就いて如何に歴史研究の上に有効であるかと一々例を取るのは甚だ面倒であるから、此處には唯だ一つ古泉學の智識が何の位まで歴史研究に裨益するかと云ふ事だけ述べて見やう。古泉(古錢の事)の最も歴史の材料となるのは希臘式のもので、先づ其の一枚を手に取つて見ると、必ず王の肖像が鑄つてある。是れに依つて其の人種が推察される、次には其の肖像と共に服裝と武器とが鑄出してある事がある。是れに依つて其の風俗の一端が分る、又王の尊號が必ず打出してあるから、其の言語に依つて朝廷の通用語が分るのである。又古泉は一般に當時の技術を示すもので、鑄造の精粗は直ちに美術の盛衰を現はし、換言へれば文明の程度を表すものである。尚ほ其れに加へて古泉の質即ち金銀銅に依つて其の時代の冶金術の進歩如何をも推察する事が出來るのである。且つ貨幣は其の時代々々の經濟事情に密接な關係を有して居るから、品質の劣等な古泉を鑄た時代は經濟界が紊れてゐたに相違なく、品質の良好の古泉を鑄た時代は必ず經濟界が亂調でなかつた徴である。

右のやうに一個の古泉を掘出してすらも、斯くの如く其の時代の大體の有樣が分るのであるから、況して一枚の古文書、一冊の帳簿があつたならば、尚更深く其の時代の有樣が判然と分るのである。

△歴史材料の批判

以上蒐集した種々の材料は、果して吾等が編む所の

歷史の材料と爲すに足りるのであらうか奈何であらうか、其れを調べるには第一に贋物であるか贋物で無いかを調べて見て、其れが決して贋物で無いと云ふ事が分つたなら、次に其の證據物件が何の位の程度まで信用することが出來るかを調べなければならぬ。先づ其の第一着手たる贋物であるや否やの鑑定が實に六ケ敷いので、中にも系圖、傳說、古文書、記錄などは隨分贋物が澤山あつて實に其の眞贋の鑑識に苦しむのである。古傳說は多く好事者の口から發たのであるとして系譜や記錄に至つては、主に自分の家の爲めに利益のあるやうにと苦心慘憺して胡魔化さうとしたものが多い。古文書は多く是れは誰れ々々の肉筆だと云つて高價に賣り附けやうとの詐僞心から贋物が出來るのである、紀伊の國には贋物の書ばかり製造して職業としてゐる家が非常に多いさうである。又名家の後裔の中に自分は先祖程豪く無いから、切めて先祖の筆蹟だけでも贋せて、其れを先祖の肉筆でもあるかのやうに胡魔化して、高價に賣つて糊口してゐる憐むべき子孫もあると云ふことである。其れは兎に角、其れ〳〵豫備の智識のお蔭で贋物と眞物との區別が漸と判然分つたとして、歷史の證據物件として役に立たぬ部分は、是れを捨てゝ了ひ、役に立つ部分だけ、拾ひあげて、其れで以て歷史を編み上げるのである。併し玆に拾ひあげた證據物件の中、齊く同じ事を證據立てゝ呉れると大層都合が好いのであるが、大抵の場合は反對の事を證據立てゝゐるのである。故に十なら十だけ證據物件が集まつた中で、十が十まで甲と云ふ事を證據立てゝゐる場合には確實と云ひ、甲を證據立てる證據物件が七八もあつて、乙を證據立てゝゐるのが二三もある時は半確實と云ひ、十中甲が五、乙が五の時には未詳と云ひ、十中甲を證據立てゝゐるものが二三しか無い時には是れを不審と云ひ、十中甲を證據立てゝゐるものが一つも無い時は之を不確實と云ふのである。扨て一々例を取つて見れば楠正成が湊川で打死したとの證據物件は甚だ多くあるが、其れに對して打死にせぬと云ふ證據は一つも無い、故に楠正成の湊川戰死は確實であ

る。半確實の場合は歷史上至つて多い故に略すとして楠正成は古來奇計の名人とされてあるが、證據物件に依つて調べて見ると、奇計を出したと書いてあるものと、其れが書いて無いものと半々位である故に、之は未詳だと云ふのである。次に兒島高德の事跡は唯だ太平記にあるばかりで其他の書籍には一つも載つて居らぬ故、殘念ながら兒島高德と云ふ人にあつた事は不審と云はねばならぬのである。次に義經が北海道へ逃げて行つたとの說は、能く人々の云ふ所であるが、其の證據物件としては一つも見出す事が出來ぬ故、是れは不確實と云はねばならぬ。

此處に鳥渡斷つて置くのは、以上列擧した證據物件は如何して其れが出來たのであるかと云ふのを調べねばならないのである。即ち是れを人に譬へて見れば、鳥渡面會たばかりでは其人の性質が分らぬ故うつかりとは信用する事が出來ぬ。其れで其人を何の位まで信用しても大丈夫であるかと云ふ事を確かめるには、其人の生年月日、生まれた故鄉、其兩親の身元素性を探ぐらねばならぬやうに、歷史の證據物件を信用するにも何時頃出來たのであるか何處で出來たのであるか、誰れが作つたのであるかと、一々其れを調べて見て、扨て而して後其の信用する程度に依つて假に一等史料とか、二等史料とか、三等、四等、五等と云ふやうに順々に符號を附けて置くのである。

△史實の復活

上に述べた史料に依つて、吾等は歷史を編むのであるが、其前に更に注意しなければならぬ三個條の條件がある。即ち天然條件、心理條件、文化條件である、と云つたばかりでは能くは分らないであらうが、其れは斯う云ふ事なのである。歷史即ち人間の活動した跡を考へるのであるから、第一人間と云ふ者は如何なる者であるかを察知せねばならぬ。更に精しく云へば人間と雖も元來地球上の一生物たるに過ぎぬのであるから、其の土地の狀況や氣候の奈何に依つて、樣々に風俗習慣を異にする事を察知せねばならぬ。次に何處の

國でも、各々其風俗習慣を異にする以上は、其の由つて來たる所、即ち各國共に異なつたる心理を有してをる事は明かである。支那人は神經が鈍いとか、佛蘭西人は輕跳であるとか、英國人は着實であるとか、更に小なる區域に於ても、鹿兒島縣人は勇悍であるとか、京都人は優美であるとか、東京人は氣が早いとか、皆な其れ〳〵其の住んで居る場所に依つて少しづゝ心理を異にしてゐる。是れを國民精神と云ふのである。又各々時代々々に依つて多少宛の性質が變つてゐるのを見る。日本で云つて見れば、太古時代は質朴であり、平安朝時代は華奢であり、鎌倉時代は厭世思想が瀰漫してゐたなど〻、斯くの如く時代々々に依つて各々其の時代の特殊の性質を發揮してゐる。是れを名づけて時代精神と云ふ。故に如何なる英雄でも豪傑でも多少は其の國、其の時代の一般の心理に異なつてゐる所があらうとも、全體から云へば猶且其のお多分に洩れぬのである。であるから歷史家は常に其の時代精神と國民精神との二つに注意しなければならぬのである。扨て其次には文化條件であるが、一國なり一都市なりが文明に赴く主なる原因は種々あらうが經濟事情が最も與つて力あるのである。社會を植物に譬ふれば、經濟事情は日光、空氣、溫度と云ふやうな者で、學藝技術は其の花である、故に其の社會を研究するには文化條件として、其の時代の經濟事情、學藝技術を察知する事が最も必要である。扨て以上の三個の條件を決して腦裡から離さずに置いて常に是れを參考に備へながら彼の史料を持つ來て一の歷史を組立てるのである。勿論史料と云ふ者は恰も動物や植物の、骨なり幹なりが化石となつて地面の下に埋沒してゐたのを掘り上げたやうなものであるから、其れに依つて動物や植物を、今目前見るやうに復活させるのは却々困難であるが、其點が學者の大手腕を要するところである。嘗て或る動物學者の話に依れば、一枚の腰の骨を發掘しても、僅に其の動物の形態は勿論、性質に至るまで推察する事が出來るとのことである。其れは先づ埋沒してあつた土地に依つて、其處の地層を考へ、凡そ今より何千

年以前に住んでゐた動物であると云ふ推測を下し、次に其地層に依つて、以前其處は陸地であつたか、水中であつたかと云ふ事も分る。若し陸上であつたとすれば其他の動物の化石を考へて凡そ如何なる種類の動物が蕃殖してゐたかと云ふ事も分つて來れば其れに依つて一枚の腰骨が斯れ程の大さがあれば、それを連結する所の脚の大さも略ぼ此位の大さは無ければならぬ。と斯くの如く次第々々に考へに考へて、其の動物の全形を組立て、之に血液を流し、神經系統を挿入して、漸く前世紀の動物を復活させるのである、史實の復活に於ても亦た斯くの如く、當時の時代精神や國民精神や、天然の有樣文化の具合を考へて、少ない歷史の材料を基に、種々樣々の推測を下して、一つの史實を復活をさせるのである、此處で鳥渡斷つて置くのは、歷史家の推測は小說家詩人等の空想とは全く異つて、一にも二にも證據物件を基礎としなければならぬのである。例を引いて云へば、小說



家や詩人の空想は或る一點を基にして無數の直線曲線を書き得るのであるが、歷史家の推測は、恰度二點間の最短距離には唯だ一本の直線より他には容るゝを許さぬやうなものである。

△歷史家の歷史編纂と——普通學として歷史を學ぶ事と

歷史家が歷史を編纂する方法は一にも二にも史料を基として組立てるのであつて、決して史料も何にも無い出鱈目を仰々しく吹立てるのは歷史家の最も職分に恥づる所である。換言すれば唯だ事實其の者を發表さへすれば其れで職分は盡きるのである。然るに全體素人と云ふ者は無理な注文をする者で、先年兒島高德は無かつた人であると云ふ說が立つた時に、余輩に對つて、斯う云ふ注文をした者があつた。「貴下も何卒立派な歷史家になつて、兒島高德を元の通りの忠臣にしたり、源義經は外國に行つて王になつたやうにして下さい」と。併し之は無理な注文と云はねばならぬ。兒島高德を生かしたいにも源義經を王にしたいにも肝腎の史料が充分に無い以上は左樣云ふ譯には行かぬ。恰度此の注文は、蜃氣樓は美しいから其中に住はせて下さい、と云ふのと同じである。

扨て吾等歷史家は前述の三個の根本條件は素よりの事、其他樣々な事を考察熟慮して歷史を編むのであるから、云はゞ世の中のあらゆる凡ての狀態が煮つまつて含まれてあるやうなものであるから、普通學として歷史を學ぶ時は、恰も常識養成の滋養物を飲むやうなものである。實に此の滋養物は種々の智識から鍊り固められてあるから、一度是れを溶かせば樣々の智識が浮び出づるのである。仔細に之を檢して、服用して、自分の常識を發達させるのが普通學を修める上に於て最も肝要である。

婦人立志の礎

白鷺生

▲成功せる女流政治家は良妻賢母

ローランド夫人

『戀情は唯是れ一場の美夢』とはローランド夫人の宿論と聞きつるが、實に夫人は戀情の擒とならずして理性の命ずる處に從ひたるぞ天晴なる、夫人名はマリーセーン佛國革命頃の人なり二十五歳にして佛國リオンの製造家たるエム、ローランドとて五十路の坂を越へたる半白の老紳士と結婚せり、夫人が老紳士に心を傾けたりしは浮きたる情にあらずして、その人物を愛しその精神を慕ひ、その嚴正にして堅忍なる古哲學者風あるにその心を許せしが故なり、而もローランド氏は其實實利的、利己的にして、且つ殘忍酷薄の人物なりしよしなるか、而かも夫人はその缺點を恕すると共になるべくこれを善導し且つその尊むべき處を尊敬しつゝ妻としての義務を盡したり、後年夫人が革命事件によりて處刑せらるゝや、ローランド氏は夫人の死を聞き『斯くも罪惡に染りたる世の中には一日も生くること能はず』とて短銃もて自殺を遂げたりき、夫妻相信じ相容せるに非らずんば如何で斯に至るべき、夫人は人の妻として慥に成功したる一人なりき。

元來夫人は幼少の頃より聖書、と聖徒傳を愛讀せしが、特に尤も嗜讀して巻を釋てざりしはプルタークの豪傑傳なりしといふ。されば共和政治を主義として自由平等を理想したりしかば、佛國の改革に際し、良人はリオン市より選出されて巴里に上り、夫人は良人を助けて過激なる共和主義に組みし、志士の間を往來し終に同志の中心となり、こゝに隱然巾幗首領となりたり、さればヂロンヂスト黨を以て一度び内閣を組織するやローランドは内務卿となりしが、これぞ其實夫人の傀儡たるに過ぎざりき。そのマラー、ダントン等の山嶽黨が勢力を得るに及びて夫人は主として第一に捕

はれて獄に投ぜられぬ、此時「後世に訴ふの書」てふ自叙傳を著して永く義烈の紀念を留む、その死刑の宣告を受くるや、彼女は心の潔白を表彰すべく白衣を以て身を包み山なす群集を排して進めり圍繞せる群集、慘として敢て一言を發するものなし、偶々一狂漢あり厲聲して「斷頭場へ〳〵」と呼ぶや、夫人は片頬に笑を湛へ「然り妾は直に斷頭場へ送られん、されど妾を送るものも亦間もなく斷頭場に送られん、而も妾は今罪なくして行くも彼等は重き罪を負ふて行かん」と言へり、斯くてその自由の肖像の前に至るや夫人は慘として「嗚呼自由よ爾の名に於て幾多の罪惡は行はるゝとよ」と叫び、その刑場に着するや、處刑中、卑劣なる壯者を顧みつ「汝先づ刑に就けよ少くとも妾の流血を見るの苦痛を免るべければ」と云へり、斯くて三十九歳を一期として刑場の露と消えたり、即ち政治家としてその主義の爲に殉せしなりき以て、儒夫をして起たしむる慨ありと云ふべし。

　夫人は政治運動に熱中せりと雖も、その母としての責任を苟且にせざりけり、夫人に一人の娘其名をユードラと呼ぶ娘あり、當時上流社會の風習として家庭教師を雇ひて兒女の教育を一任するの風なりしが、夫人はたとへ繁劇なる生涯を送るも「兒童の教育は母たるものゝ第一の務にして容易に他人に任すべきにあらず」とて、自ら乳を含め、襁褓の世話をもなしたりといふ。

△一かゝへあれど柳は柳かな

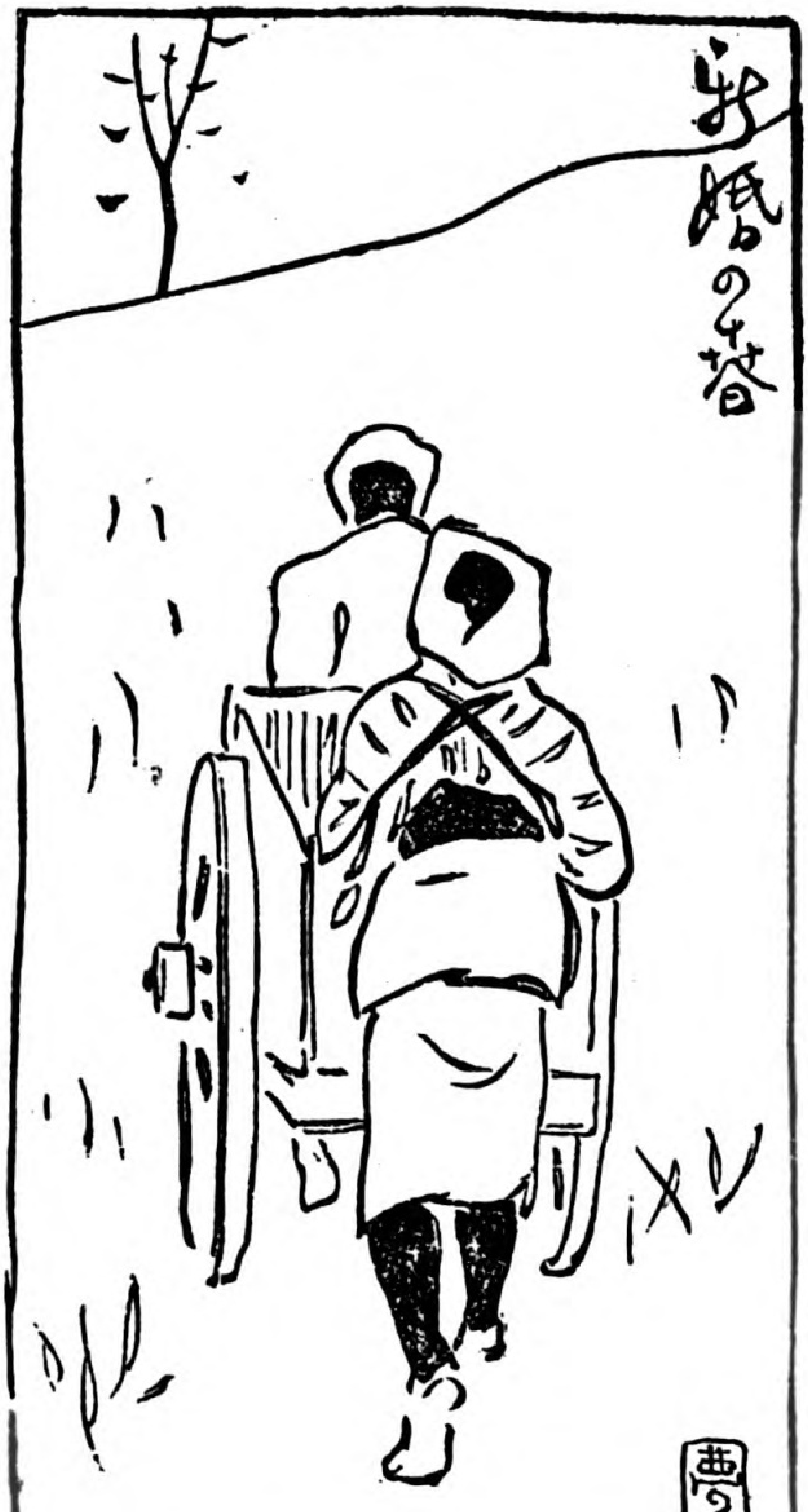
加賀の千代女

千代女は加賀の國松任と云へる小驛の民家に生れ、幼少の頃より俳諧を好みて最初支考に就て學び、後に盧元を師とす、支考歿して後は美濃の盧元坊の名を聞き之を慕ひしも、遼隔の地とて容易に尋ぬべき機もあらざりしが、偶盧元行脚して加賀に至りたれば、早速盧元が旅宿につきて教を乞へり、盧元もその篤志を感じて即ち席を與へ先づ試みに課題「杜鵑」を以てす、千代靜思句を作ると幾十首に及べども未だ一として盧

元師の心に留まる程の句を得ず遂に曉に達す、流石の千代も己が未熟なるに耻ち覺えず、

ほとゝぎす〱とて明けにけり

と叫びぬ、盧元こゝに至て感賞措かず乃ち訓て曰く俳諧の眞味は其處なり子よろしく終身此句をもて心とすべしとて、それより師弟の約を結べりと云ふ、世の人多くは千代の俳才を以てその天賦に出づるものと爲すと雖も、彼女が斯道の堂に上れるものは斯る熱心と勵精との成果に外ならざりき。



又世人は彼女を以て俳諧一片の婦女子とのみ思ふべけれど『一抱あれど柳は柳かな』にて、その女性としても淑徳の輙く企及すべからざるものあり、彼女が妙齡に及んで結婚するや『しぶかろか知らねど柿の初ちぎり』以て良人に對する彼女が思想を見るべく、又その子を亡ふや『蜻蛉つり今日はどこまで行つたやら』以て其母として慈み深きを知るべし、その良人のみまかりしときは『起てみつ寢て見つ蚊帳の廣さかな』と而も彼女が貞操は頗る堅固にして二十五歳にして寡婦となり爾來剃髮して素園と號し全く世外の人となりぬ、彼女が殘せし女子訓あり懇ろに四民妻

女の心得を述べたり、就てその理想の一班を見るべし。

四民の世に立つそれぞれの務あり、男に四民あれば女も亦然り、

士は亂れたる世に逆ふを打て靜謐をなし、治まる世は暴を禁じ賊を誅し萬民を安穩ならしめ、文武を以て治亂に處し給ふ君に近侍し、共に其事にあづかる故三民の上にあり、されば士の妻たり女たる者は風俗容儀立居振舞言葉をたしなみ、人柄よくあるべし、形態の媚たるを好むべからず、惰氣の心はその身の恥なるを辨へ、夫に心得違あらば詞やはらかによくよく諫め、萬一不幸にして危難ある時は、身命を惜まず舅姑夫に先だち、貞烈の操正しく、如何にも士の妻ぞ女ぞといはるゝ程にあるべし。

農は其業賤しといへども、上御一人より下諸萬人の食を作り出だす故、に次序工商の上にあり、その妻たり女たる者は、養蠶機織の事は云ふもさらなり、晝は野先の餉を持運び、夜は月下に衣を擣ち、粗飯粗服し、耕作の業盛なるときは、夫と共に朝の風に梳り夕の雨に浴し、露を犯し霜を踏みつゝ粒々の辛苦を手つだふなれば丈夫も及ばず疲勞すれども、毎々打開きたる曠野山水の絶景を眺望し、氣樂なる世渡りなれば、心も悠に、おのづから長壽を保つべし、農家には先祖やんごとなき人の裔、代々連綿として筋目正しきも多し、質素を本とし奢侈なく、如斯の風俗うつり變らぬやうに子供達衆の相續を心とすべし。

工は食と衣と住との三、なくて叶はぬ最第一その住を職とし、神佛の宮殿樓閣帝王の御座、貴人高位の居所を造り作すものゆゑ商の上にあり。

商は金錢の利を積みて產業をなす故下にあり、工商の妻となり女たるは稼は夫に任せ、内を治むること肝要なり、物かき縫針の心がけは定まりたること、閑ある時は算數も覺ゆべし、内を治むるとは家事の取締り、弟子奉公人の取扱、師弟主從の間武士と違ひ、嚴密に過ぎなば却て渡世の妨も出來るべく、寛にすぎては不慮の損失もあるべし、上下其業を出精し、共々利潤を得て、家名を長久に傳ふるを思ふべし、豪富の家たりとも奢侈超え過ぐるときは衰微す、況んや其下には分外の美食美服せず、雜費失墜を厭ひ、町家相應の形態を旨とし、妓女傾城の風俗を禁ずべく、朝寐すべからず、毎日の掃除に念入れ、夜は火の元別して大切にみづから見まわるべし、下々を憐み他人へ挨拶愛相よからんは繁昌の元たるべし。

四民の外に遊民あり、其妻たり女たるものは、假令藝能ありて尊き家業の世渡りに差支へあらずとも、子孫へ傳ふべき定まれる職分なきは、孟子といへる書に、恒の產なしといふもの是なり、夫にも勸め申合せて、何なりとも家業を取立て四民の中に列ならんとねがふべし、みづから今俳林にありて所謂遊民を友とすること多し、憶ふ處ありてこれを誌すと云。

▲文星の冠は寡婦の貞操を飾る

エムマ、チヴヰツト女

エムマ、チヴヰツト孃は米國のメーリホルドに生る、四歳にして其父に別れ祖母の手に育てらる、母再嫁するに及びて義父の手にて教育せられたり、二十三歳結婚してサウスウオルス夫人となりしが、二十七歳の時早く既に二人の幼兒を抱きて寡婦となれり、日頃文學の嗜好ありしが、亡夫の一週忌を過ぎつる頃匿名にてその處女作を公にし、終に新大陸の文星の冠を戴くに至れり、貞節最も固く餘年を送りしと云ふ、こゝに我が青年子女の參考にもと、夫人が傑作とせる『棄婦』中の一節を紹介すべし、

家庭の不幸の一原因は年若き男女が長上にも計らずして妄に自ら輕忽にも情愛を交換するに在り、一青年あり、美貌盛裝、動止端正にして才辨を弄し、其將來の理想を誇言するとせよ、他の短所の有無は一切之を問はずして、女子は忽ち心を動かされ、交際は日々親密を加へ、果ては相互の性質をも知らざるに早く既に取り返し難き大禍をも了するに至ることあり、何ぞ知らん此の容貌よく風采よく行狀よき青年は縱令暗き罪の淵には墮落せずとも、唯是れ泛々瓢々主義を缺き、練磨を缺き、徒に虚名を是れ求め、德行を外に裝へる海鼠流の男子に外ならざるを……謹愼の德を缺くを以て、動もすれば輕擧妄動終に何の思慮もなく咄嗟の間に生涯の大事を了せずや、忠實の德を缺くを以て不規則に流れ不信實を來して終に離別の不幸を招き覆水盆に返らざるに至るべし、又剛勇の德を缺けるを以て些少の故障の爲に神聖なる契約を反古と爲すなり、云々

▲貞節は女性が絕對の勢力なり

チュリヤ

世に馨しのチュリヤ姬、汝が崇きみ姿は、さながら天津乙女かや、いづこの里に尋ぬるも、如何なる人に求むるも、汝にますらん色も香も、たへてこの世に見えぬなり、

と、詩人アリゾトは歌ひ、又詩人タッソはその著『アマダス』に於て其名を揭げて譽れを傳へたり、抑もこのジュリヤと云へるは其昔以太利國に生れ、年若くしてジュリヤが父よりも年高きコロンヤ公爵に嫁ぎぬ、

然るに新婚の夢いまだ覺めざる內に公爵は山成す財產を殘して逝けり、而かも未亡人は絕世の美人にして、巨萬の遺產を相續せり、こゝを以て以太利第一の貴族の面々より頓に求婚せられたるも、その意思の堅きこと金石の如く貞操世に隱れなかりける、當時地中海の對岸なる土耳其中興の英主ソリマン二世はその武威遐近に轟きけるが、端なく夫人の風評を傳へ聞きて見ぬ戀にあくがれ、此に腹心の海軍司令官たるバルバロサに旨を傳へて潛かに奪ひ取らしめん工風をばなしける、即ち二千の兵馬枚を含みて押寄せたりしが、夫人は逸早くこれを聞きて身を以て山中に逃れぬ、かくて僅に前門の虎を防ぎたりしも、更に又山賊の手に落ち玆に後門の狼の餌食となるべきを、有らん限りの財を盡くして身を全ふするを得たりき、その後は專ら心を文學に寄せて靜かに世を送りたる賢婦人なりき。

▲名卿の種空しからず

野中婉子女史

揮レ涙觀ニ君筆一。名卿種不レ空。詩源小町妙。
經術大家風。如日鏡奩底。有レ天鐵圖中。
務應レ存ニ碩果一。明月出ニ麼蒙一。

是れ谷隈山將軍の遺祖、當年の碩儒谷重遠氏が野中婉子女史の述作に題せる詩なり、經學文章を以て小野小町に比し、曹大家に準せる以てその尋常一樣の女流にあらざりしを知るべし、そも此の婉子女史と云へるは土藩の賢大夫野中兼山の娘にして、幼少の頃より學に志し當時文數未だ開けず書籍に乏しかりければ、四書の如きは自ら寫して之を修めたりしと云ふ、父兼山藩政に參與して治蹟大に揚り藩主の眷遇も亦厚く終に秩祿一萬石を食むに至る藩中復その肩を比すべきものなし、爲に他の妬みを受けて災ひ身に及ばんとするや、兼山潔く自ら致仕して客を謝し獨り風月を友とす、實に寛文三年七月とす、十二月暴に病みて歿す、是れ妬者の毒する所なりと云ひ傳へぬ、兄弟繼家を繼ぐ、翌年父の故を以て家を擧げて幡多郡宿毛村に謫せられたり、婉子時に年僅に五才、長じて醫を業として

以てその家計をして乏しからざらしめたるが、その技赤妙を極めしかば、藩士の來て治を請ふもの相次ぐ、婉子患者の來るあれば相見ることを肯せず、只絲を患者の手首に結び障子を隔てゝ脈搏を診し症に應じて投藥するに盡く効驗あり、故に當時の俚諺に技の精妙に至れるものを稱して婉子の絲脈と云へりと。

元祿十六年に至りて婉女赦に遇ふ時に年四十五才、土佐郡朝倉村に遷る、婉子もし家に累なかりせば元と歴々執政家の令孃なり錦繡を纏ひ玉の輿に乘るべき身



の、江湖に落魄して草根木皮を鬻ぎ以て僅に生活するに至る、藩主もその情の憫むべきものあるを察して、俸祿八人口を賜ふて祖先の祀を絶たざらしめぬ。されど婉女はこれを辭して曰く、妾は是れ罪辟の餘孽、茲に日月を仰ぎて生存せるすら君恩已に餘りあり、而るに俸祿を受けて口腹を飽かしむるは却て恐れありとて、賜を拜せざりしが、野中家の舊臣等その母堂の老ひたるを以て強て受くべきことを勸むるに至り、漸く節を折りてその祿を受けたりといふ、斯く落魄幾十年の

久しきにありと雖も、未だ曾てその身の舊を忘れず、應接進退その執政家たりしの格を損せしことなく、一日輿して城下に出づ偶々途に一老臣の野遊せるに行き遇ひ、擔夫のこれを避けんとするや、婉子叱して曰く妾は野中良繼の女なり大夫とて何ぞ避くべきやはとて、其儘通過せしめたりと以てその自ら持するの高き一班を知るべし、斯かりし程に藩主より諭して野中家の舊臣某に嫁せしめんとせらるゝや婉子乃ち曰く妾は不幸にして孤獨依るべき所なきも實に前執政の女なり、今志を屈して身を辱しめ舊臣の妻となり、温飽を圖るは、亡父在天の靈に對して爲すに忍びざる所なりとて遂に從はざりき、斯て居常眉を剃らず齒を涅めず振袖を着て終生處女の風を變せざりしと云ふも亦た一奇なり、常に祖先の祭を重んじ命日には曾て蘋藻の祀を缺きしことなく、寶永五年祖先の祀堂を香美郡野地村に建て水田五反を寄附して永世祭の料に充て、晩年又石碑を潮江山の先塋に建てたり、享保十年十二月天壽を以て逝く行年六十有六、嗚呼女史の如きはその艱難に處して獨立獨行よく祖父を辱しめざるものにあらずや。

▲纎手一家を支ふ一枝の事

ポーリン

ヘール夫人が『佛蘭西の女記者中眞理の爲に道德の爲に大に人心を皷舞振作せしもの恐くは此女の右に出づるものなからむ』とまで稱へたりしは、巴里の名士モーランの遺子ポーリンとす、父モーラン歿して革命の亂に盡く家財を失ひ、母は五人の幼子女を抱きて途方に暮れけるを、ポーリン此時僅かに十七才の少女なりしが、一家の困阨を見かねて決然パンの爲に筆を執りぬ、天此の健氣なる乙女の心を憐れと見そなはせしにや、その處女作として世に出だせし一篇の小説は案外成功して、爾來『ド、パブリスト』と云へる巴里刊行の雜誌の寄書家となりて江湖の喝采を博し、十七年の久しき纎手もて一家を支へ來りしが、多年心勞の爲にや病を得て再び困阨の淵に沈淪するに至れり、然るに今度は無名の文士ありて原稿を寄贈し、ポーリンに代

て『バプリスト』の寄稿を助け貰ひしかば幸に安じて攝養することを得たりき、而してこの陰德家は後年文明論の著者として十八世紀の文壇を擾したる有名なるエムギゾー氏ならんとは、後五年を經て三十九歳のポーリンは未だ二十五歳計りのギゾー氏と結婚式を擧げたり

斯くてポーリン内助の功空しからず、ギゾー氏が芳名は隆々旭日の天に冲するの勢ひ以て佛國の文學界に成功したりき、同棲十五年にして良人に先つて逝き天晴れ女文學者として成功の鑑と仰がれける。

洋食一品料理

▲青豌豆の煮方（フライなどの添へ物）

莢をむきたる豌豆を二合ほど熱湯に入れ、又鹽を小匙に一杯入れて火を強くして十五分間程煮、豆が指にて容易につぶれる時は夫にてよし、もしつぶれざれば更に五分乃至十分間煮、湯をしぼりて、バターを小匙に一杯入れてかきまはすべし、熱き内フライド、チツキン又は何肉にても一緒に食してよし。

▲スチームポテト

馬鈴薯をよく洗ひて、鍋、又蒸籠に入れて肉刺が容易にさゝる位になるまで四十分乃至四十五分間蒸し溫かき、鉢にもるべし、食する時にめい／＼が薯の皮をむき勝手にバター、鹽、胡椒等にて味をつく可し。

▲マッシユド、ポテト

六個の大きな馬鈴薯の皮をむきて湯の沸騰ち居る内深鍋に入れて三十分間又は薯が容易に肉刺にさゝる位まで充分煮、火よりおろして湯をしぼり、直ぐに肉刺又は薯つぶし器にて塊のなくなりて滑らかになるまでよくつぶし、バターを大匙一杯と、鹽を小匙に一杯と、胡椒を三振と熱き牛乳を五勺加へて輕くなるまでよくかきまぜるべし、溫き皿にもりて直ちに食す。

▲馬鈴薯のサラダ

やゝ大きい馬鈴薯を十個ばかり皮をむきて軟らかになるまで煮、湯をしぼりて薯をつぶし、鹽を少し入れて、其未だ冷めぬ内に別項のサラダ、ドレッシングを大匙に五杯と、細かく刻みたる葱を大匙一杯と、刻みたるオランダミツバを大匙に一杯とを入れてよく混ぜ合はせ、冷めたき水の内に冷やしたる茶碗又は鉢に移し入れ、冷めてから茶碗又は鉢より出し角切に切る可し、葱とサラダドレッシングの多少は人の好により適宜に調味してよし。

▲鰕のサラダ

鰕を煮て皮をむき、萵苣の葉の上にならべのせ、適宜にサラダ、ドレッシングをかくべし。

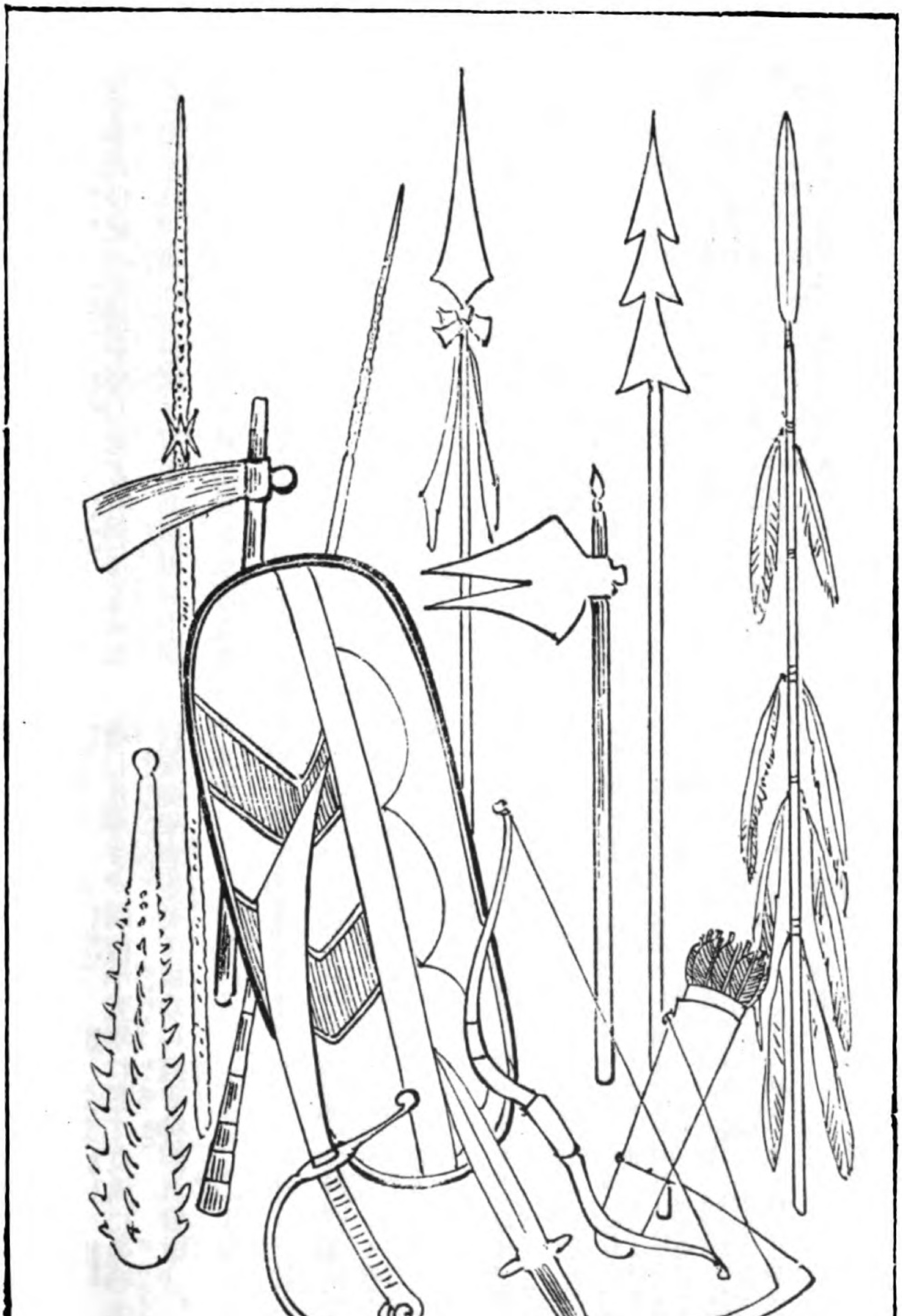
▲サラダ、ドレッシングの製法

鉢に鷄卵の黄身を三個入れ又芥子を小匙に三杯と、鹽を小匙に二杯と、中匙に三杯の砂糖とオレーフ油か又はとけたバターを大匙に三杯と麥粉を中匙に一杯入れて一緒によくかきまはし、二合の酢を深鍋に入れて、其にえたちたた時前の混ぜ合はせたた物を入れ、絶えずかきまはしながらとろ火にて濃くどろ／＼になるまで煮て火よりおろすべし、これを保存し置くにはガラスの壷又はコツプに入れて鷄卵の白身に浸したる紙を以て蓋となすべし、容器の蓋をあけたる時は、一々新しき紙を白身に浸して蓋をなすべし。

▲魚の塡料

パン粉二合と鹽を小匙に中分と、胡椒を一振とパースレー（洋芹）の刻みたるを小匙に一杯と溶解したるバターを大匙に一杯鉢に入れてよく混ぜ合はすべし、もし餘り乾き過ぐると思はゞ熱湯を大匙に一杯加ふ可し、これは魚の腹につめて蒸し又は燒くものなり。

南洋土蠻の武器



世態

情死せし男女の自白

×　×　×

△少年時代に惡しき感化を受けたる人
△父母の情育の不完全なりし人
△境遇の不可なりし人
△家庭の愛に渴したる人
△意志の薄弱なる人
△感情に熱して理性の明を失ひたる人
△失戀の反動より來りし人
△放蕩の結果身を措くに處なき人
△すべて心情に創痍を受けたる人
△社會的の制裁とその壓迫に堪へざる人
△生活上の方便を喪ひたる人

人は花に醉ふて霞に眠る四月十五日夜の出來事なり。暗雲宵に斂まりて下弦の弦月(陰曆二十日頃)ほのかに東海の波を照らし天地寂として海鳥潮にむせぶの頃、若き一双の男女は東京灣の一角、品川臺場の上に立てり、此世の名殘を涙に盡してイザとばかり海中に投じたり、されど折柄干潮の水淺くして胸部に及ばず、一丁、二丁、水に波紋を織つて沖へ沖へと死を急ぎしも、遠淺の波心なくて身を沒するに至らず、五丁隔て六丁隔て、陸影朧に夢と隔てし頃、波瀾く高うして全身を沒するに至れば男は女の手を把り、女は男の項を抱きて共に離れじの契も生死の境、浮きつ沈みつ夢うつゝ、月は唯たおぼろに白うして二個の幽魂は今天に上らんとす。

唯見る一隻の漁舟、夜漁の網をあげつゝ來るに逢ふ、兩個の黑影纖波を碎きて海中に入るよと見れば、蒼白き一双の男女は抱き合ふたる儘舟中に移されたり。茲に絕えんとしたる二つの玉の緒は危くし漁夫の手によつて救はれ、こゝに應急の手當を受け、程もなく品川の警察署に收容されぬ。

▲情死者は何人

○彼等の情交は如何にして結ばれしぞ

山に名高き信濃の善光寺、その千曲の川を溯ること十數里にして某郡某村あり山綠にして水清き仙境に人

となりしも宿世の緣惡かりし故にや、彼れが少年時代はこの靈妙なる天然の感化を受くるの機會少くして、幼少より早く既に人生の悲痛を味ふべく餘義なくされたり、一と口に言へば彼れが家庭は圓滿ならざりし、やゝ長じて他家の養子となり、小學教員を奉職して長野市に移れり、當時同じ學校に奉職せる一女教師ありこれも又同郡の出生にて其の妙齡時代には尋常ならざる多恨多涙の悲哀史を胸につゝめる一個薄命の女性にぞある、この薄倖女性と人生の痛苦を具さに嘗めたる一個偏僻性の男子とは端なくも意氣投合してこゝに不健全なる情交を結ぶに至れり。

男子名を時次郎といふ、川村は其の姓なり、二十六歲、女子名を梅子といふ岡村は其の姓なり、彼等は斯くして不健全なる戀に落ちしが、次第に募りて人目の關を隔て兼ね、遂に同僚の排斥するところとなりて解職するの止むなきに至れり。

教職を解かれし彼等は、爲すこともなく日を送りしが、所詮鄕黨の間に容れらるべくもあらざれば、寧そ知らぬ他國に落ちのびて身の方向をつけんものと兩人手を取り交はして東京に上りしは去二月の事なりき、斯くて男女は懷ろの裕かなるまゝ暫らく各所の旅宿に果敢なき月日を送り居りしが、追々所持金も盡くるに困じて果ては別れ〳〵に知己を賴りて、不如意勝ちなる日を送る身の上とはなりしなり。

▲何故に彼等は情死せしか

何故に彼等は情死せしか、勿論情死は世に所謂痴情の果なり、其の成行は從來世間に有觸たる幾多の無分別なる青年男女が新聞紙上に殘せし浮名によりて其の徑行の大凡は察せらるべし。さりながら今この容易ならざる大罪惡が如何なる事情によりて行はるゝかを個々の境遇に立ち入りて仔細に見る時は、其の間に又種々なる特殊狀態の存在するを發見すべし。家庭の教育男女情交の內容、周圍の關係、生活狀態、當事者の性行、幷びに其の精神狀態の如何等尤も研究を要すべき所なるべし。

今記者が親しくこの無分別を企てたる男女の懺悔談を聞き、其の各々の自白により、其の精神狀態の如何を見るに及んで端なく心頭に浮びたる一條の人情の暗黒史は意志の薄弱なる痴男痴女子を驅つて以て情死てふ罪惡を敢てせしむるに至るの徑路を認めしめて轉た慄然たらしむるものあり、今この不祥事件を掲げて大方淑女の淸鑒を汚すは恐懼に堪へざる處なれども又以て世上戒愼の料たらしめん微意のみ。

▲救ひし漁夫の話

救けたのは私と今一人相棒でしたあの日夕方から品川沖へ烏賊の宵釣に出かけましたので、烏賊は漁れませんでしたが、其代りまづ好い後生をしたと喜んで居ます。丁度日沒から曇つて來たからはて一雨來る哩と思つた程でもなく、幸ひ九時頃からすつかり晴れてお月樣が出ましたからこれなら大丈夫と私共は三四里も沖へ漕出しました。けれど烏賊はどうしたとやら薩張り釣れません、四時間許の間に僅か二十とは情無い噺で、寧そ歸らうかと思ひ、御臺場の先まで來ると何だか黑いものがふかふかして居るんです。懲那淺瀨に鮪でもあるまいと思つて船を近づけて見ると入水者の死骸らしいが、まだ動いてゐますから詮方なしに飛込んで船の中へ擔ぎ上げて見ると、男女二人、二の腕を手拭で結び、女の方はモウ絶息の體と見ましたが男の方はまだ虫の息で、身體も少しは溫味があるやうでもありましたから、直ぐに介抱して水を吐かせる濱へ着けて藁火を焚き、いろいろと大騷ぎをした甲斐があつて二人とも息を吹返しましたが、誠に不思議な因緣でしたそして男女とも身體中が生疵だらけでしたから、どうしたものかと聞いて見ると、汐水を呑んでも死切れず、苦しまぎれに夢中で掴み合つたものだらうとの事でした。そこで私はア、誠に無分別な事お前さん方は若い身で住い身軀を持ち永年親々に苦勞を掛けて置きながら、何故コンナ無分別を起こしたのですと尋ねると、女の方はケツメリと體をくづしてそして蒼醒めた顏でしくしく泣いて居ましたが、男はそれでも、確乎としたもので何共イヤ申譯がない、誠に馬鹿な眞似をやつて皆樣に御迷惑をかけました、との挨拶でしたそれから取敢へず品川署へ擔ぎ込みましてそれで漸く役目を濟ませました。

情死したる女子の自白

誠にお恥しい次第で、ほんとうに穴にも入りたい心地です、ですから今更もう何事も申上げますまい、いえ又こんな事を申上げられた譯のものでも厶いません

ですが貴方は〇〇さんを御存じの方といへば勿論アノ川村(男の姓)からもお聞でございましたらうから懺悔するのは償罪の一つですから包まず有の儘を申上げて復び世間にこんな無分別のないやうにと心から祈る考へで申しませう。誠にお恥かしい事ですが妾共はこれで二度目の心中です、そして二度とも死に切れないといふのはどうした因果でせうか、考へて見るとこれも妾の淫奔からでせう、情死は大罪でせう、生の親に對し、又世間へ對しても本統に罪惡に違ひはございますまい、ですからこれは妾共が天から見放されたものだと思つて甘んじてこの罪名を受けるつもりですから、何にも人に對して恨むことはございません、けれど、妾共が今回かういふ恥曝しを致すやうになつた原因といふ事に就ては少々申しあげ度と存じます、これは自分の親族、家庭、並びに境遇といふ事が大變に關係を持つて居りますから勢ひそれを申さなければなりませんが、それは大變にお恥かしい事で、今更私の一家の恥辱を世間へ出すといふ事は何分にも忍びませんけれども、既に一切の事柄を御聞及びになつたとすれば妾の方丈けそれを包み匿しをするのも、よろしくありませんから申しませう。

△幼時の境遇

實を申すと今回の原因をなしたのは私の義兄の不品行からです、斯樣申すと何だか罪を人に嫁するやうになりますけれども事實を申し上げると矢張そうです、一體この義兄と申すは、妾の實の姉の良人なのです、親戚の手で育ちました、で父母の愛とか、家庭の暖か味とかいふやうな味は少しも知りません、そして妾がこんなに身を持ち崩したのもつまりは妾の意志の薄弱からでせう。姉は十八の歲今の義兄の處へ嫁きまして同時に妾も其家の寄食人となりましたので、申せば義兄は妾の恩人です、けれど其の恩人が妾の身を墮落せしめた惡魔にならうとは、何たる惡因緣でせうか。まづ實際の事を申上げませう。

△少女の操を破りし義兄

義兄は決して初めからの惡人ではありません、又元より今日とても決して惡人ではありません、實際は普通の人情を備へ、又人に對して同情もあり、常識の缺けた處ろとては認めませんのみならず、妾が姉と一緒に引取られて參つた時は隨分親切でもあり、旁々して妾は大變に賴母しく思つて居りましたが、いつしか妾が學校敎師となつて間もなく義兄には魔でも刺したものと見え、妾に向つて怪しからぬ振舞をするやうになり、始めは只一時の座興と思つて居ましたのが、いよ〳〵その獸心は本統のものとなつて、一夜姉の不在中恐ろしい權幕になりまして遂に妾ば惡魔の手に落ちて仕舞ひました、嗚呼何たる因果でせう。

一時は仁者と思ひ恩人と慕ふて居た其人が妾の爲めには身を引裂く惡魔にならうとは、賴むに人なく、泣くにも泣かれず、膓は千切るゝばかり、どうしてこの身を全ふする事が出來やうかとそれからといふものは唯煩悶に日を暮らして居りました。

それで時によつてはいつそ死なうとまで思ひつめた事もありましたが、それでも何だかまだ世の中が惜しいやうな心地がして、この儘死ぬもつまらぬ、そして嗚呼惡い義兄だ、實に人面獸心な奴だ、人は皆こんなものかと思つて見たりした事もありましたが、これが原因となつて遂々妾は墮落するやうになりました。もう此の頃はそんな事で仕事も手につかず、學校の方も段々不首尾になりました川村とあゝいふ關係となりましたのもつまりは義兄に對する面當といつたやうなわけで、それから學校を免職され、義兄の家を逐ひ出されたのは結句妾の本望でした。

△希望なき生活

そういふ譯で妾はもう乙女の心といふものは露ほどもなく、又將來樂しい希望を以て世に處するなどいふ殊勝な考は微塵もなく、世間はどう思はうが、自分の身はどうならうが一向構はぬといふ捨撥主義になつて仕舞ひました。

かういふ譯で世の中は面白くない、希望のない生活をするよりはいつそ情死でもして仕舞ふのが罪亡ぼし

の一つだといふ様な考がむら〳〵と起つて來るやうになり、世の中は愚な物、つまらぬもの、艱難辛苦して暮して行くほどの價値のないものだと自分極めに高を括つて仕舞つたのが、つまり今日の結果を見るに至つた譯でせう。

△實姉に對する苦衷

で、斯樣に申上げると勢ひ義兄を恨む事になりますが、それと同時に姉に對して甚だ相濟ぬと考へます、元より何も彼も捨てゝ仕舞つた妾ではありますが、矢張人情として姉に對して濟まぬとそればかりが苦勞です、もし姉が、義兄と不義した事を知り、又其上人と情死するやうな事になつたのを聞いたらばどんなに妾を淫奔な奴、馬鹿な奴だと思つて肉親の妹にそんなものゝ出來たのを限りなく恨み悲しむのでせうと、それが大變に妾の心を苦しめます。

斯く語りつゝ打萎れたる彼女の態度容貌の上にはあり〳〵と神經の不健全なる徴候顯はれて一種いふべからざる陰慘の氣を帶びしが、記者はこれを形容して讀者に傳ふるは聊か人情に忍びざるを思ひて止みぬ。

男子の懺悔

私はモウ一端死んだ人間ですから、何も彼も打明けてお話致します。一體私は悪い傾向を帶びて居る性質で、世に所謂罪人です、詐欺や竊盗でなくも人の心を盗んで精神的の罪人といふ事は免かれません。時には自分ながら身に愛想が盡きて死なうとまで思つたとは二度や三度ではありません。畢竟は悪習慣に養はれて來た一個の墮落生で、これを今こゝで御話しするのは罪を悔改める爲めに必要な事で又大いに私の心中の苦悶を消す事にならうと存じます。私は現在郷里で五年も連添ふた妻もあれば子もある身分です。而も身は教育家の末席を汚して居る身分です、尤もこれは抑もからお話しなければ解らぬが、元來私の家庭は悪かつた、又境遇も良くありませんでした、私が身を持崩した抑々は結婚をした當時からで私は幼少の折に兩親を失くして兄の手で育てられたのですが、此の兄が聊か冷酷な性質で私と始終喧嘩ばかりして居ました。丁度廿一の年妻の家へ養子に貰はれましたが、此又妻家と云ふのが一通ならぬ矢釜しい家で、のみならず妻も又眞面目な婦人ではなかつた。勿論是等の委細を今こゝで申述べる必要はありませんが、その爲め私はいつも馬鹿らしい事と

感じまして、離縁して出やうかとも思つた事が幾度か知れません、併し實家へ歸れば父兄と衝突せねばならず、兎や角と考へて居る中に子供が出來ましたから止を得ず不愉快な月日を送つて居ましたが、兎角家が面白からぬが原因となつてとう〳〵其年から藝妓遊びの味を覺えて、其頃村の學校へ勤めて居たから多少の融通の利くものから、時々養家の金を引出しては酒色に耽るやうになり、遂には女を汚すことを何とも思はず次第に身を持ち崩して仕舞ひました。恰度二年ばかり恁那放埒を盡して居る中村中の評判となつて其學校にも居られず、同時に他の校へ轉任させられました。私の爲には結局幸でしたが岡村梅子と惡縁を結んだのは即ち此學校です。

▲梅子にも内心の秘密

があつた樣ですが、それは私が申す限りではありません。唯だ私と關係したのは昨年の二月人間の墮落は怖ろしいもので、毎日教室で机を併べて居る女と……實に大膽な事です。然る處ろ其年の十月頃からポツ〳〵二人の噂が持上つて二た月目には到頭兩人とも諭旨退職を申渡されました。同時に梅子は今まで寄寓して居た親戚にも見放され、世間に顏向も出來なくなり旁々して我々の運命は段々と迫つて參りました、

▲千曲川へ投身

極寒の正月の三日で、幸か不幸か人に妨げられて果すことが出來なかつたです。然うなつてはモウ恥の上塗りで、世間で矢釜しく言はるれば云はれる丈け意地が嵩じて來て全く自暴自棄です。最初は一寸とした意氣の投合で仲々夫婦とならうなどいふ考へでもなかつた仲が今度は死んでも離れまいと云ふ樣になつたのも畢竟世間に對する一種の反抗心から起つたのです。

▲情死は詩的にあらず

それから兩人で東京へ出ましたのは二月の下旬でした。當座は多少の蓄もありましたから其日暮しに一日一日と日を送つて、此先ドウ云ふ目的もありませんから止むなく銘々の知る邊を頼つて其家の厄介になつて居ましたが、サテ今の世の中に浮氣でなつた男女に安樂をさせる法もありますまいから萬事が不如意がちは當然な事で、止むなく奉公口を求める事にしたが中々思ふやうな處はなく爾かと云つてまさかに勞働者の仲間へも入り兼れ、四月の上旬頃には兩人とも絶對絶命となりました。それに郷里の方の新聞を見ると盛に我々の惡口が然かも面白おかしく例の筆法で書いてありまして世間の噂は一通でないから今更養家へ詫びて歸る譯にもゆかず、併し此儘東京に居たところで益々糊口に窮するばかりで、何の道兩人の運は盡きて居るのでした。

▲自業自得

再び情死の相談を決したのは四月の十五日、朝宿を出るまでは爾那考は更になかつたです、其の日梅子と向島から上野の花を見ての歸るさ、世間の人の陽氣に花見をしてゐるのを見るにつけ何とも云はれぬ悲しい思が胸に充ちて來ました。二人は上野の方へ參つて竹の臺の共同椅子に腰をかけて兎や角と思ひに沈みましたが見るとモウ日暮です、梅子も同じ心だつたと見えて私が不圖情死の事を言ひ出すと女は『今度こそは本統に死にましやう』と直に應じて呉れました。コノ決心はホンの一瞬間の發作で中々言葉には言ひつくされません。そこで日の暮れるのを竢つて根岸御院殿の阪へかゝり、こゝで鐵道往生をしやうかとも思ひましたが若し轢かれ損ふてはいけない、それよりも寧そ潔よく海へ身を投げて二人の恥を永劫に隱そうではないかと、相談を極めました。

▲情死當時の感想

何せよ殺急の思立ちですから遺書も何もありません、舟を雇つて臺場へ漕つけ其の上へ登つて、つく〴〵と梅子の顏を見ましたが何といふ事はなし哀れでした、でお前死ぬのは厭ぢやないかと聞きますと、『厭ですけれども爾那思をして生きて居る氣はありません』と云ふ、それなら思殘す事はないかと云へば『思殘すとはありません、今日は恰度母の命日ですから今度は死損なはぬやうにしませう』と云つて泣出しました。實際をいふと此時まで、まだ私は聊か迷つて居ましたが、こゝで彼女のいふ事を聞くと俄かに天地が迫つて來たやうな氣がしてもうこれが人間の最後だと觀念しました、でこの瞬間に鄕里に居る妻の事や、子供の事や、又は過ぎこし世のあらゆる事が取留もなく胸に浮んで來てつひ男泣きに泣出しました。で、もう善いか、それでは覺悟をしやうといふと女は自分の言ふなりに成つて居ます自分は目茶苦茶に女を引立てゝ遠淺の波を切つて五六丁も沖の方へ出ましたが實際これから先の事は十分に記臆しません、併し水を呑んでも容易に死切れないで苦しんだ事は幽かに覺えて居ます梅子は泳ぎの心得がないから唯もう私の身體にしがみ付き、苦し紛れに矢鱈と身を藻掻くやうです、又一層一思にと女の頸を〆めた事も覺へて居ます。それから

先はとんと記臆しません。救はれた當座は何だか薩張譯が解りませんでした、併し間もなく正氣になると大變に恐ろしく又恥かしく感じました、で警察へ送られ茲でいろ〳〵聞糺されて私は其翌日知人の許に引渡されました、梅子は引取人がないので下谷の警察に五日間留められた、と云ふ事です。私はもう人に面を見られるのが此上もなく辛いです。唯だ我自ら不思議に堪へぬのは、あれ程思合つて死を誓つた程の女が

▲情死未遂後弗々厭になつた

事です、彼女はドウ思つてゐるか知りませんが私は全く彼女が厭になりました。顔を見るのは勿論聲を聞くのも噂するのさへ厭になりました。此精神的變化は自分ながらも解りません、併し私は幸に知人や友人諸君の厚意によつて今までの堕落生活を一變し明日から新たなる生活に入ることを此上もなく感謝致して居ります。而して呉々も男女の青年諸君に私の如き愚なる轍を踏まれぬやう、自分の身に省けて祈ります。で私は責めてもの罪滅しにこれから信州の山奥へ這入つて樵夫にでもならうと決心して居ります。

以上男女の懺悔、自白によりて之を觀察し來れば、人情の缺陷は怖る可し、而して其こゝに至る原因動機を案ずるに境遇の不可なる人、家庭の愛に渇したる人、意志の薄弱なる人、感情の熱し過ぎたる人、失戀の反動より來たる人、放蕩の結果身をおくに處なき人、等にして凡て皆な心創を受けたる人ならざるはなし、これを惡むは仁人の事にあらず、庶幾くば世の教育者と共に彼等幾多の青年子女を愆る悲慘の情淵に陷らざらんことを祈らん哉。

▲顔の道具　目鼻立が完全に出來上つて居る顔の寸方はチヤンと極つて居る、即ち顔の幅は丁度眼を五つ並べた者と同じで、眼と眼との間隔は眼一つ丈けの長さと同樣である、又眼と口との關係は眼の幅が口の三分の二に當るのである、鼻の長さは必ず前額の高さと同一であるから、此寸方に當嵌る顔は格好が正しく輪廓がキチンとして居る、即ち完全に顔の道具が揃つたものである。

女學校評判記

鳴子

卯月の廿八日、都は凱旋大觀兵式の仕度に物せわしい折にも拘はらず、ふと高等女學校の參觀を思ひ立つて、新橋發の下り列車に乗り込み、東海道三島驛に着いたのは、午後の五時を過ぐる未だ幾分と云ふ頃であつた、日は西の天に赫く、香貫山の方から青い麥畑の面を渡つて、そよ〳〵と心地の好い風が吹いて居た。

其の夜は三島在の函南村の素封家・川口氏に宿を假り、翌朝再び三島に引き返へし、大社に詣でゝ、其の裏門より直ちに

三島の高等女學校

を訪問づれたのである。校は街の西北に當つて小松宮別邸内に建てられてある、其の閑靜なのと、市街の塵俗を避てるので、實に最良の好適地と思ひました。殊に東海道五十三驛の名物として、旅する人毎に賞めそやされた、富士の白雪解の水が、其の附近から清らかに流れ出で、東には遙かに足柄箱根の山を望んで、新羅三郎義光が過ぎし昔の事など偲ばれました、西南は田方の平野開けて、狩野川の流るゝ所、北條の古址、蛭ケ小島の舊蹟など只半日の道にて弔ふ事が出來る、校舎は敢て輪奐の美とまでは參りませんが、兎も角も土地相應の建築でせう。

開校の當時は御用邸内の養蠶室を借り受けて校舎ともし、又寄宿舎にも代用して居つたと云ふ事で、すぐ校舍の隣りに米穀の大きな家が建てられて居ました、丁度日曜でもあろし、わけて今日此頃の好天氣、宿直の先生方も定めし郊外散歩に出て、不在とは考へましたものゝ、ならう事なら是非寄宿舎の一部でも見せて頂かうかと門を這入つて、小使室を訪ひ、宿直の先生の在否を尋ねますと、漸くして奥の唱歌室の方で、今迄鳴つて居た、樂器の聲ははたと止んで、一人の女先生が出て來られました。で私を敎員室に導かれて用向きを聞かれました、私は先生に願ふて各敎室を見ました、拜見すると何れも皆整頓して掃除りよく行き屆いて居つたのには感心しました、校長の御宅はすぐ近所で大抵の日曜日は、午前中は學校へ來られるとの事でしたが、昨日縣の視學が來られて、今日は何やら忙はしいとの由、遺憾ながら會はずに仕舞ひました、廊下傳ひに寄宿舎の案内を願ひました。

寄宿舎の舎監、は溫和なお方で、去る卅二年に高等師範を出て、直ぐに此の校に赴任されたとの事、私を應接の間に伴ひいて、丁寧に次の事を話されました。

女子の敎育などゝ申しても、東京などに比べて見ますと第一生徒が違ひ、家庭が違つて居りまして、高等師範などとは餘程の差が御座います、此の學校に參りて居りますものは、大抵農家の娘達で、之れ迄少しも他所へ出た事はなく、只親の膝許で甘い言葉に育てられて居た者許りですから、三島へ來れば三島が第一の都會、外に

賑かな所はないものと考へて居ますから、學校へ入學した頃は、希望とか、意見とか、高尚な考へを持つて居る者は御座いません、段々と級が進んで、卒業する頃になり、東京などに御友達でも持つて居る方があると、何れも東京へ行つて今少し勉強したい抔と云ふ者も在りまして、昨年から今年へかけては、女子大學へ這入つたものが、五六名もあります、何にしてもまだ年が稚く一般に小供心ですから、末に何すると云ふ深い考を持つたものは、少い樣です、其位ですから、寄宿舍の規則を定めて、門限を五時と限つても頑是なしに四時半頃に出て行つたりなどする者もありますが、極く心が小供で無邪氣ですから、別段深く咎めもしません、何か事が起つて、言つて聞かせましても、無闇につまらないと云ふ考へを起して、之れが爲めに奮勵しやうと思ふ樣の者は極く少ないです。よしや門限を過ぎて出た所が、根が小供ですから、之れが爲めに弊害を生ずると云ふ樣の事はない、夫れですから寄宿舍の取締につきましても、別段弊害にならぬ限り、衛生に差支のない限りで、出來るだけ樂しい家庭の生活を、形ち作らす樣な方針を取つてあります云々。

只今當校では四十餘人の生徒を、教室に分つて家族制度にしてあるそうです、それから私は舍監に導かれて、階下の自修室から、二階まで隈なく、參觀しました、日曜の事ですから生徒は洗濯や、針仕事に餘念なく、賄の室では午餐の支度に忙しそうでした、左樣なら

ばと挨拶をして舍監と分れ、元來た學校の事務室の方へ行かうとしたら、男の先生が何れよりかお歸りになつて、懇ろに私の來校を迎へられ、再び二階の應接間に導かれました、そこで種々と學校の狀況など承はりましたが、二週間程前に東京から此の地へ赴任されたばかりですから詳しくは話されませんでした、ほと〳〵にして辭し歸らうとしますと丁度晝餉の仕度が出來たとの事に、親切の言葉いなみがたく、晝食の饗應を受け、且つ私の爲めに、沼津に行く路まで敎へやうとて三島の町はづれまで見送られ、千貫樋附近にて袂を分ちました。

沼津の高等女學校

は、郷社日枝神社の傍らで、沼津の町の東はづれです、三島より參ると道順も至極便利であります、まづ正門より這入つて、校舍の傍らに建てた、教員の校舍を訪れますと、兩三名の寄宿生が居まして先生は十時頃教會へ行つて未だ歸られないとの事でした、校長の御宅を問へば、しか〳〵と丁寧に教へてくれました。沼津の校長は伊藤義利氏、その御話のあらましは靜岡縣でも駿河と遠州とは女子教育に於て、大變な差がありまして、遠州の方がずつと進んで、駿河の方が餘程遅れて居ます、分けても此の駿東郡は遅れて居る樣です、其の源因は種々でせうが、先づ父兄が教育に熱心でないと云ふ事も影響して居ります、農家で餘程財産があり、充分小供を教育する力があつても、女子の教育は却て女をハイカラにして、一世を誤らせる基だなど〳〵、東京

邊の墮落女學生の事などを例に取つて、てんで娘を學校へ出さないものが多い樣です。

夫れに此の駿東郡は、江原先生が義務教育六年の演說をした結果として、高等小學は大抵二年に限られて、四年を併置して置く學校は御座いませんから、女子も二年の高等を修業して、あと二年位即ち高等女學校の一二年位迄は在學して居るものが多いが、三四年となると、極く減つてしまふ、夫れですから、入學して無事に卒業する者は、全級生の三分一位のもので、あとのものは、中途退學と云ふ、實に譯のわからぬ父兄が多いです。

殊に此所の女學校は、私立です、元は郡立であつたのですが、種々經營上管理上から、不都合が生じたり、議論が起つたりして、今では江原先生を顧問とした私立女學校となつたのです、官立の樣に規則ばかりに拘泥して、形にはめた樣な人物を作るよりは、今少し活動した人間を作らうと思ふにはやはり私立の方がよいかも知れません、併し一利一害は免がれないでせふ。

近來は入學生も段々增して來て、定員を超過すると云ふ盛況で卒業してからも、東京などへ勉强に出で、女子大學へ這入つたものもあります、併し大抵は高等女學校を卒業して、あと一二年も裁縫の稽古でもすると、夫れで嫁入するものが多い樣です。

斯くて懇な校長の話は玆に一段落を告げ、あとは後日の約束に殘して、靜岡へと向ひました。

▲大日本婦人學會

同會は前內親王御用掛小川直子を會長に、下田文學士、三輪田文學士を顧問に、其他市內有力なる女學校長及講師諸氏の賛助によりて成りたるものにして、地方に在て高等女學校の教育を受る能はざるもの丶爲めに、毎月一回高等女學講義錄を發行して、之れを會員に頒ち、修業年限を一ヶ年として、最新式の大學講座制度を用ゐたるものなり、而して此會の特色は、自宅に在つて家事に執掌する傍ら、僅かの會費と時間とを以て、全學科を修了するを得るにありて、其の講義錄は平易簡單なる言文一致體なれば、何人にも了解する事を得べし、且つ邊鄙の地にありて通學する能はざる婦人、及晩學者にして入學を不便とする者乃至は旣に一家の主婦となりて、家事を司どる傍ら參考として必讀すべき寶書なり尙擔任講師は各女學校に教鞭を執らるゝ知名の大家にして其姓名左の如し

文學博士
帝國大學講師
文學士
東京府女子師範學校長
蒙古喀喇沁王廷顧問
東京女學校長
跡見女學校長
日本女子大學講師
女子美術學校長
東京裁縫女學校
東京高等女學校長
東京女學館
戸板裁縫學校長
女子音樂學校長

坪井正五郎君
巖谷小波君
佐々木信綱君
大町桂月君
林吾市君
鳥居龍三君
村上專精君
跡見花蹊君
白井規矩郎君
谷喜三郎君
渡邊滋君
棚橋絢子君
國分操子君
戸板關子君
山田源一郎君

本會の會費は入會金三拾錢、會費一ヶ月五拾錢、一ヶ年五圓五拾錢、第一學期は家政裁縫講義にして、六月五日發行、而して修業者中の優等なるもの三名には、賞金を授與するの方法を設けたり。

東京本所向島小梅町百九十七番地
大日本婦人學會
幹事　勝岡恒彥



和洋折衷の結婚式

むらさき

第一段

今年四月初旬の黃道吉日を選んで、或結婚式が京都で擧げられた。

此式に列した人の中には、之を稱して模範的典禮なりとまで言ふ者もあつたが、若し夫れ和洋の結婚式禮の粹を拔き、之を綜合して毫も矛盾なからしめ、且つ我邦在來の今川、伊勢、小笠原、蜷川、乃至生間、四條の各流とも參酌して、餘りに大業ならず、又た餘りに簡略ならず、要は中流社會の慶事に應はしかるべく、試に是に一個の新しい例を開いて見たものとすれば、然う言はれるのも蓋し止むを得ぬ。

いでや其夜の式席の飾付から記すとすると、用ゆる一室の床間は一面に白絹で張つめて、幅は態と掛けず、正面に香爐、左右に燭、其前に羽盛鰭盛、其左右に蓬萊の島臺と、橘に鶺鴒の同じ臺、其他は提子、土器、結昆布、夫々正しく陳べられたのみで、照す燈は勿論蠟燭であつた。

新婦が娶家の玄關へ着くのは、日が暮れてからと決めてあつた。通例ならば、此節は人車に乘つた儘、其家の門前又は軒下まで乘つけるのであるが、斯くの如きは、娶家へ對して敬虔を缺くものとあつて、新婦は

一二丁前で車を下り、仲人と一二親族が、定紋打つた提灯を持つて之を迎へると、新婦は此一連に圍まれて、送つて來た兩親並に親族と共に下車して、軈て燭臺まばゆき娶家の式臺へと步を運ぶ。兩家の人々一人〳〵提灯を持つて居るので、可なり賑々しく見えるのである。次手なれば齒加へるが、京都での花嫁は、此時に限り、下駄は穿たず、三枚重斉天鵞絨の草履をはく。

仲人に案內されて待合の室に休憩し、衣紋やら顏やらを直して居る中に、式席が調ふと、仲人は先づ新婦を導いて、此式席の嫁の座へ直し、次いで新夫をも案內する。

新夫新婦相對して端座すると、是に契盃の式を擧げるのであるが、已に二人相對して座つたとみると、一人の宗匠が其席へ出て、正面の香爐へ香を炷いて引退る。後は仲人とも三人限となる——太凡の婚禮は仲人夫婦立合ふが、此結婚には男の仲人のみが立合つた。

盃に先ち、誓詞の交換があつた。卽ち仲人は、豫め新夫が懷にして居る倭錦裏白羽二重の袋に入れた誓詞を受け、披いて之を默讀して扇上に置き、進んで新夫が左手指に箝めた指環を拔いて、共に扇上に置きながら、飜つて新婦の前へ行つて、之も同じ袋の裏は紅絹の嚢のまゝの誓詞を受取つて、拔出して默讀すること前に同じく、指環は新婦の右手指に箝められて、軈て仲人は、自個の保證狀を併せて白羽二重の嚢に納めて之を懷中する。

誓詞は極めて嚴肅なり。

茲に神明の加護により〇〇〇〇を娶り夫婦の神聖なる緣を結び克く之を愛し之を慰め一生の禍福を與にする事を誓ふ。

年　月　日　〇〇〇〇

新婦の分は、を娶りをに緣繼ぎとし、慰めを順ひと記するだけが異つて居て、其餘は同文である。用紙は鳥の子紙にして、新夫新婦ともに自署したのであつた。

仲人の保證狀は、之亦た極めて嚴格であつて、

〇〇〇〇と〇〇〇〇との結婚は民法の規定に據り正當の順序を以て行はれ何人にも故障の無き事を證

す。

年　月　日

餘りに形式張つたやうではあるが、苟くも人と人とが婚し、過去も多く、未來も亦た多き兩家と其人とを親族たらしむる上は、換言れば、是に神聖なる夫婦の固を爲さしむる以上は、斯くの如き保證狀も、仲人としては正に與へなければならぬ義務がある。即ち其結婚に伴ふ、あらゆる責任を帶ぶるからは、單に盃せしめたのみで、夫れで仲人の責を盡くしたものとは言はれまい。由來我邦の結婚には、仲人は單に仲人として兩家の間を往來するのみで、未だ斯の如き組織的將た合理的の保證をなしたを聞かず。此一事は正しく西洋式を參酌したのであらう。新夫婦と同じく仲人も此保證狀に自署したのである。



女子職業全盛時代の想像圖

仲人が三通の誓詞を懷にして其座に直ると、男は上下、女は振袖の酌人、いづれも十五才以下の少年少女が末座に現はれる、結昆布を薦めるのも、提子の酒を交ゆるのも、世間の作法と差して相違はないが、いざ三組の土器を取つて、是に契の冷酒を口にするといふ

段になると、盃取換の順序が、世俗とは少し異ふのであつた。

三々九度は千鳥の如くかはされしものゝ、一の盃は、先づ新夫が飲む。以下三の盃までの順序は、

一の盃　新夫—新婦—新夫—仲人
二の盃　新婦—新夫—新婦—仲人
三の盃　新夫—新婦—新夫—仲人

右の如く、土器は三個とも仲人に収まる。通例は嫁が、先づ一の盃を飲むのであるが、聟から飲初めるのが正格とあつて、夫れで斯うなつたらしい。引かへて、新郎を迎へる場合には、新婦まづ飲むべしと云ふのが、此新式の主義と思はれる。

迎へる方が最初に盃を舉げる、之れは成程左様あるべきだ。

三の盃が仲人に収まる、是で陰謡がある。即ち高砂を謡ふのである。

目出度盃が濟むと、最初遅れて座に着いた新夫が、今度は先に其座を立つ、新婦は後になつて休憩室へ退く。

双方の休憩室へ行つて、仲人が滞りなく盃濟みし旨を述べてから、是に親子の盃となるのである。

此の盃式には、無論兩家の兩親が新夫婦を伴つて座に着く、聟方嫁方相向つて、二流に流れて、それに仲人が二人——言落したが、此結婚には二人の仲人があつた、一人は主たり、他の一人は従たり、従と云ふは或は語弊があるかも知らぬが、つまり嫁方附屬とも謂ふべきであつて、抑も新婦が其家を出る時、之と同道したのは此仲人であつた。夫婦の盃に立合つたのは主たる仲人のみで、此仲人が式席へ現はれたのは、此の親子の盃の時からである。又た兩仲人とも、無論夫婦そろつた者であるが、婦は式には一切立寄らず、翌日の部屋見舞の時、改めて娶家へ行つて、爰で新夫婦と顔を合はす事になつて居た、然れば主たる仲人は聟方の側に並び、従たる仲人は嫁方の側に並んで、都合八名が顔を合はした事になる。

結昆布の薦方、酒の混方は夫婦の盃の時と同じた。兩家の間に盃が交はされた順序を云ふと、先づ一の盃

を新夫の父が飲んで、之を新婦の父に贈り、新婦の父は之を飲み倘ほ二の盃をも飲んで新夫の父に還す、新夫の父は二の盃を飲み倘ほ三の盃をも飲んで之を新婦の父へ献す、新婦の父は之を飲んで新夫の母へ贈る。此三の盃が新婦の母へ廻り、次いで新夫へ行き、新婦へ献され、仲人へ廻され、復た他の仲人へ行く、之れで盃が納まつて、同時に蔭謡となる。

此の盃式にも、嫁方が前に座に着き、立つ時にも聟方が進んで、新婦の父から順々に仲人までに挨拶して

女子職業全盛時代の想像圖



座に戻ると、まづ嫁方が席を離れる。蓋し両家の人々は、此時初めて顔を合はした事になるのだから、改めて互の姓名を名乗合ふ、夫婦の盃の時には、人なきが如く、シンとしてあつたのが、是ではじめて物言つたのである。

之れが濟むと、親族の盃となつた。席に連つたは両家の親族と、新夫婦と、両仲人であつて、双方の両親は司はらず、盃は両方の首席に着いた者同士が、丁度親子の盃の折の父が爲したと同じ形式で一二の盃を献酬し、三の盃が嫁方の首席

から出ると、夫れが千鳥になつて一座に渡る。つまり双方の首席だけは幾度も盃を口にするが、次席以下新夫婦兩仲人等は、唯だ三の盃を一度だけ手にすれば、夫れでよいのであつた。

座配は、無論嫁方は賓、聟方は主だから、挨拶も聟方が一人〳〵進んで嫁方の前へ行つてする。最初席に着く時は、嫁方が前であつたが、挨拶が濟むと、其儘聟は座に戻らぬで席を離れ、嫁方は後へ殘つた。

此折も、盃が仲人に納まつた時、前と同じく陰謡があつた。正格にすれば、夫婦、親子、親族の盃とも、一二三の盃が、一つ〳〵納まる毎に謡を諷ふべきであるが、それでは餘りに繁雜なればとて、之のみは畧して三の納まつた都度にしたとのことである。

三段に分たれた盃事が、斯くして滞りなく濟むまでには、ザット三時間の長い時を要したのであつた。

娶家に於ける式事は以上を以て一先づ切上げて、更らに席をかへて祝宴となる。

第二段

祝宴の席は、さる割烹店の大廣間であつた。席へ列ぶ前に、まづ兩家の親族以下を別々の待合へ案内して、湯漬飯を供するのを本儀と定めてあつたが、しばらく世俗に從つて、燗酒に握飯、一品二品の手輕料理に止め、其外には菓子と紫蘇湯があつたやうに思ふ。

其中に本席の準備が調つて、兩家の親族兩親等は既に列座する、新夫婦は、稍や遅れて兩仲人に誘はれて其席へ出たのである。

是處で特筆しなければならぬのは、此の兩家親族列座の席の床の間に、娶家嫁家兩家の靈が祭つてあつたとである。即ち正面の床に戸帳を垂れ、其中に八脚机を置き、菅菰を布いた其上に幣帛が二基、一基は〇〇家繼承世代と記してあつた、即ち娶家の祖先の靈である、他の一基は嫁家の繼承世代、前には土器に洗米、堅鹽、大根、辛菜、鯛、鯉、神酒、短檠などが列べてある。

誘はれた新夫婦は、遙か末座で列席の人々へ挨拶してから、燈澤山な、此はれがましい席の眞中を通つて、

霊段の前へと進むのであつた。

偖て床の間に近く座ると、一人の仲人が戸帳を左右に褰げる。すると新夫婦は此の二基の霊に向つて再拝する。必竟結婚の成立を互の祖先に示すに外ならずして、再度まで拝するのも、一度は自己の祖先、二度は娶家又は嫁家の祖先を拝するのである。

拝し了ると、他の仲人が、曩に契の盃事に先だつて仲人の手許まで差出した誓詞並に仲人の保證状を併せて祭壇に供え、更に拝して戸帳を垂れ、是に於て、仲人は新夫婦を娶家の両親の下に座らしめ、自分等は嫁家親族の下即ち嫁家の両親の上席へ座を占める。



女子職業全盛時代の想像圖

言ふまでもなく両家の親族は向合つて居流れて、世間では、此席に至つても、尚且つ新婦だけは里方に列せしめるやうだが既に盃を済ましてからは、新婦は娶家の一人であるから、此の式には、新夫婦とも娶家の側に列んだ次第。

座是に定まつて、祝酒の一段となる。

祝酒は朱塗三組の盃を用ゆべく、是を華月臺に載せて、提子と共に床前に置かれてあつた。一座の面々へ、小角に伸鮑昆布小梅の三種を盛り、猩々海苔友白髪の清し吸物に耳土器を添え、加へては柳箸を置いた折敷を引くを待つて、酌人現はれ出でゝ、床前の華月臺を下し、兩家の父が之を酌交はすこと、恰も親子の盃の時の如くし、僣て娶家の父と婦家の親族と獻酬し、婦家の父も亦た同様に娶家の親族と獻酬すべきである が、斯くては徒に時を費す怖があるので、略して、娶家の父が一の盃を飲んで之を婦家の父に獻し、次いで婦家の母から順次婦家の親族に及ぼし、飜つて之れが娶家の親族へ廻つて、軈て兩仲人へ行つて納まる。祝酒はつまり極く簡略に擧げられたのであつた。

言落したが、祝宴は一人も他人を交へず、嚢に親族の盃事を行つた折に對座した者のみで、通例祝宴と稱する、彼の披露とは、全然其質を異にするから、其積であつてほしい。

此祝酒が一廻り廻ると、膳部が出た。

膳部の獻立は、是より先き兩家の親族が別々の待合に入つて、手輕な食事をした時に、一人〳〵に扇に記いて配布されたのである。扇は表を白く裏を紅く、青味の骨にして、親骨には鶴が透彫になつて居た。所謂メヌに外ならない。

言ふまでもなく最初は本膳。其獻立は、

▲膾　代々酢
鯛の湯霜
千本茗荷
しめそ
加茂川海苔

▲汁
合味噌
黒豆
色附豆腐
富貴の頭

▲平皿
松形鰆
竹輪蒲鉾
梅の甘煮

▲香の物
奈良漬
澤庵漬
味噌漬

飯

朱塗引盃

包箸

飯を進め、汁を換ひ、引いた朱塗の盃に提子で一獻を侑める。以下五の膳が出て了ふまで、謂はゞ新しい膳が出る毎に、此の盃で一獻づゝ、都合五獻と重なつたのである。

二の膳以下は、

二の膳

▲包餅

▲吸物　蛤　神馬藻

▲小皿　竹の子　獨活　木の芽あへ

松鶴立物
▲高盛　梅かされ　錦たまご　亀甲蒲鉾　源氏香茸　ます白桃煮　白糸長芋

三の膳

中皿　かけ汁　鯛の姿蒸　女芋

吸物　祝の粉　孕み鯉　祝ひ菜

双松鶴石
洲濱臺　七福神磯遊び　鯛の浜つくり　みつ葉

是に洲濱臺と云ふは、席の一隅に此時まで圍まれてあつた飾物であつて、長さ二間許の黒塗の洲濱臺へ四尺許の松を立て、其臺の上には大根で作つた色附の七福神の人形が美しく飾つてある。浪は鯛の刺身や其他のものでつくつて、船なども あつた。七福神の磯遊とは、此の人形から取つた名であらう。臺の上の刺身を、給仕が皿に盛わけて、銘々へ配るのである。

此洲濱臺に見とれて居る頃、新婦は色直しの着替をする。

三の膳が出てから暫くして、口漱の水が出る。次いで

餘の膳

▲小皿　嫁菜　土筆

▲吸物　うすたれ　水前寺海苔　線打生姜

▲水菓子　蜜柑　林檎　水栗　氷砂糖　代々でんぶ

五の膳

松魚節　水引掛

膳部は之でおしまいとなる。同時に陶盃と徳利が出て、偖て改めて亂酒となつたのであるが、抑も一の膳が出てから五の膳が出るまで、酒と云つたら、其都度に朱塗盃で一獻づゝのむだけ、是に至つて、はじめて膝も稍や崩れると云ふもの。

尙ほ後段として、いざ亂酒即ち通例に見る酒宴となつてから、嫁方より、三方盛のひとり肴（するめ、わかめ）を出し、之を婿家の親族から取廻しにした。

此後は最早多く云ふを要せず、彼我互に快談して、徳利は此際始めて席に出た美しい女の手に持運れ、席また漸く賑かになつて、亂れはせねど、中には芽出さに酔つて玉山將に崩れんとするのもある。餘興の舞が

あつたのも、酔眼朦朧としては、能く見えなかつたらう。

一言も言はず、滿座の視線の中心となつて、兎角俯き勝であつた新夫婦は、五の膳が運ばれて、いよく納盃となつた時に至つて、はじめて座を立つた。仲人の一人に導かれて、附添の女中を隨いて、娶家に戻つて、軈て第三段の盃事となるのである。

●娶家に於ての式典が始まつてから、宴席に移つて、新夫婦が一禮して其席を離れるまで、時を要する事都合七時間。後に殘つた双方の兩親並に親族が、翌朝の日出でゝ初めてお開きとなつたのは、いづれは酒が長びかしたのであると云ふものゝ、嚴格な、膝を崩さぬ式事だけで、之れだけの長い時を費した事になる。

婚禮は人生の一大典、身分に應じて出來得るだけ鄭重にすべきである。以上列べたところを簡單にすると、先づ誓詞の取換があつて後に、夫婦の盃となり、親子の盃となり、親族の盃となり、新夫婦が兩家の祖先への奉告となり、祝酒となり、偖て酒宴となる順序であつて、要は此の數節を極く念入に行つたに止まるが、尙ほ此以上に鄭重にするも差支なく、唯だ際限がないと云ふだけ。

必竟和洋兩樣の式を折衷したのが、此結婚式の特色であつて、其上に、仲人をして飽まで其義務と責任を負はしめるやうにした杯も、亦た一の新案であらう。

▲杏のサンドウヰッチ

干したる杏を軟らかくなるまで煮、その煮えたち居る內砂糖を加へて調味し、パンを薄く切りて、杏を一面にひろげパンを合はせて軟く壓し端を切り去り、三角形にすべしもし、バターを好まば始めにパンにバターをしきてもよし。

▲ダイスド、ベジテーブル

大きな馬鈴薯を入個と、玉葱を一個と、大きな蕪菁二個と、胡蘿蔔を一個とを皮をむきて小さく賽の目に切り、深鍋に入れて五合の熱湯を注ぎ、鹽を小匙に一杯入れて三十分煮、バターを大匙一杯と、麥粉を一匙を入れ一緒にこれて、野菜の沸立ち居る內に入れて絶えずかきまはしながら更に三分間煮るべし、熱き鉢にもりて、熱き內食す可し。

▲果實のジエラチン

熟したる莓、又は梅、桃、葡萄をなど何でもよし、深鉢に入れ夫のかぶさる位水を注ぎ入れて、よく軟らかになるまで煮、砂糖を適宜に入れて味をつけ、寒天を一本二三分間冷水に浸し置き。前の煮たる果實より三合り汁を漉しとり、深鍋に入れ寒天も入れ、寒天のとけるまでかきまはしながら煮る可し、茶碗又は他の小さき容器を冷水に浸して其水をふきとらずに之を入れ、冷めて固くなるまでさまし置く可し。



流行の夏衣裳

観風子

衣更への季節となりましたから各所の呉服屋で、夏衣の賣り出しで匆々忙しいやうですから、各有名な呉服店を一巡して今年の流行と認めましたのを紹介する事としませう。

△絹織物の單地類

絹織物の單地は相變らず、紋お召、縞お召、絣お召、縞養老お召、濟綾お召、扶桑お召、吉野入お召、壁お召などで縮緬類にも種々あります、それから濟綾織、東華織、壁市樂、壁糸織、紅梅糸織、高貴織、結城紬之等は孰れも上等品ですが世間向の晴着には縞銘撰、壁銘撰、節糸織と云ふ所で、縞柄の流行は撚りがらみ變り格子と云ふ嗜好です、それから染色の所は紺鐵：：茶色、消炭色、利久茶、栗梅と云つた寂た色合、令孃向きには薄代赭、臙脂色をあしらふのです、元祿模様の反動と見えて、總て樸素向きとなりました、併し絹織物は昨年に比して大差なく、突飛の縞柄や華美な染色が、社會から省かれたと見て宜いのです。

△流行の浴衣地

夏衣裳中で流行の劇甚なのは中形浴衣地でせう、昨年まで流行した傘縞や熨斗目織は、餘り華美やかで花柳社會の湯上り浴衣には宜いのですが、嚴格家庭の召物にはならない傾きで、今年は振ひません、浴衣地は舊に復して白地へ草花模様を紺と淺黃で二重染にしたのが大流行、それから變り柄では縞入中形、乃至は縞

入り絞りと申して、織縞の地質へ中形を染抜たり、又は絞りを出したりしてあるのです、絞りの所を薄代赭などで絞り、令孃向きには尤も妙で御座います、此流行浴衣地へ全力を注いだのは三越呉服店だ相です。

△高等向きの中形地

浴衣の地質は眞岡…縮地…瓦斯縮の三種ですが、其の中で需用の多いのが眞岡木綿で、それに次ぐのが瓦斯縮、瓦斯縮は一見縮緬と見擬ふやうに美麗ですから、貴顯方の令孃の學校着には適當と云ふ所から、上流社會へ瓦斯縮の需用が殖たと云ふ話して、勢ひ上流向きの中形を撰ぶ必要を感じて三越では、先頃新形浴衣地の圖案を懸賞で募集し、此夏物賣出しに發表したのですが、麻の葉に鹿の子蔦、光琳模樣の桔梗、三筋市松に落葉、破れ垣に夕顔、縒り辨慶に鹿の子結ひと云つたのが、圖案の當選中で優等だと云ふ話しです。

△モスリンの單地

唐縮緬の單物は小兒物のやうに思つて居ましたが暑中の召物として肌付きが克くつて、汗を彈く所から需用が殖へ昨年より今年の方が許多に賣れると云ふ話しですが、其の柄行きは多く染縞物です、それに外見が絹セルのやうで一倍委かで、着皺が出來ないと云ふのですから、婦人向の衣裳に適當した品と云ふ世評です、此モスリンの原糸を用ひて織た縞地もあるですが紺織に焦茶と云つたやうな柄行きのみで、妙齢の處女向きといふのが見えないのは殘念、併し縞柄も樣々と織出すに違ひないですから、婦人の夏衣裳はモスリンが跋扈する時代が來るに違ひない、單にモスリンのみではありません、絹織物が年々に騰貴するので、中流以下の需用に適きさないやうになりませうから、それの代用に綿入單地となるに違ひありますまい、今年なども比較上綿入單地が賣れ行くと云ふ事です。

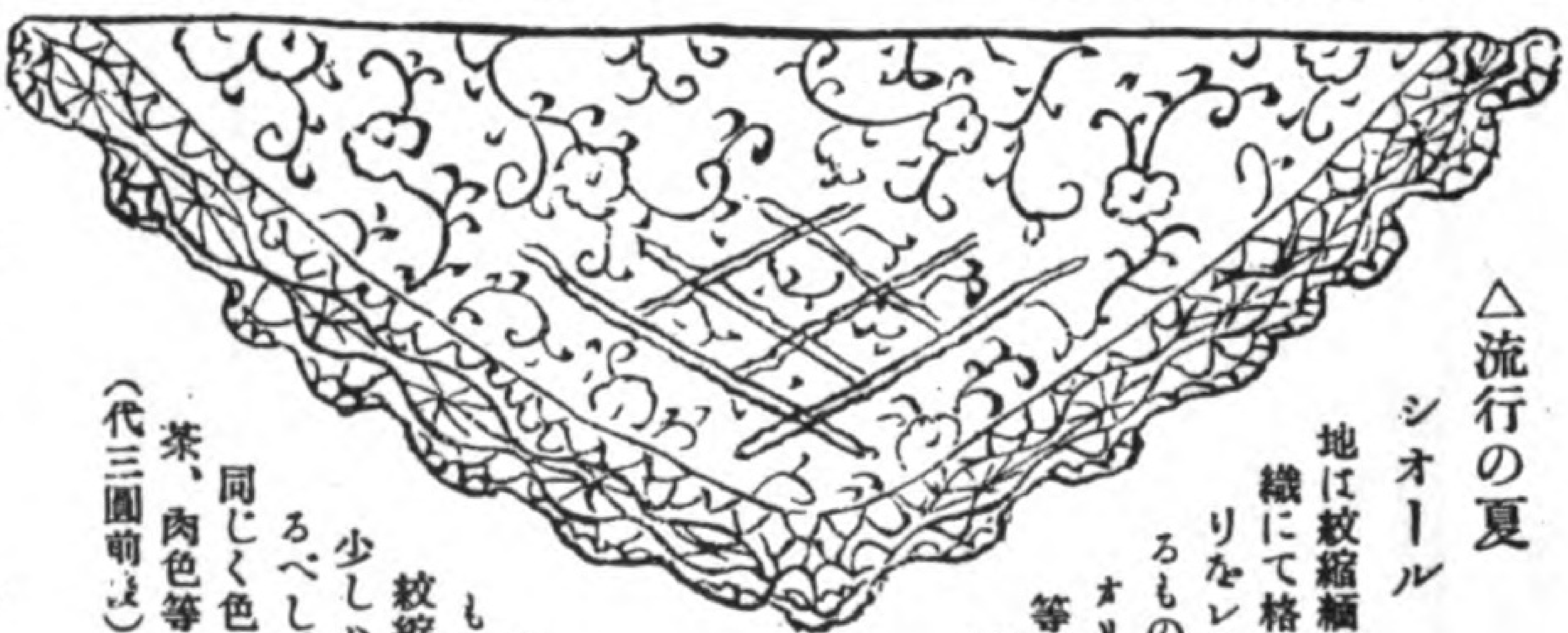
△綿入單地

一枚の夏衣裳に十圓以上を投ずるのは、中流以下の生活には及び難い事です、それも冬衣裳ならば兎に角も、夏物は襟垢や汗染と云ふ恐れがあるから、絹織物を着得られる奥樣方でも平常着は綿入物を代用に着て頂きたい、如何に絹織物が高尚だと云つても襟垢や汗染、加之に嫌な臭氣などがしたら却つて不清潔とした綿入物の方が可いやうに思はれますから、經濟上の點

から行ても平常着は綿入物を奨勵して頂きたい、所で流行の綿入單地は、月ヶ瀬お召、玲朧織、新明石縮、新御召等で價格は三圓内外ですから、瓦斯縮の浴衣地と違ひません、一見した所は絹織物と違はないのです、御不審と思召たら三越でも白木屋でも、お馴染な呉服店へお出になり、實物を御覽になれば、成程と御承諾が參りませう。

△紺絣と手拭地

夏衣裳中一番に賣口の克いのは、紺絣と手拭地の浴衣だ相で、紺絣も本場薩摩は安直でないから、一般に久留米絣と云ふ事になりました、紺絣の需用の多いのは洗濯の利くのと、着古したら藍目引をして冬物とする、それに紅や黄の色入絣が流行ですから、嬢さま方の召物にもなると云ふ、三徳が備はつて居るので夏衣裳には歡迎されるのです、それから手拭地の浴衣は三伏の日の暑も知らぬ程、召物として肌に着かず輕くつて着心が克いのですから上流社會の夏寢衣は一般に手拭地となる傾向です、之等の需用が盛んで來ましたから昨今は普通の手拭も、浴衣兼用となるやうな惣模樣の中形とありました。



△流行の夏シオール

地は紋縮緬、縫ひかゞり織にて格子を出し縁飾りなレースになしたるもの、色は白茶、オリーブ鼠、藤、黒等、老若を問はずおとなしき夏シオルなり。（代二圓七十錢）

又此形にて全體をレースにて編みたる絹製のものあり紋縮緬に比して、少しハイカラ式なるべし。同じく色はオリーブ白茶、肉色等（代三圓前後）

流行の化粧品

追々と暑さに向ひますから、交際場裏に立つ御婦人はお嗜みが肝要、こゝに新流行の化粧品を二三種申上ませう

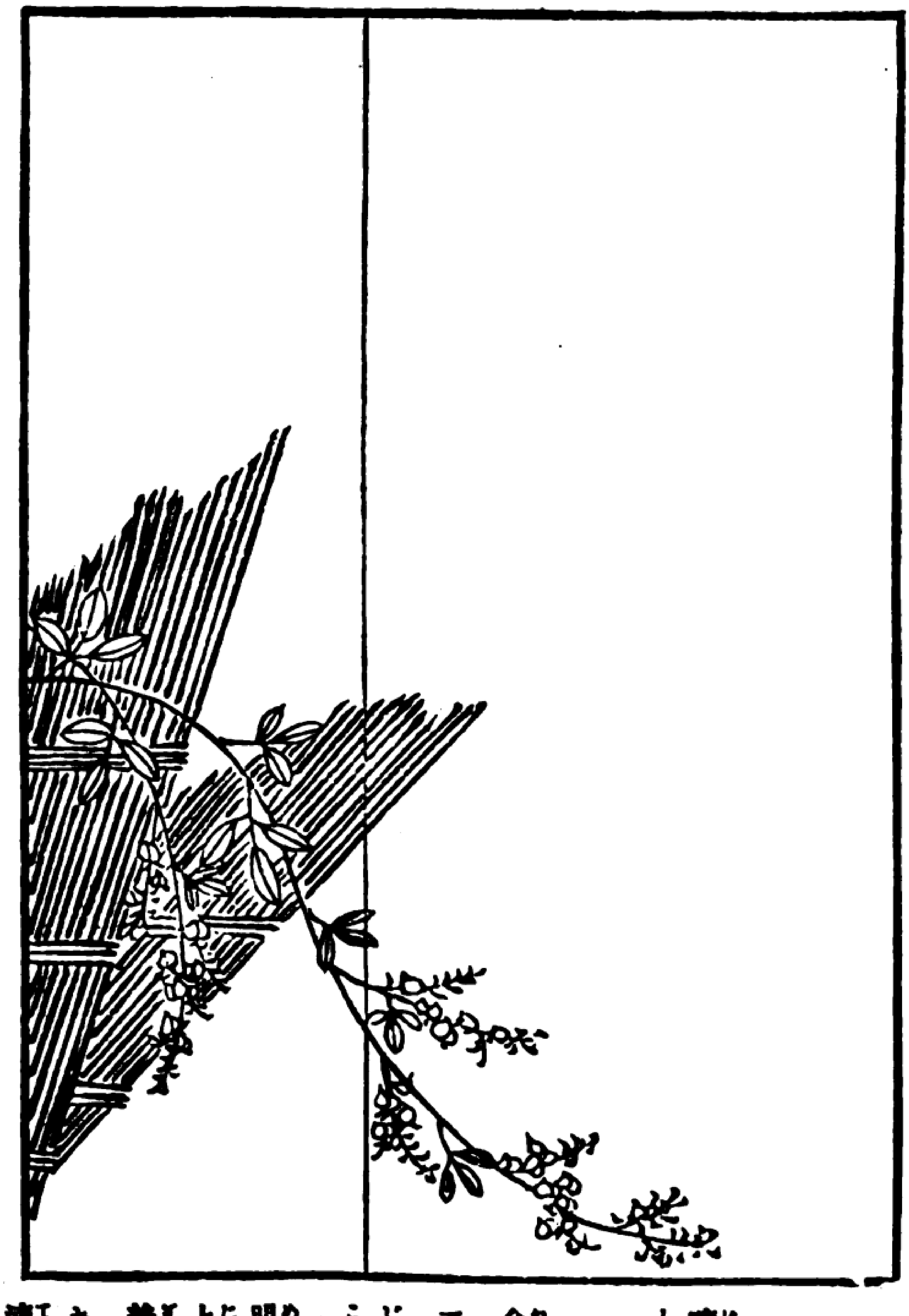
◉香水はスミレ、ヘリオトロープ、ホワイトローズの舶來品が宜しい、此香水は英…佛…米の三國から輸入しますが、佛國製を最上品としてあります、代價は普通品一瓶三圓より一圓五十錢位まで、又御携帶には豆香水と云ふ最小瓶がよろしい。

◉白粉も矢張舶來品で無論無鉛白粉です、元來白粉には粉と水と兩樣に分れて居るのですが其の價格は粉も水と違ひません、一瓶

が二十錢以上八十錢位まであつて、孰れも肉色の方が需用が多い。

●歐米の婦人社會で用ひられた、眉墨…口紅…頬紅などが本邦の婦人社會にも歡迎される傾向ですが、携帶の便なるのとお安直なのに由るでせう、殊に顔色の惡い御婦人は、此類紅をお化粧用になさるゝがよろしい代價僅に一個二十錢以上三十錢迄です。

●舶來の香油はいろ〳〵ですが、英米新輸入品としてプリアンチン、クリーム、ビション、キチー、ピロコン等で、香水と香油を混合したもの、價格は二十錢より一圓位。



素鼠地に白上に垣を染め、廻りを金にてくゝり、萩も同じく金にて筋描き入れ、處々に蝶鋼を置きたるもの、夏期用として面白き考案なり

夏の晴着

御婦人方の當夏期の流行晴着に就き三越吳服店の調によればまづ

▲着物――十七八の令孃向を申せば、色合はアツキ、ハナダ、藤鼠など、江戸褄又は裾模様總て細き模様は好まず大きく明瞭なるを好む趣きです、上下にて五十圓、取れた上着と同じ地質として、トキ色、鴇紅色等の色合が適當だそうです、長襦袢は紅梅又は赤の紋絽縮緬の無地或は繪羽模様の疋田絞りなどが配合が宜ろしいので御座います、そして、無地の方は十五圓位、紋で仕立

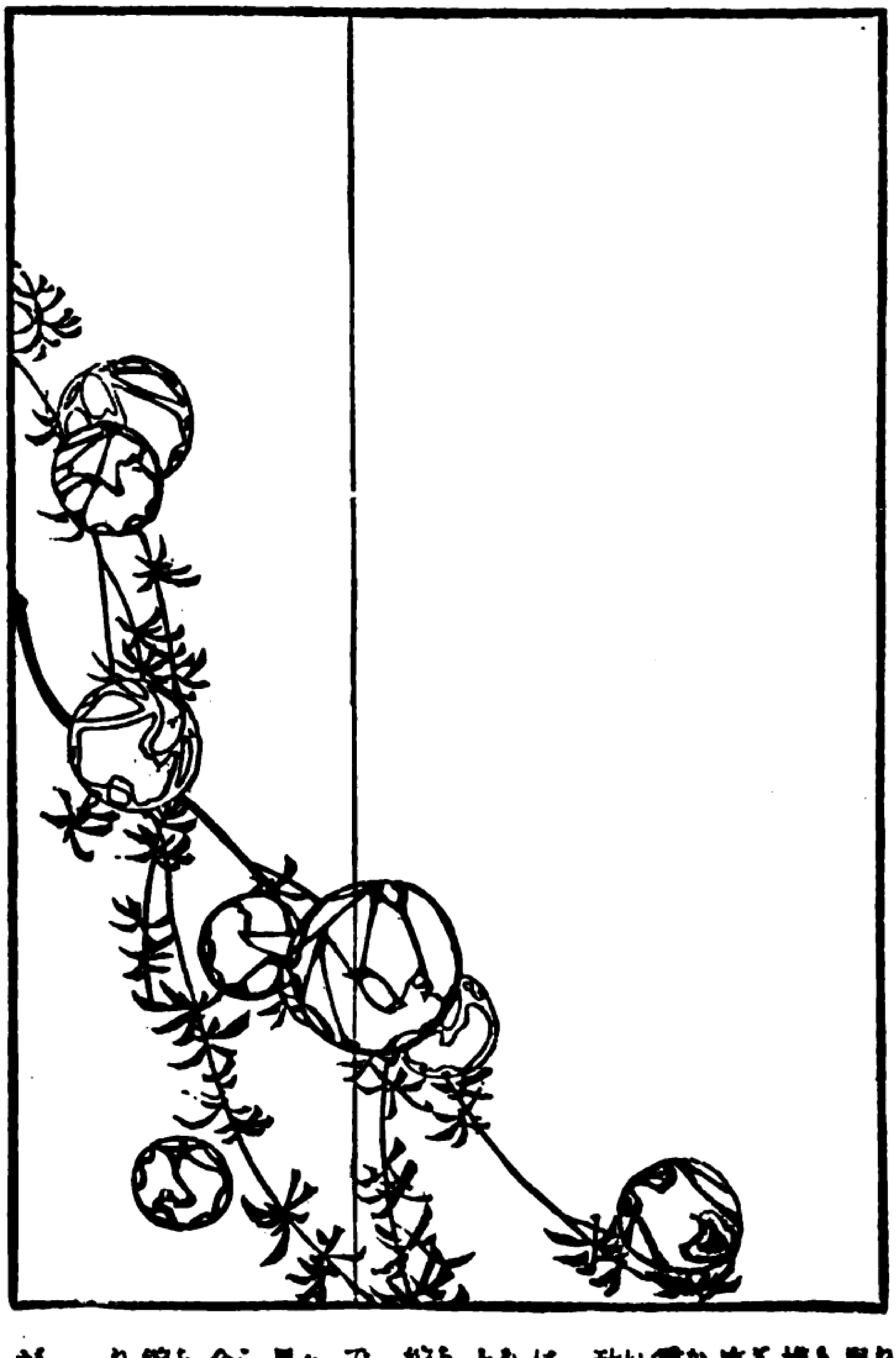
上り二十圓より三十圓迄で出來ます。

▲帶──帶は厚板で四十五圓、又琥珀地に縫模樣をしたのも上品で此は三四十圓位、鹽瀬友仙などになりますと二十圓前後で御座います、

▲着物──二十歳より二十五六歳位の御婦人向きとしては、色合は褐色、利休鼠、藍鼠、薄鼠等で、色は先年來の赤味を帶びた色は漸くすたりて、總て薄がゝりし色が流行してゐます、地質は矢張り縮緬が大部分の好みですが、樣々な好みに物足りなく思ふと申すよりは澁い向きには錦紗縮緬を用ふるといふ向きもあります、此地質は一見しますと餘り宜い品のようには見えないのですが、非常に高尚な、着心地のかるい誠に上品な地質で、其昔慶長桃山時代に流行したようなものと似て居るのであります、模樣は重に江戸褄で往年流行しました裾の方へぼかした所謂曙染と申すのは流行しませんので偶に共色で薄おどしに致す位ゐで御座います、概して白を多くして鼠色の類で配色した模樣が宜ろしいので御座います。

重れは上下同じもので致すので御座います、此は縮緬の方は上下仕立上り、四十五圓、錦紗縮緬の方は五十五圓位です。

長襦袢は縱橫絽(此は今年の新製品です)絽縮緬などで、藍鼠か薄鼠か總て薄色のものが又繪羽模樣で御座います、代は略令孃向きと大差ありません。



素鼠地に柳を白上げとし、丸形に繻絹を置き、其中に金泥を流したるもの、所々に疋田丸形をあしらひたる一層の趣きあり。

▲帶──帶は丸帶にはアルプス織、綴織、友仙羽二重の小模樣

白地の厚板など誠に配合宜く單帶としては紋博多、錦絽織(七參に同じきもの)などで尙聚樂織とて此は模樣を金銀にて竹屋町風に織り出したもので[illegible]い高雅なもので御座います、尙は、單帶をお用ひになるには織出しに糸の總を長きまゝにお結びになるのは餘り高尙なのでは御座いません、あれは成る丈け短かくお切りになつた方が上品なので御座います。

意氣向きとしての變り地には山繭入り縮緬、又は絹縮で御座います、山繭の方は、染め上りまして縞が浮き出して面白い配合になります、模樣としては奴褄の白上りなどが適當でしよう、大抵三ツ紋に致した方が宜しいようで御座います、紋付きは總て大きさ鯨尺の九分位で御座います。

▲お召——此外中流の御召用ですと、紋お召、絽お召、縞お召吉野お召、扶桑お召、壁お召、漣お召、などで其から下りますと伊勢崎お召などが宜しいので御座います、伊勢崎お召は本年の新製品でかすり縞で面白く地質も堅實で宜ろしいのです。

縞は今格子は流行の絶頂で、よりからみ縞など面白いようです、追々格子は明らかに現はれたるを好まぬ向きとなるでしよう。

絹子ルと申て誠に重寶な地質のものがあります、矢張りセルの類で夏期の初め、初秋の頃に適當で御座います、毛織製ですから自然汗をはじいて、肌に付きませんから暑中に召されても宜しいのです、只毛織製の常として濕氣の入らぬよう風に當てる事を注意しませんと虫の付く事があります、此は五六圓位で御座います。

萬朝報の女子職業問題

先月の萬朝報は

如何にせば女一人の力にて最も早く一圓の金を儲け得べき乎

との懸賞問題を起し廣く全國の讀者に答案を求めたりしが四月廿五日の〆切までに同社の接手せし答案の總數は九百七十通にして中審査に及第せしもの百五十餘通、中に就て答案の重なるものは

△縫物に屬するもの二十六
ミシン縫、シャツ、手巾、足袋、縫箔、刺繍等

△編物に屬するもの二十二
毛糸、麥藁、經木眞田等

△行商に關するもの十八
賣藥、煙草、鷄卵、菓子、生花、小間物、化粧品等

△生ものを飼ふもの十八
鷄、蜜蜂、魚、小禽、蠶、

△筆を以て仕事するもの十五
繪畫の着色、衣類の上繪、代書、寫眞、

△身一つにて出來る仕事十二
女髮結、理髮、按摩、病院小使、保險勸誘員、傳染病看護等

右の内には勿論女子の品性を忘れ同社答案の規定（着手も實行も容易にして當人の名譽を傷けざる方法にて）を忘れ又一圓といふ點をも等閑に看過したるもの等ありて同社の發案の趣意とは多少の相違はありしも兎に角答案の結果の不成功なりし丈けそれ丈け女子の職業問題はいまだ物にならずといふ大凡の見當のつきたるは偏へに同社の勢を謝すると共に吾人はこの問題に對してよき教訓を得たるを喜ぶ即ち答案の結果に依つて歸納すれば今日の女子は其の品性をも損せず、助力者をも有せず、又資本をも專門の熟練をも有せずして一圓の金を儲くるの手段の見當らざるなり、故に女子は容易に獨立的の考を起すべからず、隨つて其の天性の柔順と忍耐と注意とを以て堅固なる地位を獲守するの考を持たねばならぬといふ事に歸するなり。女子教育の進歩、婦人勢力範圍の擴張などいふといへども實際の生活問題に至つては今も昔しもあまり相違はない事と知らざるべからず、今同社が發表したる、答案の一等は左の如し

包紙及敷紙製造

近來都市より各地方へ賣出す商品は皆包紙を以て包裝せらる、包紙の需用多大なり之を製出するは婦人好職業の一なる可し

資本は金十圓、反故紙、刷毛、打刷毛、晒生麩等の買入代なり、製法は古新聞を用ひ、表二枚、裏一枚づゝ反故紙を貼る、敷紙は表裏とも三枚づゝ貼澁を塗る、大小包紙は六尺平方より六尺に一丈二尺位の者賣行宜し、敷紙は四疊半、六疊、八疊（二枚にして）等需用多し

一日の製出高は六尺平方ならば卅枚、六尺に一丈二尺物にて十五六枚は容易なり、敷紙は四疊半十二三枚は難からず、之を乾かせ揚るには晴天の日月外に繩を張りて掛く可し、雨天の日は、若し蠶室用煖爐あらば室内に繩を張り之に掛けて乾かし得るなり

賣上高、包紙は六尺平方にて五六錢、六尺に二間物十錢内外、敷紙は四疊半一枚十五六錢一日分の諸雜費三四十錢と見て充分なり。

岩佐侍醫の金婚式

從三位勳二等侍醫兼宮中顧問官にして岩佐病院長たる岩佐純氏は夫人德子氏と結婚後今年恰度五十年目に相當するを以て去月十九日上野精養軒に知己親戚を招待して金婚の祝宴を開かれたり就いて侍醫夫妻の平生を聞ける儘を記さんに氏は今年七十二歲の高齡なるも宮中奉仕以來嘗て病床に臥したることなく夙に朝は極めて早く起き先づ沐浴齋戒して兩陛下及び東宮殿下の御眞影を拜し次に神佛を拜して後食事を舉へ更に身を潔めて宮中に出仕さるゝこと一日も怠らず毎週の金曜日は宮中の當直にて中々氣苦勞の多き身ながら絕えて其勞を覺えしこともなく近年漸く老眼鏡を用ゐ二三の義齒をも入れしかど身體は頗る健全にして壯者も及ばぬほどなりと又夫人は六十六歲にて肥つた福々しい容貌眼鏡も義齒も用ゐず最も壯健なり元來大の佛教信者にて女囚携帶兒保育會、吉祥諦婦人會、婦人法話會、淑德婦人會、愛國婦人會其他あらゆる婦人會に關係して淨財を投ぜらるゝこと屢々なり夫人は純氏と同じく福井藩士たる松原治郎左衛門氏の二女にて十五歲の折岩佐家に嫁ぎ一男四女を儲けたるが長男新氏(四十二)の外長女小蝶子、次女桂子の兩人は夭折し三女三枝子氏は山脇玄氏の先夫人たりしも是亦世を逝り四女千賀子(四十)は山脇氏の令弟登彌太氏を迎えて分家したるが登彌太氏亦二十八年中病死せしにぞ千賀子未亡人は二人の忘れがたみを連れて母の許に同居し長男新氏は獨逸歸りのドクトルにて本野盛享氏の令孃を迎えて室となし四人の子女を儲け日本橋區蠣殼町三丁目に病院を開き和氣藹々たる幸福の家庭なり、卷頭の寫眞版は金婚式の紀念撮影にて翁の一族を集めたるものなり。



美文

〔天〕初夏のおもむき

羽前國東置賜郡漆山村　稻毛みつ

一

短きは花の命よ、はかなきは胡蝶の夢よ、あはれ今はや、花謝し胡蝶夢さめて、桃の林、櫻の木立、皆いたづらに緑深く、菫の床、山吹の汀、只麥波漫々と漂ふのみ、あゝ、まさに、九十の春光暮れ行きて、天下夏に入れるの時、見渡せば、翠山はいよ〱青く、白水はいよ〱長く、滴らんずる新緑濃く淡く、野を限る山影近く遠く、淡々たる夏の世界、又一の佳趣なしとせず、況してや、朝に竹林の涼風に輕袂を悦び、夕に河畔の月下啼鵑を聞くをや。

二

暮れ行く春の夕、蕭々として注ぐ微雨は、萬朶に匂へりし濃艶の花の涙か、一つ散り二つ散りて、今はしも殘んの花だに見えず、いたく變りて跡寂しき世は、なべて緑葉の茂り生ふ時、伏屋のまがきに匂ひ出でゝ、雪かとまがふ卯の花、美しとも美し、つれなき五月雨未だ降り出でれど、其の清き垣根のわたり、血に啼くといふ杜鵑、一聲三聲、はや忍び音をもらしつるぞ、嬉しうもあはれなる、時しも晩鴉塒に急ぎ、垣添の路行く子等が、繪日傘の中より……空に聞ゆる杜鵑、誰れかあはれと聞かざらん、あはれ血に啼く其聲を、……あゝ楠公の唱歌、誰人か斷腸の思ひせざらん。

三

田打ち畑うち暇なく、手入せざるまゝに、いつしか、山吹散り、草はびこりて、愛らしき金魚も見えずなり廢れに廢れし小庭の池、今はや、所得顔に啼きしきる、蛙の宿とはなり了んぬ、かく見るかげもなきまでに荒れ果てし池ながら、紫かなる杜若、二つ三つ、汀に清く美はしく、ほゝ笑み出でゝ、一しほの趣添へたるこそ、こよなう、床しうも嬉し

けれ。

あはれ、拙きは花よ、けだかきは花よ、廢れ果てし世に過ひながら、僞りもせず、欺きもせず、しかも、美はしう咲き出でし花の心ぞ、人の子の鑑ともせましものを。

四

靄々霧々、徒らに石榴の花の紅を増したる、連日の細雨、今しもゝ殘りなう晴れ渡りて、清く澄める山頭の夕月、さながら秋宵の感に堪へざるものを、喞々たる虫聲こそ聞えね、若葉の白露、皆月影をやどしたる美しとも亦たへなるかな、

晩餐のあと一家團欒、庭に面して端居すれば、池の月を搖がし、葉末の玉を碎きて、そよと吹き來る淸風一陣、池汀の棟ほろ〳〵と散らして、燈火も危きまでに今し我等が衣を拂ひぬ、あゝ、其の心地よさ、爽かさ又何にかたとへん、折しも、馥郁として薫じ來る花橘一きは芳ばし。

（評）絢爛の辭を用ひて夏の景趣をさながらに髣髴せしむるのみならず、文に才氣あり覇氣ありて面白し。（詩岡霞舟）

（地）黄　鳥

三河豐橋町曲尺手十五淺井方　若狭つく子

寂寞たる庭の白桃に、糸の如き雨の靜かなる夕、わが兄君は遂にみまかり給へり。

いまはのきはに仰せられしみ言葉あれば、今朝初七日といふに、塗籠を小椽に持ち出でつ、久しく飼ひ馴らしつる鶯を、今放たむとはすなり。

春日うら〳〵とさす此庭に、未だ梅が香の床しかりし頃よ、汝が法華經の妙なる聲は、如何ばかりか兄君が苦しきみ胸を慰めたりけむ、折にふれては、好き音や、彼の一聲の殊なりせば、耳輪にぬきて長へに聞かましものをと愛で給ひし。

散る花と共に逝かせ給ふべき運命なりと、み心の中にもおぼしけむ、血を吐き給ふがおん病なるに、卯月待ちて、不如歸に、死出の山路の跡らひせむとはしたまはで、汝が聲のみひたぶる惜しみ給へり。

さばかりのいつくしみを受けつる、唯一の生ける紀念なる、愛らしき鶯よ。

今ぞ、汝を自由の身となさむ。

たとへ如何なる愛を受くればとて、巣立つ遑もなくて、無慘や人の手に捉はれ、親同胞にも敢なく別れて、小さき籠の中に久しくあれば、さこそは古巣の慕はしかりしならむ、されば、樂しと聞きてし音も、涙絞りて啼きしやも知るべからざるを、思へば哀れなりし、いでや、放ちやらむ。

小さき籠の戸を開きぬ、されど鶯は出でず。

こゝを出でゝ自由の身とならば、親同胞にも逢ふべきを、たゆたへるは、別るゝが悲しきか、籠を天地と住馴れては、去る宿に猶名殘惜しきか。

旋て、小さき翼に風切りて、鶯は飛び出でぬ、流石に此鳥の、あだなる樹には留らず、梅の小枝に休らひたる、花こそなけれ、なか〳〵に風情なりし。

二たび三たび小枝より小枝に移ると見えしが、忽ち上ざまに舞ひ上りて、小さき影は隱ろひぬ、あはれ鶯、心あらば、一聲兄君の御墓に若を鳴きて、さて昔の谷に歸れや。

（評）眞摯の情の凝つて成れるもの、無心の黄鳥を假りて、よく傷慨の心を寓し得たり、知らず黄鳥の行方やいづこ。

（人）春のうれひ

長門　菫女史

夕風にもろきは花のさがなれど、さて何となく散る花に哀れを誘ふ夕間暮。うすうさし出でし十五夜の月影を背に浴びて、花亂れ咲くさゝ川堤を、吾唯一人そこはかとなく辿れる時。

野邊の菫の喞くを聞けば、こはそも哀れ。

「妾が幸はたゞ胡蝶の君にこそあれ、君去り給はゞ生きて甲斐なきわが身なり、あゝいかにせん推し給はれや君」

胡蝶の聲はうちふるひぬ。

「さてもまゝならぬ世や、われとてなどか住みなれし巣を去るを好まん、あゝされど、野の神の怒にふれし身はいづれ罪の身、思へば君が情のかずかず、今骨身にしみて、中々にたへられぬものを、いつの世かはわすれん、されど今ぞ別れなり、さらば、いでさらば、赦し給へや胡蝶の君、」

菫はよゝとばかり、泣きくづをれぬ。

辿れば甘き戀の香の、うするゝ夕は憂なり、祇園精舍の鐘の音にも、一榮一落は、犯すべからざる神の掟を示すめり、さるにても哀れなる春の夜のさまや。

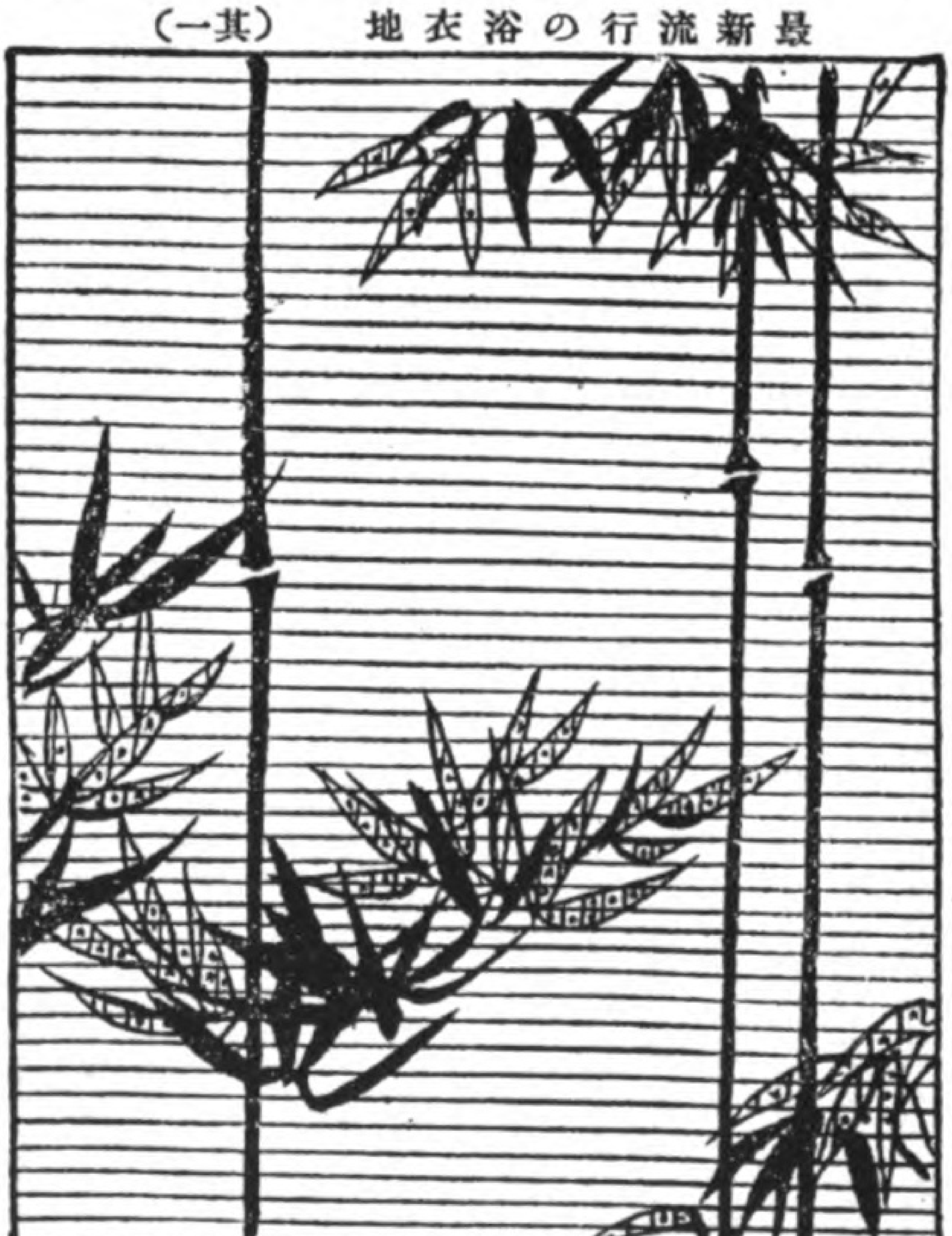
やがて我は老梅の下にイみにき。花はらはらとこぼれて、月は春の花の夢の姿か、さて美くしき。朧の影散りにし花の靈がそれ、紫の星、薄絹に包まれて光淡し。

遠きあなたに、野守が家、灯影一つしめやかなり。

夢の如き野に、一すじ白きさゝれ水、野の花の、甘き戀、哀れの戀を流して、むせぶが如、笑ふが如、されどなれが喞き、人はしらず。

（評）詩趣横溢、綺麗の彩筆掬すべし。

最新流行の浴衣地（其一）



今川橋松屋呉服店調製

（秀）めでたき花

備中　難波　勇

四つの時を通して美しくなかしきものは花にこそあれ、されば秋高うして氣澄める朝、池水にうつれる蓮は周茂叔に愛でられ、春深うして烟たなびく夕に籬に匂へる櫻は、西行法師が心醉せし所とかや、蘭菊の馥郁として秀芥の讃をえたる桃李の物言はずして木の下の自ら蹊を成せる、まことに執をめで、いづれなかすさめなんや、されどそが中にて強て妾がめづる花をし尋ぬれば彌生もやうやう暮なんとする頃、あるは野邊の流にそひて、あるは谷あひの岩陰にはさまりなどしてさも快げに群れ生へる菫なりけり、もとよ

り其幹短かくして尺にもみたざれば鶯のやすらふべき術もなく、其葉細くして數すくなければ衰れて雨宿の便とせんことかたし、されどうらゝかなる春のあした、たんぽゝ菫花草などの中に交りて清らかに匂ひ出で、そよふく風にも打戰きてうなづき合へるさま、得もいと愛すらし、花片にむすべる露の滴には小蝶のもろ羽も染にや染みなん、思ふに藤波の高く懸れるも海棠の紅燃ゆる許なるも其花をみて其操を尋ぬればなかなかに此花に劣れる所多かり、牛馬に踏みにじらるゝ憂はあれど、之を聊つ風情もなく、木隱ふかくかくろひて、訪づるものもいと稀なれども、たゞ自然のまことを示してうらみず、之を人に比べんに、さながら君子野にゐて其道を樂めりともいはまし、されば外の花にもまして妾は日頃より此花をめで、且は其花の操をとりて自らの誡ともするになん。

（評）輕快なる筆致、よく菫の德を描き盡して餘すなし、殊に末段君子の隱德に比するあたり、無量の趣味あり。

（秀）白桃

播磨　土井一子

妾が姉君には憂の雲にとざされて、美しき御姿もいとやつれ給ひぬ。あはれ姉君、實にその咲き、さこそあらめ。

今日、庭前の白桃さきぬ。あゝ、またも、姉君の涙の種にとてか。白桃よ。汝は罪深きものよ、稚らしな妾は、そも詮なき業なれば、さは思へど、又も涙の催して、あゝ、姉君が夫なりし君、あゝ義雄の君、おゝ白桃よ、汝を手植ゑし主知れりや。汝を培ひてし人の憂に沈めるを慰めすや。手植ゑしは義雄の君、培ひしは妾が姉君なるぞ。あはれ義雄の君は朔北の野の露と消え給ひしを、妾の姉君が咲も實に道理にこそ。汝が美しく開きしは、慰めんとての心にか、おゝ、さなるか、さるにても姉君の涙いや増すものを、白桃よ、汝が胸には慰めの言の葉もなくてか、あらば妾に教へてよその言の葉。

あるは山に、あるは磯に、ゆきつ歸りつ踏りつ聞きつ、いと面白かるべき春を、あゝ、さても、妾が姉君のかくも咲に身はやつれさせ給ふものを、妾に慰の言の葉なきを如何にせん。白桃よ。教へてよ。姉君の亡き夫のかたみ、白桃よ。さても。

（評）詞美しく、情やさしく、轉に綾あるを愛す。

（秀）花さうび

稻井　黑川好久

花よ、薔薇の花、などかくもあわたゞしう散りたるぞ。汝をよそにしては、友なき身の、今より何によりてかこのさびしさを慰むべき。あはれ、何の恨ありて、かくもはやう散りしぞや。

世の塵遠き野中に、あるは蝶をやどし、あるはゆく水と語らひけん汝が身の、ひと日花賣の子の目にふれて、やがて、わが文机には飾られてより、さても、折々は、ありし昔を忍びて、露ならぬ涙にくれしこともありけむ。さるを、あたらわが朝夕のはかなきすさびの伴としたりしこと、おもへば罪ふかゝりし。

さはれ世は皆かゝるならひぞかし。われもやがては汝と等しき運命にきえむ身なり。情あたゝかき同胞、なつかしき友と、樂しき春を歌へりし昔、そはまことはかなき夢なりき。一たび世の仇波に漂ひては、すみわびてこゝにこゝらのさびしき年をかされつ。中夜、夢さめて、しづかに來しかたゆく末を思ひめぐらせば、あやしき感想にぞうたれぬる。

あはれ花よ、縁ありて吾に養はれしものを、思へばはかなし、いざや散りし花びら集めて、我が愛で誦せる歌の卷に秘めむ。かくて、とこし

へに汝が情あらば偲ばんかな。

（評）散る花を慎み且つ悲しむの意溢るゝ。

消息文

〔天〕たんぽゝより蝴蝶へ

静岡縣磐田郡　平井千束

見す識らずの花より送りし文と怪しみ給ふは、尤の次第には侍れど、せめて君を戀いてやるせなきわが思ひを、泣くなくかき綴り候文なれば、せめてあはれと御覽下され度候、春日うらゝかに柳櫻錦織り交へし此の野邊に、ミューズの神の御使と天降給ひし君が御姿を見まゐらせては、鶯の初音より實になつかしく、空に囀る雲雀の聲を聞きても君を喜び迎ふるの歌とあやしまれ、野路を縫ひ行くさゝ川の水の流さへ乙女子の思をよする琴の調と忍ばれ候ものを、まして霞の衣を身に纏ひつゝ春の曲を舞ひ給ふらうたけなる君が御姿をまのあたりに眺めて　は只愛のみ神と申さんより外に言の葉無之候なればあた　りに咲る百花を初め妾同胞に至るまで君が美しき翼にふれまをしと、あらん限りの香を春風にかほらし居り候、さるに君には白桃の木影に微笑める蕪の君をこよなくめで給ひ、日毎日毎に音信れ給ふを見受け候に引かへ、岡邊にさける妾の如きは一度も君がやさしき言葉にあづからぬ口惜しさよ。只々音づれ給ふを今日か明日かと日々待ち兼れ居り候、あはれ、蝶の君よ、妾の花に宿り給はぬは蕪りうすき故に侍るか、さりとはあまりのつれなさと恨みあげ候、妾とて貢枚かたゝむ黄色の花片には、限りなき情を秘め侍るに、誰蹂躙り妾同胞を慰めくるゝもの侍らず、あたら花咲きては心なき田夫野人の手にふれ、身は泥田の中に投げすてられて、幾日かそゝぐ春雨に、凶さらす最後思へば、前世いかなる罪業を積みたるものかと、只管嘆かれ申候、幸にして妾同胞中に田夫野人の手を免るゝ者あるも、晨に花落ち夕に葉折られなば、そも團欒の儀を如何にかせんと、熱き涙に咽ぶのみにて候、妾に比して幸運なるはすみれの君よ。咲きては蝶の君の寵を得、摘れては少女の温かきみ手に抱かれいつくしまるゝ様、誠に浦山ましく候、せめては蝶の君よ、妾同胞のあさましき境遇をあはれと思召さば、一夜とは願はれど只しばしの宿をこそ願はしく候、あなかしこ。

（評）蝶を慕ふ花の心、さながらに寫し得たり、意匠新しく、趣向面白く、筆に働きあるを以て採る。

〔地〕なつかしき友の許に

栃木　淺野千代

御懐かしき明子の君よ。

いつかあなたが奈良に御いでの節、御たよりがあつたきり、其後二年といふもの、全く御消息が無いので、如何なすつたのだらう、何處に被爲入るのだらうと、始終心に、かゝつて居りました。

ところが忘れもせぬ卯月五日の夕方、何心なく女學世界の短歌の處を開いて讀んで居りますと、ふと目に入つたのは、あなたの御名、思はずらあツと叫んだので母に笑はれました、其れから御歌を拜見致しますと、其の御歌の心から詞からして如何しても、あなたの樣なので實に何とも云ひ知らぬ感に打たれました。

其の時は無くした玉を拾つた樣な、又何となく手づるを得た樣な心地が致しました。

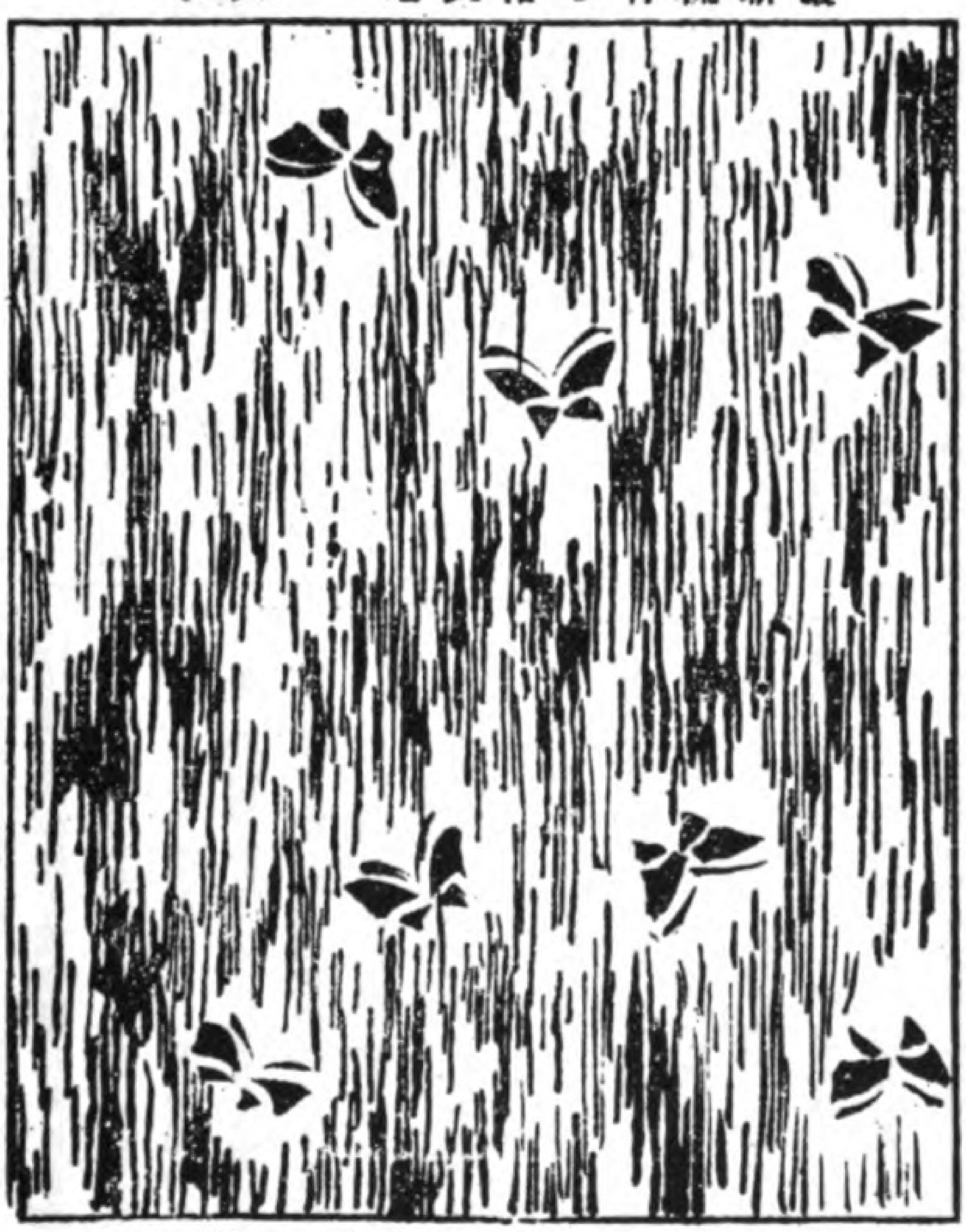
けれど殘念な事には、德島と許りで御手紙を差上げる事も出來ませぬ、只だ其れからは毎日〳〵學校時代の事を偲んで、ほゝ笑んだり、今のあなたの御身の上を想像して、羨やんだりして居るのみでした、すると五月の誌上の歌壇に又あなたの御歌が出て、居るぢやありませんか、そこで私はもう、迚もこらえきれず、直ぐに筆を執りました、きつとあなたも女學世界を御讀みになつて居られるのだらうから、せめて雜誌のはしへなりとも載せて貰ふたなら御目にふるゝ事もあらうかと、氣もそは〳〵頼み難き事を頼みにして書き認めましたは、此の一篇。

若し幸にして此の拙文を誌上で御覽になつたら、何卒唯今の御住居を御知らせ下さいな、私は實に面目ない境遇に陷つて居ります、失敗つゞけで遂に志を遂げる事が出來ませんでした、

さうして今猶家(元の所)に居ります、どうぞ私の心中、御察し下さいまし。

(評)右は、作り事に非ず、全くの實事の由にて、何卒友のありかの分る樣にとて寄せられたるものなれば、さすがに文に實情こもりて能く其の意を盡せり。

最新流行の浴衣地（其二）



今川橋松屋吳服店調製

(人)消息給はりし返りごと

名古屋市長町二十番戸　杉谷稜子

卯の花くだし、いたう降りしきりて、文讀む窓のうつ〳〵しき此頃、若葉しげれる庭の木末を、鳴きわたりゆく郭公に、友戀しと思ひ給ひてにや、私の拙き文この誌上に掲げられ候ひてより、あなた此なたの誌友の君たちより、繪葉書の交換をせよ、消息おこせよと、天雲のはる〳〵にいく重山川隔たるを御玉章賜はり候ものから、水莖のあといろ〳〵に御容姿さへ思はれて、誌友の方々の慕はしくは候へど、そが中には間々怪しと思ふ御文さへ交りて、一々御返り言せんも煩はしさに、御無禮とは存じ候ひつゝも、消息さし上げ申すまじく候、右樣悪からず御承知のほど願ひまゐらせ候。尚皆樣にも春の花秋の紅葉色とり〳〵の麗しき御文章御投稿遊ばされ候ひて、誌上のみにての御交際をいたしたく候。かしこ。

(評)溫雅にして流暢、妄に女の名前をかたつて交際を求むる男の子も有るべしと存じ候へば、ゆめ〳〵油斷はなりがたく候。

（秀）友に送り

和歌山　高内さくら

雪とまがひし花の梢も今はゝや、青柳とおなじみどりに相成候、折から、我が庭の藤の花昨今、人まちがほに、にほひそめ候、床しき梅の香、櫻のえならぬ、たぐひには候はれど、うらむらさきに、咲き出でたろ、ましてこれや、春の名殘と存じ候へば何となく、あはれに、おぼえて、空しく見すごさんには花もさこそ本意ならぬと、存ぜられ候、せめては日頃親しき御許樣と、ともにながめて、暮れゆく春を惜しみ度存じ候へば、何卒〳〵明後日の日曜には、まげておこし下され度呉々もねがひ上ら〳〵　早々

（評）優美、簡單なる一文友を誘引する力あり。

（秀）袷に添へる

三河　房枝

光ちやん、阿母樣のリウマチスは、追々快い方へ向ひましたから安心して下さいよ、御奉公先は皆樣お宜しい方ばかりと聞いて、ほんとうに落着きました、何卒わづらはないでれ、御奉公を大事に、旦那樣はじめ奥樣の御氣嫌を損じないやうになさいよ、田植も人手を借りずに、何うやら恁うやら濟しましたから、心配する事はありません、此袷は忙しい中で拵へたのですけれど、柄がこんなだから、何うせうかと思つて居りましたが、阿母樣が送れと仰つしやるので、由樣が東京へいらつしやるを幸ひ、お賴申して送ります、定めし氣には入るまいけれど、お勝手する時になりと着て下さい、左樣なら。

（評）淸らかにして眞心の籠りし文と申すべし。

最新流行の浴衣地（其三）



今川橋松屋呉服店調製

（秀）友に

周防　小澤ちゑ子

恥かしながら一筆しめし上まひらせ候。

妾は今、一人の母と相成り申候生れ出で候ふは玉の如き男の子、名は淸夫と命名いたし候。此頃は唯々可愛ゆき此子を抱きてのみ、

されど流石に、浦はづかしう、袖を顔に掩ふことも候よ。

世なれぬ身の、己が子の仕末にも困ることの折々有りて、祖母樣に叱られることさへ有之候。

一家の者の心は、此子一人に集まりて、平和の家庭に幸福を增し候ことゝ思へば、嘻しくも又た可愛ゆく御座候よ。

（評）吾が子可愛ゆしと思ふ眞情紙上に溢れたり、文また才氣ありてよし。

新體詩

(天) 朝の海

越前敦賀町曙　島　萬壽子

朝やけの雲を破りて、
赫灼の文明生れし、
巣殿の朝の海原、
波はきらめく金色に。
みち潮の樂のどよみに、
朝霧の深秘ひらけて、
東海の果なき水に、
浮ぶ朝日のまばゆさよ。
汐風に袂ひらく〱、
そばたてる巖にたてば、
珠とちる波のしぶきに、
照り映えて匂ふ七彩。

(評) 旭光四射、韻調共に鮮かなり。(霞舟)

(地) 幟

大阪市東區中入町町玉造校内　田中常子

空は霞の海にして、　黒鯉緋鯉力よく、
尾ふり鰭ふり泳ぐなり。
銀河落ち來る千丈の、　紫煙を分けて雲わけて、
のぼるや鯉の意氣高し。
神に祈りて一人得し、　あはれ男の子の行末を、
見せて勇まし鯉のぼり。

(評) 翩々たる鯉幟を促へ來つて巧みに詩化したる手腕凡ならず。

(人) 呼子鳥

茨城縣東茨城郡岩船村孫根　雪子女史

後ろに高き山負ふて、　清き小川に抱かれし、
十戸に餘る小村あり、
山の彼方に日は落ちて、　野邊に人影消え行きて、
子守の歌も止み果てぬ、
やがて淋しき夕暮の、　暮は小川のほとりより、
延びで小村を包みたり、
夕餉の烟りいと白く、　たなびく森の木の間より、
洩るゝ燈火三つ五つ、
何所ともなく鳴き出でし、　あはれ淋しき呼子鳥、
浮き世の外の小村かな、

(評) 清く靜かなる仙鄉を歌ひて、詩趣深し。

(秀) 衣かへ

三河　波久げん子

卯の花くだし今朝はれて、　あはひの垣の緑濃く、
力ありげの初夏の、　日影障子をのぼるかな。
心地もすゞし膝見るに、　綿ある衣はふさはじと、
取出す竹の小行李や、　底に書きし名懐かしき。
七十餘里を彼方なる、　我が故鄉より送り來し、
ほん銘仙の縞袷、　しつけとる手も急がれつ。
母が蠶飼のひま〱を、　つむぎて織りてつくりけむ、
あゝ戀しやと掻抱けば、　ちゝぶの裏の藍匂ふ。
綾羅の色はあらずとも、　情こもれる此袷、
古りしを脱ぎて更ふる時、　世に添ひたる思ひこそすれ。

短歌　（停春選）

（天）失題　下野　森　照野

信濃路や木曾のかけはし人たえて
　雲のみ渡る五雨月のころ

評。宛として衣笠内大臣乃至定家郷の歌を讀む心地す。

（地）失題　大和　壽　枝　子

欸乃のやゝにうすれて磯くれて
　夢と淡げの夕月懸る

評。何等の麗はしき景ぞ。何等の麗はしき調ぞ。

（人）早蕨　信州　赤　羽　ま　つ

見過してあすこん人に讓らまし
　あまりに若き春の早蕨

評。やさしの心ざし、眞に婦人の歌たるを見る。

秀逸

○○○失題　石見　宮内はる子

妻は出で馬のくつとく垣のもとにほの〴〵匂ふ夕顔の花

評。うら若き女房なるべし

○○○春雨　越後　坪井わか子

誰ほしと訪ふ人やたれ春雨に琴の音もるゝ山吹の宿

評。故事用ひ得て、凡ならず。

○○○折にふれて　越中　雪　子

ほんのりと梅の香のして何となく人なつかしき宵にもあるかな

評。何となく人なつかしき宵とは、面白し。

○○憂き事侍りける折亡き人の寫眞に　大阪　文　子

これなくば慰むべくもあらぬ身のかたみをあだと何思ひけむ

評。情思深き歌也。

○○失題　美濃　山田愛子

いつくまで送りたまふもかなしさの別ればおなじこゝに別れむ

評。長き思ひに得堪へずして、むしろはやく別れむとするは、思ひの深き餘りなるべし。

○○首夏雜　周防　眞　砂

大灘や三十五反の眞帆にうけて出船をうたう初夏の風

評。汪洋として長風萬里の波を破らむとする氣象あり。

○○閑居花　千葉　山　本　桂

舞ふ蝶の外にはふるゝ袖もなし世をかくれ住む山櫻戸は

評。上句殊によし。

○○母なき子を見て　伊賀　服部うた子

立居にも父のあと追ふ幼な子を見ればかなしも母なしにして

評。辭の素朴なる所に、却て眞情の多きを見る。

○○なき母君の愛でたまひし花の咲きければ、手向けにとて手折るをりに　大隅　高杉彌壽子

いましばしはやく咲きなば櫻花手向けにとては手折らじものを

評。遣懐察するに餘りあり。

、〇〇桃　上總　桐谷牧子
南枝や甘眠の稚子が夢はこぶやさしき風に桃の花散る
評。詩想の富贍を以て勝る。

、〇〇矢車　三河　澤田つま子
花まくら野にまろびねす小羊の夢もあらんを靜かなれ風
評。やさしき心情の掬すべきあり。

〇〇新綠　和泉　井上登美子
窓によりて讀むふみまでも青く見えぬ庭の玉樫にひみどりして
評。實景なるべし。

〇〇螢　美濃　田中文子
はりまかた針間まとほにぬば玉のやみを縫ひ行く夏虫の影
評、闇を縫ひ行くと見しは面白き着想と謂ふべし。

〇〇新樹　福岡　春子
きさらぎの花にもまさるいろ見せて時雨を知らぬ若かへでかな
評。時雨を知らぬの語ありて、寛に陳腐ならず。

〇〇藤花　伊勢　白百合
上もなきゆかしの色に咲ながら上にはむかぬ藤浪の花
評。上にはむかぬの語面白し。

〇〇五月雨　本郷　井上とほる子
若葉かげをり〱鳩の聲もれて雨靜かなる山寺の庭
評。閑寂の景。

〇〇薔薇　大阪　森川春子
花うばらおもはに笑みをふくめどもかくせるはりのある世なりけり
評。亦可憐夫。

〇〇白雲雨雲　京橋　高宮安子
打はらふ袂かほりてしらひげの翁のうちとに花の雪降る
評。綺麗亦如花。

〇〇春風拂柳　下野　金戸貞子
誰がための衣や織るらん青柳の絲をあやなす里の春風
評。巧緻。

〇〇折にふれて　埼玉　大澤ふく子
秩父路や道標古りて雨細き夕を北す母子の巡禮
評。何等物哀れの景ぞ。

〇〇紫陽花　熊本　安田文子
見るたびに咲きあらたまの心地していろめづらしきあぢさゐの花

〇〇曉郭公　越前　島爲齋子
待ちまちてあかしゝかひもありあけの傾く月になくほとゝぎす

〇〇綠蔭讀書　和歌山　木本美代子
風かほる若葉の窓にふみよみ居ればかざしの薔薇に蝶の舞ひくる

〇〇時鳥　赤坂　山本ますみ
ほとゝぎす血になきし去年は思出の話となりぬ世はしづかにて

〇〇花もみぢ　神奈川　富塚紅波
忘るなよ年ふる里の花もみぢなれて都に月を見るとも

〇〇暮春　和歌山　谷井清子
花の香にゑひし胡蝶の夢よりもはかなく暮るゝ春にもあるかな

〇〇偶感　神田　加藤通子
君がため花とちりにしますらをに見せなばと思ふ御代の春かな

〇〇牡丹　京都　四辻清子
折るもをし散らすもをしとなか〱に思ひまどひて廿日へにけり

〇〇吉野山　和歌山　森紫尾

吉野山花の吹雪にうづもれて御陵あたり呼子鳥鳴く　仙臺　竹尾きみ子

○○池杜若

誰がためのよそほひならむ杜若日ねもす池に水かゞみして

評。以上十首共に佳什たるを失はず。

○

古忠臣の心事を

誰か百世の名を愛まざらむ、君を愛むは名を愛むよりも　撰者
愛しければ。

君ゆゑに立つ名なりせばなか／＼に
あだし浮名も惜くからぬかな

涙

照る月の影のしたゝる心地して
睫がまつ毛に置ける露かな

佳調

時鳥一聲　深谷　内田可年子

天の戸をおしあけがたの雲井より一聲もらす山ほとゝぎす

春　岐阜　度會よし子

春來れば十歩に足らぬ庭ながら菫花さき胡蝶むれとぶ

折にふれて　肥前　森戸はつ子

何となくものなつかしき夕月夜床の琴柱をとり出すかな

すみれ　大阪　二木信子

むかしたかすみ荒したるやとならんひとり菫の花咲にけり

失題　奈良　奥西菊子

たゆみなく漕ぎ行く船をしるべにて學びの海の船路たどらん　長野　松尾節子

友のもとに　名古屋　清水みさを

家園は山吹つゝじ咲きにほひ青葉かくれにほとゝぎすなく

夏草　埼玉　東角井高子

茂るともはらひな捨そすゞ虫の秋のやどりの露の夏草

松上落花　山梨　小林まつよ

吹きおろす風にみだれて山松のこずゑにかゝる花のしら雪

ほとゝぎす　東京　窪田幸子

ガラス透きて外面に夜の森見えてさやけき月に時鳥なく

卯の花　伊豫　渡邊梅子

白波のよるかとみしは卯の花の露をしがらむ玉川の里

藤　熊本　安田文子

行春の日數をふかく池水にうらむらさきの藤のうつれる

撫子　名古屋　森井せき子

しき島の大和なでしこいかなれば唐紅のはなに咲くらむ

不如歸

つれ／＼に目育し育子のいくさかたりきく夜淋しくほとゝぎすなく

新樹　河内　櫻井貞子

木の芽むす烟薫りて山里は青葉若葉の世となりにけり

○　福知山　佐藤けい子

鐘の音も遠くかすみてしめやかにふる里さびし櫻ちる宿

○　高崎　小澤よし子

船の夜の夢はむなしく流れけり果てしら波の音にくだけて

暮春の鶯　三重　田中すみ子

咲きのこる一枝の梅を春にしてけふもきなけり鶯のこゑ

○

美しき胡蝶となりて花がけにねむれる君の夢まもらばや　三河　しげ子

野みち　姫路　船戸ゆき子

すみれ摘む乙女に行かむみち問へば花持つ左手東を指す

春の月　下關　春枝

うす絹につゝめる玉とまがうまでおぼろに匂ふ春の夜の月

悲しき夜　尾張　梶田愛子

なき人を思ひ出に泣くふけし夜をちかへり鳴く山時鳥

夏月　下野　金戸貞子

夜もすがら夏涼貝拾はまし月もあかしの浦つたひして

木母寺暮鐘　京橋　高宮安子

ちる花は波にながれて木母寺の夕ぐれいそぐ鐘の音かな

月下花　靜岡　小林はま

このまゝに一と夜あかさん月かげもおぼろに匂ふ花の木のもと

折にふれて　芝　吉田小萬代

菜の花かざしゆく子のあとさきに小蝶とびかふ里の細道

つゝじ　備後　重政千賀子

さかしくて人もかよわぬ深山邊にたれながめよとつゝじ咲くらん

春曙　駿河　加藤てい子

あかつきのかけはかすみにつゝまれて花よりしらむあけぼのゝそら

新緑　岡山　林粂子

手をとりて共にうたひしわが友のこゑしのばるゝ若葉かげかな

なりにふれて　備中　梅香

月をぼろ蛙の聲もしめりつゝ夢まろからぬれやのうちかな

郭公　常陸　菊地みれ子

卯の木さく片山里の夕月に鄰しのべば鳴くほとゝぎす

花菖蒲　舞鶴　輝枝

いひしらぬいろに咲ける花あやめかすみの池の清き汀に

つゝじ　淺草　春江

つゝじ咲く山は燃ゆるが如にて烟と見しは霞成けり

○　群馬　萩原敏江

ちりあくた燒くなる煙白う見えて春雨淋し夕暮れの里

初聞時鳥　備中　有田たまき

雨すぎし軒の立花かほる夜を月を掠めて初公時なく

月宿露　備後　平岡攸子

村雨の過ぎたるまどの呉竹に光るや月の雫なるらん

折にふれて　神戸　富士野みゆき

さみだれの雲の晴間ぞまたれける今宵葉こしの月をおもへば

月前時鳥　駿河　水口米子

さやかなる月にきほひて足曳の山ほとゝぎす夜たゝ鳴なり

藤の花　紀伊　靜子

川岸の松にかゝりてふじ咲きぬ行く船とむる綱手なるらむ

河邊月　廣島　房子

打けぶる柳か下のいさゝ川おぼろながらの月ぞながるゝ

藤　備後　田村もと

城あとの古松いろどるむらさきの千ふさ八千房あめにみだるゝ

首夏　熊本　露子

昨日まであかず詠めし花は散りて木かげ戀しき夏は來にけり

春の曙　羽前　大津はま子

ありあけの月は彼方に霧らぎて花より白らむ春のあけぼの

○　神戸　中西やく子

なに事の多き此世をいたづらに春もなかばをすごしける哉

海外に出でし友を思ひて　丹波　ふさ子

おぼろ〳〵月影くらし我友となれぬ船路に袖しぼるらむ

○　紀伊　川咲ひろゑ

佐保姫の小琴に風やふれにけん花の下ゆくせゝらぎの音

宮内の姉上の香港ゆきを送りて　越後　荻野てる子

姉上の遠き舟出を祈りまつる八重の潮路つゝがなかれと

落花　三重　服部かつ子

くさ〳〵の花はさけども桜花散りての後ぞ春は淋しき

春の歌　伊勢　藤堂しげ子

菫摘みつみて疲て其儘を夢路に入りぬ春の花野に

逸題　岩代　岸野常子

木犀のかをりたゞよふ夕月夜笛をかく君の影ほの暗き

折にふれて　秋田　安井はな

うの花のにほふかきねをもれ出るひめが小琴の音もゆかしき

荒寺卯花　山城　北尾きぬ子

一と聲の杜鵑に暮れて　寺はたゞ卯の花の片明りかな

春風　春野すみれ子

若菜つむ乙女のむれのこゝかしこ見ゆる廣野に春風のふく

田家卯花　播磨　小林ゑん子

卯の花のさける田つらのあかつきは垣根ばかりに有明の月

松上藤　仙臺　竹尾きみ子

紫のゆかりの道をみどりさき松にかけたる藤なみの花

牡丹　兵庫　樋口白百合子

蝶とばす人も語らずしばらくを夕日にはゆる牡丹うつくし

折にふれて　麹町　神谷よし子

小草はむたづなとりつゝ賤の女が摘みてほゝゑむ草木瓜の花

摘草　前橋　宮内りき子

かたり得ぬ思ひに摘し若草の君が身ちかく夜々夢に入る

行く春を惜しみて　大阪　中村靖子

あゝ今は短き春のゆめ覚めぬ蝶やなくらんわれもまたなく

春　牛込　遠藤義子

京は二里菜の花つゞく田甫道の晝に胡蝶に春ぞ長閑けき

野邊に匂へるすみれをみて　牛込　武藤淸牛

むらぎもの心の色をつみてよと菫を野邊にひとりごつらん

逸題　弘前　佐野てる子

亡き妹のひとみに似るよと明けの星ながむる頰に花ちりかゝる

庭外燕　伊豆　朝日千代

朝かぜにちる花よりもかろげにて小庭のそともにとぶつばめかな

早苗　河内　田中八重野

うつき散る山田の雲をかき分けてこほらぬ水に早苗とるなり

○　秋田　ふじ子

ことの音のかすかにしれて細そ〳〵の櫻ちるなりおぼろ月夜を

逸題　赤坂　服部秀惠子

錦絹の幅Hえ遠く富嶽や土佐繪畫みて金屏白し

運子　本郷　石原幽子

遠き細き松原つゞき夕月に笛吹く人のかげ長きかな

濱松を通りすぎて　島根　江角靜子
濱松の松の葉ごしに見しただは沖行く眞帆の影にぞありける

時鳥　下野　吉成ろく子
烏羽玉の夜は卯の花に明けそめてさ霧の奥にほとゝぎすかな

其夏鶯　山城　北尾きぬ子
新茶賣る聲に緑の風すぎて老鶯名のる籔かげの道

折りにふれて　高松　三村早喜子
聞え來る鐘の音さへ香に匂ふ三井の夕暮花や咲くらん

○　北海道　楓水仙子
一としきり夕立過ぎし青葉陰したゝる雨に蟬の聲きく

○　淺草　堤いく子
淺みどり若葉の茂りあふひまをあけにましろけつゝじみだれる

蝶　下野　芳子
菜の花をかざしにしたる乙女兩のあとしなひ行く蝶おもしろき

○　西播　吉田すみ子
やま里に寐ぐらもとむる鶯の聲もしめりて春○ぞふる

暮春　大阪　田中美壽榮
紛々と小蝶亂れ打つ花吹雪人影白したそがれの庭

○　牛込　平塚白百合子
あらしはらむちぎれ／＼の黒雲に吐かれて出でし中破の月

岸卯花　牛込　武藤信子
うつす夜は月さへ匂ふ水鏡岸の卯の花咲けるさかりを

郭公　高崎　澁野たま子
病みませる母みとる夜の袖の上に涙をそへてなくほとゝぎす

首夏月　熊本　中山いし子
いつしかも度は來にけむきのふけふ霞まずなりぬ山の端の月

追想　甲斐　清泉
五週の永き夢路を操り返し一日うつゝの春雨の窓

芭蕉　福井　野坂まさを
何やらむおそひ來るかのけはひして雨を知する庭の芭蕉葉

柳　新潟　原みさほ
小雨ふる柳蔭の春のくれ蛇の目のながさ影うすれ行く

郭公　栃木　たか子
郭公やさしき聲に名乘出ぬ雨の絶まの青葉かくれに

○　小石川　串本孝子
鴨の川柳に細き雨の夜を夢み心地のつま琴の音や

田家の樂　奈良　中西まさ
植ゑをへし門田の早苗ながめつゝまどゐやすらふ雨の夕ぐれ

春月　大阪　山田せい子
花をめで酌む盃のそこにさへかすめる月の影を見るかな

懷友　新發田　積若葉
忘れては亡友垣の琴の音と耳かたぶくるさみだれの音

五月雨　大阪　新家ん子
定家卿が撰りし歌よむまろまどに五月雨はれて夕月さしぬ

緑蔭　富山　舟木ひろ子
亞きんと若葉のかげに語り居ればちよろ／＼水にさゝ蟹のはな

折にふれて　長崎　春子
わか師逝きぬわが友ゆきぬわれはやみぬ櫻かざせし春もありしを

陽炎　大分　元重操子
うち日さす緑野のみち木下みち行く春人に陽炎もゆる

人事詩（劍花坊撰）

題「雨」「姉妹」

天

知らぬ字が姉の縫ふ手を止めさせる　深川區小名木川通　村松はま子

評、十七八の姉が仕事なして居る傍に其妹の少女が一生懸命に本を讀んで居る中にフト分らぬ字が、出た、「姉さんこれ何ていふ字？」と本を出された時は、流石に仕事に一生懸命の姉も、抛つて置く譯にいかず、思はずお針の手を止める、といふ刹那の人事を看取したものである、家庭團欒の情も見え、餘情もあり。

地

里歸り次の妹に嫐られる　深川東元町一九　山下みの

評、次の妹の字にいはれぬ面白味あり、敬服〳〵。

人

一念が志賀團七の首を取り　長野縣更級郡小松原　福井やう子

評、姉妹を言ひ顯はさずしてよく宮城野信夫を思ひ浮べしむ。

感吟

助六の傘は烟管の雨に逢ひ　日本橋　上田いれ子
雨入りの四光握つてさア占めた　京都　藤田静枝
撓まずに励めと雨は石を掘り　神戸　青瓢女史
宮城野に信夫あかはらたれぬ也　品川　智加女
結婚前喜憂交々の雨が降り　鳥取　朴樹子
日のもとへ鹿島香取が連れ立ちて　越後　坪井わか
ホロつくと猪首に爲つて走り出し　神戸　岡名部こま
環城「螢」さア雨乞の歌を詠め　尾張　安藤式子
雨垂れを氣味わるがつて軒傳ひ　深川　山下みの
炎天へ金を降らせる撒水夫　美濃　田中久代
姉さんへ兄さんが來て仲たがへ　山城　古川米

佳作

お揃ひのべゝで手を引く傘の内　大阪　愛子
妹の手鞠がはづむ姉の歌　深川　村松はま子
俄雨小さい傘に姉妹　東京　ゆき子
姉妹が御國の爲に奮闘ひ　大阪　高辻なか子
失戀の雨にぬれてる庇髪　同　六車よしな
姉のさす合せ鏡でお下げを見　尾張　瀧積榮子
縞柄を見くらべて居る姉妹　本所　たま子
妹の話にまぎれ縫ち違へ　糸魚川　木島そう
姉さんはカミさん妹は夫人なり　大阪　岡子
蝶千鳥うらみは晴れて雨後の月　足利　それがし
新橋へ着くとカフスの雨が降り　芝　新野壽枝
御叡慮に違旗涙の雨にくれ　磐城　尾立てい

俄雨逃げ込む矢先吠えつかれ　大阪　れん子
御無沙汰が傘借りに來る花曇り　伊勢　初學女史
結婚で姉妹の中遠ざかる　三河　白すみれ
浮氣する人の女房は涙雨　兵庫　大西季子
妹に蓋さゝせてとみかう見　水戸　八重子
傘持たぬ式部若葉の下を行き　失名氏
行幸を拜む九段の小糠雨　前橋　町田乙女子
桃櫻ならべて親は自慢なり　京都　かをる
雙六の勝を姉妹讓り合ひ　伯耆　入澤ぬい
妹は姉の秘密を見せ廻り　神戸　岡名部こま
五月雨の一と日碁の客酒の客　鶴見　岩村芳枝
姉は琴妹はピアノ買ひたがり　飛州　山茶花
音樂會拍手喝采雨のやう　紀伊　川俣多根
早乙女がだゞアがまアを話し出し　美濃　田中文子
姉の戀妹は知らずふみ使ひ　飛彈　村の子
失戀の涙指輪に涙雨　愛媛　岡田きぬ子
美しう汚すは花に雨嵐　宇都宮　大谷とみ子
妹は姉の泣くので共泣きし　横濱　杉本芳子
少將と虎と裾野の涙雨　大阪　吉野花子
雨やさめさんざ時雨の破鏡歎　名古屋　富田秀子
姉妹親と伴に受け出され　栃木　むらさき
久しぶり逢ふて嬉しい姉妹　赤坂　つれ子
盛裝の姉妹を舟が送り出し　淺草　壜いし子
百合と薔薇バイオリストの姉妹　上毛　かへで子
麥を刈る老婆の額雨雫　大分　片山きま子

雨垂に文讀み沈む丑の刻　尾張　中野るかゑ
春の雨などは嘯でぴんとはれ　上野　佐藤露子
元祿の妹廟に念を入れ　飛州　山茶花
姉は筑紫琴はバイオリン　本所　花舞女
水無月のひろひものなり雨一夜　山形　渡邊たち子
花の雨かたみにぬるゝもやひ傘　磐城　足立乙女
いやな事又日曜が雨に當り　姫路　鶴子
妹を見せに抱き出す花電車　相模　木内とみ子
姉さんは島田の方がよくつてよ　紀伊　川俣たれ
キラ／＼と濡葉に螢まつてゐる　大阪　加藤あい
招魂社祭の人の涙雨　陸中　磐井里子
人知れぬ戀が涙の雨となり　駿河　渡井いせ子
血の雨は晴れて日比谷の五月雨　芝　岸五千子
はらがらの相合傘は美しい　赤坂　桑ふさ子
晴天にして雨降る遺族の涙　下野　永井きく
二人して同じお内へ嫁きたいわ　越後　木戸まさ
喧嘩して又まゝごとの仲間入り　直江津　石井きく
招魂社かたじけなさの涙雨　下谷　安西しげ
叱られる姉をオロ／＼辯護する　尾道　中尾久子
狩衣を絞るところへ山吹の　大阪　前川四三子
裸嫁姉の紋付借りて來る　名古屋　横山保子
妹の亡き魂が知ら杜鵑　足利　相夏くら子
嫁入を看護婦妹に勸めて居　兵庫　前田すゑ
大入島香取鹿島が寄つ來る　仙臺　相澤玉子
眠いのが山から出ると雨に成り　神田　太田しげ子

母ちやんの御留守姉さんと二人でし　小樽　大杉ひさ
姉妹小さき膝を雛の前　宇都宮　大谷とみ子
靜ちやんがお喜びだと妾まで　伊勢　佐野みよし
姉さんも無事でしたかと涙也　愛媛　岡田きぬ子
しめやかな琴の音止むと欠伸也　越後　木島そう
お別れが涙の雨で日のべをし　奈良　中西まさ
姉妹がよう似た人と噂をし　伯耆　船木とみえ
けふもまた雨に倦んじたきんだちめ　靜岡　さき子
母様のお土産リボンの赤と白　名古屋　小島けん
姉妹の花見は花に見られさう　大和　今中よしへ
理想の美人を想ふ雨の永夜　香川　川崎みつゑ
狭山しいやうな姉妹の中のよさ　備後　森貞子
たほやのめ雨に濡れれたる後影　大阪　中村きぬ子
春雨にピヤノ弾いてる奥坐敷　同　加藤あい
又雨が降つて來てよと枕元　美濃　青木松尾
お花見が雨に爲つたで又流れ　伊豫　山崎くま子
未亡人石にすがつて涙雨　芝　片岡たけ
しめやかに招魂祭の涙雨　弘前　森下楮
蝶々を二つ追び行姉妹　大分　末綱さみ子
杖となり柱となつて姉妹　神戸　藤谷みき子
飛んで出てオヤ姉さんが〳〵　福井　下里露子
病む姉に許して貰ひ結納し　能登　木森一子
姉妹が陸海軍へ嫁に行き　大和　芳園女史
御贔りの仲の善いのを例に引き　小樽　若松とみ
彈の雨止むと輝やく日の御旗　芝　岸常子

母と子の別れ路に降る涙雨　岩代　五十嵐みよし
姉妹戀といふ字に敵味方　愛媛　岡田きぬ子
妹を連れ春の野に出でゝ若菜摘む　伊勢　佐野みよし
妹の手紙式部が泣かされる　神田　太田しげ子
有難い雨を降らせる招魂社　下谷　安西しげ
雨垂れに又もや坊やが目を覚まし　直江津　石井きく
山吹に一思案する雨やどり　三條　木戸まき
人知れず坊の寝顔に降る涙　下野　永井きく
姉妹才色共にまづい、なり　神戸　河本杉子

加

姉妹で書男の事があき　剣花坊
手を取りつ取られつ對の海老茶ぶり　同
姉達は南爪二ツの姉妹　同
うるさいが書見には好い花の雨　同
路に足生える秋田の俄雨　同

次號課題

『太陽(たいやう)』『母(はゝ)』

「太陽」は日なり、朝日を詠み夕日を詠む、或は夏日の烈しきを詠み、春日の麗はしきを詠む、作者の意匠に任かす、人事に配合せざれば落第と知る可し、莊嚴、美麗、光輝、温愛なる句を求む、又「太陽」の名ある物品は詠み込みて差閊無し、「母」は詠んで字の如くなれど、成る可く繼母の虐待など詠む可からず、慈の如き乳の如き母の恩愛を主として面白く詠まるべし。

短文

（天）失望

飛驒　さやんか

一度ならず二度までも沒書になりながらそれでも今度こそはとハリコンで出した彼の作文きつと載つているに違いない天だろうか地だろうかよもや人とは下るまいと待ちこんで居た甲斐もなく天はおろか地はおろか秀逸にさへ我が名の見えないとはおもはず失望の涙に沈みました。

（評云）文法整然として、一絲亂れず、事は的切自家に關係を有し筆は明了事實を敍し去る、渾然として自ら章を爲すものである。

（地）愛ちゃん

播淳　山田勝

私の徒弟の愛ちやんは今年五つで男六人の中の一人娘なのです先達私が遊びに行て愛ちやん大きくなつたら何になるのと聞きましたら可愛い愛ちやんは次の間へ驅けて行きましたが赤い友禪の着物の上に兄さまの金ボタンの外套を着て其下から二尺指を鋸でくゝつたのをガチ〳〵引きづりながら出て來まして叮嚀に敬禮したので一同ドツト笑ひました。

（評云）男の子がこんな眞似をするのは當然で一つも面白い事は無い、それが女だから非常に興味を感ずるのである、一に作者の働といふ可し、輕々に看過してはならぬ。

（人）汽車の乘合

河内　田中八須野

或る汽車の乘合に、一人の紳士がシガーを咬へ、已れ一室を買切た樣に座を占めて居つた。或る停車場にて、年頃六十近い老婆が此室に來り。紳士の傍に座せんとせしに、きも大柄に座れないといつた。妾は向ひ側に居て氣の毒に思ひ、席を讓つてあげた、後に續ひて年頃十七八の當世式部が同じく此室に來ましたすると件の紳士、すぐ座を讓つて是へと言れた、軈て先の老婆と後の式部とが話すを聞けば、親子であつた。

（評云）當世のハイカラを罵倒し得て妙、結び得て踏鞴、畫龍點睛。

胡蝶塚

岩代　菅野和子

身邊に纏る胡蝶は春野を同じ心に遊ぶらし、行々唱歌歌ひつ戯るゝも面白しや、今は打んとして驚かざるも愛らし、再びうちぬ、アハナ、優しき遊びの友!? 小さき頭は摧けて死せり、思はず我は「アレ」と叫びよりぬ、弟は「姉さんは酷いわ」と恐む、とりあげて紙につゝみかへりて櫻の木の下に葬りぬ、弟は毎朝蒲公英の花を手向けて吊へり、我はたはむれに胡蝶塚と名づく。

(評云) 婦人の文としては同情ある好き文である、弟をして姉さんは酷いわ」を叫ばしむるは、ひそかに婦人の爲に氣を吐くもの作者狡猾手段、男子をして後に瞠若たらしむ。

秀ちゃん

尾張　野咲すみれ

日頃姉様〳〵と云つて慕つて來た秀ちゃんが病氣だと云ふので、私はすぐに見舞に行きました秀ちゃんは其がはいゝ星の樣な目で、私の顏をヂッとながめて居ましたがやがて其目に涙を一ぱいためて姉樣、もし僕が死んだら姉樣は誰とあそぶの、まあ何と云ふいぢらしい私は思はずなきました、そして其日一日秀ちゃんのために神に祈りました。

(評云) 悲慘の間一種の慰安也。

靜ちゃん

山城　藤田りう子

生ひ茂れる樹の下、芝生にまろんで、餘念なく讀書して居る弟靜ちゃんの姿、アゝ賴母しいよ、綠の櫻、綠の靜ちゃん、葉風の音、本讀む聲、そゞろ綠の前途を語り合へるか、何心なく「靜ちゃん」と呼べば、そが眼に綠の葉をゆるがせてにつこと笑む。

(評云) 惡い文では無いが今一と息といふところがある、眼に綠の葉をゆるがせはアマリに巧緻に過ぎて居るやうに考へる、

待つ母

出雲　世良ふみ子

夕方になつて腹がすいたとみえ背の子は頻に泣く、釜の下の火は什麼しても燃えない、妾は本眞に困つた、「お母さんは今日お父さんと何か言ひ合ひなさつてからつい出られたが今に歸て來られない、お母さんはなぜ歸らぬであらう？」。背の子はます〳〵泣く、妾は遂にたまりかね火吹竹も火箸もなげやつて置いて、泣く子をゆすりつゝ門の外へ出た。幾ら待つてもお母さんはお歸りない、あゝなぜお歸らぬであらうか妾は急に心細くなつて太い溜息を漏らした。折からお隣の清子さんの唱歌と笑ひ聲とが交つて聞えた。

(評云) 恐る可きかな家庭風浪の高き、他の溫柔鄕を化して地獄と爲す。

一日の仕事

宇都宮　大谷とみえ子

軒の雀に起されて朝景色を見て居る内チリン〳〵牛乳が來る新聞が來る牛乳は母新聞は兄さん及座敷のお掃除は妾の受持朝食後母のお仕事の手傳をする晝食後机の塵を飛ばして切に頭を振りあやしくも短文を綴る妹の學校歸りを待受けいつも〳〵程遠からぬ湖畔を逍遥のが何よりの樂しみそして向ふに人家の灯點々水に照ろふ頃薄月に小さき影を二つ動かして家の門を潜り晩食後約束なくも妹にいつも〳〵本のお稽古其夜投稿せし短文の某誌上天位に選ばれしを夢む

(評云) 結び得て奇想、一句千鈞の力あり。

思ひの種

奈良　中西まさ

喜んで下さい長けは四尺九寸池月のそれにも劣らぬ青毛の逸物それが今日より僕の弟！僕は青龍と命名してやつた、戰友が皆羨むのですよ」

とは亡き兄上が應召當時の手紙に…僕も青龍も　無事とは出征地よりのいつもの手紙に…あゝその青龍は兄上が戰死の後は如何にせし。過ぎにし馬匹拂下げに隣村の太郎作爺が買ひ　入れた脊毛の逸物恐しい駿馬で聞けば足と　首には二ヶ所の彈傷があるとの事。何となく青龍らしく思はれてならぬ。あゝ又今朝も聞ゆるあの勇しい一聲！　たしかにそれよだけどだけど、問はんにも、語らんにも。

（評云）　短文盡し得たり、一篇の小說。

姉弟

芝　新野壽枝

三四の大和屋で御座い御茶の御用は如何樣で！、十二三の目のくりくりした小僧此處牛込の町外れ腰障子の立てゝある　破目から臺所をこう叫びながら覗いては何か考へて又思出した樣にすたすた　臺所では米洗ふ音のハタと止んで青白い顏の女が手桶を片手に二足三足　あつと少さく叫んで足を返す途端　前の小僧は引掛帶の端をつかんで聲もおろおろ矢張り親不孝の姉ちやんだつ　女は無言にだき抱へた空には塒を急ぐ鳥が三羽五羽。

（評云）「だき抱へた」を今少し面白くすると面白くなる。

内のエスが勝つてよ

三河　山中その子

姉さまちよつと見に入らつしやいな姉さまてばよ！
幸雄さんなんですの
内のエス（犬の名）がねよその大きい犬といさかつてよ
そう…そばへおよりでないよあぶないからね！
あつあつ姉樣とうとうエスが勝てよ
ちようどお父樣が露兵を御負しなすたようなのね！
お父樣も凱旋して入らつしやつたがエスも今凱旋してきてよ

（評云）　エスの凱旋とお父樣の凱旋とコントラスが妙ではないか、少女の心情を寫し得て眞に迫れるもの。

亂筆御免

飛驒　遊多子

亂筆御免下され度候などゝ書くものゝ其の實は！　水莖の跡美はしう書き流したつもりの此の手紙、我ながらおかしい程曲つた金釘流なので破つては書き書いては破り一寸氣候の挨拶にも卷紙三丈も書いて見て之れで根氣の盡き果てた揚句が例の亂筆御免受信者は何と思召す。

（評云）　可笑しいと思召す！　呵々。

御返事

越後　伊倉やす子

清子さん今程は有難うあなたの何時も　御針仕事をしていらつしやるあの御座敷の前を横切る小川へ宜く咲いた　山吹の枝に今の御返事を結び付けて土橋の上から流しましたら廻りながら　あなたの方へ行きましたから早く出て取つて下さい

（評云）　あはれ風情ある振舞や。

郵便にて

神戸市　青瓢女史

日曜なれば姉君の家に訪れむと思ひ立ち家を出でぬ、途端に人なく、いぶかり聞けば 波守る人の病を得て妻なる人の抜逆さんと出で來るにイヘ〳〵と氣の毒さのあまり辭して歸りぬ。姉君逢へなかつたは此事で!!

變　轉

水戸　篠　むめ子

「一旦かうと思立ち遊ばして中々お諦めなさらぬ御氣性とは婆やもよく存じて居りますもの、」檜原長者の一粒種とも有らうお嬢樣が醫へお家は瓦壞となり御兩親はお亡なり遊ばした迹この變つたお姿はどう遊ばしたお心から……」庫裡に近く藤の房簾に搖るゝ寂の一室五十路に餘る老媼かしやくりながらの怨み言、語なく聲なく兩手を膝に俛く人や墨染の服衣纏うた花も耻なんうら若き尼法師、佛壇の花陸より香の紫煙が搖々として庭には一連りの卯の花下し。

（評云）　悲凉の景、文章の外に在り。

小千代

伊豫　なでしこ

文ちやんてば何するのと私は 薔薇の瓣をちぎつてゐる妹を窘しましたすると小い瞳が物言ふ樣に 小千代にやるのと門籠ゐ私の目白を云ふのです。小千代が食べるのかう言つたが流石に淡しくなつて春日の照す又色を眺めると風が一陣、妹の薔薇を散し初めました。

姉さんと散步

長崎　栗原たか子

或る月の夜に妹さんと二人り庭を散步しましたが 月は木の間なくゞりてゝり渡り星は幾萬となく輝いて美しき 夜でありましたがふと姉さんが空を見て星の數を讀つあるか、あてゝごらんと申しましたから、いそぎ座敷に入り皆の前で筆に 墨を一つぱいつけて白き紙にぱつとちらし之だけありませうと申しましたが皆、なんともいはず只笑つていらつしやいました。

地震の失敗

和歌山　林　貞子

夕食後父母及び弟と妾と四人臺所にて 今日の地震の恐ろしかつた事を語りて互に胸をドキつかせて居た出へ 不時に二階の一隅から、ぐわら〳〵と震動の音弟も妾も一聲にソリヤ亦地震じや、と逃げ出す父も母も共にうろたへ火鉢を倒す、鐵瓶は覆へる座敷中狼藉暫く經て音が已んだよく考へて見ると地震には非ずしてチユー〳〵の聲のみ尙ほも、響いて居る。

（評云）　滑稽の甚しきもの、呵々。

たのしみ

紀伊　橋爪千代

兄上樣の御かへりと女學世界 並に少女界の發行と御友達よりの御玉章と六月の御祭と之が妾の一番たのしみです。

（評云）　罪なかりけり〳〵。

謎々

「貧乏人の財布」「三井呉服店」「下女」とかけて

一等

▲貧乏人の財布

ポーツマスの談判」と解く、心は「償金（正金）は一文も無し　愛知縣海西郡六ケ和村　中野さかゑ

二等

▲下女

はかり炭」と解く、心は「粉（子）が多いといやがる　神戸楠町一ノ三〇　闇名部こま

三等

▲貧乏人の財布

親の氣に入らぬ婿」と解く、心は「入れたくも入れられぬ　下野國喜連川町　永井きく子

▲三……東北地方凶作當時の稲」と解く、心は「元祿丈が大出來であつた　神戸　青瓢女史

▲貧……繪に書いたゆふれい」と解く、心は「何つもおあしがない　姫路　てる子

▲三……神社の祭禮に出る神輿」と解く、心は「御輿（三越）ともいふ　兵庫　春田愁葉

▲三……日光」と解く、心は「外賓は必ず立寄る　美濃　青木松尾

▲貧……クロパトキン」と解く、心は「實戰（拾錢）もたぼつかない　愛知　中野柳亭

▲三……郵便切手」と解く、心は「カケ子がない　信州　松本まつ子

▲三……眞家の處女」と解く、心は「衣裳（意匠）にこること非常だ　仙臺　よし子

▲下……自己の所有物」と解く、心は「勝手に使ふ　愛知　中野柳亭

▲下……漁村の夕」と解く、心は「背から舟を漕ぎ出す　京都　藤田靜枝

▲貧……シベリア」と解く、心は「暖かになる事が少い　芝　新野春枝

▲下……荒神様」と解く、心は「臺所にくすぶる　芝　新野春枝

▲三……花紅葉の名所」と解く、心は「季節〳〵に客を引付ける　遠江　丸山茂豐

▲貧……下宿屋の味噌汁」と解く、心は「多くは空（殻）だ　上毛　かへで子

▲三……赤穗義士の夜討」と解く、心は「元祿で世を驚かす　越後　坪井わか

▲貧……立身出精の時」と解く、心は「始終空（四十から）　深川　加藤木はるえ

▲貧……守備隊家族の小兒」と解く、心は「ちゞまつてる　羽前　谷山たに子

▲貧……春の雪」と解く、心は「たまらぬ内に消えてしまふ　美濃　田中文子

謎々新題

▲梅雨
▲寫眞
▲情死

例によつて諸嬢の出題を希望す、何卒奇々妙々のものを澤山御出し下さい（〆切六月十五日）

一口ばなし

▲出征軍人の留守宅　　田中久代

其一

不具の子供母にむかひ「阿母さん僕も大きくなるとお父さんのやうに軍人になつて戰爭に往くよ」母「お前は手の指が二本しかないから軍人にはなれないよ」小供は平氣で「ナニ僕は負傷兵になるよ」。

其二

軍人の留守宅へ强盜忍び入り「サー有り金を出せ」と例の長い刀を翳して怒鳴る聲に寢て居た小供眼を醒し衝と起きるや否や兩手をつき「お父さんお歸りなさい」。

▲三越呉服店　　青狐女史

下女「奥さん女學世界の謎々を投書しやうと思ツて」奥「さう爲渡拜見……」「こりや御前陳腐じやないか」下女「だツて題が古いんですもの」奥「どうして」下女「三井呉服店なんて」。

▲見た事がない　　池田濱子

理科の時間に先生が生徒に向い、先生「花山さん空氣と云ふ物を知つていますか、

花山「私わまだ見た事がありませんからしりません。

▲英語　　鈴木まさ子

妹「姉さん昨夜ラーレーさんの處に赤坊が生れましたツてれ、なんて啼いたでせう、

姉「矢張りオギヤ／＼とないたでしよう、

妹「そーかしらどうして英語でなかないのでしよう。

▲　　一見安子

○軍人遺族曰く、モシあの襷がけの婦さんはナントいふ人です、アレハ(大將の奥さん)。

○家庭料理の献立は實に經濟的ですナア(野菜ものばかり)。

▲火の用心　　あやめ

馬鹿者「夜中金棒やら拍子木で騒しいが何の爲めですか、

老人「丙午年で火早いからぐう／＼寢ない様注意して居るのだ、

馬鹿者「ハーそーですか其れよりか大砲に彈丸をこめて打たら皆目を醒ますだろー。

▲五月鯉

老爺手に鯉をさげながら内の媼は能く(鯉)は新撰なるものと言つて居るが之れは少し腐りかゝつてるよ。

ものはづくし

▲途方もないものは

○○紀念繪葉書の相場　藤田しづえ
、書生の空想　足立てい
○兵式當日の直奏者　英子
、○○兄嫁をくどく人　岩村芳枝
、緣日植木の値　北村綠子
、米國の地震　加藤とよ
、見世物の軒看板　久保澤銀江

▲怖いものは

、色情狂　足立てい
○立ち聽きする人　岡部いと子
○昨夜の足音　岩村芳枝
、天災とペスト　伊藤とよ子

▲汚らしいものは

○鷄卵の腐敗したる　田中千賀子
、犬と口なめ　岡部いと子
、他人の作を我物顔に投書する人　木森一子
、鐵瓶の中の飯粒　永井きく子
、男女の接吻　足立てい
○○蹴つけた犬の糞　北村とく子

▲馬鹿らしいものは

○試驗場で忘れて居て歸つてから思ひ出した時　北村綠子
○螢に驚いて逃げかへると　佐藤露子
○交番の燒打　藤田靜枝
○掃いた跡へ又ごみ　岡部いと子
○猫に肴を取られし時　木森一子
、、訪問先の不在　久保澤てつ

來月の課題

▲いやなもの▲好きなもの▲辛(から)いもの

右投書の〆切六月十五日限り

●●結婚道しるべ●●

求婚者須知

一、申込者は博文館女學世界交際部宛封書にて送られたし。
一、申込者の住所姓名番地は詳記するを要す。
一、書面の外に本人の寫眞を添えて送らるれば至極便利なり。
一、申込書は簡明を要すれども參考の爲め身元希望の點を詳記さるゝものは、特に保存して紹介の便に供す。
一、照會者は通信料を添へらるべし。
一、申込は郵書の到着順によりて掲載し手數料は當分無料とす。

嫁に行き度き方

▲年齢二十二歳血統純正性質極めて温順府立高等女學校出身、卒業後自宅にあつて挿花茶道の奥義を極む、交際應對共に申分なし、容貌普通體質健全遠近を問はず、前途有望の官吏又は銀行會社員に嫁ぎたし。（浪花節子）

▲年齢呼年二十二歳地方女子師範卒業の女、容貌普通血統正確にして醫師を業とす、家計は中等なり父は先年死亡したれども母は健在なり、商家若くは相當の所へ嫁入たし、但し舊士族にして家庭嚴格なれば成るべくハイカラ流にあらざる着實温健の人を望む。（伊勢の濱荻）

▲年齢二十四歳地方高等女學校卒業生、容貌普通血統純正兩親健在にして、家計は中等なり、係累なき官吏又は軍人の所へ行きたし、適當の人なれば教師にてもよし、成るべく東京を望む。（大阪の求婚女史）

良縁を求むる方

▲年齢廿四歳の血統純正なる電氣技師、目下某會社に勤務中にして、年收六百圓、他日製造工業家の妻として、充分の資格を有すべき見込ある十六歳以下の女子と約婚を望む、但し東京若くは横濱在住のものに限る。（横濱のK）

▲年齢卅四歳血統正再婚者にして、今三歳の男兒あり、他に係累なし、醫師を業とし月收五百圓、尙ほ東京にも多少の財産あり、普通敎育あつて身體健全なる年齢廿二歳以上卅歳以下の初婚或は再婚の淑女を求む、容貌普通にして家事に心得あれば妙なり。（在韓一紳士）

▲廿七歳の男子血統正確、地方縣立中學卒業目下某大學に入學勉强中なり、在學中漸く凌ぎ得る丈けの財産を有す、係累は國元に老母一人あり、深切にして沈着なる處女と結婚したし、敎育、技藝、財產の有無を望まず、委細面談を要す。（早苗生）

▲年齢二十七歳、血統正（初婚は出產の爲死）早稻田專門學校出身、現今中國鐵道株式會社社員（營業部勤務）月收二十五圓（外に不動產有價證劵等相當財產あり）何等係累なし（別家なり）都合によりては養子に行くも不苦十八歳以上二十三歳以下女學校卒業家政科專攻を希望極ハイカラ氣質を好む容貌普通以上の事（岡山希望生）



簀屏風

楊太眞

イへ、私は貴君の仰つしやる樣な美しい人間ではありませぬ、私は畜生で御座います、人間の皮を着た、動物とやらで御座います、儂はね、儂はあの、私……いへね、兒まで出產けたので御座いますよ、ハイ。

だつて、運命が然うなつて行つたんですもの、人が何と云つたつて、些つとも搆やしませんわ、しませぬけれど、……正直の處を申上ると儂は始めから貴方が好きで〳〵、夫は大好きなんですけれど、此れ程仰つしやつて下さる貴方の御言葉に反むいて迄も、總身の血を吐く程な憂苦い思ひで、怎うしても申上げねばならぬ事があるので御座います、いつ、もう、人がましう申上げるでは無く、淸い氣高い美しい貴方の前で、儂の身の上を白狀しなければならないので御座います、而して、殘酷い恐ろしい罪情の犧牲となつて、淋しい戀に泣くより外は無いので御座います。

儂はもう斷念めては居ります、だから、人も自分も更に恨めしいとは思ひません、儂は唯、儂の犯した罪惡を奪めて、忘れる事の出來る生涯を經たいと存じますばかり、迂詐ではありませんよ、眞に死なうと思つた事は一度や二度ではありませぬでしたけれど、儂

には什麼しても死ぬ程な勇氣がないんですもの、眞實くの處、取り詰めて死ぬ氣にはなれないので御座います、此頃じや、丸々と肥滿つた可愛い奴が、里子に遣つた乳母に縋がつて、僕の事を姉ちやんなんて、片言交じりの唱歌も歌へる樣になつたじやありませんか、笑ふ都度にふつくりとした頰の片笑凹、男としては優し過ぎる切れ長がな眼附、お死去りなされた阿母樣其儘なのを見ては、怎うまあ、私は死ぬ事が出來ませう、たとひ、石に噛り着いても生きて居たう御座います、彼の兒の口から一度でも母樣と呼ばれて僕は……死にたう御座います。夫ですのに、什麼して阿方、二度と僕は此の上の罪が犯されませう、世間には構ひません、人にも關係ませんさ、稼業が稼業だから、何と云はれたつて、少しも構ふ事はありませぬけれど。

噫、全然醉つて仕舞ひました、御覽なさいまし、此の島田が、四つになる兒の母樣ではありませんか、

ホヽ、私の鄕國ですか、其れは申上る事丈は許して頂戴な、其れでも兩親は、狼でも狸でもなく鼻が縱に附いて眼が橫に切れて、私を可愛がつて呉れてたで御座いませう、一人娘ではありましたし、其頃は今とは違ひ、人並に、物憶えもよく、少しは怜悧でもありましたが、其れは隨分と近處の賞められ者で御座いました、春は鶯の音に春風渡つて、芍藥が赤く芽を出した頃、風の心地でふいと御臥せりなさつた母樣、其花が咲いて散つて、淡綠の實に初々しい里、蜻蛉が止まる頃に、終々母樣が御死去りなされたので御座います、去年漸やう、兩の手を合せたばつかりの、幼な心には、如何程か悲しくも心細くも思ひましたけれど、未だお優しかつた伯母樣もありましたし、父樣も可愛いがつては下さいましたし、諦めさして下されば兒供丈に、何とも思はず、月の七日、母樣の御墓參をするのを、何よりの樂しみにして居りました。

初秋の風に萩の花飜れて、僕の大好きだつた、其芍藥の葉が枯れて、莖が枯れて、籬の菊にしつとりと霜おき餘る朝、眞赤な柿の實一つ、裸な枝に、ぶらりく寂寞しう搖れて居つた頃、私には後の母樣、……其れ

は、私の樣な稼業を遊ばした、若い美しい方が、入らしたので御座います、流れの中にも然る者ありと知られた程な御方、何うして〳〵堅氣の家の女房となつて、儂の母樣で通して入らつしやる事が出來ませう、召し食る御酒の量も度重れば、粹な音色に忍ぶ戀路を合せ玉ふ夜半もあり、はては、藤表の駒下駄に半纏姿、膝寛ろげし毛脛には、男龍女龍の入れ墨もある、あらぬ人を集へては花紅葉の遊び、其頃、紅絹裡洩れて、袖より落ち散りし怪しの封じ文、知り玉はぬ筈の阿父樣すらも、有繫に見るに見兼ねて御意見なさつたけれど、聞き入れ給はゞこそ、彼れ此れ一年は御出遊ばしたで御座いませう、父樣にある程の金、半額は浪費ひ散らして、或る夜御姿が消えたので御座います、御連のあつた樣にも申ますが、何處へ御出遊ばしたのですやら、寢られぬ夢の夜すがら、其れでも一度は、母樣と呼むだ御方、昔慕戀しう時折思ひ出されます。

　以後で御座います、父樣は一層自暴におなりなされて、取り出す銀行の株劵も酒に化れば、家屋倉庫も酒に流れて仕舞ふ、暮れて明けて、明けて暮れて、三年の間と云ふものは殆んど溶びる程な御酒の飲み詰め、思へば私が十五の春、些との便を東京に求めて、哀れな活計、何時か御本心も消失つてお仕舞ひなされてか、遊藝の人並に暗からで、姿の割合に田舍びぬを幸、御酒の代にと、私をまで。

　夫れとて、運ならば少しも恨みには思ひませぬけれど、私が御側に御附き添ひ申さぬばかりに、僅つた一人の父樣迄が……其翌年死んでお仕舞ひなされたので御座います、孝と云ひ不孝と云ひ、何れ丈の差別があるものでせう、私は未だに、了りませぬ、孔子樣の敎へも、御釋迦樣の誡めも其れは世に在る程の人にこそ、用には立て、私等の樣な不運では、何の價値もありません、大學病院に藥は山程ありましても、名醫は腐る程ありましても、診察ても戴けず服藥もさせませず、酒が原因の……私は其頃から何もかも世の中の事を疑ひ始めたので御座います、病氣と申ても大した事は無いのでせうけれど、父が五十年の不行跡、目を閉つて許

し呉れよ、責めて此の上の苦勞は掛け度くなければ、と、さぞや、事果てゝの朝、四行に足らぬ走り書の葉書、受取つた時の私の心、お察し遊ばして下され、御覺悟の上とは云ひながら、レールを其儘の枕、父樣五十一歳の一期果敢なく車輪に掛けられて、骸も止ず、其れは無慘らしい殘酷な横死樣で御座いました。

　這れ丈でさへ、此の少さな胸が張り裂け相ですに、何と云ふ儂は……否々泣いたのではありませんわ、ほゝ、だつて貴方が餘まり煙草を御吹かし遊ばすんですもの。

　大路を流して歩行く按摩の笛の聲更けて、其れは淋しい〳〵梅雨の夜で御座いました、冴えた細音に爪曳の何やら、慣れてる耳にも、今始めて聞く樣で、何とも云へぬ悲しい果敢ない忌な想ひが胸を衝いて來るので御座います、寢惡い夜で、雨はしと〳〵と降る、其先が掠れて地にでも染み入る樣、切れては續いて細い女の泣き聲の樣にも聞かれる、蘭の葉の戰ぎ愈よ小さうなればぱつたりと風は死して、夜は唯だ、凄う更けて參りますばかり、……儂は父樣や母樣の事を思ふと怎うしても寢られませぬ、夢!? 私は驚いて飛び上つた、微暗い障子の陰に主人養父の姿顯然と。

　此の上は申上げたとて、何になりませう、私も申上げませぬ、今から考へると、何故私は其時、死なれなかつたらふと夫が口惜しう御座います、生れてから一度の運命、儂は鏡に掛けて誓ひます、職業こそ這麼ですけれど、儂は一度だつて、そ、其麼、淺間しい恥しい、……此れが泣かずに什麼して居られませう、御察し下さい!。

　聞けば、上流の姫樣、孃樣方だつて強ち御品行の方正方ばかり、と云ふ譯には參りませぬ相ですけれど、知らさねばこそ、知らねばこそ、其儘お嫁き遊ばせば、振りの袂の綻びは昔の夢と流して、縫ひ込みし止め袖の、善い奥樣になり濟まして御出遊ばします、其れは元より數にも足らぬ私ではありますけれど、人には後指さゝれて笑ひ者となつて、思へば〳〵這麼氣の小さな者が能く〳〵死なずに居ると思ひます、眞箇に、死ぬ事の出來なかつたは、意氣地が無くて、勇氣の無い

のではなく、大方、意志とやらが强かつたので御座いませう。

右を見ても左を向いても、其れは憂苦く御座いましたよ、芭蕉の葉が擦れて、初雁の聲を聞いた頃は、羽織の袖にも包み切れぬ人の噂、御恥しう御座います、此の身體、什麼して人並な事が出來ませう、所詮、餘所樣並の人間ではないのだと心に斷念めては居りながら、返らぬ事の思ひ出ては、腸の寸斷れる程、苦しい悲しい思ひに泣かされます、能く〱考へて見れば、何の身分ある所に生れた御孃樣と云ふではなし、職業が職業だもの、恥しい事は少しもないでは無いかと、思ひ切りよく口では云つて、這麼に洒蛙〱と、浮いて暮して居りますのよ、立つて舞ふ時の、緋縮緬の襦袢の手前泣きたい程切なくは思ひましたけれど、此頃じや一層其れも慣れて來て、彈く三味の音も冱えた樣で御座います。

内證ながらも思はぬ人の妾になつて、思ふ方を袖にせねばならぬ、此れも商買の立て引きなら、致し方がありません、諦めましたよ、後生ですから二度と其麼事、仰つしやつて、良心とやらの呵責の咎に私を泣かして下さいますな、這麼事して一生は終る儀、思ふ事も考へる事も少しもない筈ではありませぬか、儂に云はせると道德とやらが何で御座います、女の貞操程、馬鹿げた戲氣な物はありませぬ、何を操正しいと云ひ何を不貞腐れと爪彈きするのでせう、世には金の爲にお嫁に行く女もあれば、位を良人として事へる妻もありませう、食ふに困つて再緣する寡婦もあれば、中には良人ある方の、役者狂ひ遊ばす名聲高き令夫人もあるつてじやありませんか、私の樣な、まあ一口に云へば、醜業婦、明らかに、白狀すれば、養父の妾、妾が賤しくて奧樣が貴とい、藝者が罪惡の塊で、御孃樣が淸淨潔白だ、其麼事誰れが一體定めたのでせう、可笑しいじやありませんか、行義が善いからつて、惡いからつて、這麼職業柄じや何にもなりませんや、構ふものですか、以後どし〱大手を振つて、威張つて何でも遣りますのさ、ほゝ……彼樣御顏遊ばしてと、火焔に舌の燃えぬも不思議、二十の伊達姿、華美に笑ひ捨てゝ、大層醉つちまひましたのよと、相手の男の膝を枕に、絃聲小さう、額にかゝる鬢の絹房微に搖れて、淡紅色の帶上、だらしなく飜れつ。

簀屛風洩れて、黃昏の灯美しう、音無き春雨に散る花吹雪わきて艶なり。

學校芝居

喜劇 家政學校

巖谷小波

▲場所　山野家の一室
　　夫人松子の居間

▲登場人物

△山野夫人松子(四十歳位)
△女學生貴美子(十九歳位)
△同　宇佐子(同　上)
△山野下婢お清(十九歳位)
△同　娘　花子(十七歳)
△同　羽根子(同　上)
△同　志保子(同　上)

以　上

注意　これは女斗りで出來る喜劇。即ち女學生の學校芝居として、獨逸の其向きで喝采されたものです。我邦の時弊にも適切の樣に思ひましたから、今試みに飜案して見ました。皆さん試みに御讀み下さつたら、又試みに演つて御覽遊ばせ！

第一節　松子夫人　お清

松子夫人火鉢の側で裁縫をして居る所へ、下女お清慌しく入つて來て、

(お清)　奧樣、々々！

(松子)　何だねエせわしない！　又地震の豫報でも出たのかエ？

(お清)　地震ぢやア御坐いません。あの……お孃樣が……大變で御坐いますよ。

(松子)　エッ、孃が何をしたの？（ト少し慌てゝ裁縫を押退る）

(お清)　いゝえ、まアお聞き遊ばせ、あの、御肴が……。

(松子)　何だねエまア、お肴なのかエ？

(お清)　所が奧樣！　そのお肴が大變なんで御坐いますよ。私がお敎へ申上げても、ナニいゝよッてお聞き遊ばさないもんですから、とう〳〵眞黑にお焦がし遊ばして、それに頭も尻尾も、グジャ〳〵に成つてしまひましたから、もう召上る事も何も出來や致しません。

（松　子）まア、仕方が無いねエ！

（お　清）それがと申しますのが、お孃様が御料理を御嫌ひ遊ばして、どんなに御勸め申しましても、御稽古遊ばさうと云ふお氣が無いからで御坐います。先達ても左樣ぢやア御坐いませんか、お吸物に鹽を御入過ぎに成つて、折角の御客樣に、御燒物斗りで御飯の出た事が御坐います。かう云ふ辛い御汁の出來ますのも、つまりは奥樣があまり御甘過るからで御坐います。たまには御小言を仰有つて、ちつとかう云ふ御稽古にも、御精の出る樣に遊ばしませな！それア當節の御孃樣の事ですから、音樂とやらも御嗜好なさらなけりやア成らず、舞踏とかの御稽古も御大事で御坐いませうが、また御料理も一通りは御存じないと、後へ行つて御損で御坐いませう。……ホヽヽ、まア、私とした事が、飛んだ生意氣な事申上げまして、何卒御勘辨遊ばしまし！

（松　子）なアに、よく云つてお呉れだつた。けどももう安心してお呉れ！　私もその事は氣が付いてるので、いよ〳〵今度はあの花子を、家政學校へ入れる事にしたから……。

（お　清）（手を振りながら）駄目、々々、駄目で御坐いますよ。奥樣！　さう申しちやア失禮で御坐いますが、あのお孃樣の樣なお氣で、何うして家政學校へ入らつしやれませう。此間も斯うなんで御坐いますよ。家政學校の評判が、大層宜しい樣で御坐いますから、入らしつては如何で御坐いますッて、私がお勸めしましたら『厭な事だワ、あんなお裁縫やお料理斗り教へる學校、私死んだつて行きやアしない』ッて、大層な御權幕で御坐いましたもの。尋常大體の事ぢやア、とても入らつしやりやう致しませんですよ。

（松　子）それだから私だつて、實は少し仕組んだ事があるのさ。

（お　清）ヘエ、仕組んだ事とは！

（松　子）これならあの花子も、乾度行く氣になるだらうと思ふの。

（お　清）まア、何う致すんで御坐います？

(松子) 一寸御出で！ 斯うなんだよ。

ト、招く。お清すりよつて、

(お清) 御免遊ばせ！

ト、耳を一寸搔いてからさしむける。松子それにひた〳〵と語らふ。お清點頭く事あり、

(お清) ヘエ、まア……よく御考へ遊ばしましたネ。

(松子) だからお前もその氣に成つて！ いゝかイ！

(お清) 畏りまして御座います。それぢやア私も役者の氣で、うまく演つて御覽に入れませう。(ト意氣込)

(松子) シツ、花子が來る樣だ。(ト、制す)

(お清) ではまた後程！

ト、お清は會釋して勝手へさがる。

第二節　松子夫人　花子

花子、次の間から出て來る。但しその左の指は、二本斗り繃帶して居る。

(花子) ア、痛い〳〵！ もうあんな事懲々だワ。阿母さん！ コレ！ 私此間切つた所を、又こんなに火傷しちまつたワ。(ト、泣聲に成つて甘へる樣に云ふ)

(松子) (わざと嚴しく) またそんな意氣地の無い事を！ お前もう十七にも成つて、何と云ふ人だらうねエ。

(花子) だつて阿母さん！ 私にやアあんな事性に合はないンですもの。

(松子) お料理が性に合はなければ、此所へ來てお裁縫でもなさい！

(花子) お裁縫？……お裁縫も何だか虫が好かないワ……

(松子) 何と云ふ氣隨な子だらうねエ。それでお前今時の娘が濟むとお思ひかエ？

(花子) アラ、阿母さんそんな事云つたつて、今時の婦人は、お裁縫やお料理より、まだ他に爲なけりやア成らない事が、いくらあるか知れやしませんワ。慈善事業、社會問題、赤十字社、愛國婦人會……ほんとに是からの婦人てエものは、愚圖々々しちやア居られない事よ！

(松子) それでも女は女だから……

(花子) いゝえ、女だつて人間ですワ。阿母さんなん

ぞは、昔時の事斗し考へてるから、ぢき引込思案に成つちまふけども、今の女子敎育ぢやア、そんな事は流行らないワ。

（松子）そんな事つて？ 何がだエ？

（花子）そんな、お料理やお裁縫なんぞ！

（松子）ホヽヽ、そんならまた、何うして家政學校なんてエものがあるのだらう。而も大層評判が好いぢやないか。

（花子）そ、そりやア、入る人が違ひますワ。

（松子）入る人が違つたッて、矢張り女は女だらう。

（花子）女は女だつて、……女が違ふワ。

（松子）まア、それぢやア家政學校へ行く樣なのは、女の中の女だけでも、お前の樣なのは、女の中の男とでも云ふのかエ？

（花子）アラ、何とでもお云ひなさい！（下、少しふくれる）

（松子）（氣を更へて）そんならそれで可いとして、それぢやアお前は、全體何樣な事が習ひ度いンだエ？

（花子）何樣な事ッて、もつと時勢に適切な事が習ひ度いワ。

（松子）然う、それぢやアお前の好きな樣にお爲！ が、花子や！ 今日はねエお前に、新しいお友達を紹介せやうと思つてネ、阿母さんが此間から、餘所の御孃さんを三四人、お招き申しておいたから、今に屹度お見えに成るだらうよ。

（花子）餘所の阿孃さんて……どんな方？

（松子）お前よりは年が行つてらつしやるけども、みんな當世風の敎育受けた方ばかりだから、屹度お前の氣に入るだらうと思ふよ。

（花子）まア、嬉しい事！ 早く入らつしやればいゝのねエ。

第三節　同上　お清

お清次から出て來て、松子に名刺を渡しながら、

（お清）この方が入らつしやいました。

（松子 名刺を見乍ら）オヤ、もう入らしつたよ。それぢやア早く、清や！ あの……お蒲團をお出し……序に他の方のも……

（お　清）ハイ！

ト、お清は急いで席を設ける。花子はいそ〳〵しながら、その名刺を取りあげて、

（花　子）色澤貴美子……まア、洒落た名刺だ事！

（松　子）その筈さ！　その方は畫をおかきに成るんだもの。清！　何卒お通し申して！

（お　清）ハイ！（ト、次へ出る）

第四節　同上　貴美子

間も無くお清の案内で、貴美子女畫師の扮裝にて入つて來る。その手に畫具箱と三脚とを携へ、今寫生の歸途と云ふ體。

（貴美子）今日は！　何うも難有う御座いました。（ト、無造作に席に着く）

（松子　挨拶して）よくお出で下さいましたねエ。アノ……これが娘で御座います。何卒御懇意に！　花子、御挨拶なさい！

花子は無言で辭儀をして居る。

（貴美子）まア、お孃樣！　初めて御目に掛りますのねエ、何卒以後御心安く！

（花　子）ハイ、私も？

（貴美子）花子さん！　貴女も畫を遊ばして？

（花　子）少々！　學校に居りました時分。

（貴美子）圖畫でせう。そりやア誰でも致しますワ。私伺つたのは、別にお習ひ遊ばしたか何うだかッて申すんです。

（花　子）まだ何誰にも……

（貴美子）アラまア……なぜ遊ばしませんの？　はやく遊ばせよ。畫はほんとに宜しう御座いますよ。第一貴女、畫をやつて居りますと、自然と趣味と云ふものが出て、色彩の配合が上手に成りますから、一寸衣服を拵へればと云つて、何うしても良い嗜好が出來ますよ。またこの『自然』の美ですねエ。この自然の美を解すと云ふ事が、ほんとに人生の最上の快樂ですよ。隨分世間には明盲があつて、折角自然の美に接しながら、これを解しない人がありますが、ほんとに此等は、人生の不幸ぢやアありませんか。

はやい話が、まアこの窓から見て御覧なさい！

ト、進み寄つて窓をあける。花子も釣られて外を見ながら、

(花　子)　アラ如何しませう、阿母さん！　まだ垣根が倒れたまゝだワ。草もまだ刈つてない事よ。

(松　子)　ひどい所が見えるねエ。はやくお閉めなさいな！

(貴美子)　いゝえ、閉めるにやア及びません。あの垣根の倒れた所、蔓の伸びた所が、即ち自然の美ぢやアありませんか。あれがちやんと成つて居ちやア、不自然に成つて卑しく成ります。美は却つてあゝ云ふ所にあるので。あゝ、ほんに好い畫題だ事！

(花　子)　いやアねエ！　此人は人を馬鹿にしてるんだよ。(ト、獨語に呟く)

(貴美子)　最も不自然のものだつて、人工の物にも美はあります。例へば器物や骨董品――私の方で云ふ靜物ですねエ。靜物はまた靜物で、隨分面白い研究も出來ますが……それよりも面白いのは、動物の寫生ですねエ。例へば牛の鳴いてる所だとか、犬の咬み合つてる所だとか……

(花　子)　まア厭だ！　牛だの犬だの……

(貴美子)　牛や犬が嫌ひで、何で畫工に成れませう。私なんざア寫生と成りやア、蛇でも恐かアありませんよ。

(花　子)　オヽ厭だ！(ト、眉を顰める)

(貴美子)　蛙でも平氣で捕まへますよ。

(花　子)　アラ……(ト、鼻を覆はす)

(貴美子)　美を研究する上から云へば、恐いの、汚いのなんて、そんな事云つちやア居られません。却つてなまじ人工を加へた、不自然なのが醜いものです。例へば……(ト、見まはして床の生花に目を着け)あの花なんぞも、おなじ活けて眺めるなら、丁度野に咲いてる通に、自然の形を殘しておいて頂き度いものですねエ。あんなくねらしたり、ひねらしたり、私達の眼にやア少しも美ぢやアありません。恐らく美を解する者は、屹度私と同感でせうよ。失禮ですが、今の間に一寸直し

てあげませう。

ト、進み寄つて、遠州流に活けてある花を、無造作に取つて枝を伸ばし、普通の投込にしてしまふ。花子ハラ〳〵しながら。

(花　子)　まア阿母さん！　折角私が活けといた花を…

(貴美子)　アラ、貴女がお活け遊ばしたの？　そんなら猶申さなけりや成りませんねエ。畢竟こんな不自然な事を爲さるのも、畫をお習ひなさらない故ですよ。畫の道へ入つて、ほんとに美と云ふ物が解つて來ると、とてもこんな事は出來やしません。御覽なさい！　大變よく成つたぢや御座いませんか！　先刻と大差異ですよ。

(花子……呆れて物も云へぬこなし)

(貴美子)　ねエ奥様！　さうで御座いますワねエ！

(ト、意味あり氣に云ふ)

(花　子)　はア……(ト氣の無い返事。其隙何か目配する)

(貴美子　氣を更へて)　それはさうと、まだ他の方は入らつしやいますまいねエ。其間に一寸、私はスケッチをして參りませう。あの垣根の倒れた所が、ほんとに好い畫題ですから。……奥様御免遊ばせ！　花子さん！　後刻！

ト、貴美子は畫具箱、三脚を持つて、とつかはと次へ出てしまふ。

第五節　同　上(但し貴美子を缺く)お清

松子は花子と顔見合はせて、

(松　子)　何うだエ、畫工のお孃さんは好い方ぢやないか。お前氣に入つたらうねエ。

(花　子)　あんな人！　私大嫌だワ。

(松　子)　まア……然うかねエ？

お清次の間から出て、

(お　清)　眞鍋さんのお孃様が入らつしやいました。

(松　子)　オヽ、羽根子さんが？　直ぐに此方へ！

(お　清)　畏りました。(ト去る)

(松　子)　ほんとに羽根子さんなら、屹度お前と話が合ふよ。

(花　子)　さう？　どんな方？

(松　子) 何しろ大層學問のある方だから。

(花　子) まア賴もしいのねエ。

第六節　同上　羽根子

羽根子は洋服扮裝、金椽の眼鏡を掛け、洋本二冊斗り手にしながら、ギス〳〵步いて席に着く、

(羽根子) 今日は！　昨日はお手紙を難有う御座いました。(ト、凡て速口に甲張つた調子)

(松　子) いゝえ、お忙しい所を御出でを願つて、何の御愛想も御座いませんが、只花子を、皆さんにお紹介申し度いと存じましてね。

これにはて羽根子、花子の方を捻ち向き、

(羽根子) まア左樣ですか。お孃さん！　私眞鍋羽根子！　何卒御親近に！　(ト、手を出す)

(花子 手を出して握られながら) 何卒宜しく！　(と辭儀をする)

(羽根子) 何ですねエ、二十世紀の婦人が、そんなに頭を下げるもんぢやありません。だから日本の婦人は、無敎育だの、卑屈だのつて、世界各國から笑はれるんです。然し花子さん！　貴女も學問がお好きださうですが、是まで隨分御勉强なさいまして？

(花　子) はア、少しは？

(羽根子) さう。然し學問にもいろ〳〵ありますが、まアおもに何學を？

(花　子) 理科もやりましたし、それから化學も……。

(羽根子) 理科にもいろ〳〵あります。動物、植物、地理、天文、數學、物理、人類學、考古學、……化學だつて又さうです。純正化學、應用化學、藥用化學……貴女のはその中何れですか？

(花　子) 私……只學校で敎つたんですから。

(羽根子) 學校つて、大學ですか？

(花　子) いゝえ、高等女學校！

(羽根子) あゝ、高等女學校なら知れたもんですワ。理科だつて、化學だつて、ほんの總論斗りですもの、學問とは云へやしません。

(花　子) はア……(ト、少し赤く成る)

(羽根子) 私の伺ふのは、眞の專門の學課の事ですよ。さう申しちやア自慢する樣ですが、私ア高等女學校

を出てから、まだ三年にしか成りませんが、その間に隨分勉强致しましたよ。はア、學問も大方各科を究めて見ましたが。尤も私の姉も學問好で、醫學の方に志しましたから、私アわざと哲學から初めて、心理學、倫理學、比較宗敎學や純正哲學を修めて、それから社會學、敎育學、審美學と研究し、哲學にやア何うしても理學の智識が要りますから、今度は理學に移りましたが、それも力學だの光學だの云ふ、そんな高尙なもの斗り。序に生理學も一通りやつて、生體解剖も隨分實習しました。

（花子）まア、よくそんなに種々な事が？

（羽根子）なアに出來ない事がありますものか。まだその他に、私やアまだ我邦に、女の博士の出ないのが、何うも遺憾で成りませんから、理學と文學とで、都合二篇の論文を出しましたが、もう何とか沙汰のある筈です。それで今度は、政治、經濟、法律の方も、順々に修める心算ですが、哲學や理學から見ると、此等は皆淺薄なものですから、別に頭腦も入りやアしません。

（花子）ほんとに貴女は、非常な精力がおあんなさるのですねエ。

（羽根子）精力？　貴女精力ッて事御存じですか？

（花子）……でも、よくそんな種々な事が？

（羽根子）種々な事が出來るのを、精力だと思つてらつしやるの？　それだから、まだ〳〵貴女は學問が足りません。抑も精力と云ふものは、理學上にも哲學上にもありますが、これには深重な意味があるので、苟もその意味を解した者には、輕々しく使はれる語ぢやありません。それより花子さん、貴女に好い物見せてあげませう。いゝえ、これも學術の研究ですから、ようく見てお置きなさい。私今途中で買つて來たんですが、貴女なんぞは、これを見て、乾度人間のだとお思ひでせう？

ト、云ひながら、手に持つた本を明けて見せる。中には動物、人體などの解剖圖あり。

（花子）まア氣味の惡い畫ねエ。（ト肩をよせる）

(羽根子) 氣味の惡いなど〻云ふ考で、眞の學問が研究できますか。それぢやアこれを御覧なさい！

ト、羽根子はわざと氣味惡き圖を明けては見せる。花子見る度に顏を蹙め、遂には座に堪えぬ體あるべし。

(花子) 阿母さん！ 私一寸……(羽根子にも)御免遊ばせ！

ト、用あり氣に立つ。

後、松子羽根子と點頭き合ひ、羽根子はやがて庭の方へ出てしまふ。

第七節　松子夫人、花子、宇佐子

花子また出て來て、

(花子) 阿母さん！ 飛井さんのお孃さんですッて！

(松子) 宇佐子さんだらう。お通し申しな！

(花子) いま濟がお連れ申すのよ。羽根子さんは？

(松子) 今お庭の方へ入らしつたよ。

(花子) ヤレ〳〵助かつた。

(松子) 何だねェ……あんな學問のある方は無いのに、お前逃げてしまふんだもの。

(花子) だつて私、あんなむづかしい事斗りベラ〳〵ベラ〳〵獨り喋つて、頭痛がして來たぢやありませんか。

(松子) でも、お前の好きな學問の……。

(花子) 學問のある人私もう大嫌ひ！

此所へ飛井宇佐子、改良服に自轉車乘の袴を着け、汗を拭きながら、活潑に入つて來る。

(宇佐子) 今日は！ お暑い事ねェ。

(松子) まア宇佐子さん！ よく入らしつた。相變らず活潑なお風俗ですねェ。またお馬ですの？

(宇佐子) いゝえ、此頃はもう自轉車なのよ。(ト、花子を見返り)この方がお孃さま？ 花子さんと仰有るんでせう。私飛井宇佐子、阿母さまには毎度御厄介に成つて居ります。何卒御懇意にねェ！ (ト、凡て馴々しき調子)

ト、紹介を待たず挨拶する。花子少し煙に卷かれた體で、無言に辭儀をする、松子座を繕ひ顏に。

(松子) 花子や！ 宇佐子さんはほんとに活潑で、運

動なら、何でもお出來に成らない物は無いんだよ。それに舞踏も御上手だつて……よくその方の事伺ふといゝ。

(花　子) まア、舞踏？　ほんとに面白いのねエ。

(宇佐子) 花子さんも舞踏お好き？　何所でお習ひ遊ばして？

(花　子) 學校で！

(宇佐子) アラ、學校なア矯正術ですワ。舞踏と云ふ程のものぢやア無いのよ。舞踏と名の付くからは、ちやんと音樂も樂隊がやつて、男と女が同數に寄つて、眞個の型でやらなけりやア面白くないワ。尤もこりやア、ちやんと練習所で習はつて、それから何遍も舞踏會へ出て、段々場數を踏んで來なけれア、とても上手に成れませんけども……。

(花　子) それぢやアあの……よく西洋の畫にある樣に！

(宇佐子) さうですとも……それであゝ云ふ會へ出ると、第一交際が廣くなけれアいけず、又交際が廣けれア廣いだけ、何うしても踊る數が多くなるから、同じ所を廻つてる樣でも、一晩に十里や二十里歩行く理になります。

(花　子) まアそんなに？

(宇佐子) それが貴女一晩と云つても、九時頃から三時頃までゝすもの……盛んな時にやア夜が明けてから歸る位ですワ。ですから平生體を馴らして、ようく運動で鍛へて置かなけれア、とても續くもんぢやありません。其所へ行つちやア私なんぞは、毎日運動してますから、どんな事があつても平氣なものです。

(花　子) 私も體操は好きでしたワ。

(宇佐子) 體操ですツて？　體操計りが運動ぢやアありませんよ。テニス、クリツケツト、フートボール、ベースボール、ジヤンプ、レース、スケーチング。

(花　子) それみんな遊ばすの？

(宇佐子) まだありますワ、日本のなら柔道、擊劍、薙刀、鎖鎌……。

(花　子) アラまアそんなものまで……。

（宇佐子）それから馬も乘りましたが、此頃また自轉車を始めたの。……自轉車はほんとに面白い事よ。貴女もお乘りでせう？

（花　子）私まだ……。

（宇佐子）アラ、お乘んなさらないッて？　まア厭な！　それぢやア此頃の御交際は出來ない事よ。自轉車は重寶で、何所へでも乘つてけますから、自然見聞が廣くなつて、人中へ出ても話に困らない事よ。――見聞が廣くなると云へば、旅をするのが一番ねエ。貴女も旅はお好でせう。

（花　子）はア面白いのねエ。

（宇佐子）何所まで入らしつて？

（花　子）大磯、箱根……去年熱海へ參る筈でしたが、銚子へ行つてしまつたもんですから。

（宇佐子）それから何方？

（花子　少し極り惡さうに）まだ他は存じません。

（宇佐子）それぢやア旅をしたッて云ふ程ぢやア無いワ。そんな大磯や箱根なんぞなら、子供だつて行くぢやありませんか。私なんぞは、まア第一に、富士へ登つた事が三度、日光が六遍、伊勢が七回……東海道は何度通つたか知れませんが、中仙道は二度、山陽山陰が四度、四國が五度に、九州が一度、……北海道は去年行きましたが、今年は臺灣まで行かうかと思つて……まア海だけは仕方がありませんが、後はみんな自轉車で行きます。……貴女御一所に入らつしやいな！

花子呆れて默つてしまふ。

（宇佐子）尤も自轉車が乘れなけれア、馬で入らしつてもいゝでせう。アラ馬も乘れないの？　それぢやア仕方がありませんから、今からお初めなさいよ。まア、馬は生物だから面倒ですけども、自轉車なら譯ありません。私なんぞは乘り出してから、日に二十哩宛は乾度乘ります。ねエ貴女もお初めなさいな！　丁度彼所にありますから、行つて敎へてあげませう。さア、花子さん！

ト、はや中腰に成つて促がす。花子迷惑さうに、

(花　子) また此次願ひませう。

(宇佐子) そんな因循な事云つてるから、何時まで經つても乘れないんですワ。

(花　子) でもあの……今日はお客様が御座いますから

(宇佐子) ア、さうでしたねエ。それぢやア今度に致しませう。けどもまだ何誰もお見えにならない樣ねエ。……あゝ自轉車の御話をしたら、又乘り度く成つて來た。私まだ今日は十哩しか乘らないから、一寸行つて、もう少し乘つて來る事よ。……御家は御庭が廣いから、彼所だけでも御稽古が出來るのに、あゝ因循な花子さんだねエ。――ドレ、それぢや暫時御免遊ばせ！

ト、いひ〳〵飛立つ樣に出て行く、松子見送つて

(松　子) ほんとに活潑な方ぢやアないか。

ト、花子を見かへる。花子舌打して、

(花　子) チヨツ、何てエ御轉婆だらう！

七月號記事豫告

（七月五日發行）

每月五日發行

定價表

一册（紙數二百八頁）…金二十錢
四册（三ケ月分）……前金七十五錢
八册（半ケ年分）……前金一圓四十五錢
十六册（一ケ年分）……前金二圓八十錢
内 （定刊數……十二册　增刊四回…一、四、七、十月價格同一）

郵稅　一册　二錢

廣告料

二十四字詰	一行	半頁（卅二行）	一頁（六十四行）
特等	五十八錢	二十圓	割引四十圓
一等	五十八錢	十七圓	割引三十三圓
二等	五十錢	十四圓五十錢	割引二十八圓
三等	四十二錢	十二圓	割引二十三圓

▲等級の位置〻切日等御照會次第御報可致候

註文略規

㈠本館發行の圖書は都て前金の外送本せず
㈡御拂込の前金相切れ候節は送本を停止す
㈢郵券代用は一割增にて五厘一錢の切手に限る
㈣總目錄御入用の方は二錢券相添申込あれ

明治卅九年六月五日發行　第六卷第八號

編輯兼發行人　松原岩五郎
印刷人　山田英二
印刷所　東京市小石川區久堅町百八番地　博文館印刷所
發行所　東京市日本橋區本町三丁目　博文館

電話本局　三百三番　千十八番　二千六百二十番　三千二百二十九番

（後付の一）

羽君著書

風月集

全一冊袖珍總クロース美本寫眞版入
正價金參拾五錢郵税六錢

目次

侯爵伊藤博文君題字

歐山米水

全壹冊和裝折表
空前の美本仕立
正價金壹圓五拾錢
郵税八錢

目次

若菜籠

全一冊袖珍美本三百廿頁
正價廿八錢 郵税四錢

紀行あり、小説あり、美文あり、韻文あり、小品に俳句に新作舊編、著者が得意の作は容れて可憐なる此一籠の中にあり春の野にあこがれて摘み溜めたる千種の若菜日長の玩びには、之に過ぎたる品あるまじ評判〳〵

全一冊袖珍洋裝頗美本
正價拾八錢 郵税四錢
●●●●●
▲特價拾貳錢（五月一日より六月卅日迄祝賀紀念として割引す）

歐米小觀

全一冊袖珍上製
正價四拾錢
郵税六錢

目次

口繪

乙羽君小照
●外國繪はがき通信寫眞銅版二十四葉
●乙羽君案不折君書の乙羽洋行漫畫、石版刷十六葉

博文館

女（後付の三）

(後付の四)

女子高等師範學校教授日本大學講師 野口保興君校閲并序
中村士德君
大久保千濤君 共著

本邦地理詳說

全一冊

（近刊）

洋裝菊判美本紙數約七百頁
本邦地質全圖及寫眞版數葉
木版挿入圖約二百四十餘個

本邦地理書の上梓せらるゝもの汗牛充棟も啻ならず然れとも是れ多くは中等程度に用ひらるゝ教科書の類なるが偶々參考に供すべきの書あるも未だ全きものあるを聞かず實に斯界の爲め遺憾とする處也玆に本館中村士德、大久保千濤兩君に囑するに此缺陷を補はれんことを以てす兩君快諾、執筆せらるゝ年餘稿成るに及んで今や本邦地理書界の泰斗野口保興先生又此擧あるを賛し懇篤たる修正を試みらる其の責任を重せらるゝこと現はれて其序中にあり本書は普通教育の參考用たるは勿論中等教員の受驗適用斯學獨習の讀物として必讀の良師良友たるなり請ふ其の眞價は一讀の後に徵せられよ

故文科大學教授 文學博士 栗田寛先生題詩
文科大學教授 文學博士 三上參次先生題歌
文科大學教授 文學博士 田中義成先生題詩
理科大學教授 理學博士 神保小虎先生題詞

文學博士 文學士 原秀四郎先生著作

（近刊）

日本國史地圖

全壹冊菊判精巧着色
地圖壹百四拾餘挿入
解說（日本國史地理）約百六拾頁

本書は日本歷史の地理事項を叙述する側國民發展の大勢を附說せん爲め我國民の必しも短所とせざる法制軍陣の事蹟の外特に內國產業の盛衰及ひ邊裔四表の動靜並に之を處せる我國民行動の事蹟を博采して本書紙面の過半を充用せり

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

女(後付の七)

巖谷小波君編　著名畫伯挿畫

世界お伽噺

正價（●壹册金八錢●六册金四拾五錢●五拾册金參圓貳拾錢●十二册金八拾五錢●二拾五册金壹圓六拾五錢●全部百册六圓參拾錢●郵税壹册貳錢）

全部壹百册毎月一回發行
洋裝大判紙數一册約七拾餘頁
正價一册金八錢　郵税一册貳錢

第八拾貳編

木馬物語

名和永年君畫

むかしギリシヤの人とトロヤの人と戰爭をしましたが長らくの間トロヤの城が落ちないので流石のギリシヤ人持て餘して居りました所へカルラツハと云ふ名僧の知惠を借り王のオデクフイスは好い計略を思ひ付き大きな木馬を拵へ腹の中に十二勇士を隱し巧く敵をあざむいて城の中に引入れさせ敵に油斷をさせて城を落しました則ち木馬の計略と云ふて世界のお伽噺中有名な極く面白き御話しであります

第八拾參編

馬の首

小島沖舟君畫

鬼の首を取つたのは、大江山の功名話、これは馬の首を斬つて却つて、再生の恩人を、寃呪の中から救ひ出した、珍奇變妙のお伽噺、若し夫れ巨人の追撃から、金、銀銅の三寃王を敵手に命懸けの奮闘に至ては誰か手に汗を握らさらん、誰か拍案絶叫せざらん。蓋し稀有の怪文字とす。

第八拾四編

三の王冠

片山春帆君畫

只見る三個の王冠は、元と小人の贈物なからこれを受けたる三個の王子に慈悲と無慈悲の別あれば、やがて因果の報ひ來て二人は榮華の雲の上から、忽ち奈落の井底に落され、一人は鍛冶屋の煤の中から、忽ち金殿に迎へらる、愉快極まるお伽噺はやがて適切なる修身談なり。

（未完）

續刊

第八拾五　馬の裁判
第八拾六　甲良武者
第八拾七　樽の三郎
第八拾八　辛抱草

發兌元　東京本町　博文館

（後付の八）

マスター、オフ、ロース　宮本桂仙君著

西洋男女交際法

我國由來禮儀の國と稱するも明治の今日は唯々從來の作法を其儘に應用すべきにあらず、須く日進の文化に作ふて必要の變化を加へざるべからず要するに社交の最大要素は男女交際を以て骨子とせり、而して本書に於て特に女子の要件を詳述したるは女子の社交に最も適し且つ最も人目を引くものなればなり著者久しく歐米の禮式を研究し其實驗に基き今後日本社會に必要なる日常作法を青年士女に懇示し併せて日本式と交際法の連絡を通融す實に新日本人士が必ず一本を机右に備ふるの要書といふべし

▲既刊▼

全一冊

袖珍美本紙數二百三十四頁
正價貳拾五錢
郵稅貳錢

發兌元
東京日本橋本町
博文館

女學世界衛生顧問　糸左近君編　（既刊）

四季應用 通俗治療法

附養生秘訣

醫者は病人に取つて命の親なり、救ひの神なり。其の病魔を退治して起死回生の効を奏し、垂死の病人を回復して三千世界に一つしかなき玉の緒を取り止むるものあり、世に神醫仁術の稱ある所以なるべし、さりながら、世間に神醫と稱するものは雨夜の星よりも尠くして難病危病に惱む人は恒河の砂よりも多し、この限りなき病人患者をして限りある神醫の方劑を仰がしめんこと無理の注文といふべし、況んや山間僻地に到つては一度の診察を請ひ、一服の藥を飲むすら容易の事にあらず、病人は手を空ふして病魔の横行するに任すのみ、是に於てか世に醫道の智識を必要とする所以なり著者糸左近氏は仁術に造詣深く、諸病の蘊奧を究めて洩らすなし、今其尤も普通なるもの七十餘種を網羅して備さに治療の方針を說く、蓋し車輿を要せずして千里の遠きに趣き謝儀を求めずして萬病の適藥を授く其功德の大なる昔への耆婆扁鵲にも讓らずといふべし。

全一冊洋裝四六判
紙數四百餘頁
正價金二十八錢
郵稅六錢

發兌元
博文館
東京本町

女學世界

（明治卅三年十二月廿五日 第三種郵便物認可）　第六卷第八號　（明治卅九年六月五日發行 毎月一回五日發行）



（定價金貳拾錢）

監修
小山静子　KOYAMA Shizuko
京都大学大学院教授

女学世界（じょがくせかい） 明治期復刻版㊹
明治39年5月（第6巻第7号）、6月（第6巻第8号）

2008年7月10日　第1刷発行　定価（本体20,000円+税）

監　修　小山静子
発行者　富澤凡子
発行所　柏書房株式会社
東京都文京区本駒込1-13-14（〒113-0021）
電話　03-3947-8251［営業］03-3947-8254［編集］
協　力　株式会社博文館新社
印　刷　株式会社友美社
製　本　有限会社青木製本

ISBN978-4-7601-3383-3　C3321